茨城県教育財団文化財調査報告第75集

一般県道新川江戸崎線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

上ノ台遺跡

岡ノ内遺跡

平成4年3月

財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第75集

一般県道新川江戸崎線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

上ノ台遺跡
岡ノ内遺跡

平成4年3月

財団法人　茨城県教育財団

上ノ台遺跡・岡ノ内遺跡遠景

序

茨城県は，次の時代の到来を見越して長期的な展望のもとに，県土の基盤整備を行っておりますが，その一環として，農業生産性の向上と流通の合理化を図ることを目的とした広域営農団地農道の整備が着々と進められております。県道新川江戸崎線道路改良工事はこの整備事業に伴い計画されたもので，その予定地内には，埋蔵文化財の包蔵地である上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡が確認されておりました。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，平成２年４月から平成２年９月にかけて県道新川江戸崎線道路改良工事地内に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。

本書は，上ノ台，岡ノ内両遺跡の調査成果を収録したものであり，本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育，文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会，桜川村教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成４年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，平成２年度に茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，発掘調査を実施した，茨城県稲敷郡桜川村に所在する上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の発掘調査報告書である。

なお，２遺跡の所在地は，次のとおりである。

上ノ台遺跡　　稲敷郡桜川村大字浮島字上ノ台3,257番地ほか

岡ノ内遺跡　　稲敷郡桜川村大字浮島字岡ノ内2,902番地ほか

2　上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		小林　元	昭和63年４月～平成３年７月
		角田芳夫	平成３年７月～
常務理事		小林　洋	平成元年４月～平成３年３月
		本田三郎	平成３年４月～
事務局長		一木邦彦	平成元年４月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成２年４月～
企画管理課	課長	北沢勝行	平成２年４月～
	課長代理	水飼敏夫	平成２年４月～
	主任調査員	小山映一	平成２年４月～平成３年３月
	主任調査員	根本康弘	平成３年４月～
	係長	園部昌俊	昭和63年４月～平成３年３月
	主事	飯島康司	平成３年４月～
	主事	吉井正明	平成元年４月～
	主事	大貫吉成	平成２年４月～
調査課	課長(部長兼務)	石井　毅	平成元年４月～
	調査第三班長	柴　正	平成２年度
	調査員	中村敬治	平成２年度調査
	調査員	吉川明宏	平成２年度調査
整理課	課長	沼田文夫	平成２年４月～
	主任調査員	中村敬治	平成３年度整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第３章「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。

4　本書の作成にあたり，遺物については吉岡康暢氏・平川南氏(国立歴史民俗博物館考古学研究部)，斎藤孝正氏(文部技官)から御指導をいただいた。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査方法 …… 1
　　1　地区設定 …… 1
　　2　基本層序の検討 …… 2
　　3　遺構確認 …… 3
　　4　遺構調査 …… 5
　第３節　調査経過 …… 5
第２章　位置と環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 8
第３章　遺構・遺物の記載方法 …… 12
　第１節　遺構・遺物の記載方法 …… 12
　第２節　表の見方について …… 14
第４章　上ノ台遺跡 …… 17
　第１節　遺跡の概要 …… 17
　第２節　遺構と遺物 …… 17
　　1　竪穴住居跡 …… 17
　　2　土坑 …… 28
　　3　掘立柱建物跡 …… 34
　　4　溝 …… 34
　　5　遺構外出土遺物 …… 37
　第３節　考察 …… 40
　　1　出土土器について …… 40
　　2　住居跡について …… 40

第５章　岡ノ内遺跡…… 43
第１節　遺跡の概要…… 43
第２節　遺構と遺物…… 43
1　竪穴住居跡…… 43
2　土坑…… 90
3　溝…… 112
4　地点貝塚…… 117
5　遺構外出土遺物…… 119
第３節　考察…… 128
1　土器の様相について…… 128
2　住居の形態と集落について…… 132
3　土坑の形態について…… 134
4　置き竈について…… 136
結語…… 138
写真図版

挿　図　目　次

第１図　調査区呼称方法概念図 …… 2
第２図　上ノ台遺跡土層柱状図 …… 2
第３図　岡ノ内遺跡土層柱状図 …… 3
第４図　遺跡関連図 …… 4
第５図　周辺遺跡位置図 …… 10

上ノ台遺跡

第６図　上ノ台遺跡遺構配置図 …… 19～20
第７図　第１号住居跡実測図 …… 21
第８図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 22
第９図　第２号住居跡実測図 …… 23
第10図　第２号住居跡竈実測図 …… 24
第11図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 26
第12図　第３号住居跡実測図 …… 27
第13図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 28
第14図　土坑実測図 …… 29
第15図　土坑出土遺物実測図 …… 33
第16図　第１号掘立柱建物跡実測図 …… 35
第17図　第１号溝実測図 …… 36
第18図　遺構外出土遺物実測・拓影図 …… 37
第19図　遺構外出土遺物実測図 …… 39

岡ノ内遺跡

第20図　岡ノ内遺跡遺構配置図 …… 45～46
第21図　第１号住居跡実測図 …… 47
第22図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 48
第23図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 48
第24図　第２号住居跡実測図 …… 49
第25図　第３号住居跡実測図 …… 51
第26図　第４号住居跡実測図 …… 52
第27図　第５号住居跡実測図 …… 54
第28図　第５号住居跡出土遺物実測図 …… 55
第29図　第６号住居跡実測図 …… 56
第30図　第６号住居跡出土遺物実測図 …… 57
第31図　第７号住居跡実測図 …… 58
第32図　第８号住居跡実測図 …… 59
第33図　第８号住居跡出土遺物実測図 …… 60
第34図　第９号住居跡実測図 …… 62
第35図　第10号住居跡実測図 …… 63
第36図　第10号住居跡出土遺物実測図 …… 64
第37図　第11号住居跡竈実測図 …… 65
第38図　第12-A・B号住居跡実測図 …… 67
第39図　第12-A・B号住居跡竈実測
　・遺物出土位置図 …… 68
第40図　第12-A号住居跡出土遺物実測図(1) … 69
第41図　第12-A号住居跡出土遺物実測図(2) … 70
第42図　第12-B号住居跡出土遺物実測図 …… 72
第43図　第13号住居跡実測図 …… 73
第44図　第13号住居跡出土遺物実測図 …… 74
第45図　第14号住居跡実測
　・遺物出土位置図 …… 75
第46図　第14号住居跡竈実測図 …… 76
第47図　第14号住居跡出土遺物実測図 …… 77
第48図　第15号住居跡実測
　・遺物出土位置図 …… 79
第49図　第15号住居跡出土遺物実測図 …… 81
第50図　第16号住居跡実測図 …… 82
第51図　第16号住居跡出土遺物実測図 …… 83
第52図　第17号住居跡実測図 …… 84
第53図　第17号住居跡出土遺物実測図 …… 86
第54図　第18号住居跡実測
　・遺物出土位置図 …… 87
第55図　第18号住居跡竈実測図 …… 88
第56図　第18号住居跡出土遺物実測図 …… 89
第57図　土坑実測図(1) …… 95
第58図　土坑実測図(2) …… 96
第59図　土坑実測図(3) …… 97
第60図　土坑実測図(4) …… 98
第61図　土坑実測図(5) …… 99
第62図　土坑実測図(6) ……100
第63図　土坑実測図(7) ……101
第64図　土坑実測図(8) ……102
第65図　土坑実測図(9) ……103
第66図　土坑出土遺物実測図(1) ……105
第67図　土坑出土遺物実測図(2) ……106
第68図　土坑出土遺物実測図(3) ……107
第69図　土坑出土遺物実測図(4) ……108
第70図　第１号溝実測図 ……113
第71図　第２号溝実測図 ……114
第72図　第３～６号溝実測図 ……115

第73図　第１号地点貝塚実測図 ……118
第74図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1) ……121
第75図　遺構外出土遺物実測・拓影図(2) ……122
第76図　遺構外出土遺物実測・拓影図(3) ……123
第77図　遺構外出土遺物実測図(1) ……125
第78図　遺構外出土遺物実測図(2) ……126
第79図　遺構外出土遺物実測図(3) ……127
第80図　時期別住居跡配置図 ……129～130
第81図　土器分類図 ……133

表　目　次

表１　上ノ台遺跡・岡ノ内遺跡周辺遺跡一覧表 …… 11
表２　上ノ台遺跡竪穴住居跡一覧表 …… 28
表３　上ノ台遺跡土坑一覧表 …… 34
表４　岡ノ内遺跡竪穴住居跡一覧表 …… 90
表５　岡ノ内遺跡土坑一覧表 ……110～112
表６　土坑の分類 ……135
表７　茨城県内の置き竈 …… 137

写真図版目次

上ノ台遺跡

ＰＬ１　調査終了後全景，調査前全景，テストピット土層，グリッド試掘後全景，遺構確認状況
ＰＬ２　第１～３号住居跡，第１・３号住居跡竈内遺物出土状況，第３号住居跡遺物出土状況，第１・２号土坑
ＰＬ３　第１～６・８号土坑，第２・７号土坑遺物出土状況，第３号住居跡貯蔵穴，第1号溝
ＰＬ４　第１～３号住居跡，第２・４・５・７号土坑，出土遺物
ＰＬ５　第１～３号住居跡，第１・２号土坑，遺構外出土遺物

岡ノ内遺跡

ＰＬ６　岡ノ内遺跡全景
ＰＬ７　調査前全景，グリッド試掘・遺構確認，テストピット土層，東・西部全景
ＰＬ８　第１・２・５・７号住居跡，第１・10号住居跡遺物出土状況，第５・８号住居跡竈内遺物出土状況
ＰＬ９　第13～15号住居跡，第12-A・B号住居跡遺物出土状況，第12-B・13～15号住居跡竈内遺物出土状況
ＰＬ10　第17・18号住居跡，第16号住居跡遺物出土状況，第18号住居跡竈内遺物出土状況，第20・22・30・41号土坑
ＰＬ11　第43～46-B・52・56号土坑，第48・53・54号土坑遺物出土状況
ＰＬ12　第60・61・64・68・69・71号土坑，第67号土坑遺物出土状況，土坑群
ＰＬ13　第１・５・８・10・12-A・B号住居跡出土遺物
ＰＬ14　第12-B～15号住居跡出土遺物
ＰＬ15　第15～18号住居跡，第16号土坑出土遺物
ＰＬ16　第26・41・45-A・B・46-A・B・48・67号土坑，遺構外，出土遺物
ＰＬ17　第８・10・12-A・13～15・17・18号住居跡，第12・26・41・45-B・46-B・54・67・71号土坑，遺構外，出土遺物
ＰＬ18　第５・10・12-A・15号住居跡・第36・45-B号土坑，遺構外，出土遺物
ＰＬ19　遺構外出土遺物
ＰＬ20　第２・７・12-B・15・18号住居跡・第12号土坑，第１号地点貝塚，遺構外，出土遺物

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

一般県道新川江戸崎線は,国道125号との分岐点である東村上須田地内を起点として，桜川村を横断し，主要地方道成田江戸崎線との分岐点である江戸崎町法蓮坊地内に至る，総延長16.752kmの稲敷地方の主要な道路である。昭和47年に，地域住民の生活福祉と営農の推進を図ることを目的として，東村から牛久市に至る総延長約25kmの区間を対象とする稲敷広域営農団地農道整備事業が計画されたが，現在，道路沿いには人家が立ち並び，この区間における道路の幅員の拡張は極めて困難なため，茨城県では，この整備事業の一環として，新たに桜川村浮島地区を起点に，江戸崎町佐倉地区を終点とする幅員12m,総延長12.435kmの一般県道新川江戸崎線道路改良工事を計画した。

工事に先立ち，平成元年9月28日茨城県は，茨城県教育委員会に工事予定内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し，茨城県教育委員会は，平成元年10月3日に現地踏査を実施し，工事予定地内に上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の存在を確認した。平成元年10月16日に茨城県教育委員会は，文化財保護の立場から，埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果，現状保存が困難であるとし，記録保存の処置を講ずることとなり，調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し，平成2年4月1日から，上ノ台遺跡(3,027m²)，岡ノ内遺跡(5,427m²)の調査を実施することとなった。

第2節　調査方法

1　地区設定

上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の発掘調査を実施するに当たり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は，日本平面直角座標第IX系，X軸（南北）・Y軸（東西）を基準点として，40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区(大グリッド)とした。さらにこの大調査区を東西，南北に各々十等分して，4m四方の小調査区(小グリッド)を設定した。

調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず，大調査区の名称は，北から南へ「A」・「B」･･･，西から東へ「1」・「2」･･･とし，その組み合わせで「A1区」，「B2区」･･･のように呼称した。さらに,大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に，

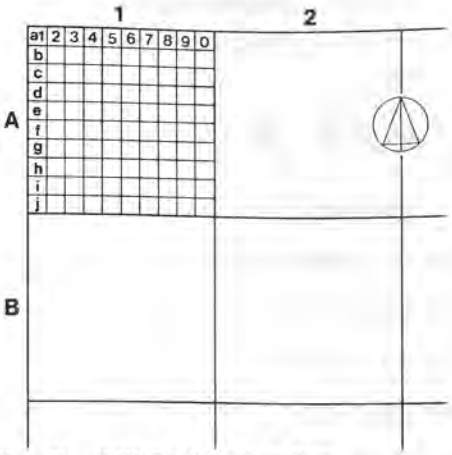
北から南へ「a」・「b」・・・「j」,西から東へ「1」・「2」・・・「9」・「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせて，「A1 a_1」区・「B2b_2」区のように呼称した。

なお，基準点の杭打ち測量は，財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

両遺跡における基準点の座標は，次のとおりである。

(1) 上ノ台遺跡（B2a_1）X軸(南北)－3,160m，Y軸(東西)＋54,200m

(2) 岡ノ内遺跡（B3a_1）X軸(南北)－2,960m，Y軸(東西)＋53,760m



第1図　調査区呼称方法概念図

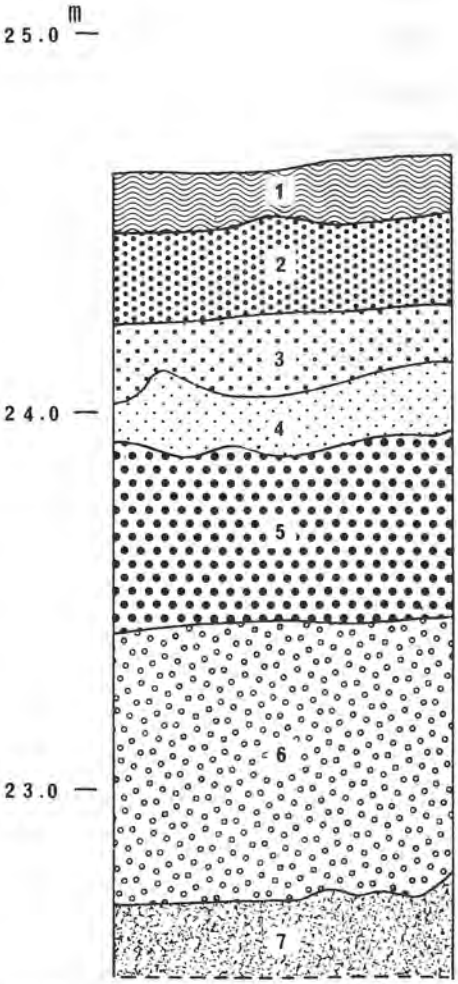
2　基本層序の検討

(1)　上ノ台遺跡

上ノ台遺跡においては，調査区域南部B2j_6区にテストピットを設定し，第2図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は,黒褐色の表土層であり,厚さは12～18cmを測る。第2層は，黒褐色の耕作土であり，厚さは18～25cmを測る。第3層は,褐色のソフトローム層であり，ローム粒子が多量に混入しており，厚さは10～25cmを測る。第4層は，褐色のソフトローム層であり，ローム小ブロックの混入が目立ち，厚さは10～20cmを測る。第3，4層は，ハードローム層への漸移層に当たる。第5層は，褐色のハードローム層であり,厚さは45～55cmを測る。第6層も褐色のハードローム層であるが，第5層よりも若干，白色がかっており，厚さは65～75cmを測る。第7層は，粘土層であり，粘性が強く水分を多く含んでいる。

上ノ台遺跡の遺構は，表土下30～40cm程の第3層から検出されている。

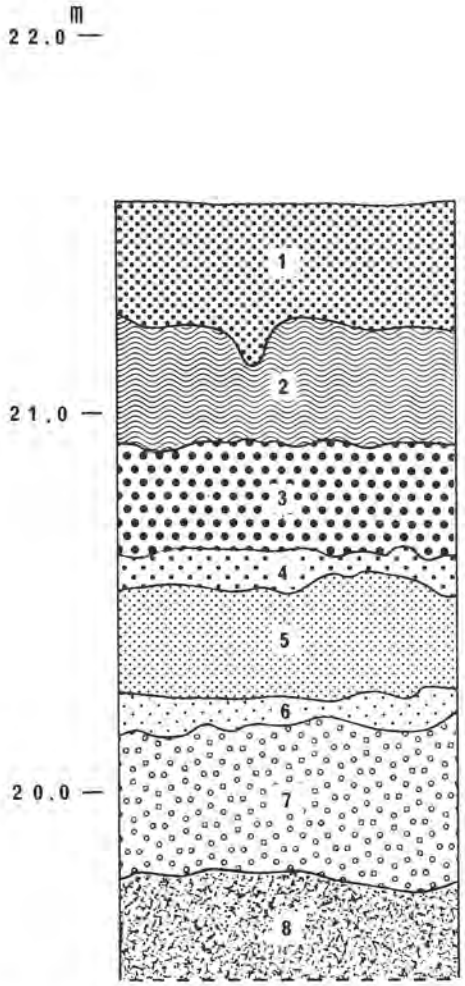


第2図　上ノ台遺跡土層柱状図

(2) 岡ノ内遺跡

岡ノ内遺跡においては，調査区域の西部A2g_6区にテストピットを設定し，第3図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，黒褐色の耕作土であり，厚さは30～40cmを測る。第2層は，褐色土であり，ローム粒子，ローム小ブロックが混在し，耕作による撹乱が部分的にみられ，厚さは25～40cmを測る。第3層は，暗褐色を呈し，軽石や黒色の鉱物を含む黒色帯であり，厚さは25～30cmを測る。第4層は，褐色を呈し，ハードローム層と黒色帯との漸移層であり，厚さは5～15cmを測る。第5層は，褐色を呈したハードローム層であり，厚さは25～35cmを測る。第6層は，明褐色を呈し，下位の粘土層との漸移層になっており，厚さは5～15cmを測る。第7層は，明黄褐色を呈した砂質の粘土層で，黒色の鉱物を多量に含んでおり，厚さは35～50cmを測る。第8層は，にぶい黄橙色の粘土層であり，水分を多く含んでいる。　岡ノ内遺跡の遺構は，表土下40～70cm程の第2層から検出されている。

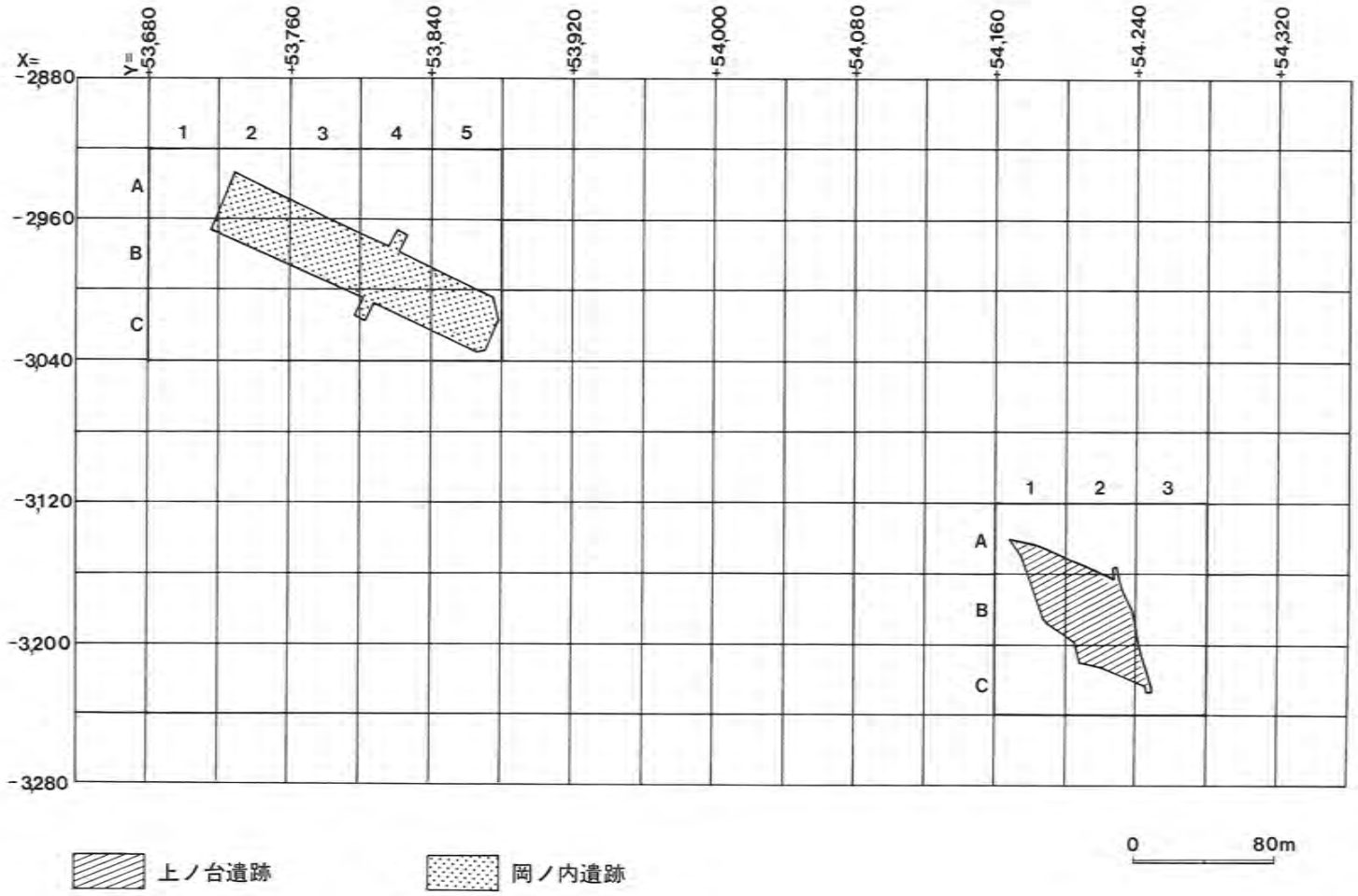


第3図　岡ノ内遺跡土層柱状図

3　遺構確認

調査前の遺跡の状況は，上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡とも畑地として耕作されてきた状況にあり双方の遺跡の表土からは，土師器片や須恵器片が採集されていることから，奈良・平安時代を中心とした遺構の存在が予想された。

調査区域全体にグリッドを設定し，調査面積の16分の1，次いで8分の1の割合で試掘を行った。上ノ台遺跡においては，調査区の4分の1まで試掘を行ったが，調査区の北部に数軒の住居跡及び数基の土坑しか確認されなかった。そのため，遺構が確認されたグリッドを拡張していくという方法を採り，人力による表土除去と遺構確認作業を実施した。その結果，住居跡3軒，土坑8基，溝1条，掘立柱建物跡1棟を確認した。岡ノ内遺跡においては，調査区のほぼ全域に遺


X=
Y=
-2,880
-2,960
-3,040
-3,120
-3,200
-3,280
+53,680
+53,760
+53,840
+53,920
+54,000
+54,080
+54,160
+54,240
+54,320
1
2
3
4
5
A
B
C
1
2
3
A
B
C
0
80m
上ノ台遺跡
岡ノ内遺跡

第 4 図　遺跡関連図

構の存在することが認められたので，担当者間で協議し，重機を導入して速やかに調査を進められるように図った。バックホーによる表土除去と，作業員による遺構確認作業を行い，住居跡18軒，土坑71基，溝６条等を確認した。

4　遺構調査

上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡における遺跡の調査は，次の方法で行った。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設定し，四分割して掘り込む「四分割法」を基本とし，地区の名称は，北から時計回りに１～４区とした。重複している場合には，新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は，長径方向で二分割して掘り込む「二分割法」で行った。

土層観察は，色相，含有物，混入物の種類や量，及び粘性，締まり具合等を観察し，分類の基準とした。色相の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げについては，住居跡，堀，溝，土坑の各区名と遺物番号，出土位置，レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で行い，土層断面や遺構断面の実測は，標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の１を基本としたが，竈や部分的な微細図については10分の１の縮尺で作成した。

調査の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては，野帳及び調査記録カードに記録し，さらに遺構カードに整理した。

第３節　調査経過

上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の発掘調査は，平成２年４月１日から平成２年９月30日までの６か月にわたって実施された。以下，調査の経過について，その概要を月ごとに記述する。

４　月　発掘調査に必要な事務所や現場倉庫の設置，調査機材搬入及び作業員の雇用を行った。
24日には，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って，鍬入れ式を挙行した。

５　月　上ノ台遺跡の清掃作業を行い，調査区内にグリッドを設定し，試掘を開始した。
11日には，４分の１までの試掘を完了したが，調査区北部の一部に遺構が確認されたに過ぎなかった。そのため遺構の存在が確認された周辺を拡張するという方法を採り，人

力による表土除去と遺構確認を併せて開始した。その結果，竪穴住居跡３軒，土坑８基，溝１条，掘立柱建物跡１棟が確認され，中央部寄りの第１号住居跡から本調査を開始した。

6　月　岡ノ内遺跡においては，グリッド試掘の結果，調査区全域から遺構が確認されたため，重機による表土除去を計画した。12日には岡ノ内遺跡の東部から表土除去を開始し，併せて遺構確認作業を開始した。その結果，竪穴住居跡18軒，土坑71基，溝６条が確認された。19日には，併行していた上ノ台遺跡の本調査を終え，岡ノ内遺跡の本調査を調査区東端部の第１号住居跡から開始した。

7　月　17日に，上ノ台遺跡の航空写真撮影を実施した。25日には，岡ノ内遺跡の調査区北西部に地点貝塚を確認した。

8　月　岡ノ内遺跡の本調査を進めた。第15号住居跡の竈からは，高台付坏が４枚逆位の状態で出土し，第53号土坑からは，置き竈の破片が出土した。

9　月　16日に，岡ノ内遺跡において現地説明会を開催し，遺構，遺物を一般公開した。小雨にもかかわらず約60名の見学者が訪れた。19日には，岡ノ内遺跡の航空写真を撮影し，27日までに，上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の補足調査，埋め戻し及び安全対策を実施し，28日には，一切の現地調査を完了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡の2遺跡は，茨城県稲敷郡桜川村大字浮島に所在している。

桜川村は，県南地域の南東部に位置し，村域は東西約11.4km，南北約5.3km，面積約34.13km²を測り，人口は8,130人，世帯数は1,965戸(平成3年10月1日現在)を擁する。北及び東は我国第二の面積を誇る霞ケ浦，南は東村，西は江戸崎町と境界を接している。村の中央部を県道新川江戸崎線が東西に走り，西側を国道125号が南東から北西方向に走り，土浦市と結んでいる。昭和61年4月には，浮島地区と東村本新島を結ぶ稲敷大橋が開通し，国道51号から桜川村への距離を短縮させた。

村の基幹産業は，稲作を中心として野菜（大根・野沢菜等）・たばこ栽培を主とする農業で，今日，全国市場で有名な“浮島蓮根”をはじめ，ハウス栽培による，スイカ，メロン，ブドウ等も特産物となり，都市近郊型農業としての性格を強めつつある。

近年，水郷筑波国定公園の一部に指定されている浮島・和田地区をもつ桜川村は，釣り場やキャンプ場のほか5か所のゴルフ場等，レジャー用地の開発も積極的に行われており，多くのレジャー客を集めている。

桜川村は東端を新利根川が，西端を小野川が北流して霞ケ浦に注ぎ，南側には東村を隔てて坂東太郎の名で親しまれる利根川が東流する水郷地帯が広がっている。村の西部には稲敷台地が広がり，近年，企業誘致も積極的に行われ，工業用地としても広く利用されている。東部の沖積低地は，肥沃な水田地帯が開け，早場米の産地で穀倉稲敷の一翼を担っている。

遺跡の所在する浮島地区は，村域の東部を占め，霞ケ浦の湖畔に位置し，南北1.5km，東西7.2kmで，面積は約10km²である。かつては，霞ケ浦に浮かぶ島であったが，周囲の干拓が進み，現在は陸続きになっている。中央部は標高25m程の台地で，台地上は畑地として利用されている。

上ノ台遺跡は，浮島地区のほぼ中央部の標高23～25m程の台地上に位置している。台地上は畑地として利用されている。台地の南側を除く三方は急崖をなし，北側には，霞ケ浦沿岸の水田地帯が開けている。水田面との比高は，約20mである。

岡ノ内遺跡は，上ノ台遺跡の北西約350m程，支谷を挟んだ標高22m程の台地上に位置している。台地上は畑地として利用されている。台地の南側を除く三方は急崖をなし，北側は霞ケ浦沿岸の水田地帯が開けている。水田面との比高は約18mである。

第2節　歴史的環境

霞ケ浦沿岸地方は，古くから数多くの遺跡が所在することで知られており，多くの研究者の関心を集めた地域である。桜川村もその例外ではなく，考古学史上著名な遺跡が存在している。

ここでは，村内の主な遺跡について，時代をおって述べることにする。

縄文時代の遺跡としては，貝ケ窪貝塚<25>，広畑貝塚<13>及び前浦遺跡<24>等があり，いずれも学術上貴重な遺跡である。貝ケ窪貝塚[1]は，桜川村大字浮島字狭間久保の台地斜面に所在し，2か所の地点貝塚からなる縄文時代前期後葉の遺跡である。この貝塚は，ハマグリを主体とし，アサリ，シオフキ，アカニシ等を含む純鹹貝塚であり，自然遺物のほか，石器，骨角牙器，貝器，土器等が出土している。中でも，この貝塚から出土した土器は「浮島式」土器と呼ばれ，霞ケ浦沿岸を中心として関東地方から東北地方南部にかけて分布する土器の標式となる重要な土器となっている。広畑貝塚[2]は，桜川村大字飯出字ひろ畑ほかの丘陵斜面から沖積地にかけて所在し，東西75m，南北40mにおよぶ大規模な貝塚である。この貝塚は，ハマグリ，アカニシ等からなる純鹹貝塚で，縄文時代後期から晩期にかけての土器と伴に，土偶，ヤス等が出土している。出土した土器の中には，製塩に使用されたと考えられる土器が多量に含まれていることから，縄文時代の製塩遺跡として注目され，昭和57年2月27日，国指定史跡となっている。前浦遺跡[3]は，桜川村大字浮島字前浦に所在する縄文時代後期から古墳時代にかけての複合遺跡である。昭和31年に，山内清男氏が発掘調査を行い，縄文時代晩期中葉における当地方の土器型式として「前浦式」土器が抽出され，今日，関東地方における晩期縄文式土器の一型式として全国に知られている。本遺跡は，縄文後・晩期の製塩跡と考えられる遺構及び製塩土器が多数出土していることでも有名である。

弥生時代の遺跡としては，前述の前浦遺跡と同一地内に所在する殿内貝塚[4]<37>がある。この貝塚から，初期弥生式土器を埋設した土坑が，晩期縄文式土器を包含する層を掘り込んだ状態で検出されており，縄文時代と弥生時代の接点を知るうえで重要な遺跡である。弥生時代の再葬墓が10基検出されている。

古墳時代になると，桜川村にも次々と古墳が築造され，現在8か所の古墳群と8基の古墳が確認されている。中でも，桜川村大字浮島字追越に所在する原古墳群<34>の原1号墳[5]は，全長32mの前方後円墳で，4世紀後半に築造されたと考えられ，県内でも最古のクラスに位置づけられる古墳として知られている。浮島の北端に位置する和田岬には，勝木古墳群[6]が所在する。古墳時代の中期から後期の集落跡としては，桜川村大字浮島字宮の脇に所在する宮の脇遺跡[7]及び尾島貝塚[8]，後期の集落跡としては，同後九郎兵衛[9]に所在する後九郎兵衛遺跡等がある。尾島貝塚からは，多

量の祭祀遺物と共に祭祀跡，屋外工房跡が検出されている。

奈良・平安時代の遺跡としては，今回調査した上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡のほか，前述の宮の脇遺跡，尾島貝塚等が確認されている。『常陸国風土記』のなかに「乗浜ノ里ノ東ニ浮島ノ里アリ。（中略）居メル百姓，塩ヲ火キテ業ト為ス。（以下略）」とあるように，律令体制下の桜川村域は，常陸国信太郡（『新編常陸国誌』によると，現在の江戸崎町下君山付近に，郡衙があったとされている。）乗浜郷とされ，乗浜の里は海苔の産地，浮島は製塩の地であったことが窺える。[10] 平安時代末期になると，この地方にも常陸平氏の勢力がおよび，東条忠幹によって治められて以来，鎌倉時代を通じて，その子孫によって支配されることになる。

南北朝時代の遺跡としては，南朝の北畠親房が東国における南朝勢力の強化を図るための拠点とした神宮寺城跡[11]<1>が，桜川村大字神宮寺に所在する。同城は，暦応元年（延元三年1338年）の親房入城後，間もなく北朝方の佐竹・鹿島勢の攻撃を受け落城している。城跡は，東西約200m，南北約400mの規模をもち，現在，本丸跡，外堀跡，土塁等が残っている。城跡の北方には，南朝方に味方した地元有力者の墓と伝えられる十三塚がある。

中世以降，桜川村域は浮島城[12]<39>を築いた浮島氏の支配をうけていたが，浮島氏は天正年間（1573年～1592年），豊臣秀吉の関東平定の余波を受け，佐竹氏によって滅ぼされ，浮島城は廃城となっている。

江戸時代の浮島地区[13]は，初期には幕府領，元禄年間は旗本領（雨宮氏，諸子氏，小栗氏）の相給，そして幕末は再び幕府領という変遷を経ている。元禄郷帳の石高は1,031石，その後新田開発が進み，天保郷帳では1,559石に増加している。

以上のように，桜川村には霞ケ浦をはじめとする豊かな自然環境を背景に，原始，古代から人々が生活を営み，著名な遺跡や史跡が数多く残されている。

※文中の<>の番号は，表1，第5図中の該当遺跡番号と同じである。

引用・参考文献

茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』　1987年

(1)～(3),(5)茨城県「原始古代編」『茨城県史』　1985年

茨城県「先土器・縄文時代」『茨城県史料　考古史料編』　1979年

(4)茨城県「弥生時代」『茨城県史料　考古史料編』　1991年

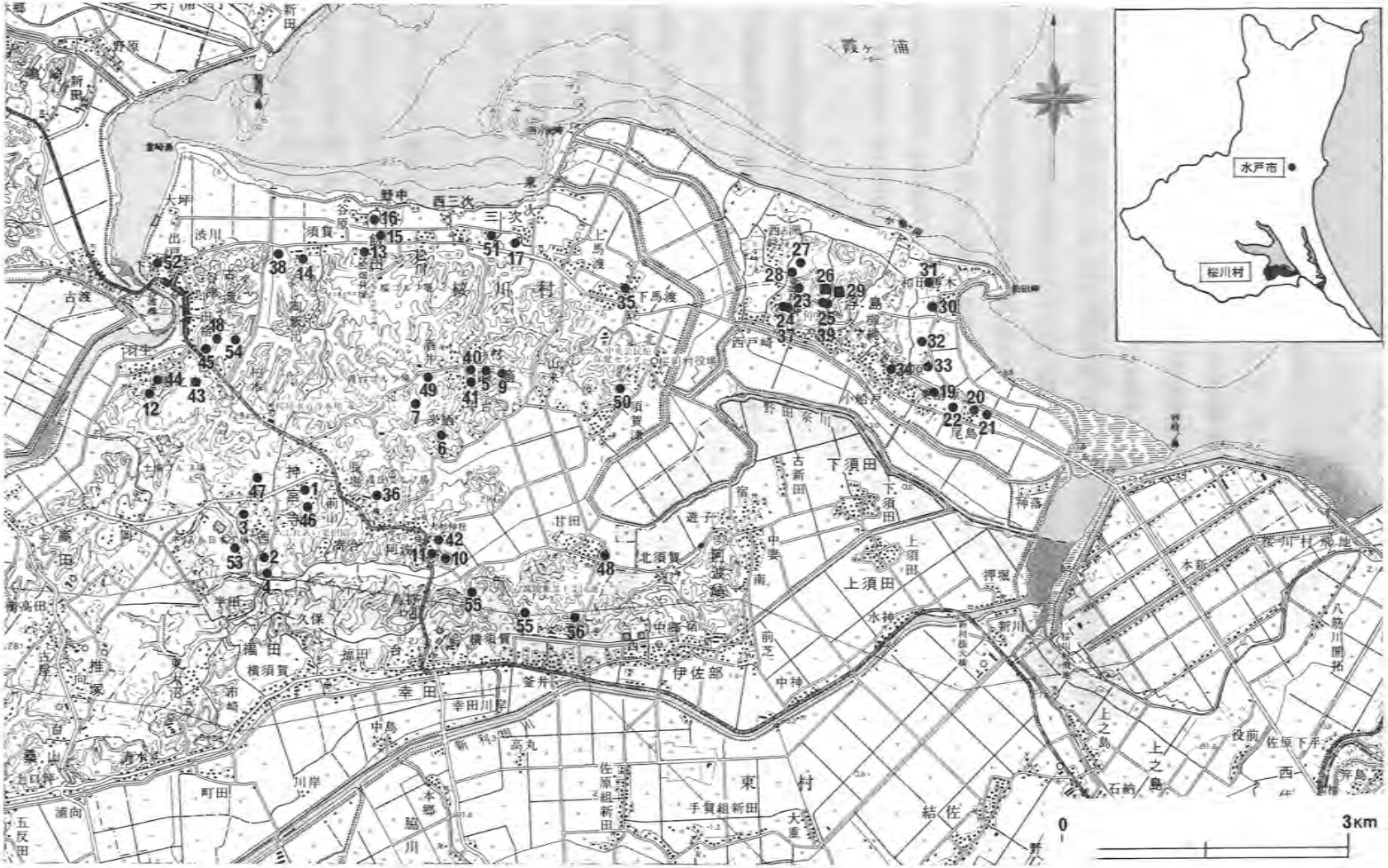
(6)茨城県「古墳時代」『茨城県史料　考古史料編』　1974年

(7)～(9)茨城県教育財団「尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第46集　1988年

(10)人見暁郎『常陸風土記入門』　1980年

(11),(12)　茨城県「中世編」『茨城県史』　1985年

(13)角川書店『日本地名辞典』　1983年


霞ヶ浦
水戸市
桜川村
0
3km
桜川村
下須田
上須田
伊佐部
東村
結佐
幸田
横須賀
須賀
北須賀
西三次
三次
上馬渡
下馬渡
西戸崎
小船戸
尾島
上之島
石納
役前
佐原下手
八筋川開拓
桜川村飛地
新川
水神
中神
前芝
中妻
南
古新田
宿
神落
押堀
本新
甘田
蓮子
久保
横須賀
幸田川岸
中島
高丸
佐原組新田
手賀組新田
大堂
本郷
舟川
川岸
町田
浦向
五反田
桑山
推塚
古屋
南島田
半田
福田
弟崎
蒲田
神宮寺
前山
辰地
村生
古渡
大坪
出戸
浅川
谷原
須賀
野中
谷原
東三次
三次
上馬渡
下馬渡
西戸崎
小船戸
尾島
上須田
下須田
北須賀
横須賀
伊佐部
結佐
東村
桜川村

第 5 図　周辺遺跡位置図

表1　上ノ台遺跡，岡ノ内遺跡周辺遺跡一覧表

番号	名称	時代						
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸
1	神宮寺城跡						○	
2	塔の前寺院跡					○		
3	穴かまど跡				○			
4	西原古墳群				○			
5	酒井古墳				○			
6	大室貝塚		○	○				
7	所作貝塚		○					
8	南貝塚		○					
9	大門貝塚		○					
10	龍貝貝塚		○					
11	石神下貝塚		○					
12	人形塚古墳				○			
13	広畑貝塚		○					
14	塚原古墳				○			
15	飯出A貝塚							
16	飯出B貝塚							
17	三次貝塚							
18	柏木貝塚							
19	後九郎兵衛遺跡		○	○	○			
20	尾島祭祀遺跡		○	○	○			
21	尾島貝塚		○	○	○			
22	宮の脇遺跡		○	○	○			
23	前浦貝塚		○	○				
24	前浦遺跡		○					
25	貝ケ窪貝塚		○					
26	岡ノ内遺跡		○			○	(当遺跡)	
27	年行地貝塚				○			
28	年行地遺跡					○		

番号	名称	時代						
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	鎌・室	江戸
29	上ノ台遺跡					○	(当遺跡)	
30	平山古墳群				○			
31	勝木古墳群				○			
32	竹の下古墳群				○			
33	寄縄原古墳群				○			
34	原古墳群				○			
35	下馬渡貝塚							
36	天神台貝塚							
37	殿内貝塚		○	○				
38	塚原貝塚							
39	浮島城跡						○	
40	村坪貝塚		○					
41	村坪遺跡		○					
42	南貝塚							
43	内道古墳群				○			
44	稲荷久保古墳				○			
45	柏木古渡古墳群				○			
46	前山古墳				○			
47	穴かまど跡				○			
48	甘田古墳				○			
49	四箇古墳群				○			
50	大日塚				○			
51	三次古墳				○			
52	小谷城跡						○	
53	迎山古墳							○
54	柏木古墳群		○		○	○		
55	立切遺跡							
56	東台古墳群							

※8番の南貝塚は位置不明

第３章　遺構・遺物の記載方法

第１節　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は，下記の要領で統一した。

(1)　使用記号

名称	竪穴住居跡	土坑	溝	掘立柱建物跡	地点貝塚	ピット
記号	ＳＩ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＢ	ＳＭ	$P_{1,}$‥

土器	土製品	石器・石製品	鉄製品
Ｐ	ＤＰ	Ｑ	Ｍ

(2)　遺構・遺物の表示方法

(3)　遺構番号

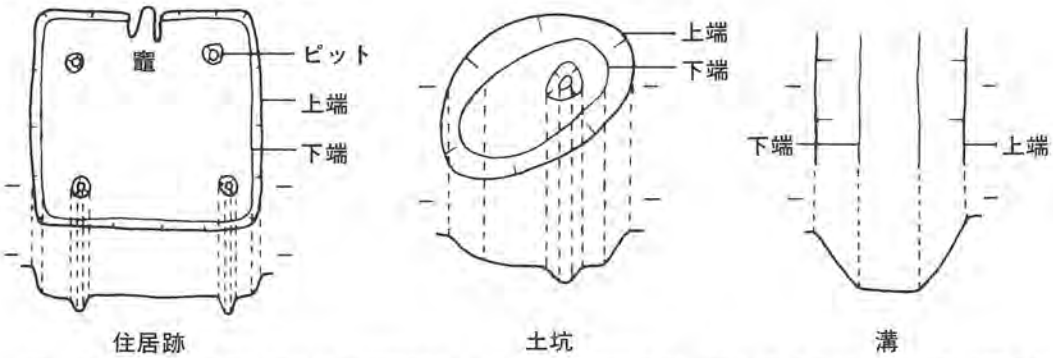
遺構番号については，調査の過程において遺構の種別毎，調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは，欠番とした。

(4)　土層の分類

各遺構における堆積土の土層については，調査時に，含有物，色調，粘性及び締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。

なお，色調については「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社発行）を使用し，図版実測図中に土層解説を記載した。

(5)　遺構実測図の記載方法



①　住居跡は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

②　土坑は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

③　竈・炉は，10分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

④　溝は，縮尺20分の１・40分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

⑤　実測図中のレベルは標高であり，m単位で表示した。

⑥　本文の住居跡の記載について

○「位置」は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○「重複関係」は，住居跡の切り合い関係を記した。

○「平面形」は，壁の上端部で判断し，方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。〔　〕を付したものは，推定を表す。

方形（短軸：長軸＝１：1.1未満），長方形（短軸：長軸＝１：1.1以上）

○「規模」は，壁の上端部の計測値であり，長軸×短軸の順にm単位で表記した。壁高は，残存壁高の計測値である。（　）を付したものは現存値を示す。

○「主軸方向」は，竈を通る線を主軸として，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。〔　〕を付したものは，推定を表す。

○「長軸方向」は，炉を通る長軸を，「主軸方向」に準じて計測し表示した。

○「壁」は，床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直，65°～80°を外傾，65°未満を緩斜さらに90°以上を内傾とした。

○「壁溝」は，その形状や規模を記述した。

○「床」は，形状や床質等を記載した。

○「ピット」は，その住居跡に伴うと考えられるピットをＰで表示し，P_1・P_2はピット番号を表し，さらに，ピットの直径と深さを記述した。

○「貯蔵穴」は，その形状を記述し，数字は長径，短径及び深さを示した。

○「覆土」は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，撹乱を受けている場合は「撹乱」と記した。

○「遺物」は，遺物の種類と数，出土遺物や状態を記述した。

また，遺構の平面図中に(2)で示した記号を用い，出土位置をドットで表示し，接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した番号は，遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。

○「所見」は，当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

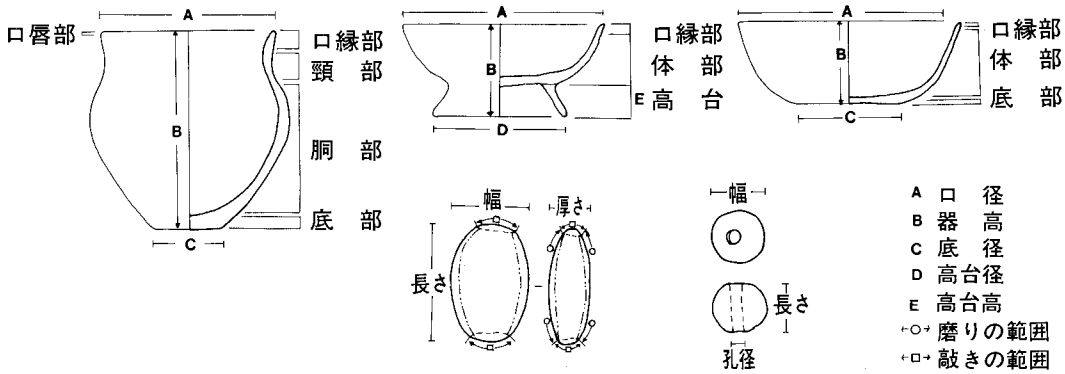
(6)　遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については，実測図，拓影図，写真等により掲載した。

①　土器の実測図は，原則として中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

② 土器拓影図は，右側に断面を図示した。

③ 遺物は，原則として実測図をトレースしたものを３分の１に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより異なる場合もある。



第２節　表の見方について

１　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高（cm）						

① 位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

② 主（長）軸方向は，座標北をＮ－０°とし，東(Ｅ)・西(Ｗ)に何度傾いているかを表示した。（例Ｎ－10°－Ｅ，Ｎ－10°－Ｗ）〔　〕を付したものは推定である。

③ 平面形は，現存している形状の上端面で判断し，方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

方形（短軸：長軸＝１：1.1未満）　長方形（短軸：長軸＝１：1.1以上）

④ 規模の欄の長軸・短軸は，上端の計測値であり，壁高は残存壁高の計測値である。

⑤ 床面は，平坦，凹凸，皿状及び緩い起伏とに分類して表記した。

⑥ 柱穴数は，平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。

⑦ 炉・竈は，その種類を記した。

⑧ 覆土は，自然堆積のものは「自然」，人為堆積のものは「人為」，堆積状況の不明のものは，「不明」と表記した。

⑨　出土遺物は，実測個体数を除いた遺物の種類と，出土土器片の数を記した。

⑩　備考は，重複関係等について記した。

2　土坑一覧表

土坑番号	位　置	長径方向（長軸方向）	平面形	規　模（m）		壁　面	底　面	覆　土	出土遺物	備　考	図版番号
				長径×短径	深　さ						

①　土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。

また，整理の過程で土坑でないと判断したものは欠番とした。

②　平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

円形（短径：長径＝１：1.2未満）楕円形（短径：長径＝１：1.2以上）

③　規模の欄の長径・短径は，上端部の計測値（m）で表した。

④　壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

⑤　その他の項目については，住居跡一覧表の記載方法に準じた。

3　出土遺物観察表

(1)　土器

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考

①　遺物番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

②　法量は，A－口径　B－器高　C－底径　D－高台径　E－高台高，単位はcmである。推定値は〔　〕を付した。

③　胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土，色調及び焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，焼き締まって硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。

④　備考の欄は，土器の残存率，実測(P)番号，出土位置，その他必要と思われる事項を記した。

(2)　土製品

遺物番号	器　種	法　量				出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		

① 遺物番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

② 重量の欄で，（ ）を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

③ 備考の欄は，実測（ＤＰ）番号，その他必要と思われる事項を記した。

(3) 石器・石製品

遺物番号	器　種	法　量				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			

① 遺物番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

② 備考の欄は，実測（Ｑ）番号，その他必要と思われる事項を記した。

(4) 鉄製品

遺物番号	器　種	法　量				備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	

① 遺物番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

② 備考の欄は，出土位置，実測（Ｍ）番号，その他必要と思われる事項を記した。

第４章　上ノ台遺跡

第１節　遺跡の概要

上ノ台遺跡は，桜川村の東部，浮島地区の標高23～25m程の台地上に立地する，縄文時代早・前期及び平安時代の複合遺跡である。調査区は，南北に約60m，東西に約50m，面積3,027㎡であり，現況は畑地である。

今回の調査によって検出された遺構は，竪穴住居跡３軒，土坑８基，掘立柱建物跡１棟，溝１条である。

縄文時代の遺構は検出されなかったが，縄文時代早・前期の土器片が遺構外から出土している。

平安時代の遺構としては，竪穴住居跡３軒が調査区の北西部から検出されている。平面形は，一辺が3.0～4.5m程の方形あるいは長方形を呈しており，竈が付設されている。いずれの住居跡からも柱穴は検出されていない。土坑は，調査区の北部及び南部から，断面形が袋状を呈した大形の土坑や，墓壙と考えられるもの等を含む５基が検出され，それぞれの土坑からは，平安時代に比定される土師器の小形甕，坏，高台付坏等が出土している。

その他，時期が特定できない遺構として，土坑３基，掘立柱建物跡１棟，溝１条が，主に調査区の北西部から検出されている。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に２箱程出土している。縄文時代の遺物は，早・前期の土器片が少量出土している。平安時代の遺物は，土師器の甕，坏，高台付坏等が住居跡及び土坑から出土しており，中には，内面が黒色処理された坏や高台付坏がみられる。土師器が出土遺物の大半を占め，須恵器はごく僅かである。第３号住居跡の竈燃焼部からは，羽釜片が出土している。土製品は，球状土錘，管状土錘（全長２～３cmの小形のもの）が多くみられ，鉄製品は，第２号住居跡から鈍が１点出土している。

第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

当遺跡からは，調査区の北西部から３軒の竪穴住居跡が検出されている。検出された住居跡のほとんどが耕作等による撹乱を受け，出土遺物は大部分が破片である。

以下，検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載する。

第１号住居跡（第７図）

位置　調査区の北西部，A2j_2区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.37m，短軸3.00mの長方形を呈している。

主軸方向　N－26°－E

壁　壁高は，20～23cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北東壁を除き，壁下に確認され，上幅10～15cmを測り，深さは３～５cm程で，断面形はU字状を呈している。

床　平坦で，全体に踏み固められ堅緻である。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は長さ80cm，幅85cmで，壁への掘り込みは，55cm程である。砂や粘土で構築されているが，撹乱を受け遺存状態が悪い。火床は，床面を20cm程掘り窪め，焼き締まりは弱く，焼土粒子及び焼土小ブロックが少量出土している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　全体的にローム小ブロックを少量含み，人為堆積の状況を示している。

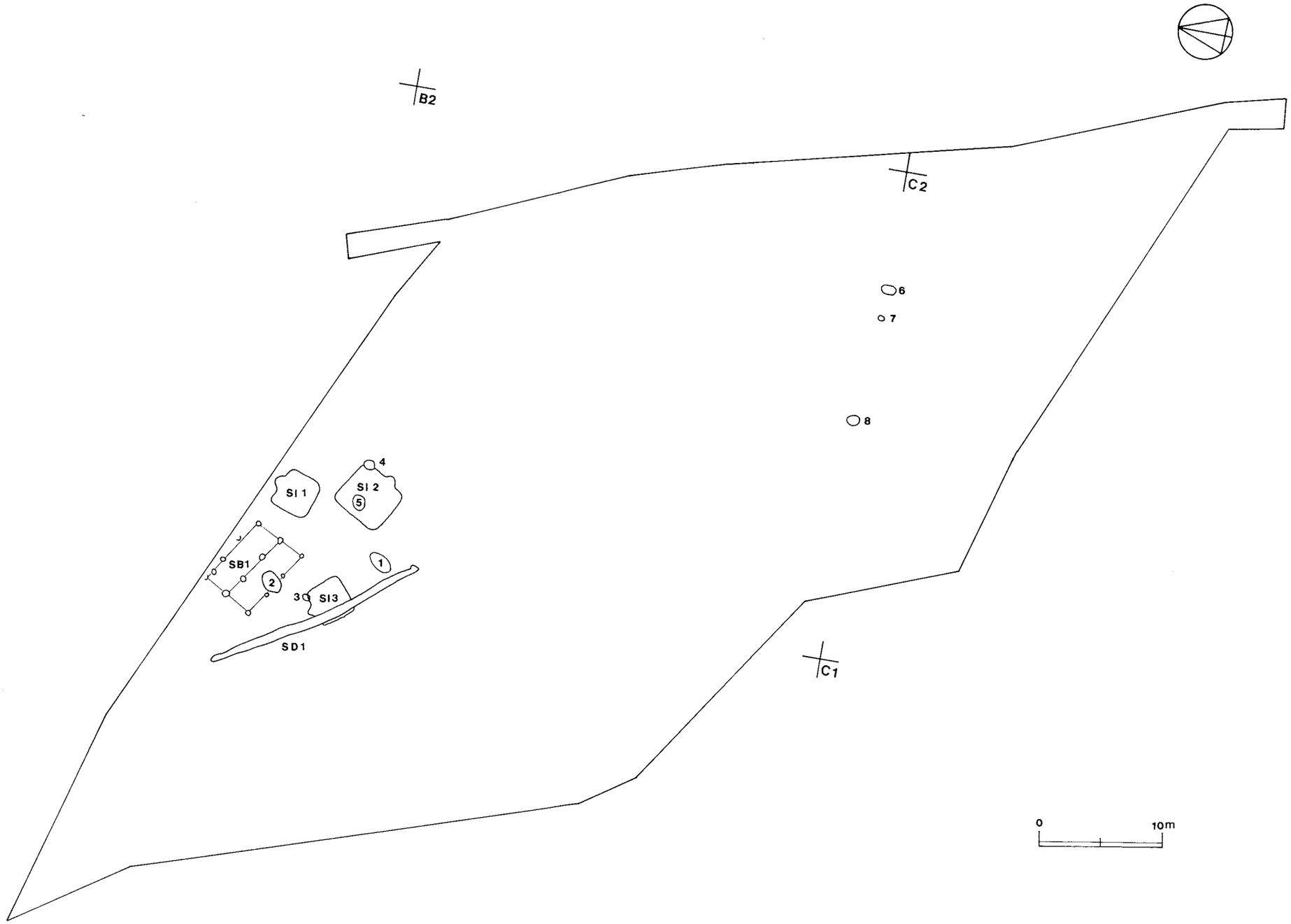
遺物　土師器片59点（甕片，坏片），土製品９点（管状土錘，球状土錘）が，主に覆土上層及び中層から出土している。竈燃焼部の覆土からは，土師器片13点（甕片）が出土している。２の坏は南東壁際中程の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

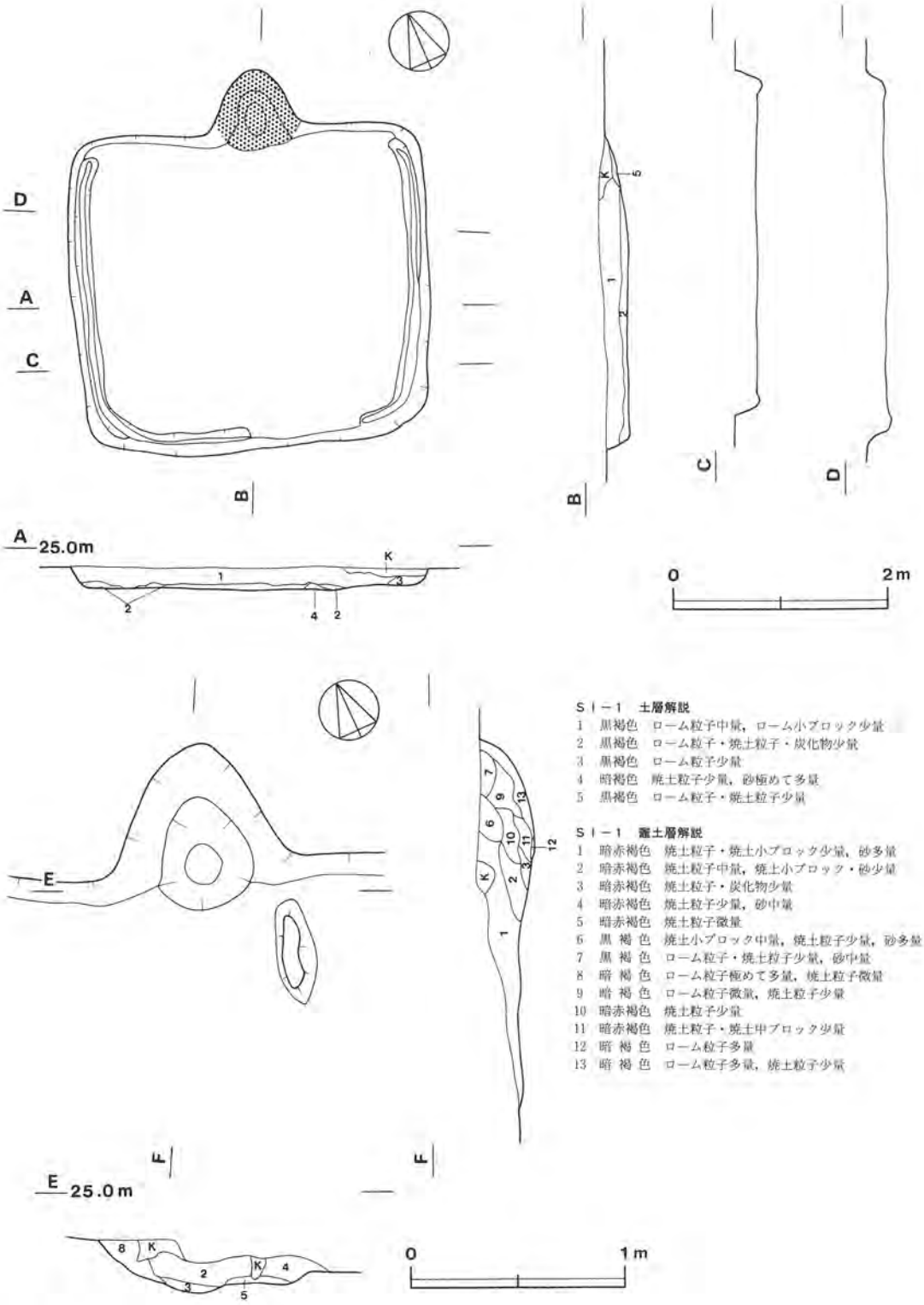
第１号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A〔17.5〕 B(10.2)	胴部欠損。頸部を「く」の字状に屈曲させる。口縁部外面に沈線を施す。	胴部内・外面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。 輪積み痕有り。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P１　15% 竈燃焼部 覆土中層
2	坏 土師器	A〔15.0〕 B(3.6)	体部は外傾して立ち上がり，口唇部は丸みをもつ。	体部内・外面横ナデ。 内面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P２　15% 南東壁際 覆土中層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
3	球状土錘	1.7	1.9	0.5	4.7	北部覆土下層	DP１　100%
4	球状土錘	1.7	1.8	0.5	4.5	東部覆土中層	DP２　100%
5	球状土錘	1.4	1.7	0.5	3.5	南部覆土中層	DP３　100%
6	球状土錘	1.7	1.7	0.5	4.1	西部覆土中層	DP４　100%
7	球状土錘	1.7	1.8	0.5	4.0	南部覆土中層	DP５　100%
8	球状土錘	1.3	1.8	0.5	(3.5)	竈覆土上層	DP６　70%
9	管状土錘	4.8	1.4	0.5	(8.4)	北部覆土中層	DP７　90%
10	管状土錘	(2.5)	1.3	0.5	(3.4)	西部覆土中層	DP８　80%
11	管状土錘	(2.8)	1.3	0.5	(4.0)	東部覆土上層	DP９　70%



第６図　上ノ台遺跡遺構配置図



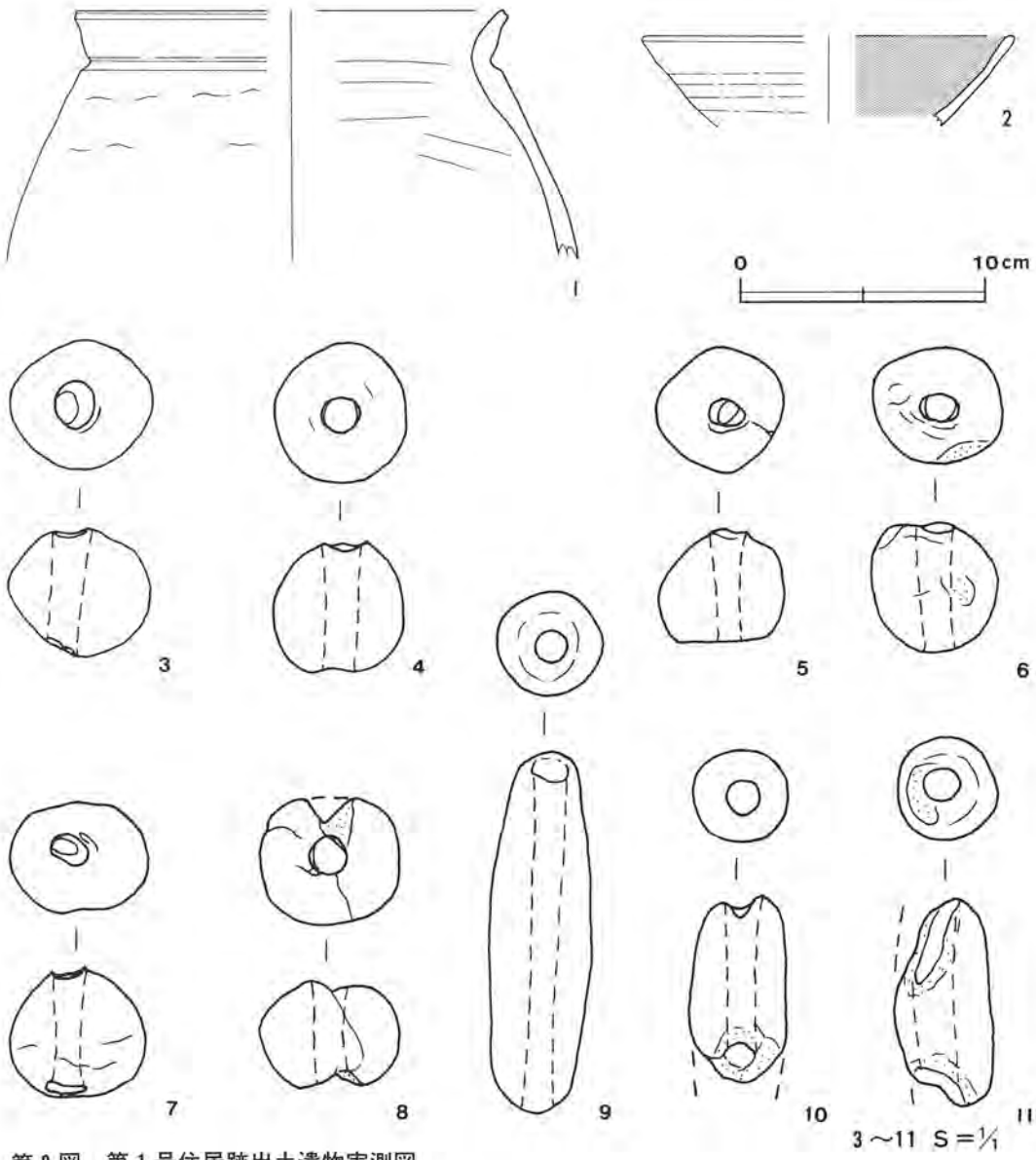
Ｓ Ⅰ－１　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
3　黒褐色　ローム粒子少量
4　暗褐色　焼土粒子少量，砂極めて多量
5　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量

Ｓ Ⅰ－１　竈土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂多量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック・砂少量
3　暗赤褐色　焼土粒子・炭化物少量
4　暗赤褐色　焼土粒子少量，砂中量
5　暗赤褐色　焼土粒子微量
6　黒 褐 色　焼土小ブロック中量，焼土粒子少量，砂多量
7　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂中量
8　暗 褐 色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子微量
9　暗 褐 色　ローム粒子微量，焼土粒子少量
10　暗赤褐色　焼土粒子少量
11　暗赤褐色　焼土粒子・焼土中ブロック少量
12　暗 褐 色　ローム粒子多量
13　暗 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子少量

第７図　第１号住居跡実測図



第8図　第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡（第9・10図）

位置　調査区の北西部，B2a$_2$区を中心に確認されている。

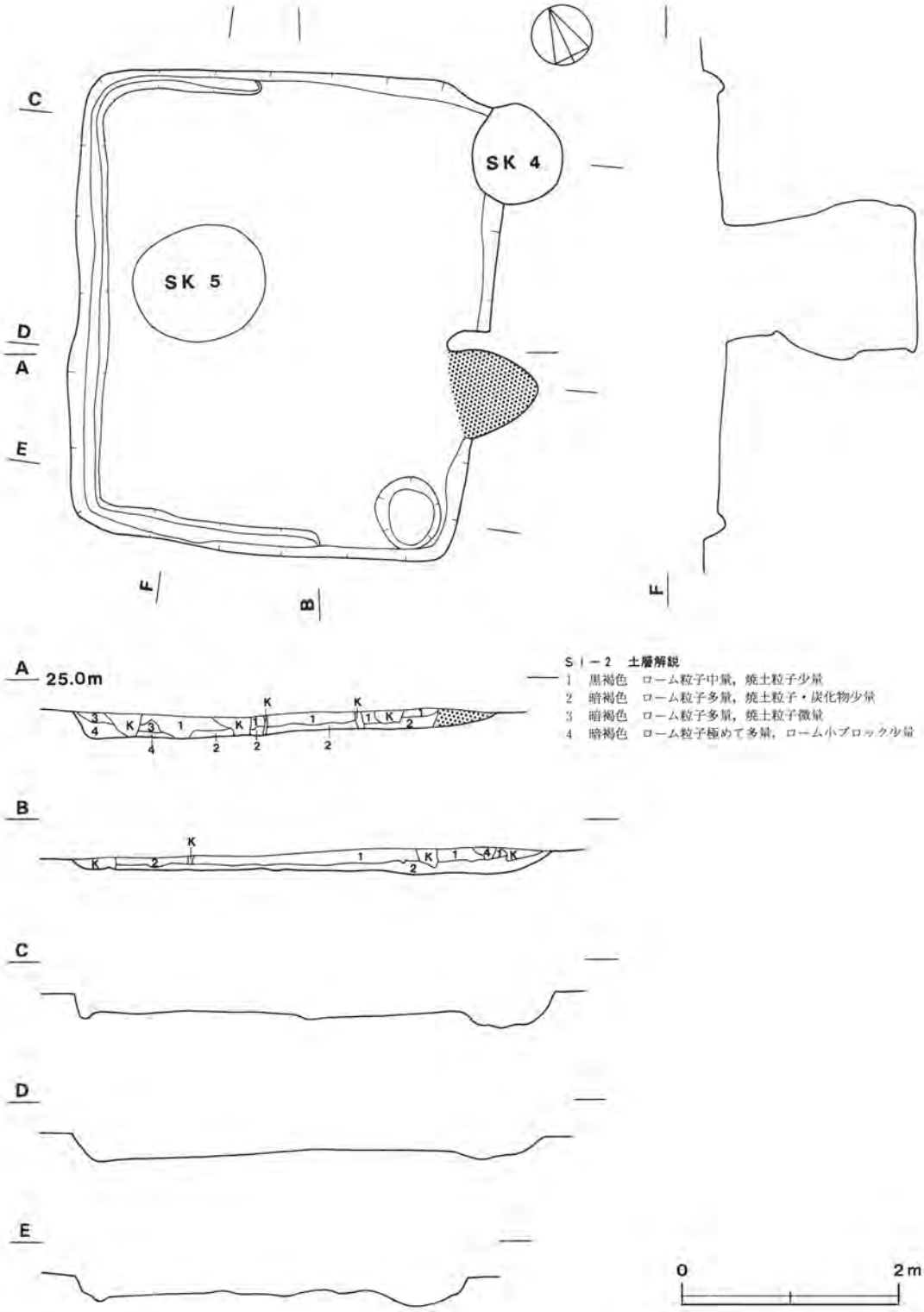
重複関係　東コーナーを第4号土坑に，北西部床面を第5号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.50m，短軸3.38mの長方形を呈している。

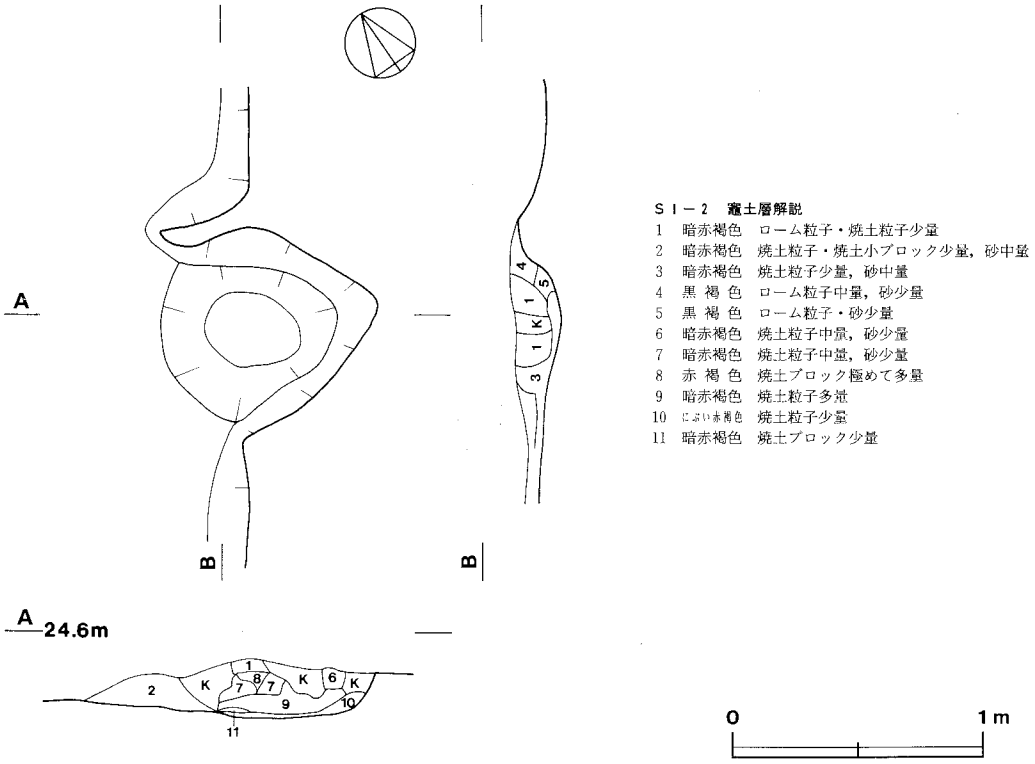
主軸方向　N－124°－E

壁　壁高は，16～25cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北西壁下及び南西壁下，北東壁下の一部に検出され，上幅10～20cmを測り，深さは6cm程



第9図　第2号住居跡実測図



第10図　第２号住居跡竈実測図

で，断面形はU字状を呈している。

床　竈付近は平坦で，硬い部分が認められる。全体的には軟らかく凹凸を呈している。

貯蔵穴　南コーナーに付設され，径60cmの円形で深さ14cmを測り，断面形はU字状を呈している。

竈　南東壁中央部からやや南西側に付設され，規模は長さ88cm，幅110cmを測る。壁を50cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を10cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片131点（甕片，坏片，高台付坏片），土製品４点（球状土錘，管状土錘），鉄製品１点（鉈）が主に覆土中層から出土している。貯蔵穴の覆土中層からは，土師器片９点(甕片)，竈燃焼部の覆土中層からは，土師器片４点（甕片）が出土している。13の内面黒色処理された土師器の坏は南コーナー付近の覆土下層から，20の鉈は東コーナー付近の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第４・５号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第２号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
12	甕 土師器	A〔19.7〕 B（6.5）	胴部欠損。頸部を「く」の字状に屈曲させる。口縁部外面に浅い沈線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P３　5％ 南コーナー付近 覆土中層
13	坏 土師器	A〔13.6〕 B（4.5）	体部は内彎して立ち上がり，口縁部はやや外傾する。	体部内・外面横ナデ。 内面黒色処理。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P５　25％ 南コーナー付近 覆土下層
14	坏 土師器	A〔13.8〕 B（3.1）	口縁部片。口縁部はやや外傾し口唇部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 不良	P６　20％ 南コーナー付近 覆土中層
15	高台付坏 土師器	A〔16.2〕 B　6.1 D〔9.0〕 E　1.7	平底。高台は「ハ」の字状で，畳付は内側が下がる。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 やや不良	P７　45％ 南コーナー付近 覆土中層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
16	球状土錘	2.3	2.0	0.5	8.1	東部覆土下層	DP10　100％
17	球状土錘	1.3	1.8	0.6	3.4	中央部覆土下層	DP11　100％
18	管状土錘	3.9	1.3	0.4	(5.3)	西部覆土中層	DP12　90％
19	管状土錘	3.0	0.8	0.3	(1.5)	竈覆土中層	DP13　90％

遺物番号	器種	法量			備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
20	錐	10.9	1.3	0.4	東コーナー付近覆土中層から出土　M１

第３号住居跡（第12図）

位置　調査区の北西部，A1j_0を中心に確認されている。

重複関係　西部を第１号溝に，北コーナーを外側から第３号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.00m，短軸2.86mの方形を呈している。

主軸方向　N－36°－W

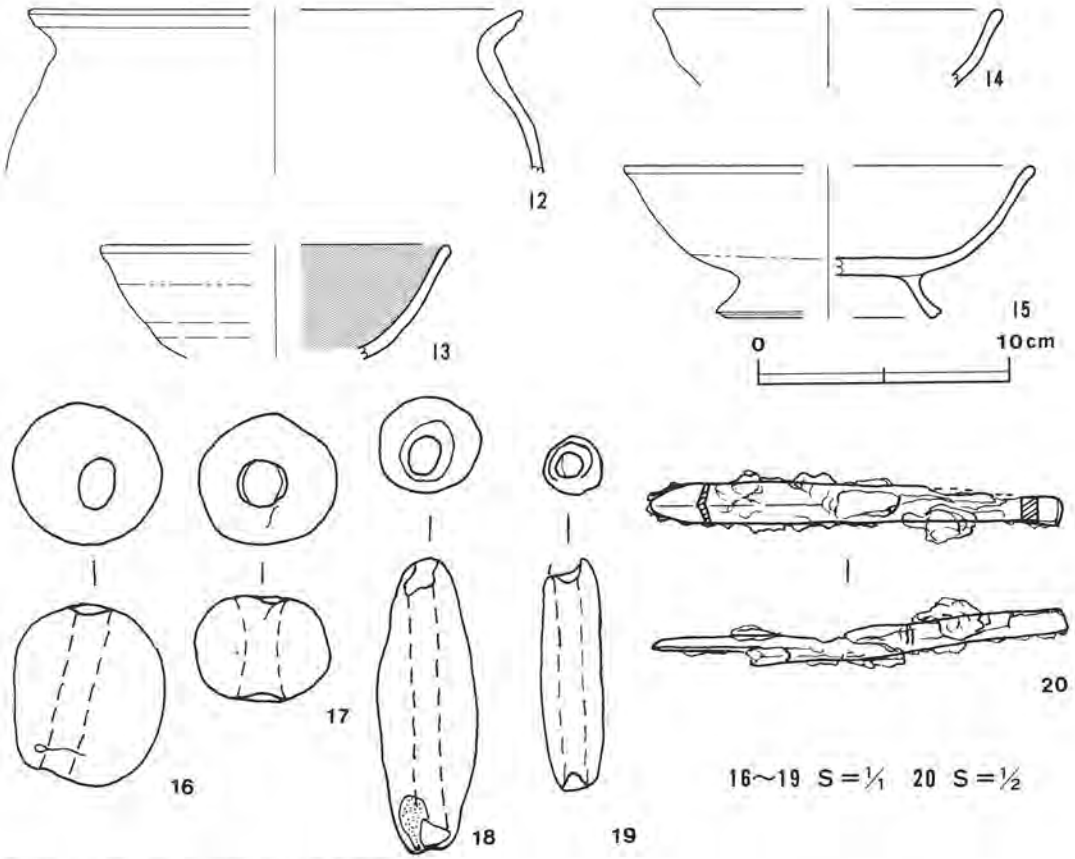
壁　壁高は23～30cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　平坦であり，全体に踏み固められ堅緻である。

貯蔵穴　北コーナーに付設され，径50cmの円形で，深さ40cmを測り，断面形は逆台形状を呈している。

竈　北西壁中央部に付設され，規模は長さ120cm，幅125cmを測る。壁を60cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を５cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。



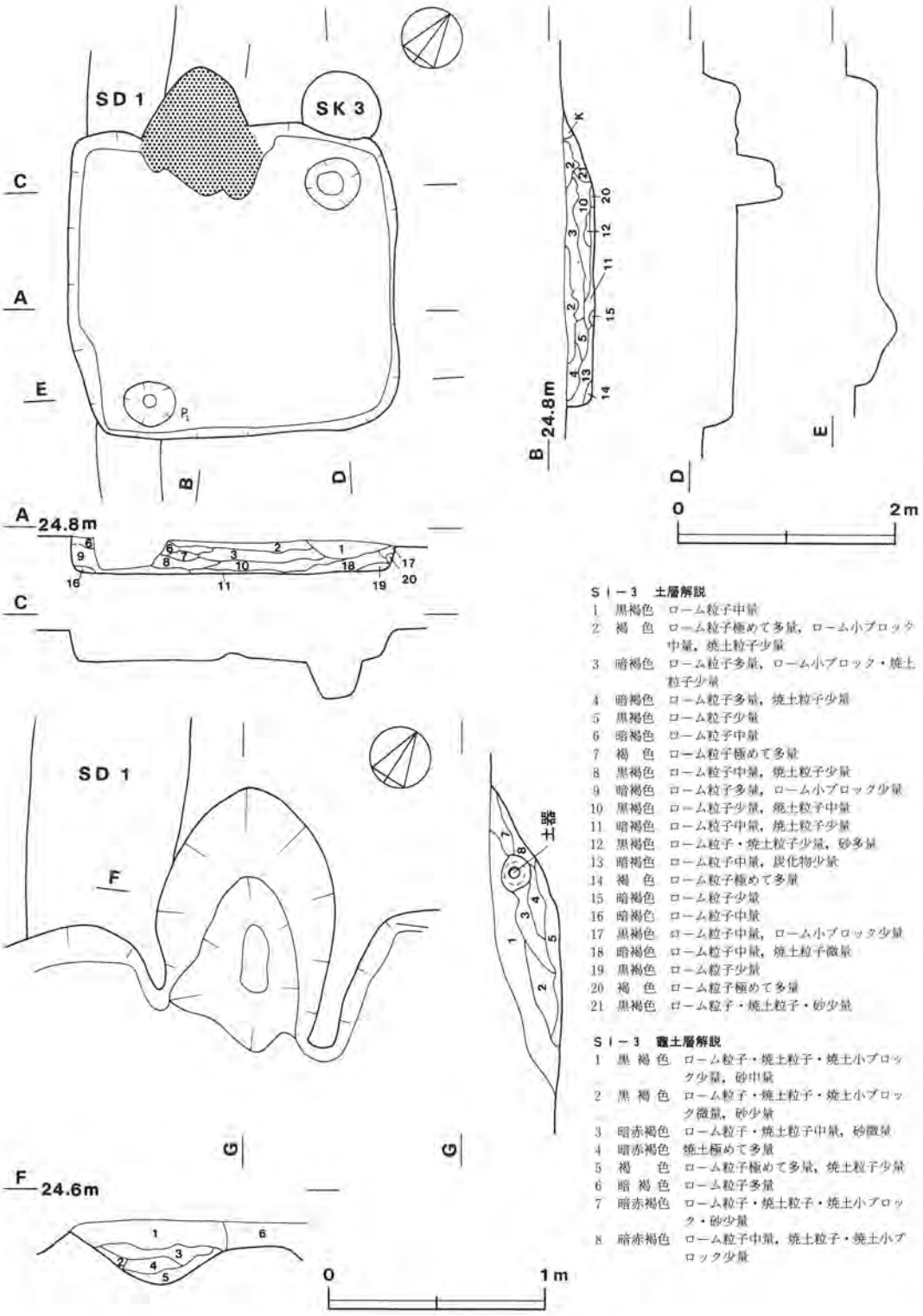
第11図　第2号住居跡出土遺物実測図

遺物　土師器片147点(甕片，坏片，高台付坏片，羽釜片)，須恵器片2点(甕片)，土製品1点(球状土錘)が覆土上層及び中層から出土している。竈燃焼部覆土上層及び中層からは，土師器片35点(甕片，坏片，羽釜片)が出土している。22の高台付坏は竈燃焼部覆土中層から横位の状態で，23の羽釜片は竈燃焼部覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第1号溝，第3号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	甕 土師器	A〔16.8〕 B〔 7.8〕	胴部欠損。頸部は丸みをもって外反する。口唇部はつまみ上げられる。	胴部内面ヘラナデ。 口縁部内面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 不良	P 8　10% 竈燃焼部 覆土上層
22	高台付坏 土師器	A 14.0 B 5.5 D〔 7.6〕 E 1.8	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸みをもつ。	底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 9　80% 竈燃焼部 覆土中層
23	羽釜 土師器	幅 3.1 厚さ1.6 長さ(7.7)	鍔の一部。	ナデ。	砂粒 橙色 普通	P10　5% 竈燃焼部 覆土上層



S I－3　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量
2　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子少量
6　暗褐色　ローム粒子中量
7　褐　色　ローム粒子極めて多量
8　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
10　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子中量
11　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
12　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂多量
13　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物少量
14　褐　色　ローム粒子極めて多量
15　暗褐色　ローム粒子少量
16　暗褐色　ローム粒子中量
17　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
18　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
19　黒褐色　ローム粒子少量
20　褐　色　ローム粒子極めて多量
21　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂少量

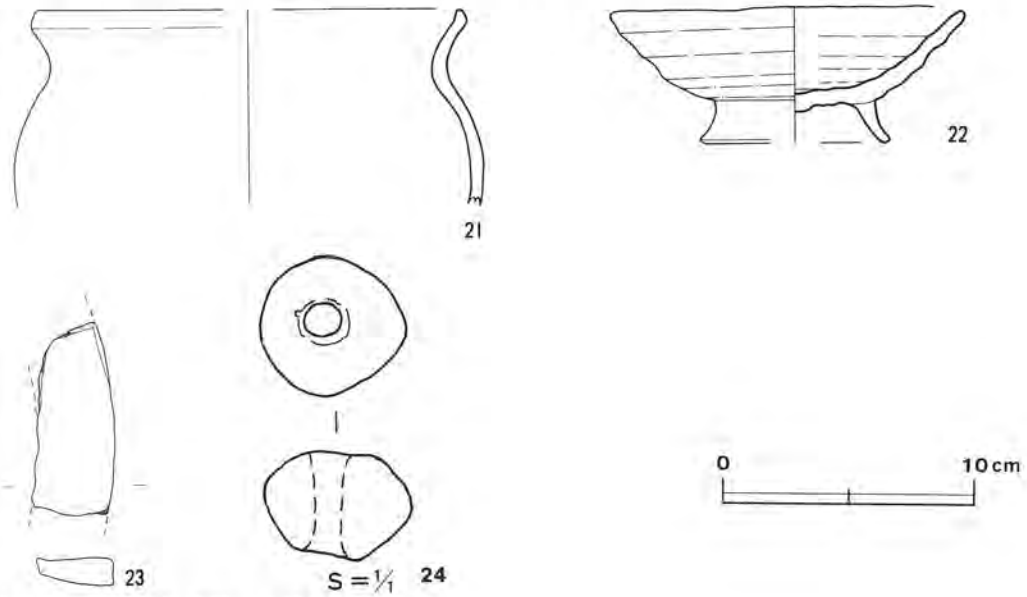
S I－3　竈土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂中量
2　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック微量，砂少量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，砂微量
4　暗赤褐色　焼土極めて多量
5　褐　　色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子少量
6　暗 褐 色　ローム粒子多量
7　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・砂少量
8　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・焼土小ブロック少量

第12図　第３号住居跡実測図

第 3 号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
24	球状土錘	1.4	1.9	0.6	3.9	西部覆土中層	DP14 100%



第13図　第 3 号住居跡出土遺物実測図

表 2　上ノ台遺跡竪穴住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)						
1	$A2j_2$	N-26°-E	長方形	3.37×3.00	20～23	平坦	0	竈	人為	土師器片59点(甕片，坏片)，土製品9点	
2	$B2a_2$	N-124°-E	長方形	4.50×3.38	16～25	凹凸	0	竈	自然	土師器片131点(甕片，坏片，高台付坏片)，土製品4点，鉄製品1点	SK-4･5と重複
3	$A1j_0$	N-36°-W	方形	3.00×2.86	23～30	平坦	0	竈	人為	土師器片147点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片2点，土製品1点	SK-3，SD-1と重複

2　土坑

当調査区から検出された土坑は8基である。主な土坑5基については以下に記載し，他は一覧表の中に記載した。

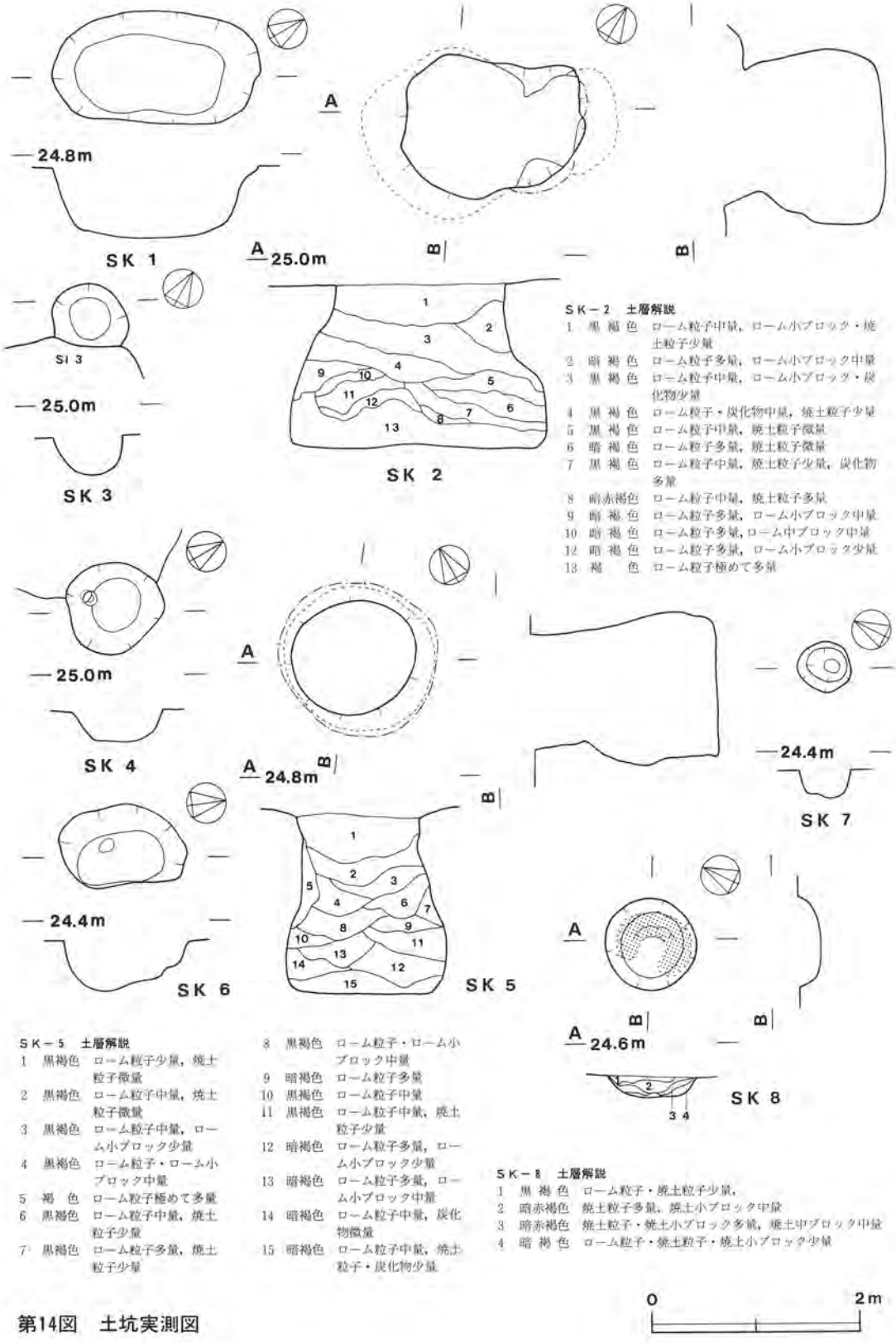
第 2 号土坑（第14図）

位置　調査区の北西部，$A1i_0$区に確認されている。

規模と平面形　長径1.75m，短径1.45mの不整楕円形を呈し，深さは1.59mである。

長径方向　N－50°－E

壁面　底面から1.30m程の高さまでオーバーハングしており，壁面はロームで硬く締まっている。



SK－2　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化物少量
4　黒褐色　ローム粒子・炭化物中量，焼土粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
7　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物多量
8　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子多量
9　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
10　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量
12　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
13　褐　色　ローム粒子極めて多量

SK－5　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
5　褐　色　ローム粒子極めて多量
6　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
7　黒褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
8　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
9　暗褐色　ローム粒子多量
10　黒褐色　ローム粒子中量
11　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
12　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
13　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
14　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物微量
15　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量

SK－8　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
3　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量，焼土中ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量

第14図　土坑実測図

底面　全体的に平坦であり，ローム面は，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片58点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片２点（甕片），土製品２点（球状土錘）が覆土から出土している。27の坏は北東壁際覆土下層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から平安時代の土坑と思われるが，性格については不明である。

第４号土坑（第14図）

位置　調査区の北西部，B2a$_3$区に確認されている。

重複関係　第２号住居跡の東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形　径1.40mの円形を呈し，深さは0.32mである。

壁面　外傾して立ち上がり，壁面はロームで硬く締まっている。

底面　鍋底状を呈し，やや丸みをもっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器２点（坏）が完形で，南西壁際の底面から出土している。33の坏は正位の状態で，34の坏は33の坏の上に斜位に重なった状態で，それぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第２号住居跡よりも新しい時期に構築されており，出土遺物等から平安時代の土坑と思われるが，性格については不明である。

第５号土坑（第14図）

位置　調査区の北西部，B2a$_2$区に確認されている。

重複関係　第２号住居跡の中央部よりやや北西側の床面を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径1.25m，短径1.10mの円形を呈し，深さは1.78mである。

長径方向　N－90°－E

壁面　壁面はロームで硬く締まり，底面から1.30m程の高さまでオーバーハングしている。

底面　全体に平坦であり，ローム面は，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片40点(甕片，坏片)が，主に覆土中層から出土している。35の坏は中央部覆土中層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第２号住居跡よりも新しい時期に構築されており，出土遺物等から平安時代の土坑と思われるが，性格については不明である。

第7号土坑（第14図）

位置　調査区の南東部，C2a_8区に確認されている。

規模と平面形　長径0.55m，短径0.48mの楕円形を呈し，深さは0.26mである。

長径方向　N－5°－W

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，壁面はロームで硬く締まっている。

底面　鍋底状を呈し，ローム面は硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器2点（小形甕，高台付坏）が中央部の底面及び覆土下層から出土している。37の高台付坏は内面に黒色処理が施されている。

所見　本跡は，遺物及び出土状況等から，平安時代の墓壙と考えられ，36の小形甕と37の高台付坏は，火葬骨を納めた蔵骨器と思われる。

第8号土坑（第14図）

位置　調査区の南東部，B2j_5区に確認されている。

規模と平面形　径0.90mの円形を呈し，深さは0.22mである。

壁面　外傾して立ち上がっている。

底面　鍋底状を呈し，中央部及び西部を除いた幅25cm程の範囲が円形状に焼土化している。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は，遺構の形態等から炉穴の可能性も考えられるが，出土遺物がなく，詳細については不明である。

第1号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
25	球状土錘	1.7	1.8	0.4	5.4	覆土中層	DP15　100%
26	球状土錘	1.0	1.1	0.4	1.1	覆土中層	DP16　100%

第2号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
27	坏 土師器	A〔12.2〕 B 4.4 C〔5.6〕	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P11　35% 北東壁際 覆土下層
28	坏 土師器	B (2.1) C 7.0	底部片。平底。	底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P22　30% 中央部 覆土中層

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
29	高台付坏 土師器	A 12.8 B (4.3) E (0.5)	平底。高台剥離。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P12 65% 中央部 覆土中層
30	高台付坏 土師器	B (2.4) D 7.4 E 0.6	底部片。平底。高台は低く畳付の先端は丸みをもつ。	底部回転ヘラ切り後，横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P13 45% 北東部 覆土中層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
31	球状土錘	1.7	2.0	0.5	(5.8)	覆土中層	DP17 90%
32	球状土錘	1.5	1.8	0.5	(4.5)	覆土中層	DP18 90%

第4号土坑出土遺物観察表

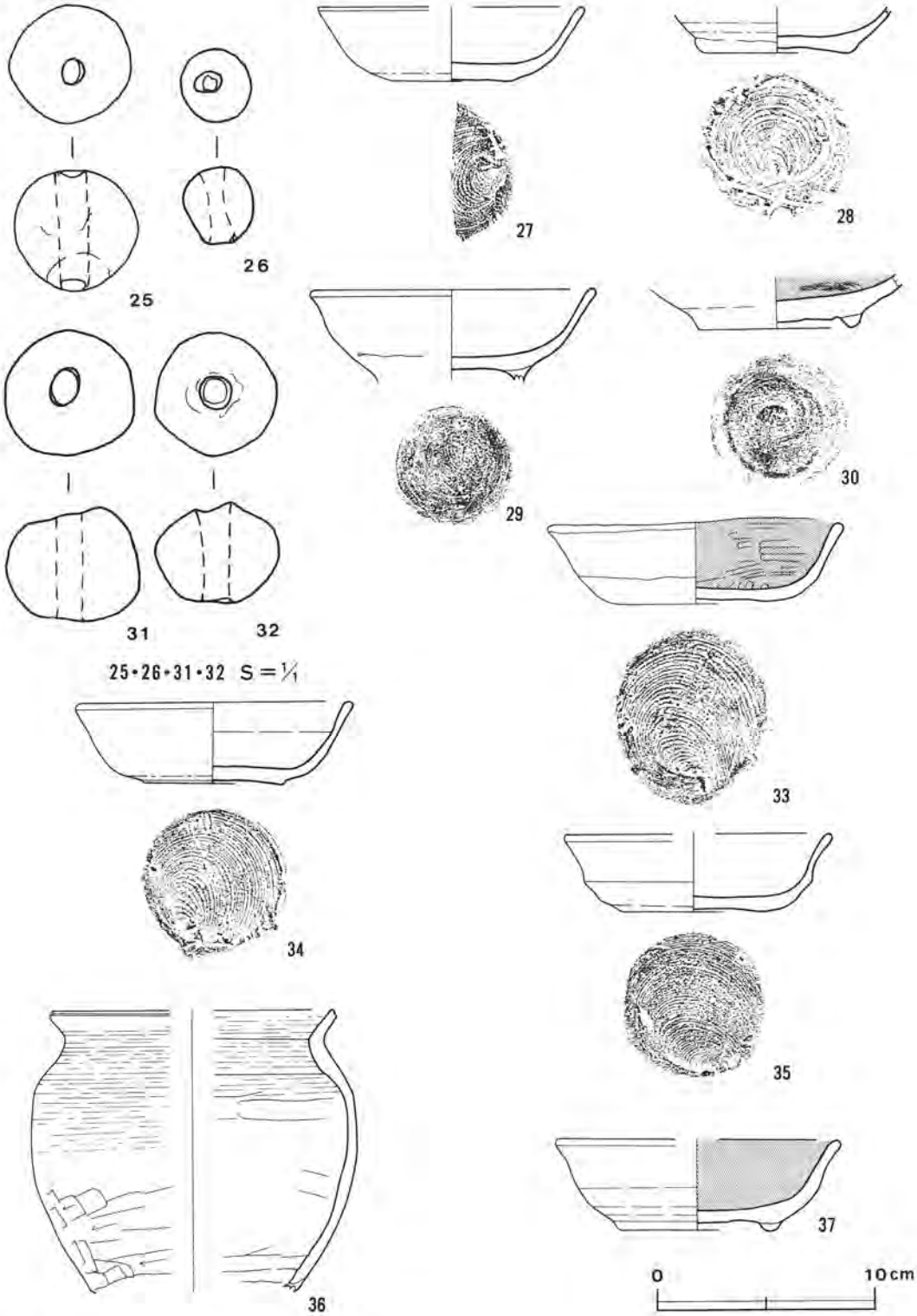
遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
33	坏 土師器	A 13.1 B 3.8 C 7.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P14 100% 南西壁際 底面
34	坏 土師器	A 12.4 B 3.9 C 6.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口唇部は丸みをもつ。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 橙色 普通	P15 100% 南西壁際 P14の上位

第5号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
35	坏 土師器	A〔12.1〕 B 3.6 C 6.8	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，中位に稜を有する。口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P16 65% 中央部 覆土中層

第7号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
36	甕 土師器	A〔13.0〕 B(13.0)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部を「く」の字状に屈曲させる。口唇部に細い沈線を施す。	胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	P17 40% 中央部 底面
37	高台付坏 土師器	A〔12.8〕 B 4.1 D〔7.1〕 E 0.4	平底。低い高台が付き，畳付は丸みを帯びる。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り後，ヘラナデ。 体部内・外面横ナデ。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P18 50% 中央部 覆土下層



第15図　土坑出土遺物実測図

表 3　上ノ台遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 (m) 長径×短径	規模 (m) 深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
1	$B2a_1$	N-34°-E	楕円形	2.20×1.10	0.73	垂直	鍋底	人為	土師器片23点(甕片，坏片)，土製品２点		第14図
2	$A1i_0$	N-50°-E	不整楕円形	1.75×1.45	1.59	内傾	平坦	人為	土師器４点(坏,高台付坏),土師器片58点(甕片,坏片,高台付坏片),須恵器片2点,土製品2点	SB1と重複	14
3	$A1j_0$	N-72°-E	楕円形	0.76×0.55	0.38	外傾	鍋底	人為		SI3と重複	14
4	$B2a_3$	－	円形	1.40×1.40	0.32	外傾	鍋底	人為	土師器２点(坏)	SI2と重複	14
5	$B2a_2$	N-90°-E	円形	1.25×1.10	1.78	内傾	平坦	人為	土師器１点(坏),土師器片40点(甕片,坏片)	SI2と重複	14
6	$C2a_8$	N-14°-E	楕円形	1.25×0.75	0.50	外傾	鍋底	自然			14
7	$C2a_8$	N-5°-W	楕円形	0.55×0.48	0.26	垂直	鍋底	人為	土師器２点(小形甕，高台付坏)	墓壙	14
8	$B2j_5$	－	円形	0.90×0.90	0.22	外傾	皿状	自然			14

3　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡　(第16図)

位置　調査区の北端部$A1j_9$区を中心に確認されている。

重複関係　第２号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

長軸方向　N－35°－W

規模　南北３間（約6.20m)，東西２間（約4.40m）の建物で，柱間寸法は，桁行2.10～2.40m，梁行1.80～2.30mである。柱穴掘方の平面形は，径0.33～0.56mの円形を呈し，深さは0.40～0.67mを測る。柱痕跡は確認されなかった。

覆土　ローム粒子を含む，黒褐色土と暗褐色土であり，人為堆積の状況を示している。

所見　本跡は，総柱の倉庫跡と思われるが，遺物が出土していないため，時期は不明である。

4　溝

第１号溝　(第17図)

位置　調査区の北西部，A1・B２区に確認されている。

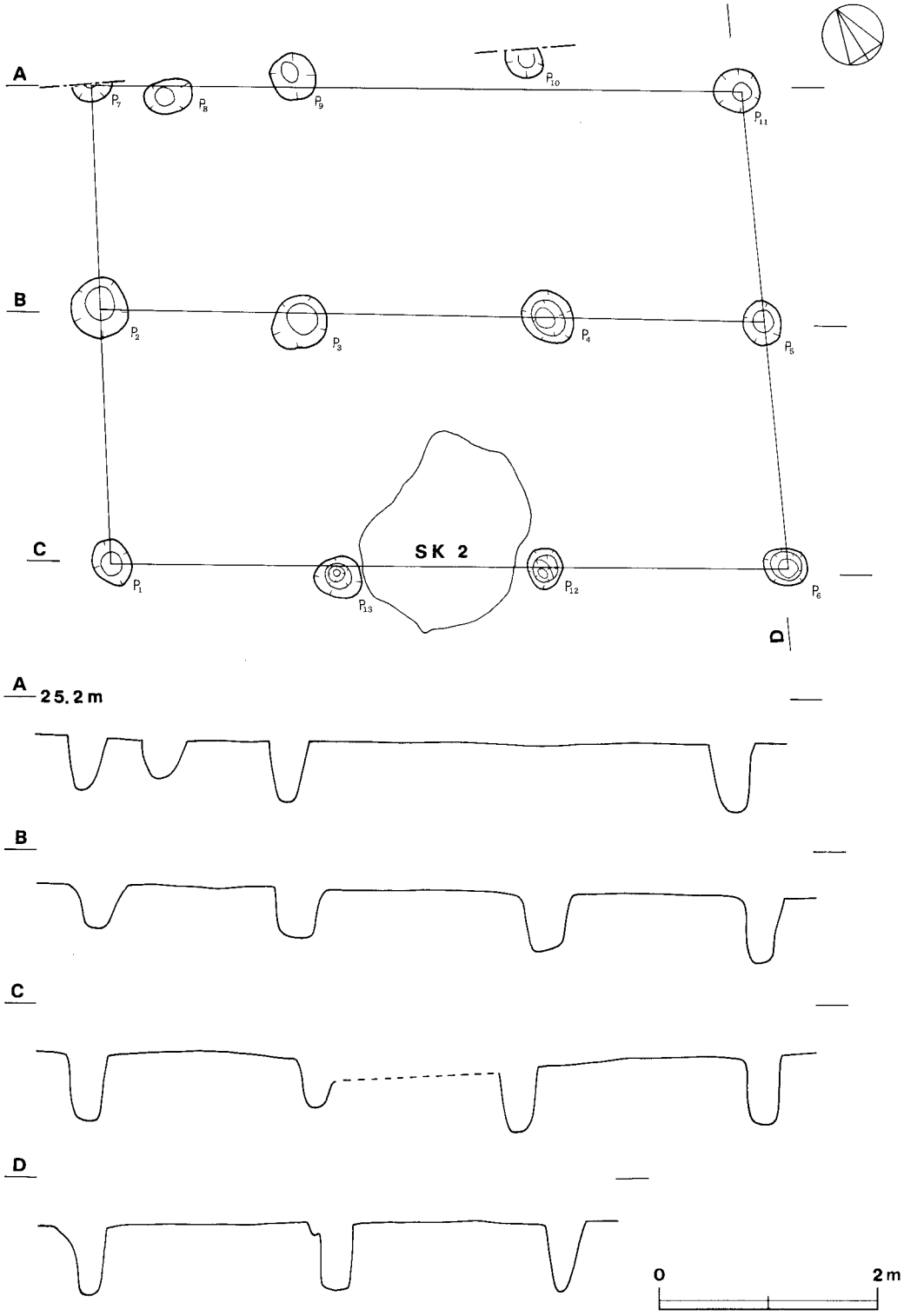
重複関係　$B1a_0$区で第３号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　全長は約20.00mであり，上幅0.30～0.72m，下幅0.17～0.36m，深さ９～22cmを測り，断面形はU字状を呈している。

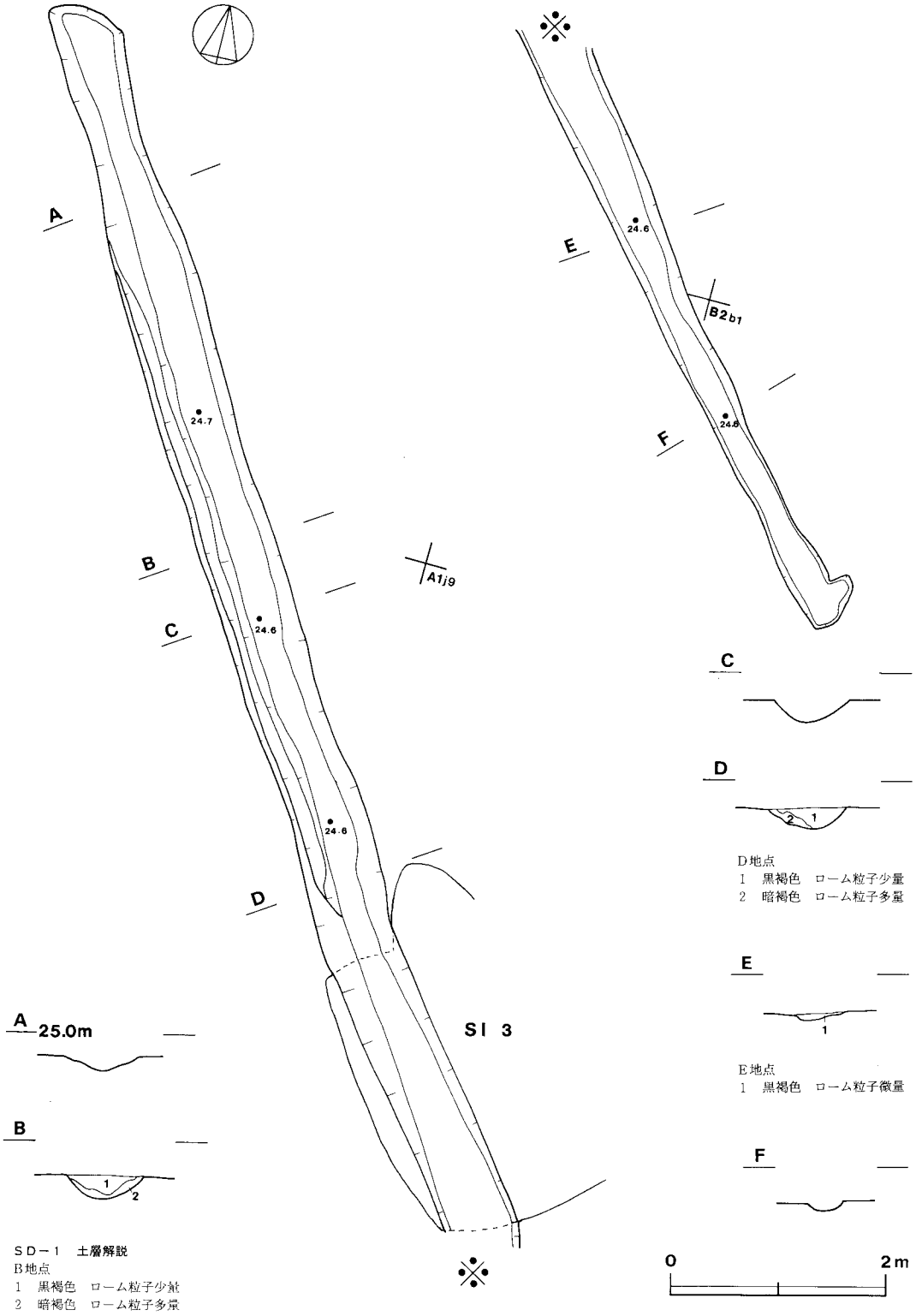
方向　$A1i_9$区から南東方向（N－148°－E）へほぼ直線的に20m程延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は，重複関係から第３号住居跡より新しい時期に構築されているが，遺物の出土もないため詳細については不明である。



第16図　第１号掘立柱建物跡実測図



SD－1　土層解説
B地点
1　黒褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　ローム粒子多量

第17図　第１号溝実測図

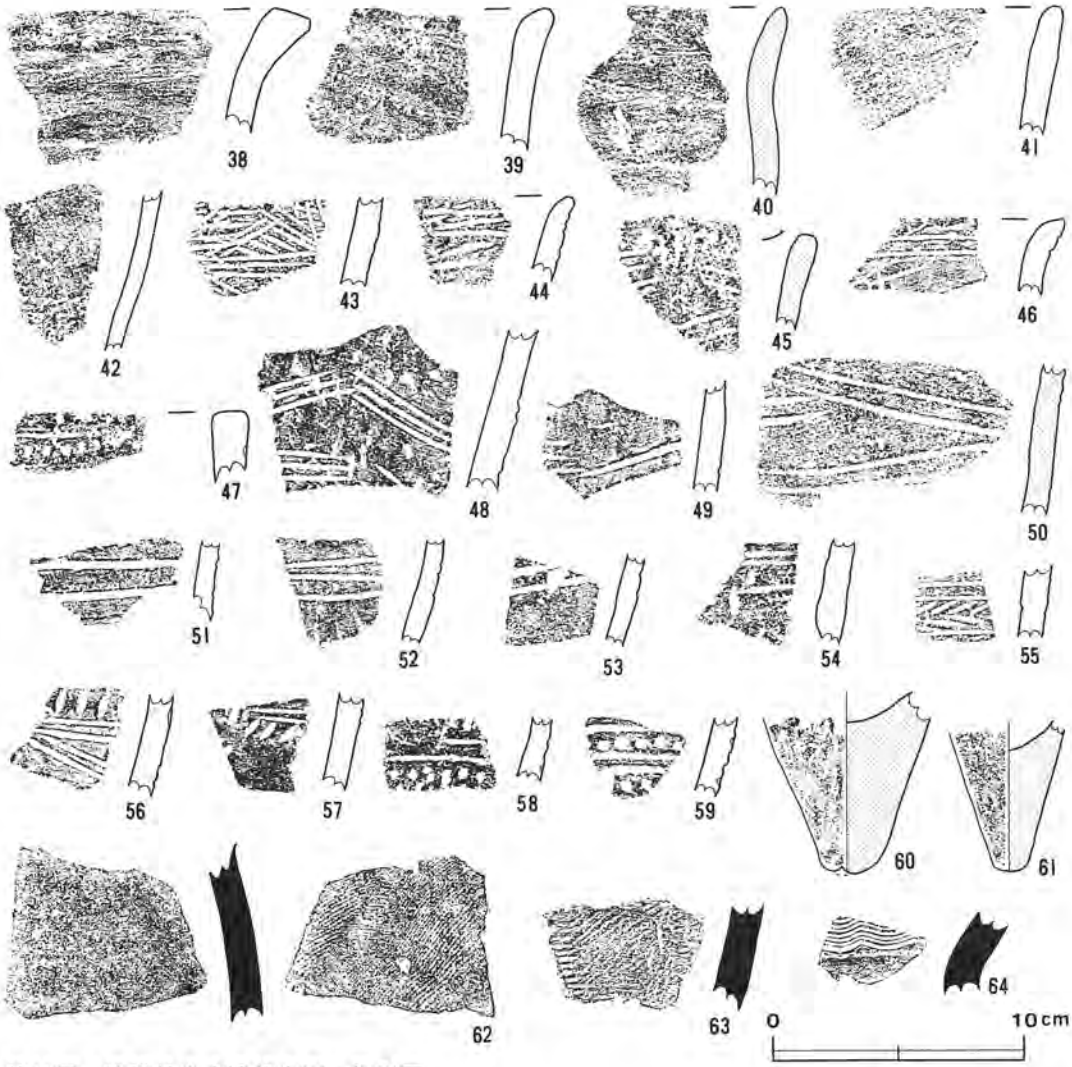
5　遺構外出土遺物

当調査区からは，縄文式土器片，石器，須恵器片が，遺構外から出土している。これらの主な遺物について，一覧表，実測図及び拓影図で紹介する。

(1)　縄文式土器（第18図）

38～42は，無文系の土器群である。38～41は口縁部片である。38は口縁部が外反し，口唇部は角頭状を呈している。42は胴部片であり，いずれも早期前葉に比定される。

43～61は，沈線文系の土器群である。43は胴部片であり，横位及び斜位に平行沈線が施されており，三戸式に比定される。44～47は口縁部片である。44は横位の沈線の間に斜位の沈線が施され，45は小波状口縁を呈し，３本の縦位の沈線と３本１条の斜位の沈線が施されている。46は口



第18図　遺構外出土遺物実測・拓影図

縁部が外反し，２本１条の沈線が施されている。47は口唇部が角頭状を呈し，横位の沈線の下に刺突文が施されている。48～59は胴部片である。48は横位の沈線が施され，起点，終点の部分にヘラを押しあてている。49～54は１～３本の横位あるいは斜位の太めの沈線が施されている。55～57は２本１条の平行沈線の間に，矢羽状の細い沈線が施されている。58，59は胴部片であり，58は横位の沈線の下に半截竹管による刺突文が，59は２本の横位の沈線の上下に断面三角形の刺突文がそれぞれ施されている。60，61は底部片であり，どちらも鋭角的な「天狗の鼻」状を呈している。44～61の土器群は，いずれも田戸下層式に比定される土器と思われる。

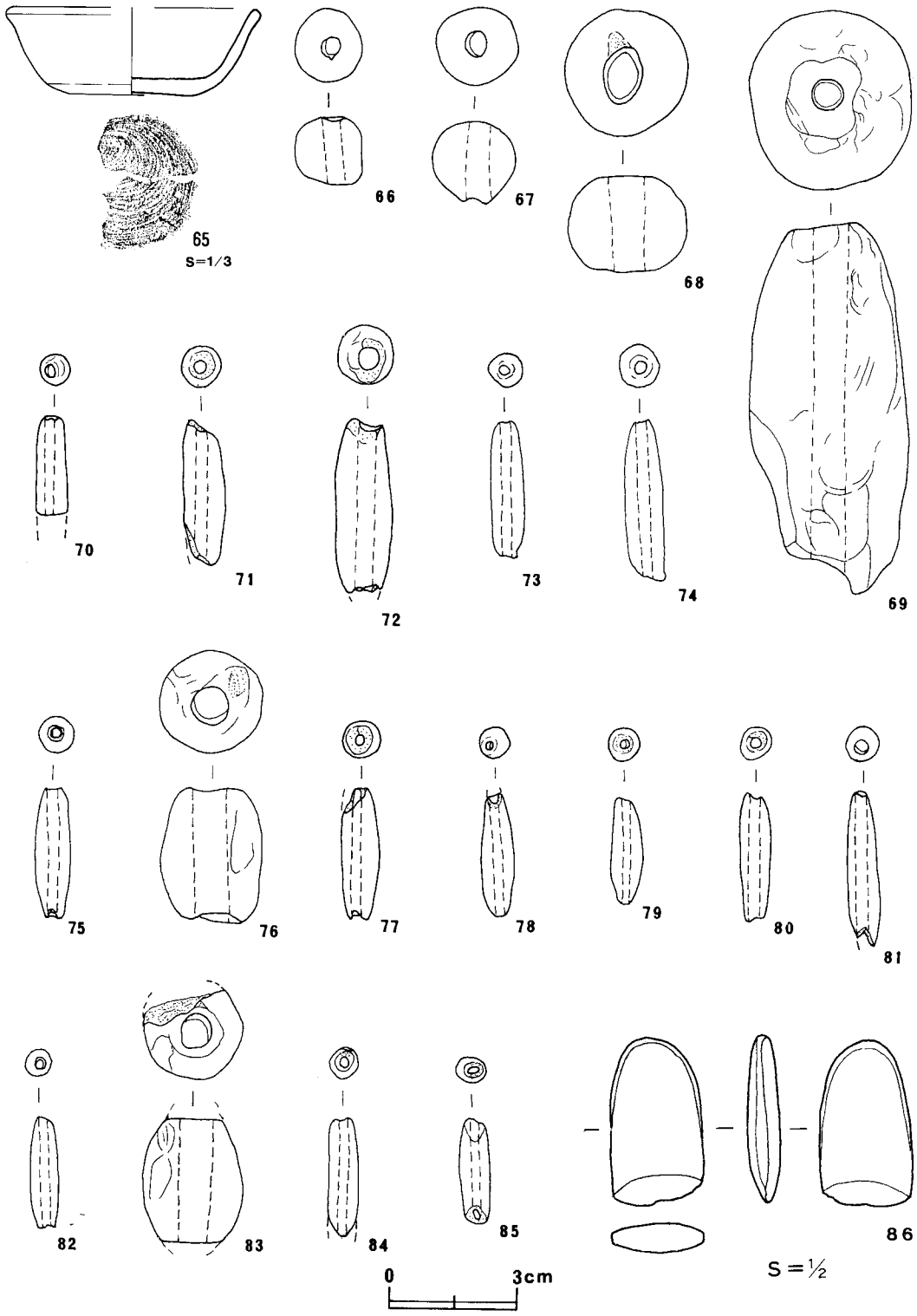
(2) 須恵器（第18図）

62，63は甕の胴部片である。62は表面に自然釉が付着し，内面は横位及び斜位の平行叩き目が，63は表面に横位及び斜位の平行叩き目が施されている。64は甕の頸部片で，櫛描きの横走波状文が施されている。

遺構外出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
65	坏 土師器	A〔11.2〕 B 4.0 C 6.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部はやや外反し，口唇部は丸い。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P21 30% 表採

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
66	球状土錘	1.4	1.6	0.5	3.8	表採	DP23 100%
67	球状土錘	1.7	1.9	0.5	4.8	表採	DP24 100%
68	球状土錘	2.1	2.9	0.9	14.8	表採	DP34 100%
69	管状土錘	(8.5)	4.1	0.7	(123.8)	表採	DP19 80%
70	管状土錘	(2.2)	(0.7)	(0.3)	(0.9)	表採	DP20 60%
71	管状土錘	(3.3)	1.0	(0.3)	(1.6)	表採	DP21 90%
72	管状土錘	(4.0)	1.3	(0.5)	(6.3)	表採	DP22 95%
73	管状土錘	3.1	0.8	0.2	1.8	表採	DP25 100%
74	管状土錘	3.6	0.9	0.3	2.9	表採	DP26 100%
75	管状土錘	3.0	0.8	0.2	1.7	表採	DP27 100%
76	管状土錘	3.1	2.3	0.8	(14.6)	表採	DP28 90%
77	管状土錘	(3.0)	0.9	(0.2)	(2.0)	表採	DP29 80%
78	管状土錘	(2.8)	0.8	(0.2)	(1.1)	表採	DP30 90%
79	管状土錘	(2.4)	0.8	(0.2)	(1.2)	表採	DP31 90%
80	管状土錘	(2.9)	0.7	0.3	(1.2)	表採	DP32 95%
81	管状土錘	(3.5)	0.8	0.3	(1.6)	表採	DP33 90%
82	管状土錘	2.6	0.7	0.2	1.0	表採	DP35 100%
83	管状土錘	2.8	2.2	0.7	(11.4)	表採	DP36 70%
84	管状土錘	(2.7)	0.7	0.2	(1.2)	表採	DP37 80%
85	管状土錘	(2.4)	0.7	0.2	(1.0)	表採	DP38 80%



第19図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
86	磨製石斧	5.1	2.8	0.9	22.0	硬砂岩	表採	Q1 100%

第3節 考　察

上ノ台遺跡からは平安時代(10世紀～11世紀)に位置付けられる竪穴住居跡や，土坑，溝及び掘立柱建物跡が検出されている。これらの遺構からは土師器や，土製品及び鉄製品等の遺物が出土しているが，ここでは，出土した土器についてその特徴を述べ，若干の検討を加えて行くことにする。

1　出土土器について

当調査区からは，土師器の甕，坏，高台付坏及び足高高台付坏等が出土している。甕は，「常総型甕」の範疇のものである。口唇部のつまみ上げが退化し，代わりに細い沈線が口縁部外面に施されている(36)。坏は，体部下位に丸味をもち，外傾して立ち上がり，底部は回転糸切り後無調整であるもの(34)，内面黒色処理を施されたもの(33)，体部中位に稜を有するもの(35)等が出土している。高台付坏は，高台が「ハ」の字状に開き，体部は内彎して立ち上がり，底部は回転ヘラ切り後，ナデ調整が施されているもの(15)，高台が低く内面黒色処理が施されているもの(37)，高台の発達した足高高台付坏と呼ばれるもの(22)等が出土している。

第3号住居跡の竈燃焼部覆土上層からは，羽釜の鍔に当たる部分の破片(23)が出土している。羽釜の出現については，大久保山Ⅰ遺跡に類例がみられるように，10世紀から11世紀にかけての時期として捉えられている。県内では，石岡市鹿の子C遺跡，日立市遠下遺跡，那珂町森戸遺跡，土浦市南丘遺跡から，それぞれ羽釜について類例がみられる。

これらの出土土器は，江戸崎町思川遺跡の編年等を参考にすると，器形や整形技法の特徴等から，10世紀から11世紀に位置付けられるものと思われる。

2　住居跡について

住居跡は，調査区の北西部から３軒検出されている。これら３軒の住居跡は，出土土器等から平安時代（10世紀～11世紀）に比定される。平面形は，方形ないし長方形を呈している。一辺は3.0m前後から4.5m程であり，床面積は8.6～15.2m²を測る。竈については，第１号住居跡が北東壁に付設され，主軸方向はＮ－26°－Ｅを指し，第２号住居跡は南東壁に付設され，主軸方向はＮ－124°－Ｅを指している。第３号住居跡は北西壁に付設され，主軸方向はＮ－36°－Ｗを指している。主柱穴については，３軒の住居跡とも検出されていない。

土坑は，主に調査区の北部から８基検出されており，第２・４・５・７号土坑からは，平安時代（10世紀～11世紀）に比定される土師器の坏等が出土している。第２号土坑は断面形が袋状を呈しており，坏２点，高台付坏２点が出土している。第４・５号土坑は，第２号住居跡を掘り込んでいることから，第２号住居跡よりも若干新しい時期に構築されている。第７号土坑は，調査区の南東部から検出され，覆土下層からは小形甕(36)と高台付坏(37)が出土している。出土状況から，火葬骨を納めた蔵骨器と思われ，時期については，小形甕と高台付坏の特徴から10世紀後半と考えられる。蔵骨器の出土例としては，千葉市荒久遺跡，我孫子市新木南遺跡，水戸市渡里町火葬墓，同向井原火葬墓等がある。

上ノ台遺跡の住居跡及び出土土器について触れてみたが，当台地上には，平安時代(10世紀～11世紀）を中心に集落が形成されていたものと思われる。集落については，調査区が道路幅という限定された範囲であるため，その全容を明らかにすることはできないが，住居跡の検出されている状況やこの地域の地形から，集落はさらに調査区北東側の台地縁辺部付近(霞ケ浦湖畔方面)にまで広がっていることが考えられる。この時期の住居跡からは漁網に使用されたものと思われる球状土錘，管状土錘等の土製品が多数出土しており，霞ケ浦での漁を営んでいたことが窺われる。

引用・参考文献（順不同）

(1)　茨城県教育財団　「思川遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第65集　1991年

(2)　早稲田大学出版部　「大久保」　早稲田大学本庄校地文化財調査報告１　1980年

(3)　茨城県教育財団　「鹿の子Ｃ遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第20集　1983年

(4)　茨城県教育財団　「森戸遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第55集　1990年

(5)　茨城県教育財団　「南丘遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第64集　1991年

(6)　日立市教育委員会　「日立市遠下遺跡調査報告書」　1975年

(7)　千葉県文化財センター　「千葉市荒久遺跡(3)」　千葉県文化財センター調査報告第193集　1991年

(8)　我孫子市教育委員会　「我孫子市新木南遺跡」　1991年

第５章　岡ノ内遺跡

第１節　遺跡の概要

岡ノ内遺跡は，桜川村の東部，浮島地区の標高22m程の台地上に立地する，縄文時代早期から中期及び平安時代の複合遺跡である。調査区は，東西に約180m，南北に約30m，面積5,427㎡であり，現況は畑地である。

今回の調査によって検出された遺構は，竪穴住居跡19軒，土坑76基，溝６条，地点貝塚１か所である。

縄文時代の遺構は，陥し穴状土坑１基で，調査区の東部に検出されている。

平安時代の遺構は，竪穴住居跡19軒で，調査区のほぼ全域から検出されている。平面形は，一辺が３～５m程の方形あるいは長方形を呈しており，第７号住居跡を除く18軒の住居跡からは，竈が検出されている。第７号住居跡からは炉が検出され，その周辺からは鉄製品及び鉄滓が出土している。柱穴が検出された住居跡は９軒で，１軒を除き，柱穴は１～２か所しか検出されていない。平面形が円形あるいは楕円形を呈した土坑が45基検出され，その中の多くの土坑から，平安時代に比定される土師器の坏及び高台付坏等が出土している。

その他，時期が特定できない遺構として，溝６条，地点貝塚１か所が検出されている。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に18箱程出土している。縄文時代の遺物は少量で，縄文時代早期から後･晩期の土器片が遺構外から出土している。平安時代の遺物は，土師器の甕，坏，高台付坏，高台付皿等が住居跡及び土坑から出土している。出土遺物の大半は土師器であり，須恵器はごく僅かである。土師器の坏や高台付坏の中には内面黒色処理されたものが多くみられ，高台の発達した足高高台付坏と呼ばれるものも出土している。第１号住居跡の竈燃焼部覆土からは，支脚に転用されていたと思われる灰釉陶器の壺が，第15号住居跡の竈燃焼部覆土からは，支脚に転用されていたと思われる土師器の高台付坏４枚が逆位の重なった状態でそれぞれ出土している。土坑からも土師器の坏及び高台付坏等の土器が出土しており，第53号土坑の覆土上層からは，置き竈の破片が出土している。

第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

当遺跡からは，調査区のほぼ全域から19軒の竪穴住居跡が検出されている。検出された住居跡のほとんどが，耕作等による撹乱を受けており，出土遺物もほとんどが破片である。

以下，検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載する。

第１号住居跡（第21図）

位置　調査区の東部，C5d_7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸2.84m，短軸2.68mの方形を呈している。

主軸方向　N－7°－E

壁　壁高は，西壁で15cm，他の三方の壁は４～８cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　全体に凹凸しているが，踏み固められ堅緻である。

竈　北壁中央部に付設され，規模は長さ78cm，幅75cmで，壁を56cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を10cm程掘り窪め，焼き締まりは弱い。焼土粒子が多量に検出されている。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片40点（甕片，坏片），須恵器片４点（甕片）が，主に竈内及び住居跡西部覆土中層から出土している。１の灰釉陶器の壺は，竈燃焼部覆土中層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第１号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	壺 灰釉陶器	B(14.5) D〔8.4〕 E 1.2	平底。底部に低い貼り付け高台が付く。胴部は内彎しながら立ち上がり，上位に最大径をもつ。	底部回転糸切り後，横ナデ。胴部上位に自然釉。	砂粒 灰白色 良好	P１ 60% 竈燃焼部 覆土中層
2	坏 土師器	A 12.6 B 4.3 C 6.1	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部は丸い。	底部手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P２ 60% 竈燃焼部 覆土上層
3	高台付坏 土師器	B(2.9)	底部片。高台剝離。平底。	底部回転ヘラ切り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	P３ 20% 南西部 覆土中層
4	高台付皿 土師器	A〔12.8〕 B 2.7 D 5.7 E 0.7	平底。底部に低い貼り付け高台が付く。体部は外傾して立ち上がり，口唇部は丸くおさめる。	底部回転ヘラ切り。 体部外面横ナデ，内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P４ 60% 竈前方 覆土上層

第２号住居跡（第24図）

位置　調査区の東部，C5e_7区を中心に確認されている。

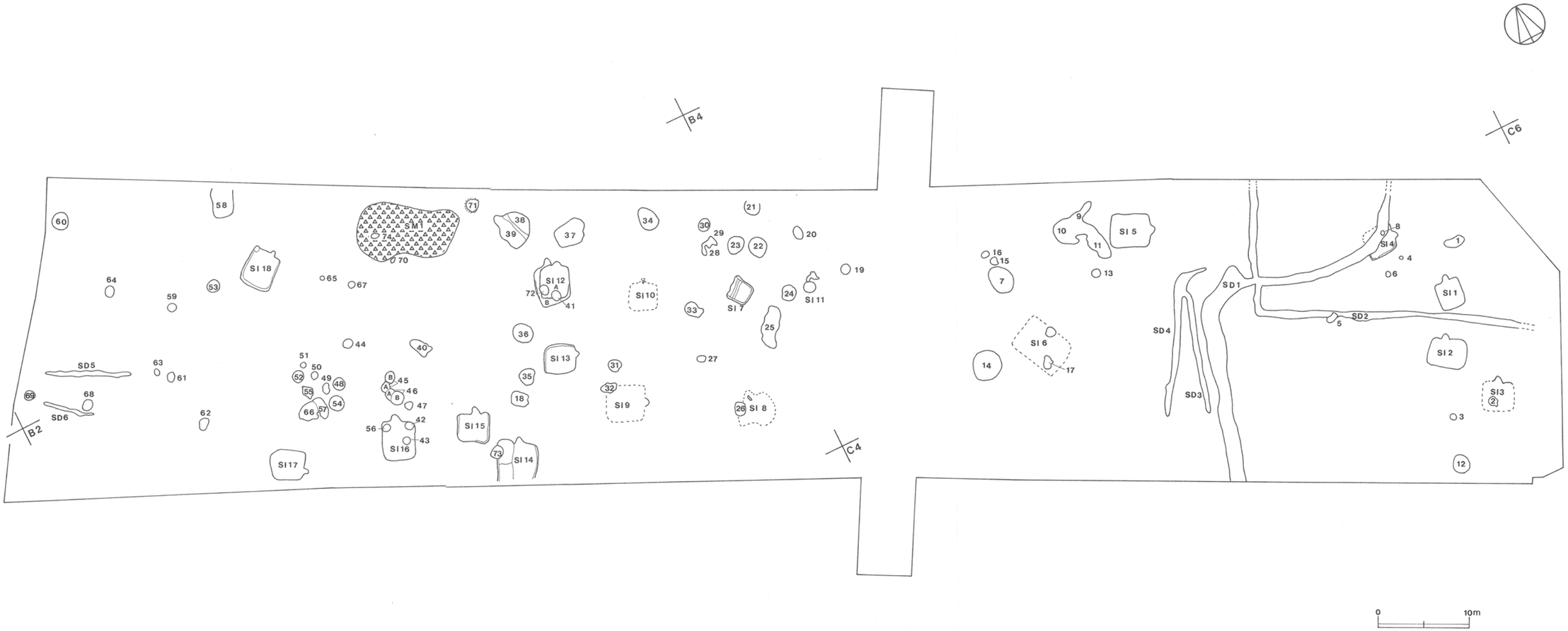
規模と平面形　長軸3.82m，短軸3.32mの長方形を呈している。

主軸方向　N－33°－E

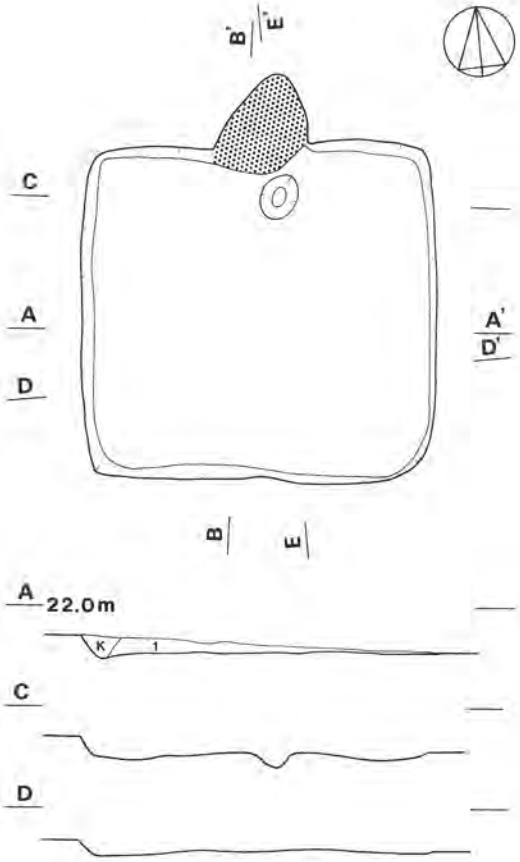
壁　壁高は，北西壁で15～18cm，他の壁は８～10cmを測り，外傾して立ち上がっている。

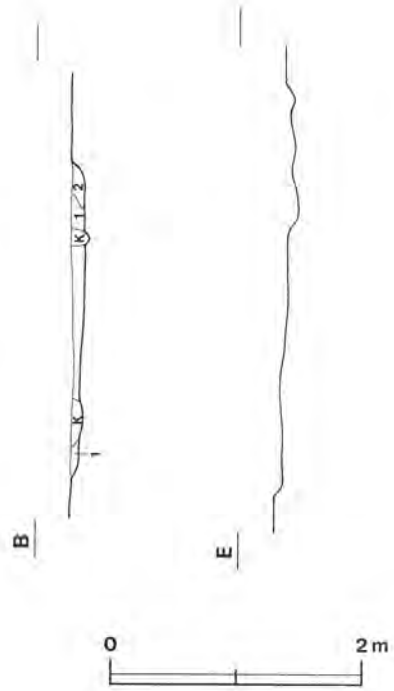
床　全体に凹凸しているが，良く踏み固められており，特に竈周辺は堅緻である。

竈　北東壁中央部からやや北西側に付設され，規模は長さ130cm，幅96cmを測る。壁を45cm程壁外

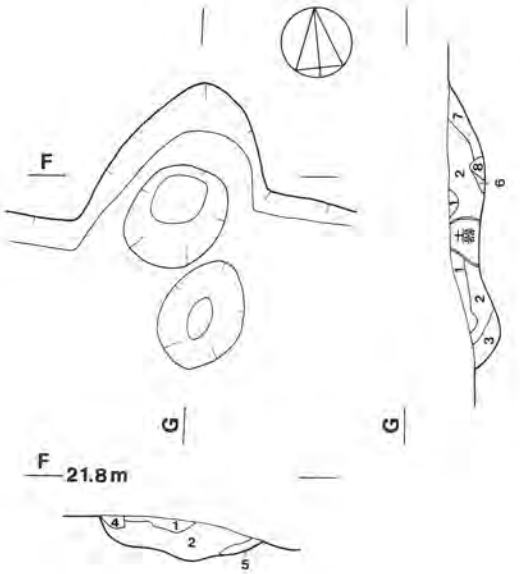


第20図　岡ノ内遺跡遺構配置図





S I－1土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子中量，砂多量



S I－1竈土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土小ブロック・砂少量
5　暗赤褐色　焼土粒子少量
6　褐　　色　焼土粒子微量，灰少量
7　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
8　灰 褐 色　焼土粒子少量，灰極めて多量

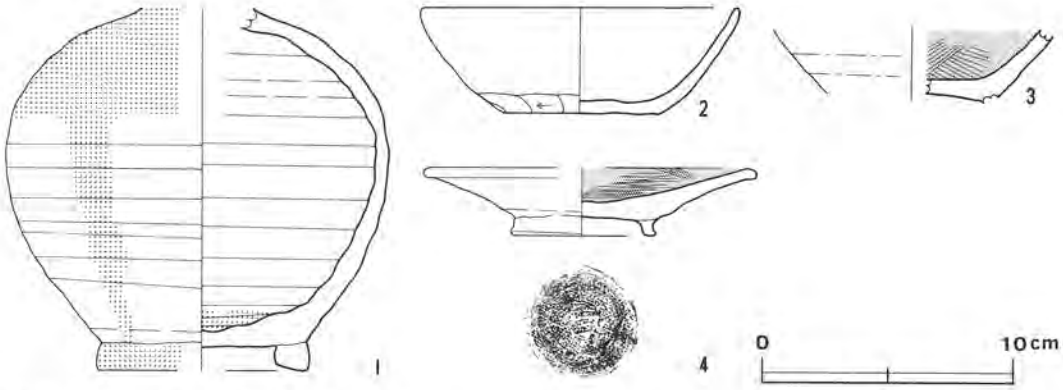
第21図　第１号住居跡実測図

へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を10cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片31点（甕片，坏片）が，北東部の覆土から出土している。5の甕は，北東部覆土中層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から平安時代の住居跡と考えられる。

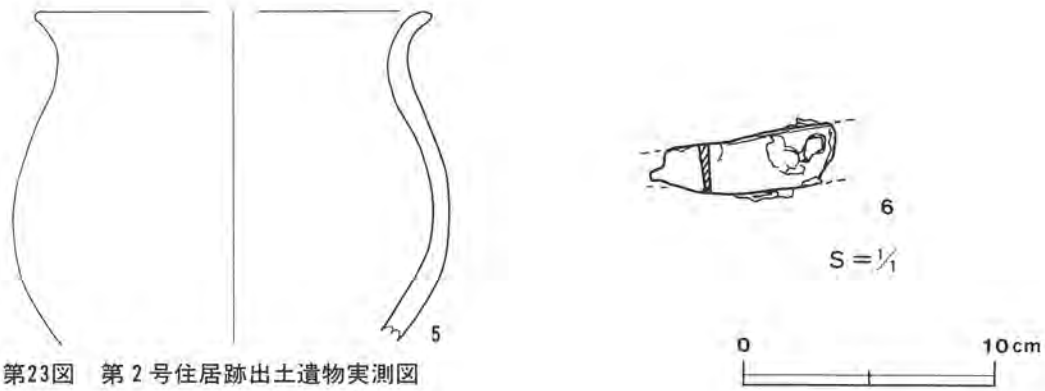


第22図　第1号住居跡出土遺物実測図

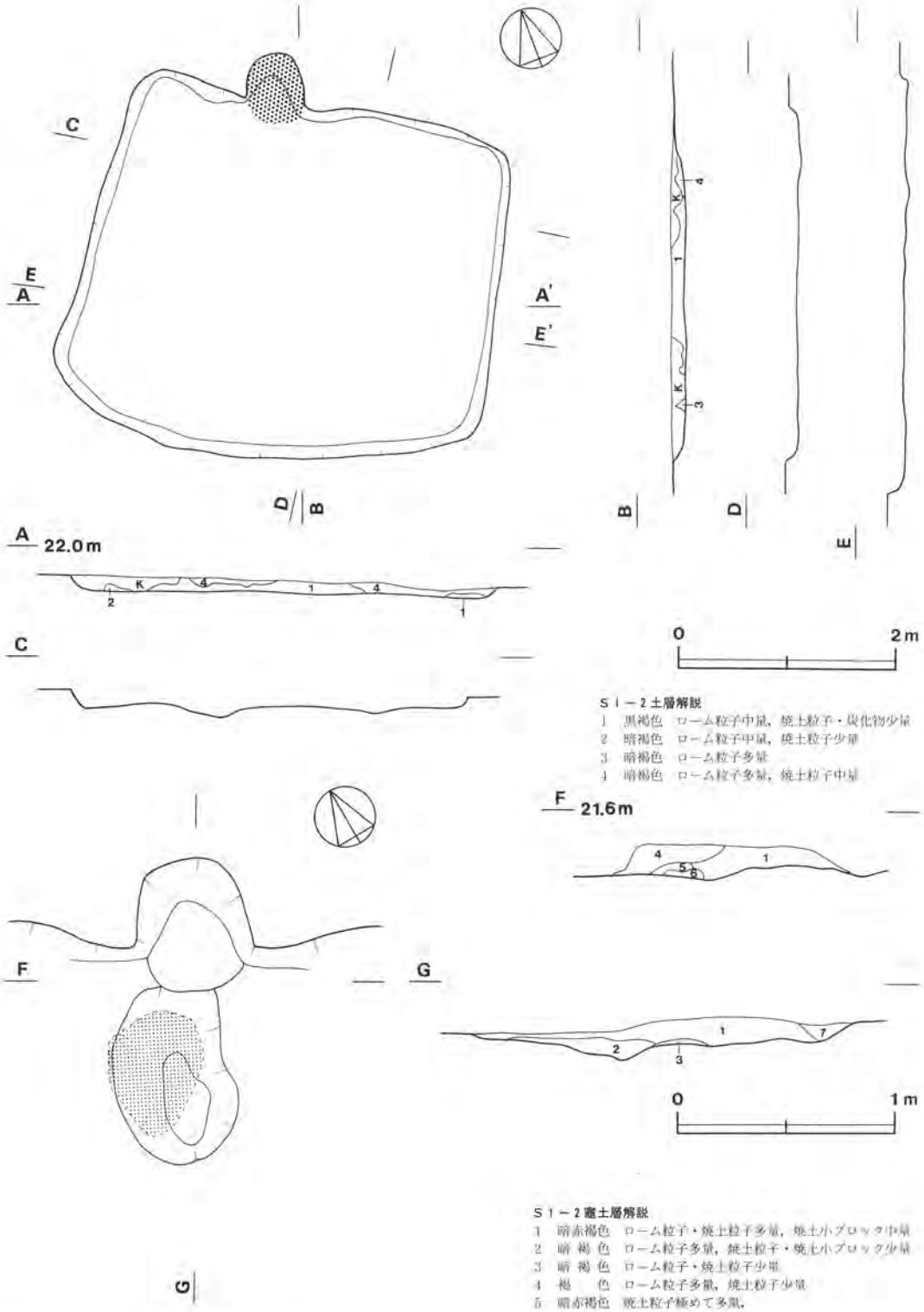
第2号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	甕 土師器	A〔15.5〕 B〔13.1〕	胴下半部欠損。胴部は内彎し，頸部ほくびれ，口縁部は外反する。	胴部内・外面剝離のため調整不明。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・パミス 赤褐色 不良	P5　25% 北東部 覆土中層

遺物番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
6	刀子	(5.8)	(2.1)	(0.2)	(9.0)	竈南側　覆土下層　M1



第23図　第2号住居跡出土遺物実測図



S1－2土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子多量
4　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量

S1－2竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・焼土小ブロック少量
3　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
4　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量
5　暗赤褐色　焼土粒子極めて多量，
6　褐　色　ローム粒子極めて多量
7　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量

第24図　第2号住居跡実測図

第3号住居跡（第25図）

位置　調査区の東端部，C5g_8区を中心に確認されている。

重複関係　南西部を第2号土坑に，掘り込まれている。

規模と平面形　一辺が（3.50）mの方形状を呈する住居跡と思われる。

主軸方向　〔N－23°－E〕

壁　南壁の一部で5cm前後の立ち上りが確認されている。

床　北西部及び南部に，硬質面が確認されている。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は長さ77cm，幅46cmを測る。壁を50cm程壁外へ掘り込み構築されている。撹乱を受け遺存状態が悪い。

覆土　全体にローム小ブロックが中量混入し，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片22点（甕片，坏片）が，竈燃焼部覆土中層から出土している。土師器片はいずれも細片である。

所見　本跡は，重複関係から第2・6号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や遺物等から平安時代の住居跡と考えられる。

第4号住居跡（第26図）

位置　調査区の東部，C5b_6区を中心に確認されている。

重複関係　北東コーナーからほぼ西方向にかけての北部を第1号溝に，北東部床面を第8号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.30m，短軸3.08mの方形を呈している。

主軸方向　N－90°－E

壁　北壁を除き遺存している。壁高は，12～20cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　北部に硬質床面が認められ，凹凸を呈しているが硬く踏み固められている。

貯蔵穴　南西コーナーに付設されている。平面形は，長径70cm，短径55cmの楕円形を呈し，断面形は皿状を呈し，18cm程掘り込まれている。

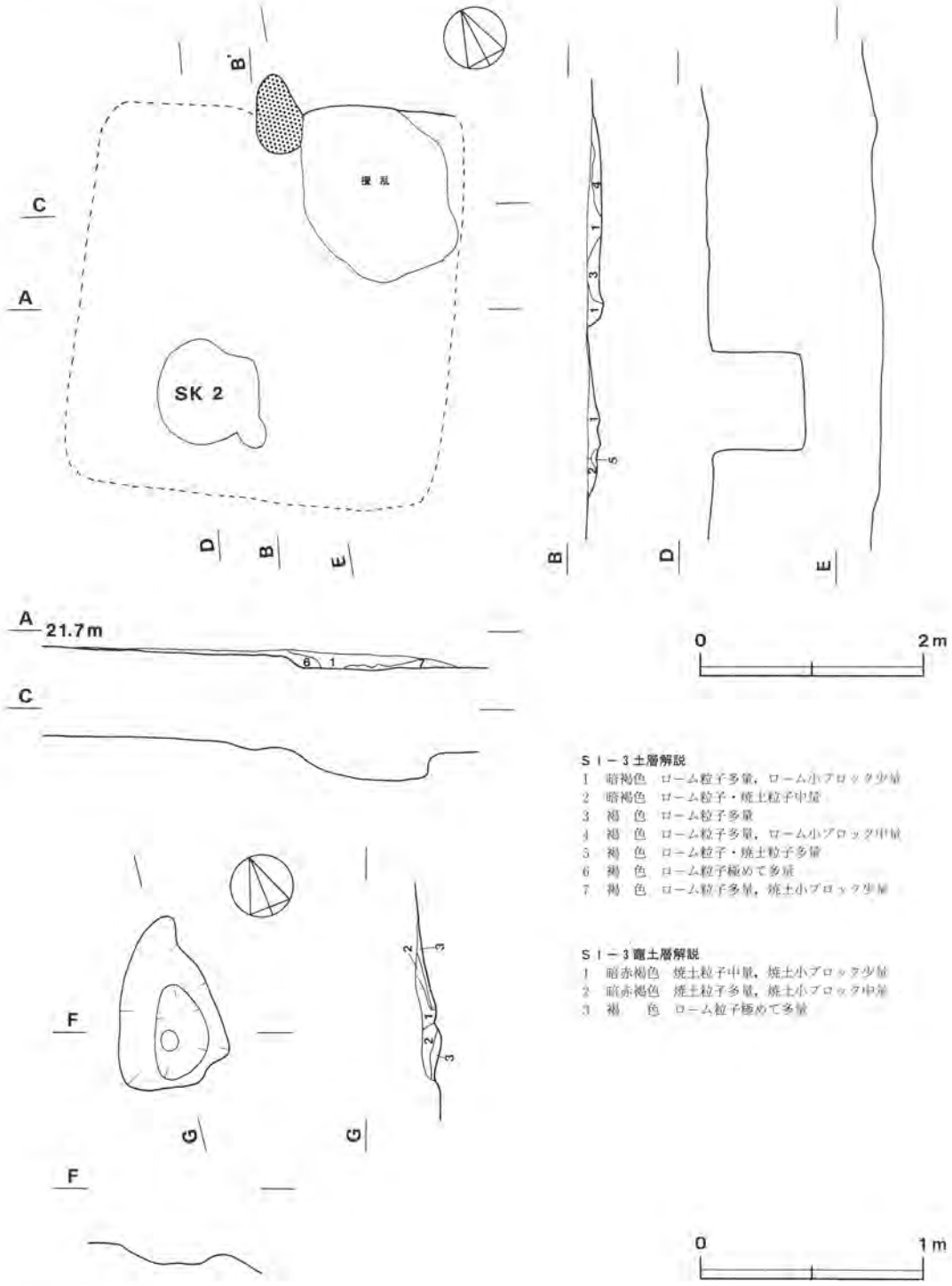
竈　東壁中央部からやや南側に付設され，規模は長さ75cm，幅115cmを測る。壁を40cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を5cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

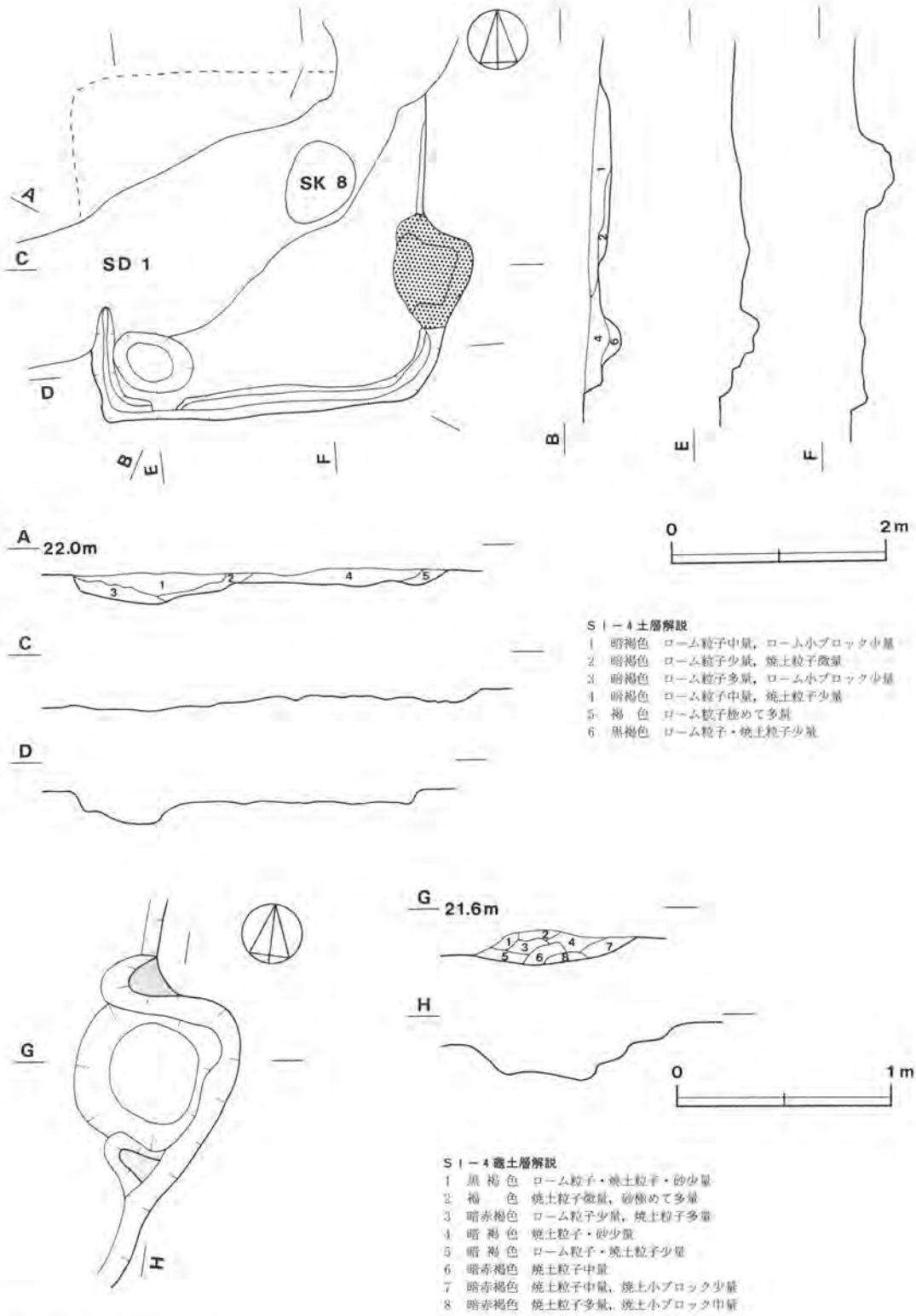
遺物　土師器片60点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片1点（甕片）が，南部覆土中層及び竈燃焼部覆土中層から出土している。土師器片はいずれも細片である。

所見　本跡は，重複関係から第1号溝や第8号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形

態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。



第25図　第３号住居跡実測図



第26図　第４号住居跡実測図

第5号住居跡（第27図）

位置　調査区の中央部，B4i_0区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸4.50m，短軸3.70mの長方形を呈している。

主軸方向　N－115°－E

壁　壁高は，8～18cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であり，硬く踏み固められている。

竈　南東壁中央部に付設され，規模は長さ92cm，幅90cmを測る。壁を48cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。撹乱を受け，袖部はほとんど遺存していない。火床は，床面を8cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

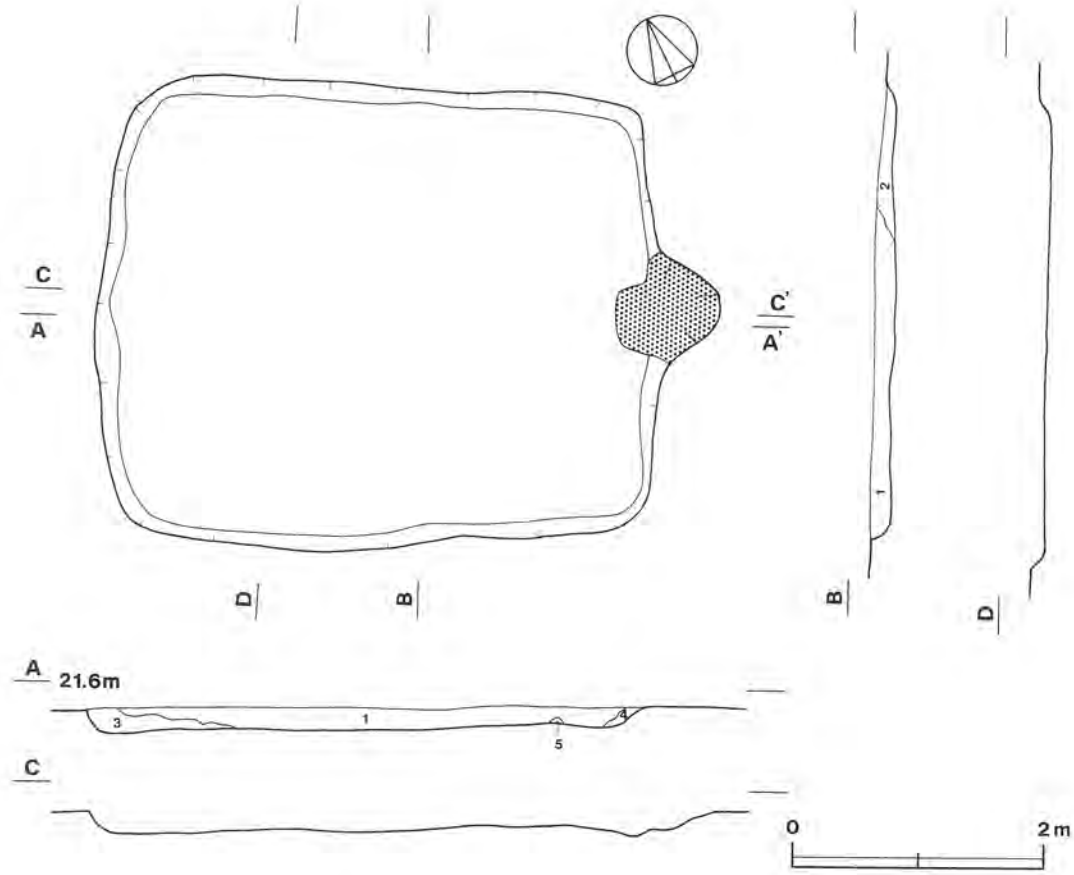
遺物　土師器片98点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片1点（坏片），土製品2点（支脚）が，住居跡全域の覆土中・下層から出土している。竈燃焼部覆土中層からは，土師器片16点（甕片，坏片）が出土している。9の坏は，竈燃焼部覆土下層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

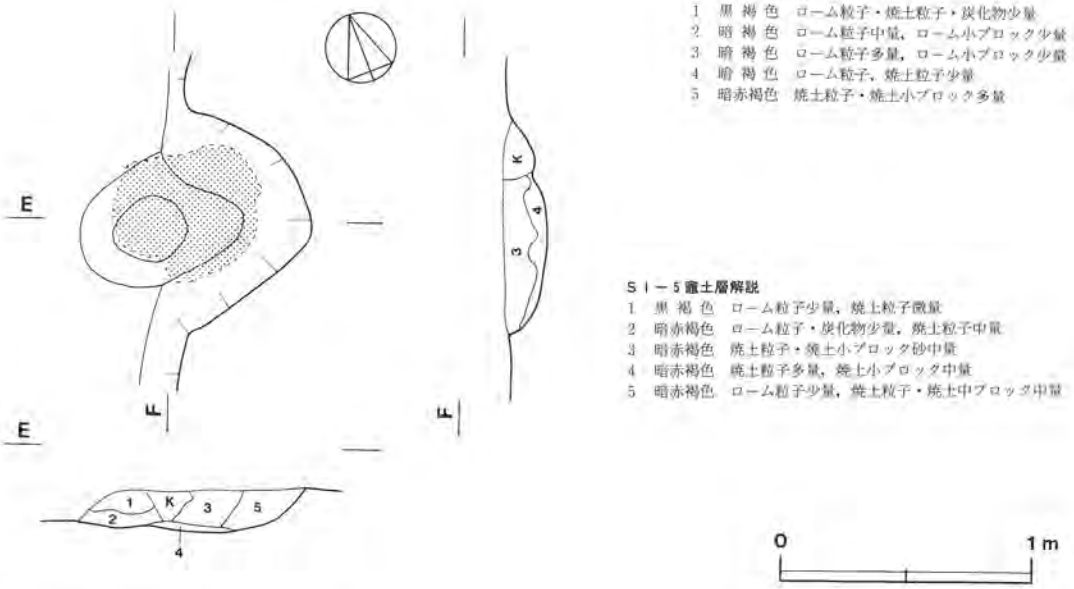
遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	甕 土師器	A〔23.4〕 B(10.0)	頸部は「く」の字状に外反する。口縁部外面に浅い沈線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。胴部上位にヘラ描きによる一辺3cm程の方形状の施文をもつ。	砂粒 にぶい橙色 良好	P6　10% 竈燃焼部 覆土中層
8	甕 土師器	B(9.4) C〔8.0〕	口縁部欠損。平底。胴部は内彎して立ち上がり，中位に最大径をもつ。	胴部下位横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P7　30% 竈燃焼部 覆土下層
9	坏 土師器	A 14.2 B 5.2 C 7.5	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。外面剥離のため調整不明。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P8　90% 竈燃焼部 覆土下層
10	高台付坏 土師器	B(2.6) D〔7.0〕 E 0.8	平底。底部から「ハ」の字状に開く低い貼り付け高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 良好	P9　30% 西部 覆土中層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
11	支脚	(7.7)	(9.2)	—	(408.7)	南東コーナー付近覆土中層	DP1　30%
12	支脚	(14.0)	7.5	—	(540.4)	中央部覆土中層	DP2　50%



Ｓ Ｉ － ５ 土層解説

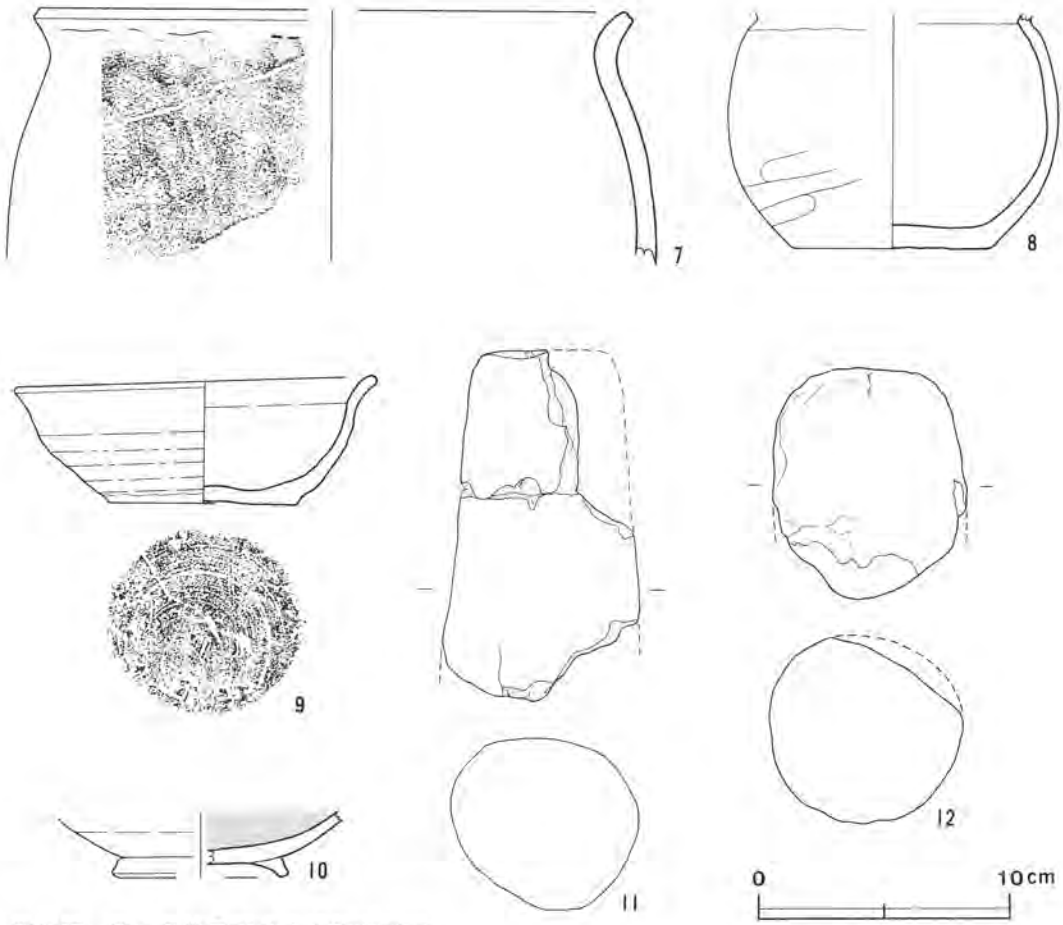
1　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4　暗 褐 色　ローム粒子，焼土粒子少量
5　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量



Ｓ Ｉ － ５ 竈土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗赤褐色　ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子中量
3　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック砂中量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
5　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・焼土中ブロック中量

第27図　第５号住居跡実測図



第28図　第５号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡（第29図）

位置　調査区の中央部，C4a$_7$区を中心に確認されている。

重複関係　南部を第17号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸（5.90）m，短軸（4.20）mの長方形を呈した住居跡と思われる。

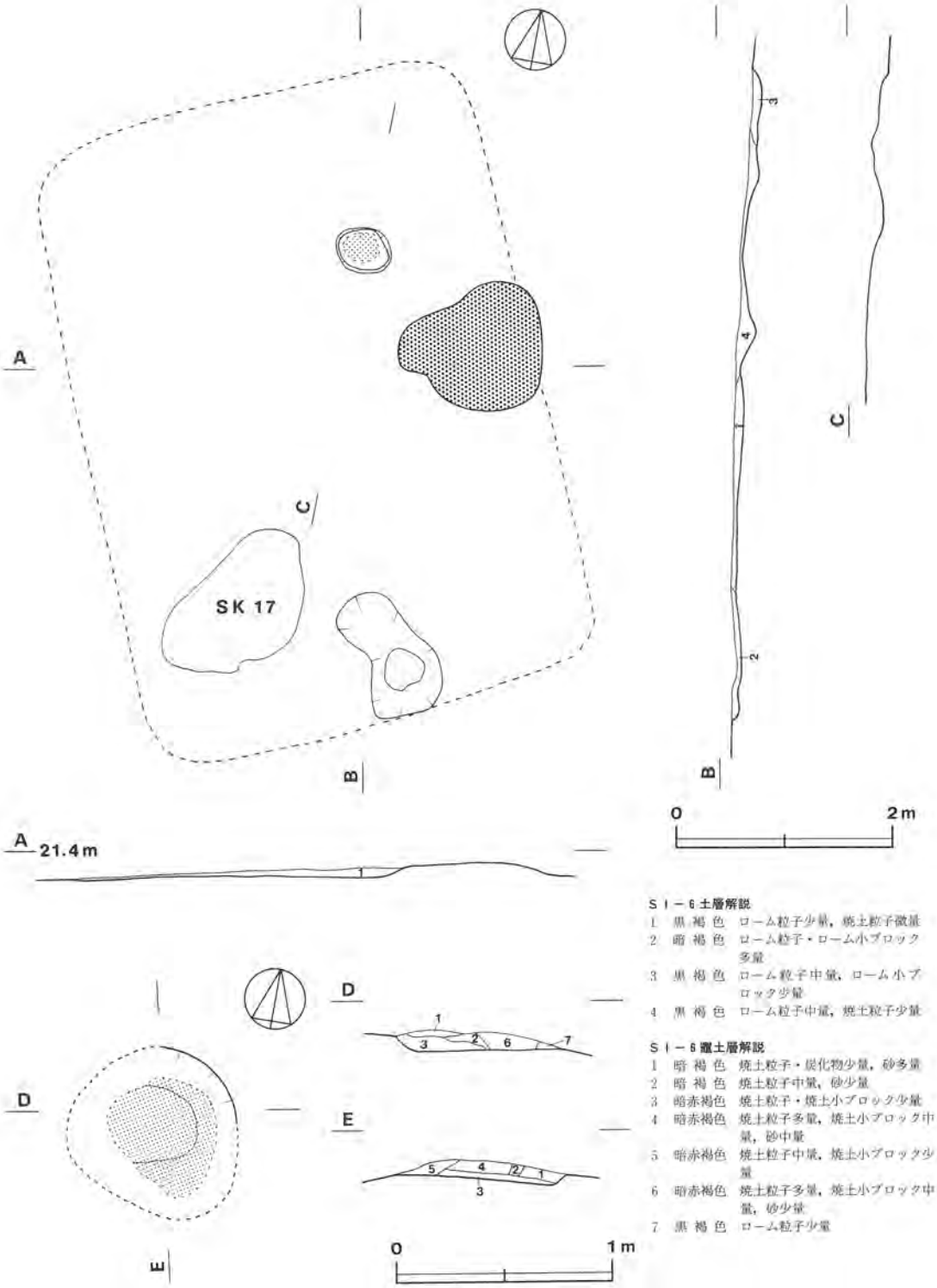
主軸方向　〔N－76°－E〕

壁　耕作等によって削平されており，遺存状態は極めて悪く，僅かな立ち上がりが土層断面から見られる。

竈　砂や粘土で構築されたものと捉えられるが，依存状態が悪く，袖部，天井部は既に削平され，火床部の焼土が僅かに遺存している。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片９点（甕片，坏片）が，主に竈周辺の覆土から出土している。13の甑は，竈燃焼部覆土上層から出土している。

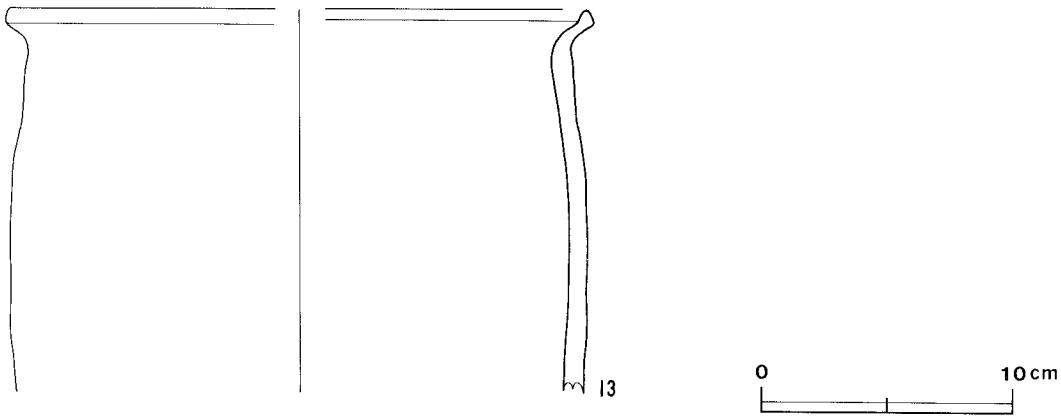


第29図　第6号住居跡実測図

所見　本跡は，重複関係から第17号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や遺物等から平安時代の住居跡と考えられる。

第６号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
13	甑 土　師　器	A〔23.0〕 B(15.3)	口縁部は外反し，口唇部は上方につまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 良好	P10　20% 竈燃焼部 覆土上層



第30図　第６号住居跡出土遺物実測図

第７号住居跡（第31図）

位置　調査区の中央部，B3e_0区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸2.42m，短軸2.36mの方形を呈している。

主軸方向　N－44°－W

壁　壁高は，18～38cmを測る。北西壁は，緩やかに外傾して立ち上がり，北西壁を除く他の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北西壁を除き，壁下に検出され，上幅10～20cmを測り，深さは４～８cm程で，断面形はU字状を呈している。

床　平坦であり，良く踏み固められ，堅緻である。

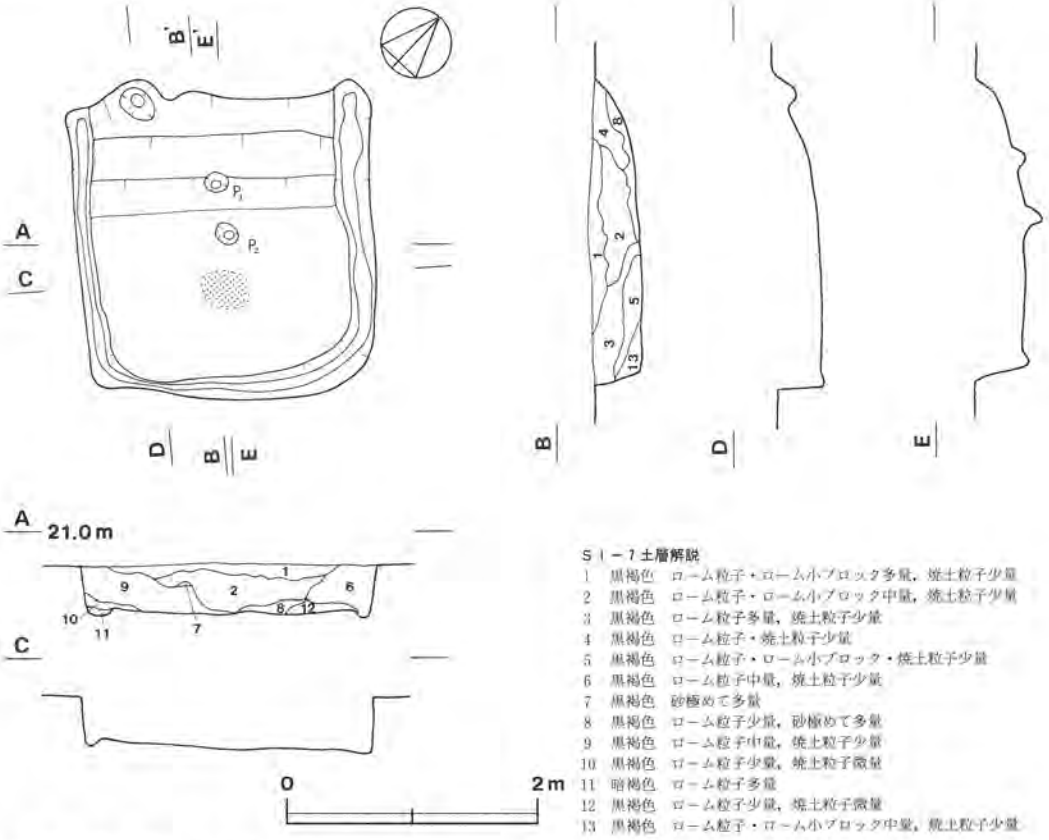
ピット　２か所（P_1，P_2）検出されている。P_1，P_2の平面形は，径10cm程の円形を呈し，深さ16～18cmを測る。性格については，不明である。

炉　中央部からやや南東側に付設され，規模は，径30cm程の円形を呈する地床炉である。炉床は，床面を僅かに掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片24点（甕片，坏片，高台付坏片）が，主に南東部覆土中層から出土している。鉄滓は炉周辺の覆土中・下層から10点程出土しており，P_1，P_2の覆土からは砂鉄が検出されている。

所見　本跡は，遺構の形態（竈の代わりに炉が付設されていること等）や出土遺物等から平安時代の工房跡と考えられる。



第31図　第７号住居跡実測図

第８号住居跡（第32図）

位置　調査区の中央部，B3i_9区を中心に確認されている。

重複関係　北西部を第26号土坑に掘り込まれている。

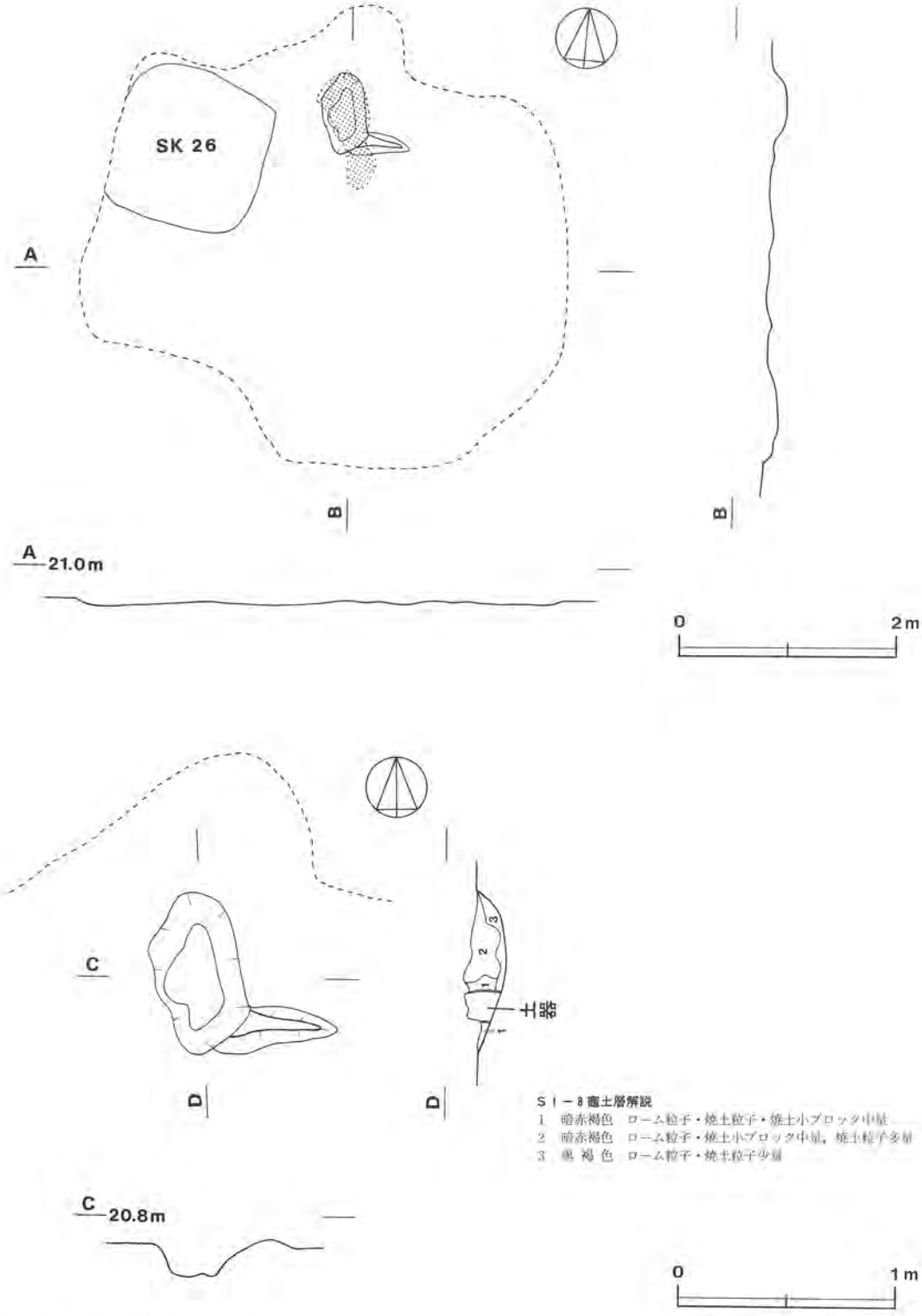
規模と平面形　長軸（4.36）m，短軸（3.56）mの長方形を呈した住居跡と思われる。

主軸方向　〔N－2°－E〕

壁　壁高は，８～12cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　竈の南側付近に凹凸状の硬質面が確認されている。

竈　北壁中央部に付設されていたものと思われる。火床部の焼土が，幅20～25cm，長さ110cm程の



第32図　第 8 号住居跡実測図

範囲で確認されている。

覆土　自然堆積と思われる。

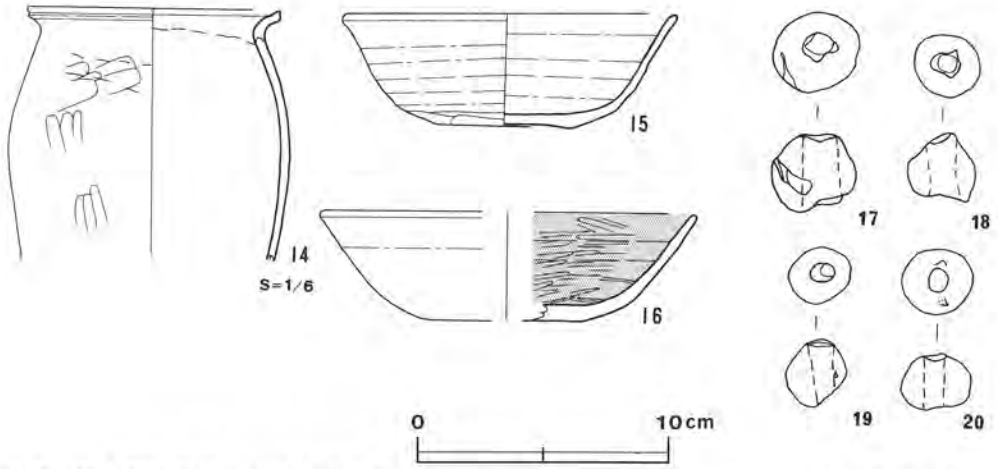
遺物　土師器片6点（甕片，坏片），土製品4点（球状土錘）が，竈燃焼部覆土から出土している。14の甕は正位の状態で，15の坏は14の甕の中に入った状態で，竈燃焼部覆土から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や遺物等から平安時代の住居跡と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
14	甕 土師器	A 19.9 B (20.1)	胴下半部欠損。頸部はくびれ，口縁部は外反する。口縁部外面に沈線を施す。	胴部外面縦位のヘラ削り後，ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P12　50% 竈燃焼部 覆土下層
15	坏 土師器	A 13.1 B 4.7 C 5.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り後，全面手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P13　90% 竈燃焼部 覆土下層
16	坏 土師器	A〔14.7〕 B 4.3 C〔6.0〕	平底。体部は直線的に外傾し，外上方に開く。	底部全面手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P14　20% 竈燃焼部 覆土下層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
17	球状土錘	1.6	1.7	0.7	2.5	竈前方　床面	DP3　100%
18	球状土錘	1.4	1.4	0.6	1.6	竈前方　床面	DP4　100%
19	球状土錘	1.1	1.4	0.4	1.7	竈前方　床面	DP5　100%
20	球状土錘	1.3	1.2	0.5	1.2	西部　床面	DP6　100%



第33図　第8号住居跡出土遺物実測図　　17～20　S＝1/1.5

第9号住居跡（第34図）

位置　調査区の中央部，B3g_6区を中心に確認されている。

規模と平面形　耕作等の撹乱を受け，規模や平面形については不明である。

主軸方向　〔N－113°－E〕

壁　削平されて，立ち上がりが検出されていない。

床　竈の付近に，床面と思われる硬質の平坦なローム面が，僅かに確認されている。

竈　撹乱を受け遺存状態が悪い。砂や粘土で構築されていたことが，土層断面から捉えられる。火床の一部から焼土が検出されている。

覆土　撹乱を受け覆土も浅いため，堆積状況は不明である。

遺物　土師器片12点（甕片，坏片）が，竈付近から出土しているが，いずれも細片である。

所見　本跡は，出土遺物等から平安時代の住居跡と考えられる。

第10号住居跡（第35図）

位置　調査区の中央部，B3e_7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸（3.32）m，短軸（3.00）mの方形を呈した住居跡と思われる。

主軸方向　〔N－20°－E〕

壁　壁高は，6～8㎝を測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　中央部は平坦であり，良く踏み固められている。

ピット　1か所（P_1）検出されている。P_1の平面形は，長径36㎝，短径30㎝の楕円形を呈し，深さは17㎝を測り，出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は長さ90㎝，幅80㎝を測る。壁を58㎝程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を8㎝程掘り窪めているが，焼き締まりは弱い。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片33点（甕片，坏片，高台付坏片），土製品4点（球状土錘，管状土錘）が，主に竈付近の覆土中・下層から出土している。23の高台付坏は，竈前方の覆土下層から出土している。

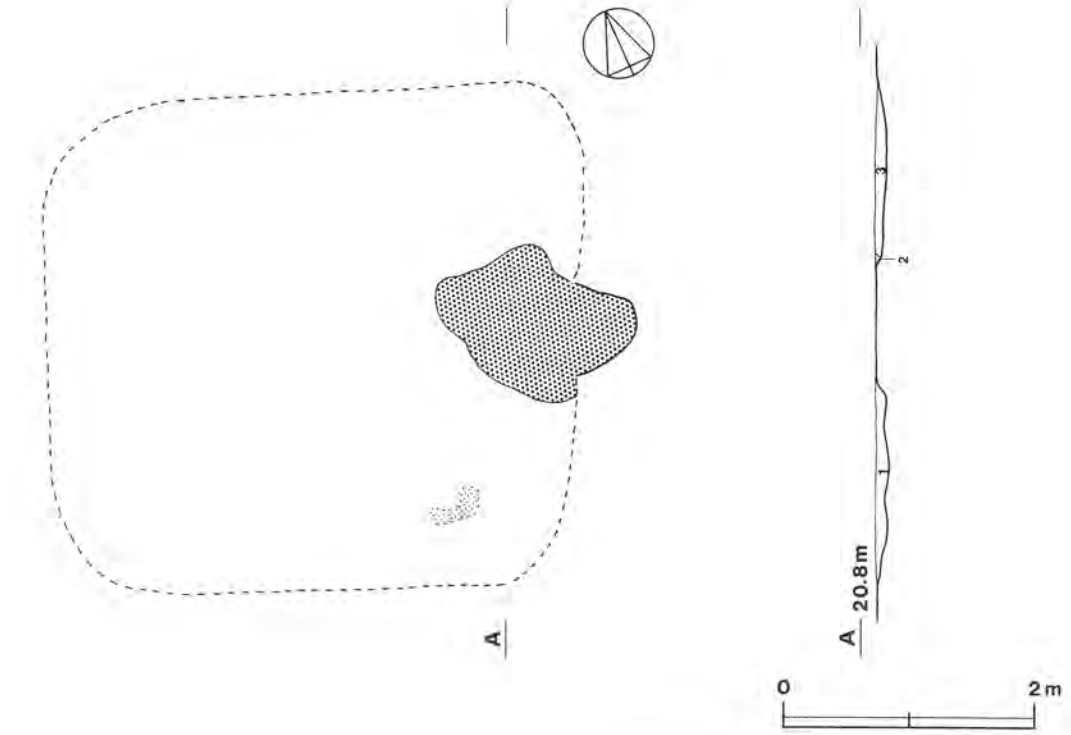
所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第11号住居跡（第37図）

位置　調査区の中央部，B4f_2区を中心に確認されている。

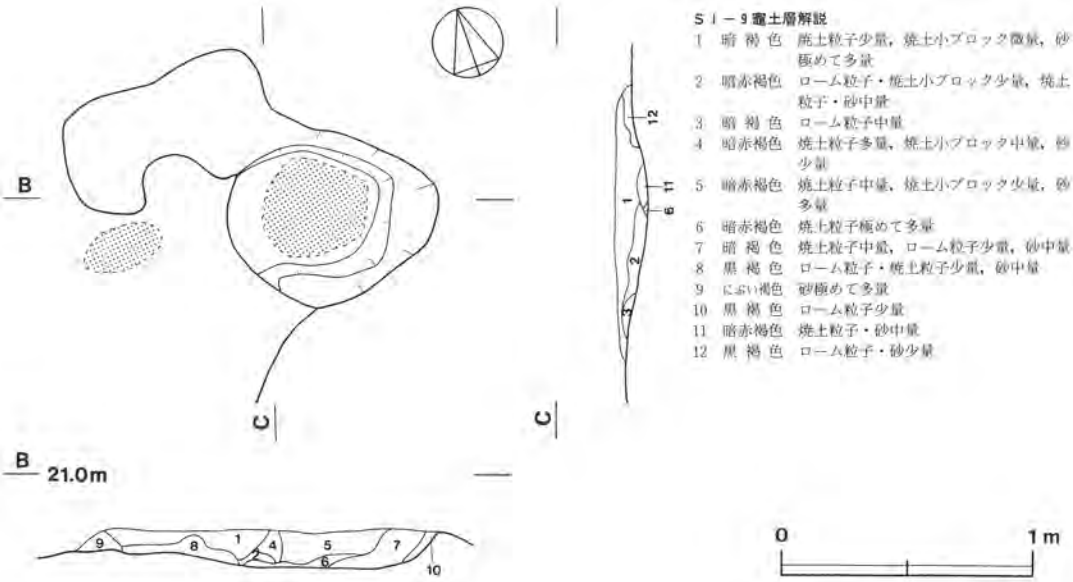
規模と平面形　竈のみが検出され，規模や平面形については不明である。

主軸方向　〔N－28°－E〕



S I－9 土層解説

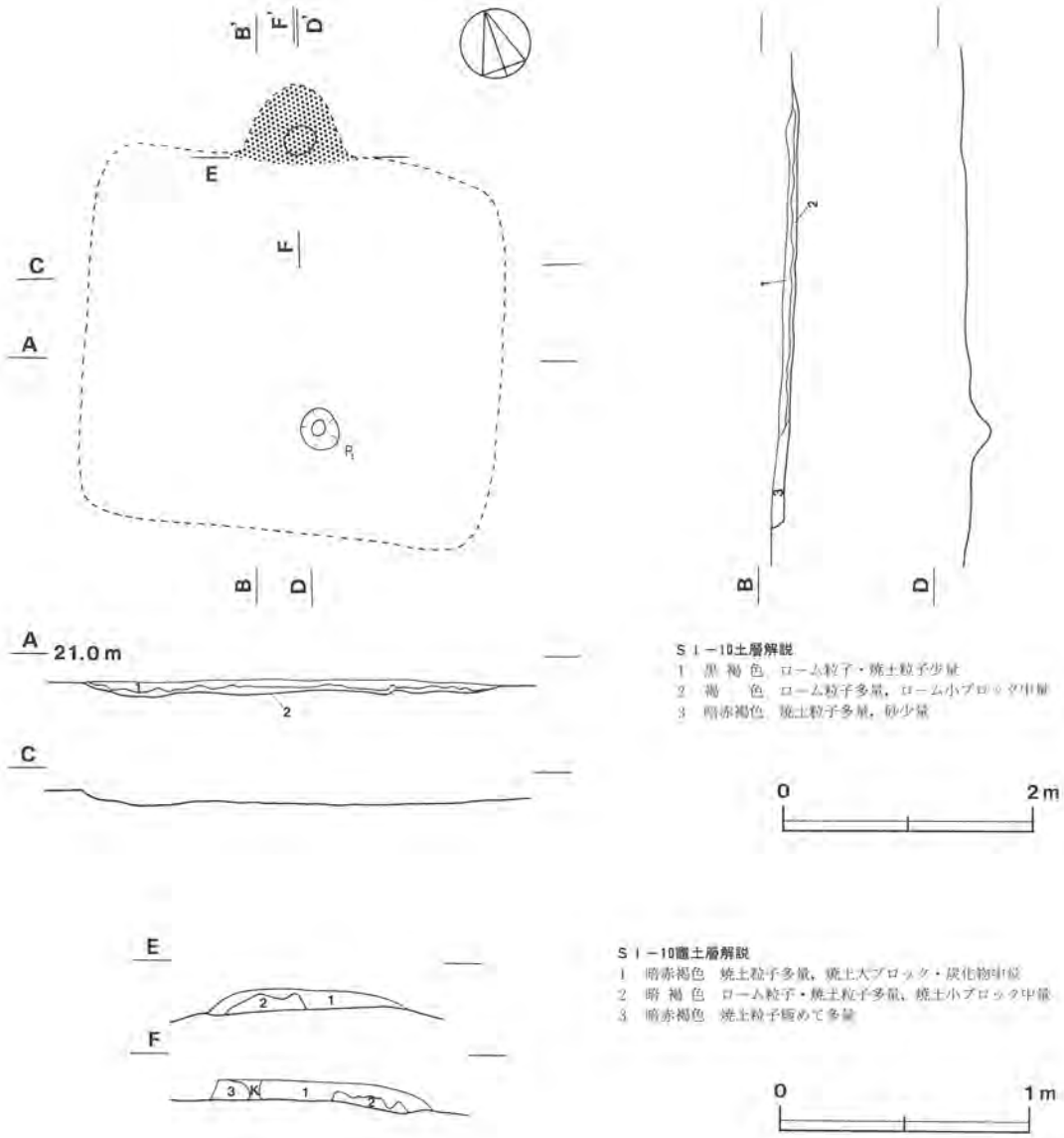
1　黒 褐 色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
2　にぶい褐色　砂極めて多量
3　黒 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量



S I－9 竈土層解説

1　暗 褐 色　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，砂極めて多量
2　暗赤褐色　ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土粒子・砂中量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，砂少量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，砂多量
6　暗赤褐色　焼土粒子極めて多量
7　暗 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，砂中量
8　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂中量
9　にぶい褐色　砂極めて多量
10　黒 褐 色　ローム粒子少量
11　暗赤褐色　焼土粒子・砂中量
12　黒 褐 色　ローム粒子・砂少量

第34図　第 9 号住居跡実測図



第35図　第10号住居跡実測図

壁　削平されて，立ち上がりが確認されていない。

竈　砂や粘土で構築されている。撹乱を受け遺存状態が悪い。土層断面から火床の一部と思われる焼土が検出されている。

覆土　撹乱を受け覆土も浅いため，堆積状況は不明である。

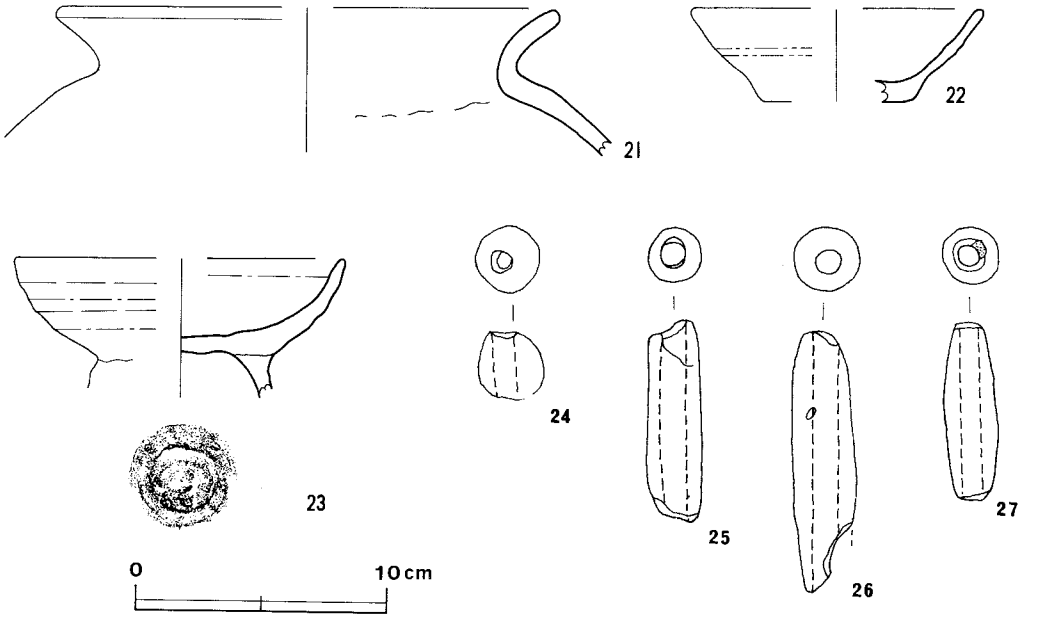
遺物　土師器片18点（甕片，坏片，高台付坏片）が，竈燃焼部覆土から出土しているが，いずれも細片である。

所見　本跡は，出土遺物等から平安時代の住居跡と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	甕 土師器	A〔19.7〕 B(5.8)	頸部はくびれ，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	胴部内面上位に輪積み痕。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P15 10% 北東コーナー付近 覆土中層
22	坏 土師器	A〔11.4〕 B 3.7 C〔 6.1〕	突出した平底。体部は直線的に外傾し，外上方に開く。口唇部は丸くおさめる。	底部回転糸切り。 体部内・外面剝離のため調整不明。	砂粒 明赤褐色 普通	P16 30% 竈燃焼部 覆土中層
23	高台付坏 土師器	A〔13.0〕 B(5.6) E(1.7)	平底。底部に「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P17 60% 竈前方 覆土下層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
24	球状土錘	1.4	1.3	0.4	2.0	覆土	DP7 100%
25	管状土錘	(4.1)	1.1	0.5	(3.5)	中央部 覆土中層	DP8 70%
26	管状土錘	5.2	1.3	0.5	(7.1)	覆土中層	DP9 80%
27	管状土錘	3.6	1.1	0.4	(3.8)	覆土	DP10 80%

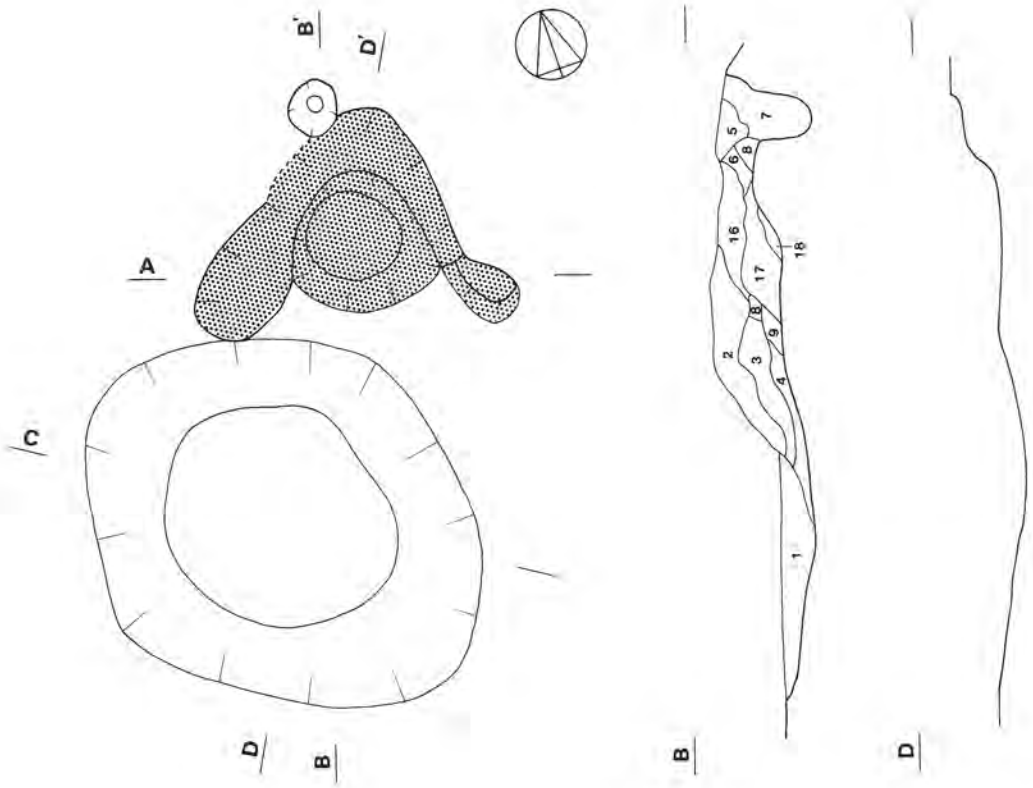


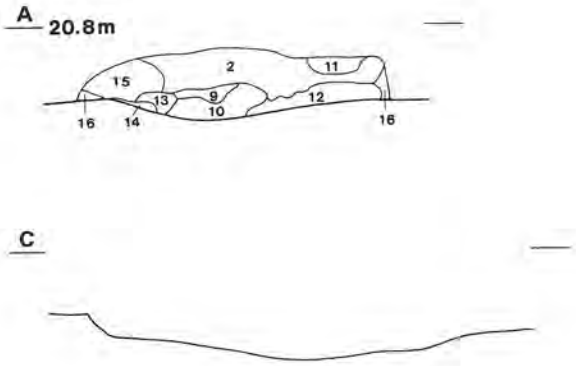
第36図　第10号住居跡出土遺物実測図　　24～27 S＝1/1.5

第12-A号住居跡（第38図）

位置　調査区の中央部，B3c$_5$区を中心に確認されている。

重複関係　第12-B号住居跡を掘り込み，南部床面を第41号土坑に，西コーナーを第72号土坑にそれぞれ掘り込まれている。





Ｓ Ｉ－11竈土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂中量
3　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量，砂多量
4　黒 褐 色　焼土粒子・砂少量
5　黒 褐 色　ローム粒子・砂少量，焼土粒子少量
6　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・砂中量
7　黒 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
8　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・砂少量
9　黒 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
10　黒 褐 色　砂多量
12　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量
13　褐　　色　砂極めて多量
14　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子中量，砂多量
15　黒 褐 色　ローム粒子少量
16　暗赤褐色　焼土粒子中量，砂多量
17　暗赤褐色　ローム粒子・砂少量，焼土粒子中量
18　黒 褐 色　ローム粒子多量，焼土粒子少量

0　1m

第37図　第11号住居跡竈実測図

規模と平面形　長軸3.60m，短軸3.30mの方形を呈している。

主軸方向　N－30°－E

壁　壁高は，8～18cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　平坦であり，全体的に良く踏み固められている。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は長さ73cm，幅133cmを測る。壁を35cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を僅かに掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

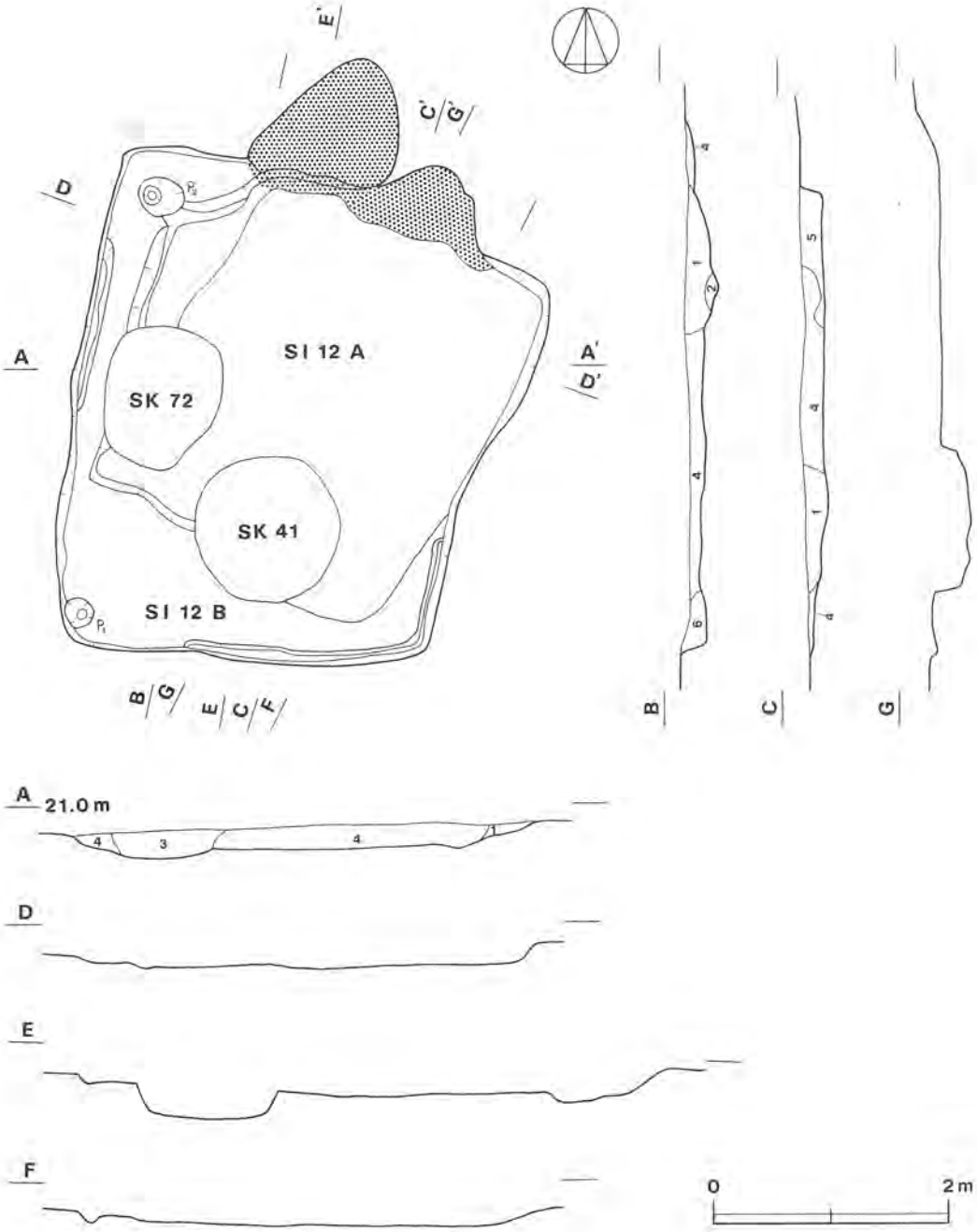
覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片137点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片１点（坏片），土製品18点（管状土錘，球状土錘）が，主に東部覆土中・下層から出土している。竈燃焼部覆土下層からは，土師器片９点（甕片）が出土している。35の高台付坏は，中央部の覆土下層から，32の坏は，南東壁中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，第12-Ｂ号住居跡よりも新しく，第41・72号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第12－Ａ号住居跡出土遺物観察表

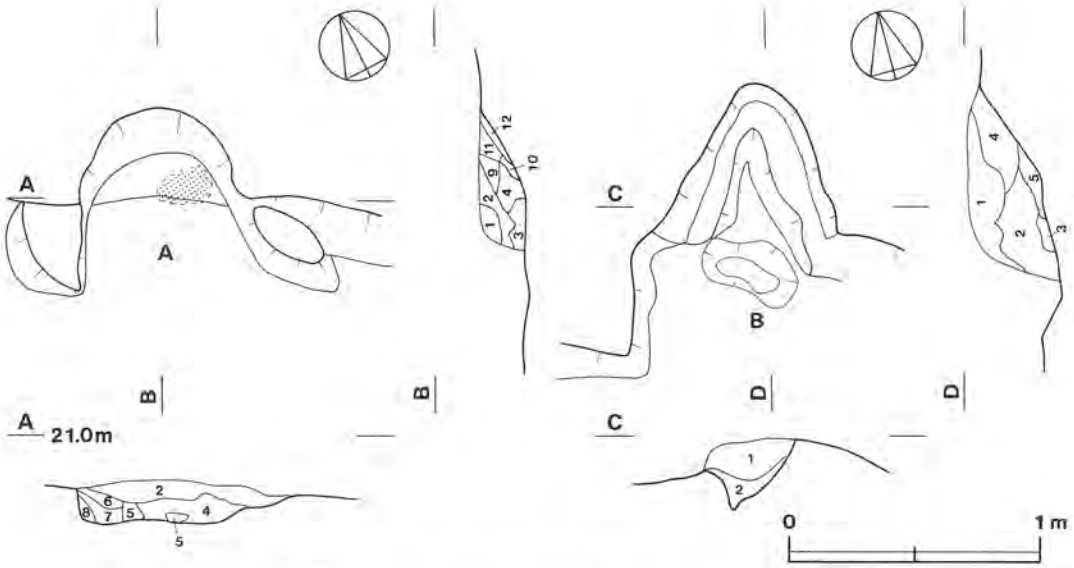
遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
28	甕 土師器	B(18.1)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面平行叩き。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 不良	P18B　20% 竈前方 覆土中層
29	甕 土師器	B(16.5) C〔14.8〕	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は内彎して立ち上がる。	底部全面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 不良	P18A　20% 竈前方 覆土中層
30	甕 土師器	A〔24.0〕 B(9.7)	頸部はくびれ，口縁部は外反する。口唇部を外上方へつまみ出す。	胴部外面縦位のヘラ削り後，ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P20　10% 東壁中央付近 覆土下層
31	鉢 須恵器	B(13.4) C〔13.8〕	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり，外上方に開く。	底部ヘラ削り後，横ナデ。 胴部下端斜位のヘラ削り。	砂粒・長石・礫 黒色 不良	P19　30% 北東部 覆土下層
32	坏 土師器	A 13.3 B 4.3 C 5.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部全面手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P24　65% 南東壁中央 覆土中層
33	高台付坏 土師器	B(2.3) D 7.9 E 1.3	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。	底部回転ヘラ切り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P27　20% 中央部 覆土床面
34	高台付坏 土師器	B(5.6) D 9.4 E 1.6	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P26　30% 北東部 覆土上層
35	高台付坏 土師器	B(4.7) D 7.6 E 1.5	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り後，横ナデ。 体部下端回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P25　60% 中央部 覆土下層

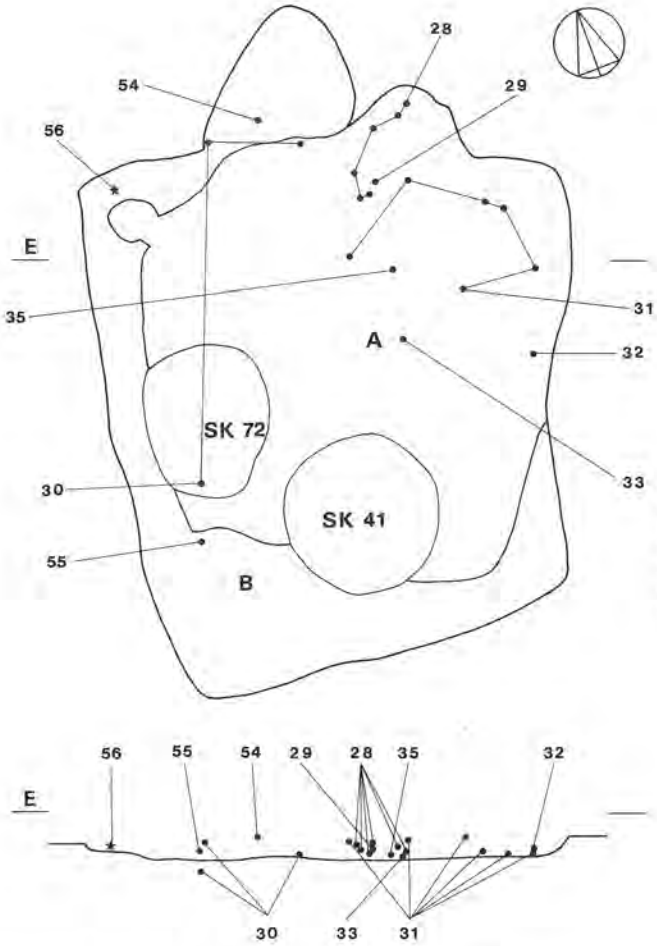


SI－12A・B土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化物少量
2　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量
4　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
5　黒褐色　ローム粒子・砂中量，焼土粒子少量
6　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量

第38図　第12-A・B号住居跡実測図





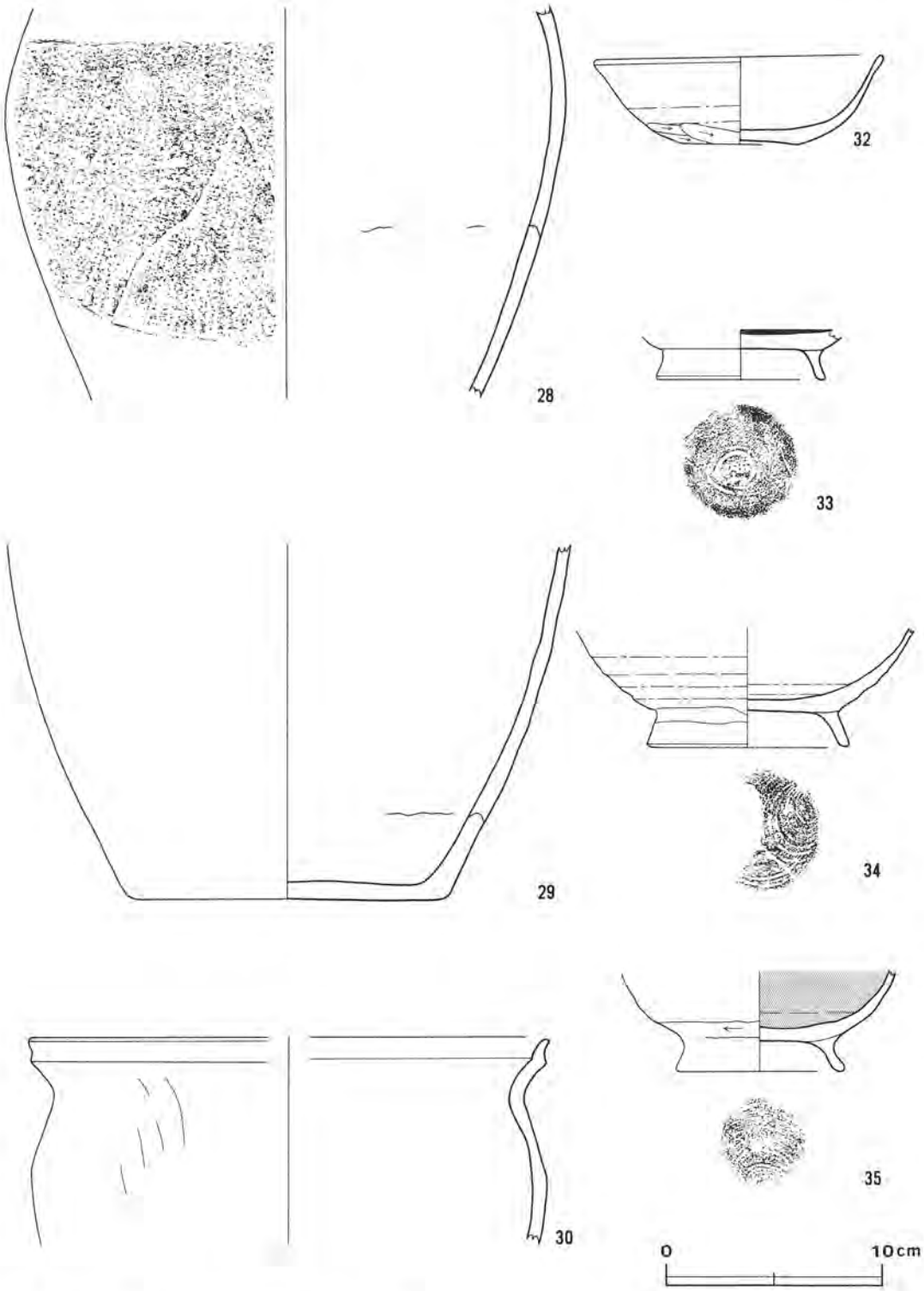
S I－12－A竈土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
2 褐　色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量
3 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・焼土小ブロック中量
4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子中量
5 褐　色 ローム小ブロック多量
6 暗赤褐色 焼土粒子多量
7 暗赤褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
8 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
9 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
10 暗赤褐色 焼土粒子極めて多量
12 褐　色 砂質粘土極めて多量

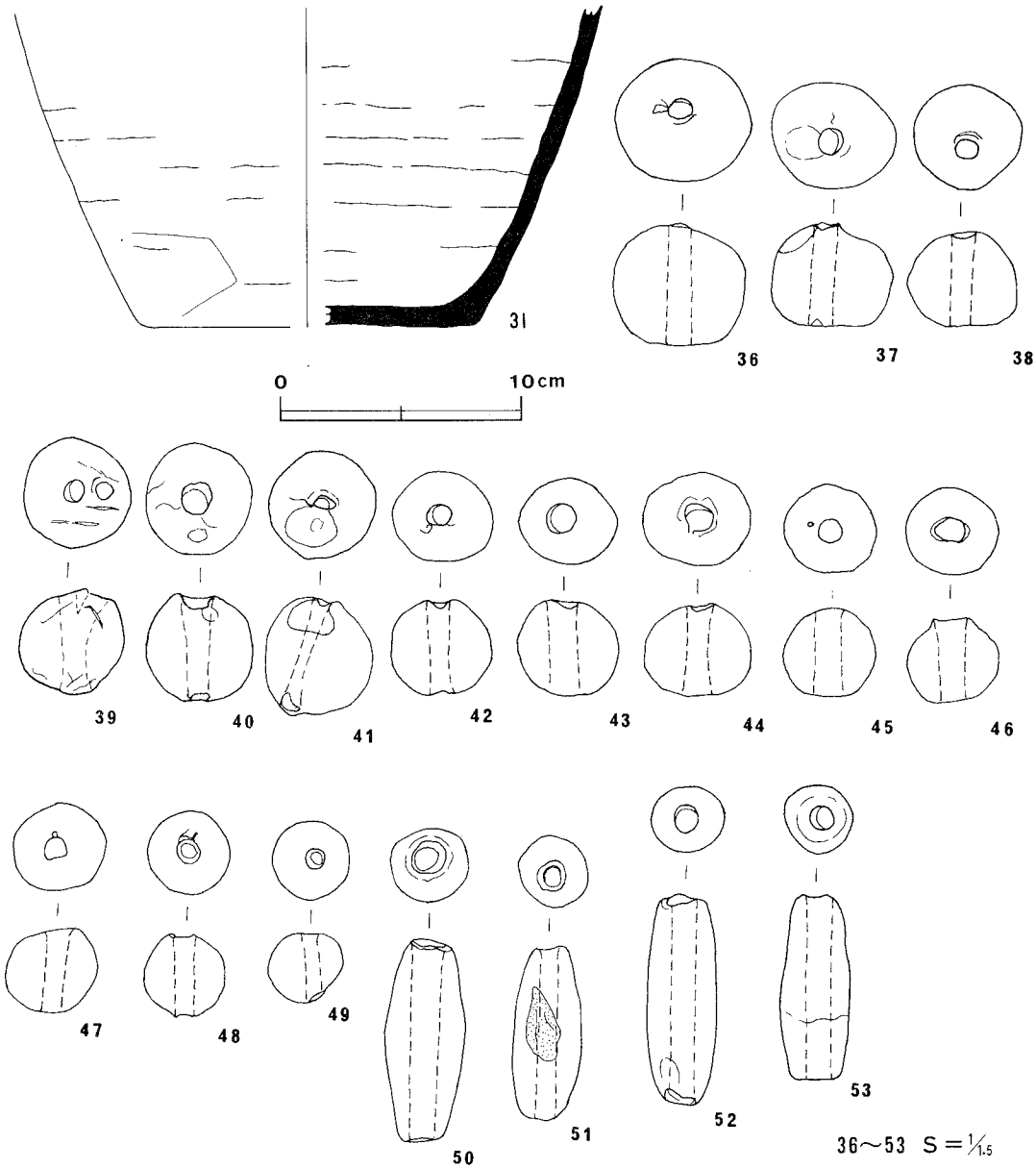
S I－12－B竈土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂少量
2 褐　色 ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物少量
3 褐　色 ローム粒子極めて多量
4 暗赤褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
5 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量

第39図　第12-A・B号住居跡竈実測・遺物出土位置図



第40図　第12-A号住居跡出土遺物実測図(1)



第41図　第12-A号住居跡出土遺物実測図(2)

第12－A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
36	球状土錘	2.5	2.8	0.4	16.3	竈燃焼部　床面	DP11	100%
37	球状土錘	2.1	2.5	0.5	10.2	北西部　覆土中層	DP12	100%
38	球状土錘	2.0	2.3	0.5	7.9	竈燃焼部　覆土中層	DP13	100%
39	球状土錘	2.2	2.2	0.4	8.9	覆土	DP14	100%
40	球状土錘	2.2	2.3	0.6	10.2	北東部　覆土中層	DP15	100%

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
41	球状土錘	2.5	2.2	0.5	5.9	北西コーナー付近覆土中層	DP16	100%
42	球状土錘	1.9	2.1	0.5	5.6	覆土	DP17	100%
43	球状土錘	2.0	2.1	0.6	7.2	竈燃焼部　覆土中層	DP18	100%
44	球状土錘	1.9	2.3	0.6	4.5	竈燃焼部　覆土中層	DP19	100%
45	球状土錘	2.0	1.9	0.7	4.8	竈燃焼部　覆土中層	DP20	100%
46	球状土錘	2.0	1.9	0.7	4.5	竈燃焼部　覆土中層	DP21	100%
47	球状土錘	2.0	1.8	0.6	4.5	南西部　覆土中層	DP22	100%
48	球状土錘	1.7	1.7	0.5	3.2	中央部　覆土中層	DP23	100%
49	球状土錘	1.5	1.5	0.4	(3.2)	竈燃焼部　覆土中層	DP24	90%
50	管状土錘	4.1	1.6	0.7	8.5	竈燃焼部　覆土中層	DP25	100%
51	管状土錘	3.6	1.5	0.4	7.4	中央部　覆土中層	DP26	100%
52	管状土錘	4.3	1.5	0.6	8.5	中央部　覆土中層	DP27	100%
53	管状土錘	3.8	1.5	0.6	7.8	中央部　覆土中層	DP28	100%

第12-B号住居跡（第38図）

位置　調査区の中央部，B3c_5区を中心に確認されている。

重複関係　南部及び西部の一部を残し，第12-A号住居跡に掘り込まれている。南部床面を第41号土坑に，南西部を第72号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.20m，短軸（3.50）mの方形を呈している。

主軸方向　N－12°－E

壁　壁高は，6～8cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　平坦であり，全体的に良く踏み固められている。

ピット　2か所（P_1，P_2）検出されている。P_1，P_2の平面形は，径25～42cmの円形を呈し，深さは30～37cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設され，規模は長さ82cm，幅90cmを測る。壁を110cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を僅かに掘り窪めているが，焼き締まりは弱い。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

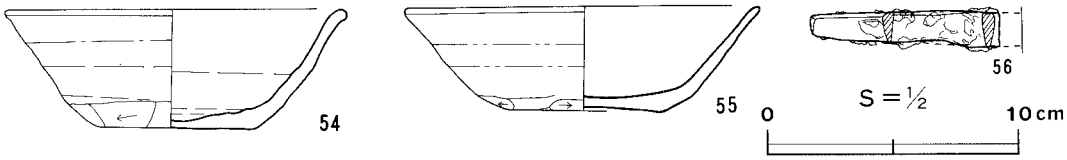
覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片26点（甕片，坏片）が，主に西部覆土中層及び竈燃焼部覆土中層から出土している。55の坏は竈燃焼部覆土上層から，56の坏は南西部覆土下層から，それぞれ出土している。

所見　本跡は，第12-A号住居跡，第41・72号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
54	坏 土師器	A 13.5 B 4.9 C 6.1	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり，外上方へ開く。	底部全面手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P22 100% 竈燃焼部 覆土上層
55	坏 土師器	A 14.0 B 4.3 C 6.2	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり，外上方へ開く。	底部回転糸切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P23 85% 南西部 覆土下層

遺物番号	器種	法量			備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
56	刀子	(5.1)	0.9	0.3	北西コーナー付近覆土中層 M4



第42図　第12-B号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡（第43図）

位置　調査区の中央部，B3e$_4$区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.60m，短軸3.18mの長方形を呈している。

主軸方向　N－108°－E

壁　壁高は，4～12cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　西壁下及び北壁下に検出され，上幅6～15cmを測り，深さは4～6cm程で，断面形はU字状を呈している。

床　平坦であり，全体的に良く踏み固められ，堅緻である。

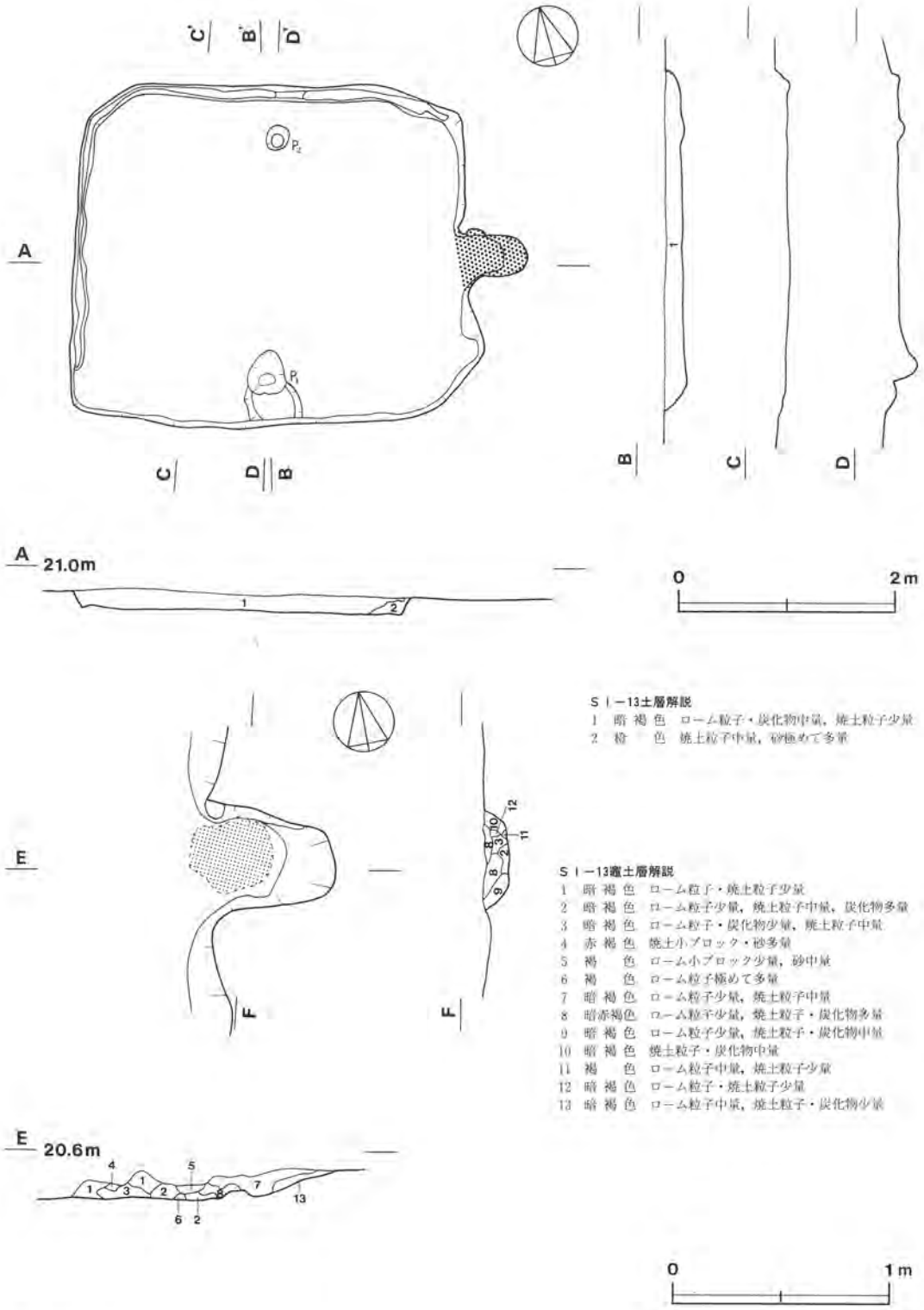
ピット　2か所（P$_1$，P$_2$）検出されている。P$_1$，P$_2$の平面形は，長径20～40cmの楕円形を呈し，深さは6～18cmを測り，規模や配置から出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　東壁中央部に付設され，規模は長さ86cm，幅60cmを測る。壁を58cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を僅かに掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片50点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片4点（甕片），土製品2点（球状土錘）が，主に南壁際中央部覆土中層から出土している。竈燃焼部覆土下層からは，土師器片10点（甕片）が出土している。59の高台付坏は，南壁際中央部覆土中層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。



Ｓ Ｉ－13土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子・炭化物中量，焼土粒子少量
2　橙　　色　焼土粒子中量，砂極めて多量

Ｓ Ｉ－13遺土層解説

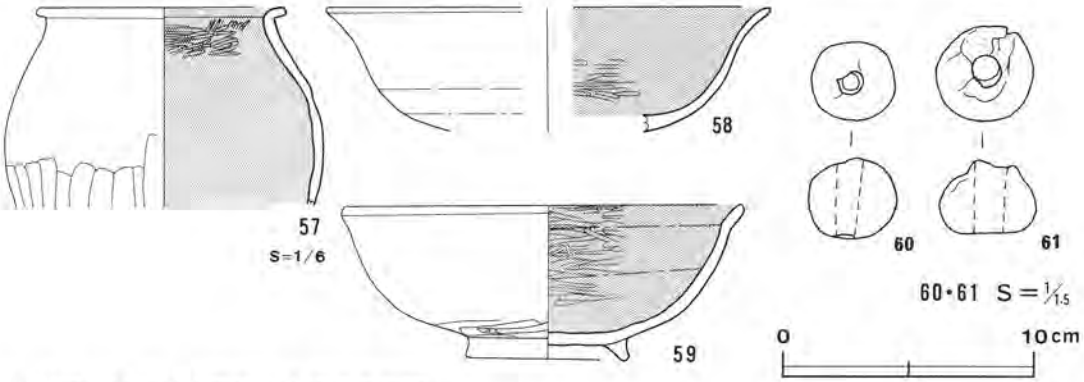
1　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子中量，炭化物多量
3　暗 褐 色　ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子中量
4　赤 褐 色　焼土小ブロック・砂多量
5　褐　　色　ローム小ブロック少量，砂中量
6　褐　　色　ローム粒子極めて多量
7　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子中量
8　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物多量
9　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物中量
10　暗 褐 色　焼土粒子・炭化物中量
11　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
12　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量
13　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量

第43図　第13号住居跡実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
57	甕 土師器	A 19.3 B(15.8)	胴下半部欠損。頸部はくびれ，口縁部は短く外反する。	胴部外面中位から下方へ縦位のヘラ削り。口縁部から胴部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P28 40% 西部 覆土中層
58	高台付坏 土師器	A〔17.6〕 B(4.9)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	体部外面横ナデ，内面横位のヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	P30 30% 南壁際中央部 覆土下層
59	高台付坏 土師器	A 15.7 B 6.2 D 6.4 E 0.9	平底。底部に低い貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	底部回転糸切り後，横ナデ。 体部下端手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P29 70% 南壁際中央部 覆土中層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
60	球状土錘	1.6	1.7	0.5	3.9	北部 覆土中層	DP29 100%
61	球状土錘	1.4	1.9	0.7	(3.2)	北部 覆土中層	DP30 70%



第44図　第13号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡（第45図）

位置　調査区の中央部，B3g_2区を中心に確認されている。

重複関係　北コーナー付近を第73号土坑に掘り込まれている。

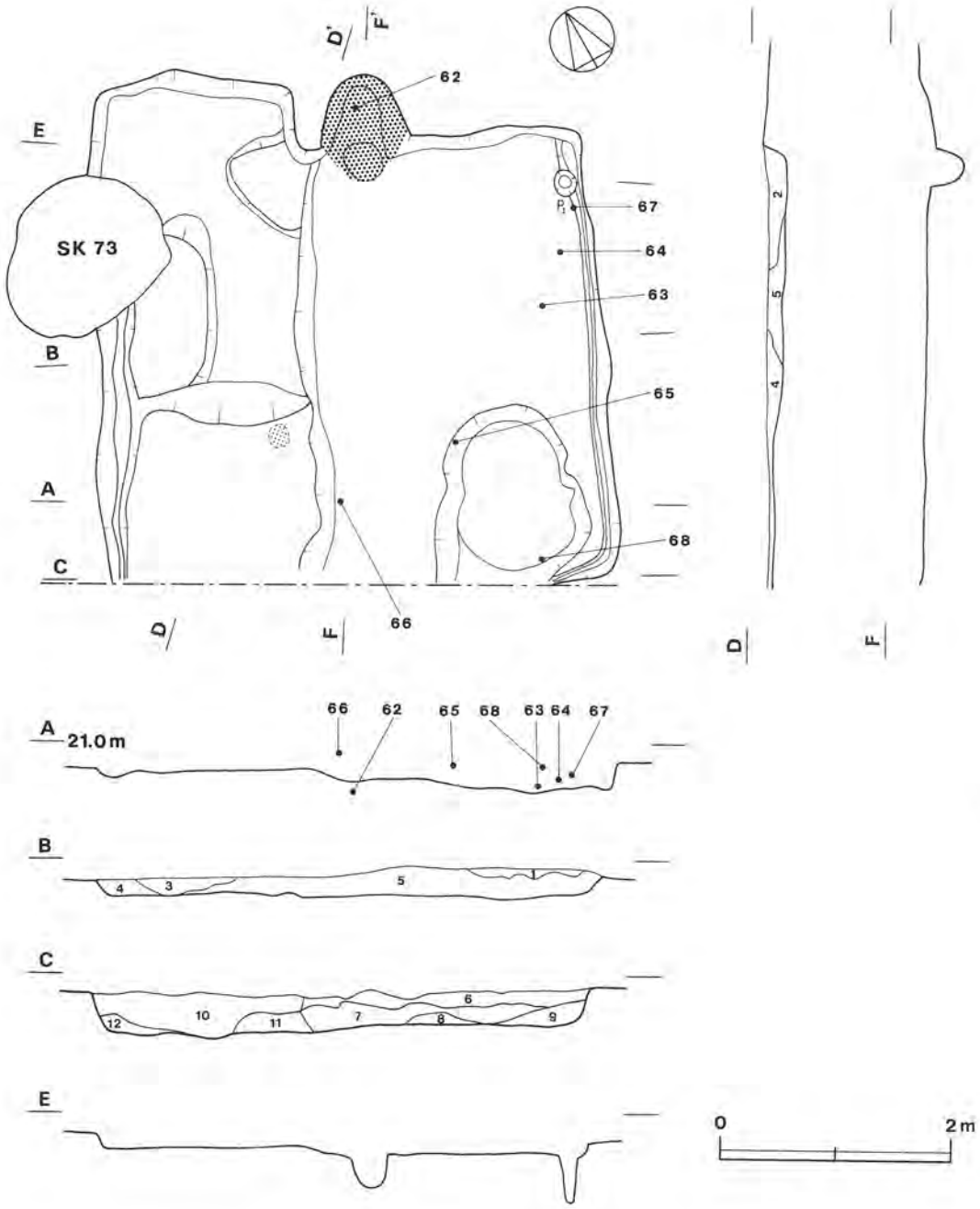
規模と平面形　南西部の一部が調査区外に延びているが，長軸4.56m，短軸4.36mの方形を呈している。

主軸方向　N－28°－E

壁　壁高は，10～22cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　北西壁下及び南東壁下に検出され，上幅4～6cmを測り，深さは4～8cm程で，断面形はU字状を呈している。

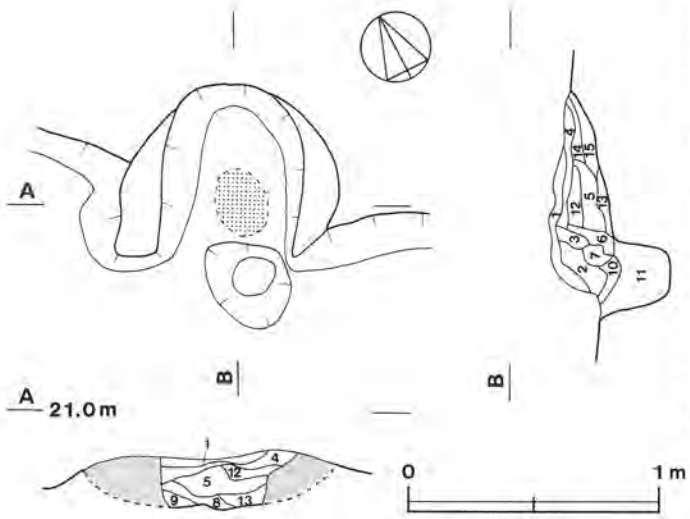
床　平坦であり，全体的に良く踏み固められ，堅緻である。北西部及び南西部の床面が，4～8



SI－14土層解説

1　黒赤褐色　焼土粒子極めて多量，焼土小ブロック多量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，粘土多量
3　黒 褐 色　ローム粒子中量，粘土少量
4　黒 褐 色　ローム粒子・粘土中量
5　暗 褐 色　ローム粒子・ローム小ブロック多量
6　黒 褐 色　ローム粒子・砂少量
7　黒 褐 色　ローム粒子中量，粘土少量
8　暗 褐 色　ローム粒子極めて多量，粘土多量
9　黒 褐 色　ローム粒子・粘土少量
10　黒 褐 色　ローム粒子中量
11　黒 褐 色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
12　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量
13　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
14　黒 褐 色　ローム粒子少量

第45図　第14号住居跡実測・遺物出土位置図



S I－14竈土層解説
1 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
2 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量
3 赤 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子多量，砂極めて多量
4 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子中量
5 暗赤褐色 ローム粒子少量，焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
6 暗 褐 色 ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子中量
7 暗赤褐色 ローム粒子少量，焼土粒子多量
8 赤 褐 色 焼土粒子・砂極めて多量，焼土大ブロック多量
9 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物中量，砂極めて多量
10 暗 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・砂中量
11 暗 褐 色 ローム粒子多量，炭化物・砂中量
12 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量，砂少量
13 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
14 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・砂少量
15 暗赤褐色 ローム粒子・砂中量，焼土粒子少量

第46図　第14号住居跡竈実測図

cm程の高さで，一段高くなっている。

ピット　1か所（P_1）検出されている。P_1の平面形は，径20～24cmの円形を呈し，深さ40cmを測る。性格については，不明である。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は長さ98cm，幅105cmを測る。壁を44cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を6cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片102点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片3点（甕片），土製品1点（球状土錘）が，主に南東部覆土上・中層から出土している。竈燃焼部覆土中層からは，土師器片19点（甕片）が出土している。66の高台付坏は，南部覆土上層から，63，64，65の土師質土器の皿は，東部覆土の中層から下層にかけて，それぞれ出土している。

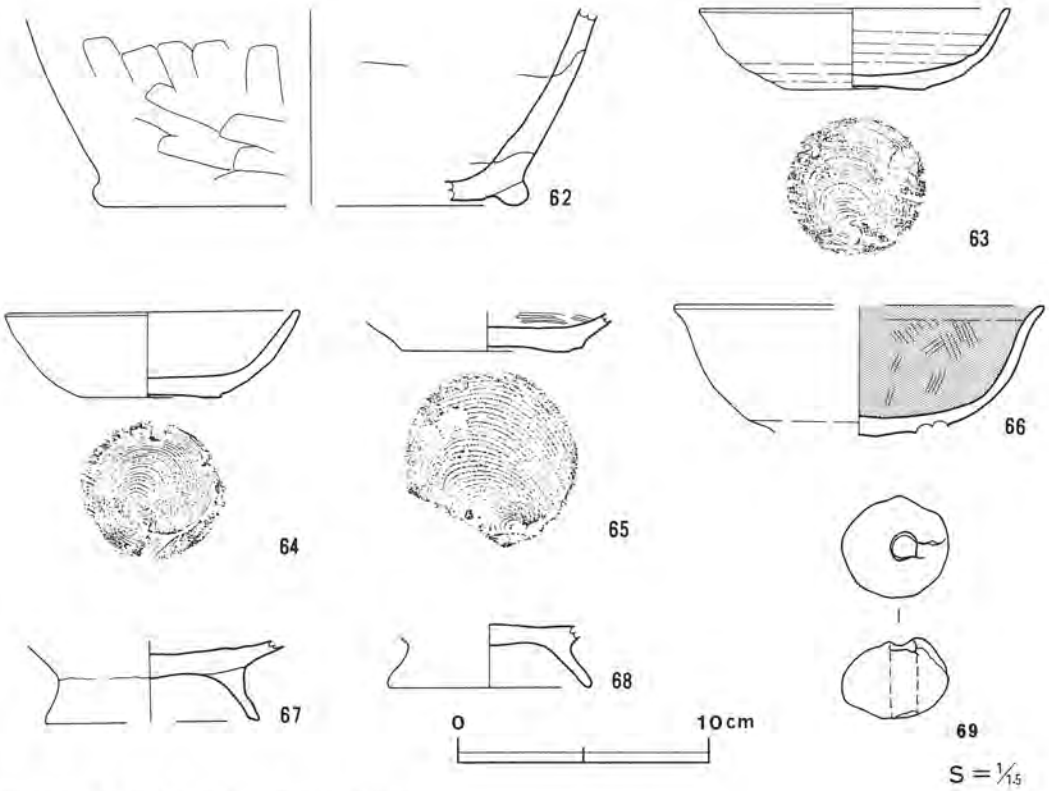
所見　本跡は，第73号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
62	甕 土師器	B（7.8） C（17.4）	底部片。平底。短い貼り付け高台が付く。胴部は内彎気味に立ち上がる。	高台貼り付け後，底部回転ヘラ削り。胴部外面横位のヘラ削り後，縦位のヘラナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P31　10% 竈燃焼部 覆土下層
63	皿 土師質土器	A 12.1 B 3.2 C 5.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・パミス にぶい橙色 普通	P32　100% 東部 覆土下層

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
64	皿 土師質土器	A 11.5 B 3.5 C 5.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P33 100% 東部 覆土中層
65	皿 土師質土器	B(1.6) C 7.3	底部片。 上げ底気味の平底。	底部回転糸切り。	砂粒・長石 橙色 普通	P34 40% 東部 覆土中層
66	高台付坏 土師器	A(14.5) B(5.1)	平底。高台剝離。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部及び体部外面剝離のため調整不明。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 不良	P35 50% 南部 覆土上層
67	高台付坏 土師器	B(3.2) D(8.5) E 2.2	体部欠損。底部から「ハ」の字状に開く足高の貼り付け高台が付く。	底部回転ヘラ切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P36 40% 北東コーナー付近 覆土中層
68	高台付坏 土師器	B(2.5) D 8.2 E 1.8	体部欠損。底部から「ハ」の字状に開く足高の貼り付け高台が付く。	底部回転ヘラ切り後，横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P37 40% 南東コーナー付近 覆土上層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
69	球状土錘	1.6	2.1	0.6	(3.2)	北部 覆土中層	DP31 70%



第47図 第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡（第48図）

位置　調査区の西部，B3f$_2$区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.40m，短軸3.12mの方形を呈している。

主軸方向　N－31°－E

壁　壁高は，14～32cmを測り，北東壁は外傾して立ち上がっているが，他は，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北東壁を除き，壁下に検出され，上幅4～6cmを測り，深さは6cm程で，断面形はU字状を呈している。

床　平坦であり，全体的に良く踏み固められ，堅緻である。

ピット　1か所（P$_1$）検出されている。P$_1$の平面形は，径25cmの円形を呈し，深さ5cmを測り，規模や配置から出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は，長さ86cm，幅73cmを測る。壁を75cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を10cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から外傾して立ち上がっている。

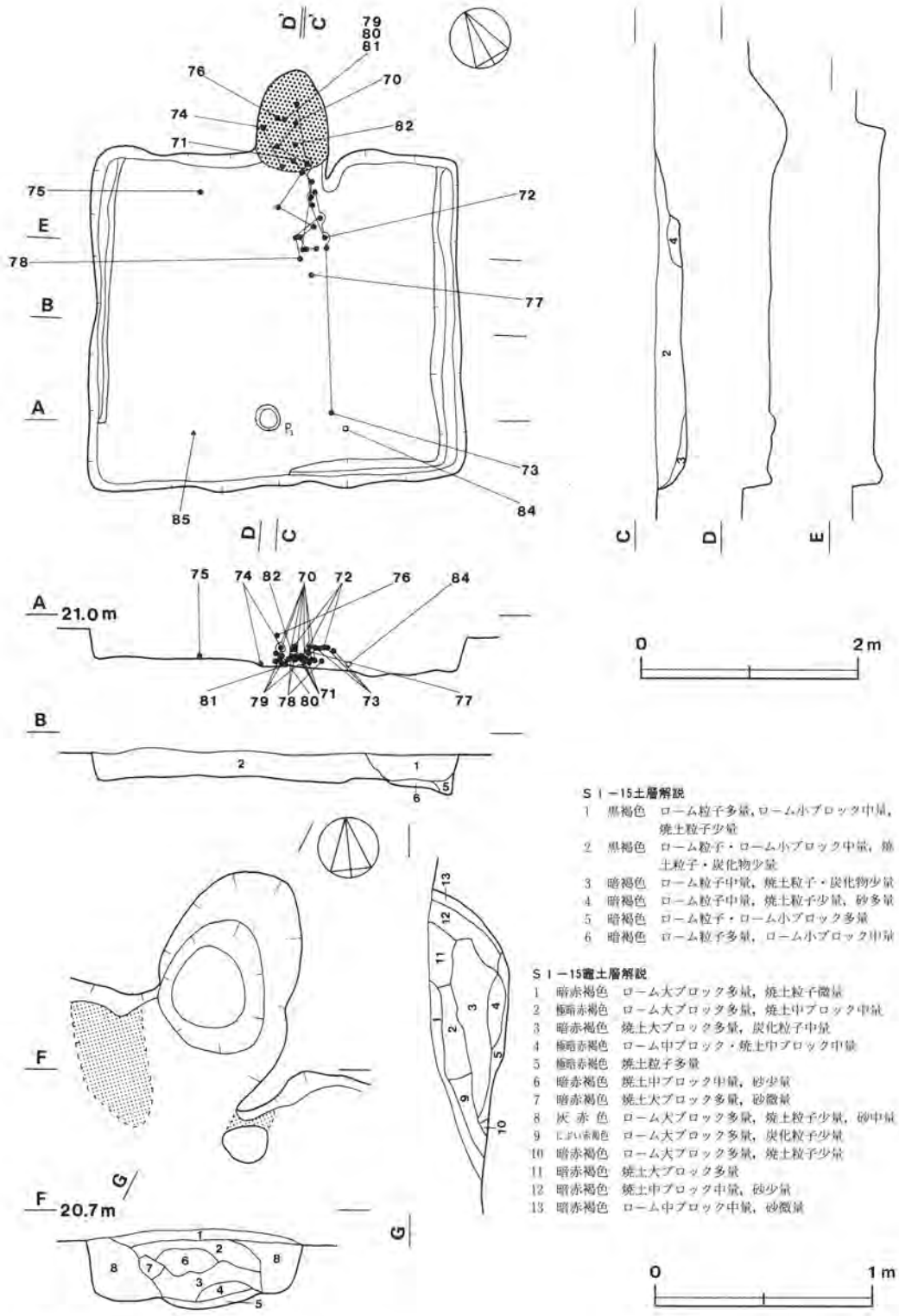
覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片125点（甕片，坏片，高台付坏片），須恵器片2点（甕片），土製品2点（球状土錘，紡錘車），石製品1点（砥石）が，主に覆土中層及び床面から出土している。70，71の甕は竈前方の床面から，73の坏は竈前方の覆土中層から，75の坏は北西部の床面から，78の高台付坏は中央部の床面から，それぞれ出土している。竈燃焼部覆土からは，79，80，81，82の4枚の高台付坏が，逆位で重なった状態で出土している。84の紡錘車は，南コーナー付近の床面から出土しており，側面には，「中舘」と判読できる文字が刻んである。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
70	甕 土師器	B(20.5) C〔13.6〕	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下方横位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P38　25% 竈前方 床面
71	甕 土師器	B(17.5) C〔12.8〕	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下方横位のヘラ削り後，部分的に縦位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P39　20% 竈前方 床面
72	坏 土師器	A〔15.5〕 B　5.8 C　7.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，横ナデ。体部下端回転ヘラナデ，内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P40　50% 竈前方 覆土中層
73	坏 土師器	A〔13.7〕 B　3.0 C　7.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P41　50% 竈前方 覆土中層



S I −15土層解説

1　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，砂多量
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量
6　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

S I −15竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム大ブロック多量，焼土粒子微量
2　極暗赤褐色　ローム大ブロック多量，焼土中ブロック中量
3　暗赤褐色　焼土大ブロック多量，炭化粒子中量
4　極暗赤褐色　ローム中ブロック・焼土中ブロック中量
5　極暗赤褐色　焼土粒子多量
6　暗赤褐色　焼土中ブロック中量，砂少量
7　暗赤褐色　焼土大ブロック多量，砂微量
8　灰赤色　ローム大ブロック多量，焼土粒子少量，砂中量
9　にぶい赤褐色　ローム大ブロック多量，炭化粒子少量
10　暗赤褐色　ローム大ブロック多量，焼土粒子少量
11　暗赤褐色　焼土大ブロック多量
12　暗赤褐色　焼土中ブロック中量，砂少量
13　暗赤褐色　ローム中ブロック中量，砂微量

第48図　第15号住居跡実測・遺物出土位置図

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
74	坏 土師器	A〔15.9〕 B 4.6 C〔7.2〕	平底。体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部は僅かに外傾する。	底部手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P42 40% 竈燃焼部 覆土中層
75	坏 土師器	A〔12.6〕 B 3.6 C〔7.5〕	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 不良	P43 30% 北西部 床面
76	坏 土師器	A〔13.1〕 B 3.5 C〔7.7〕	平底。体部は内彎気味に立ち上がり,口縁部は僅かに外傾する。	底部回転ヘラ切り。 体部内面横位のヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 橙色 普通	P44 30% 竈燃焼部 覆土上層
77	坏 土師器	A〔13.8〕 B(4.0)	底部欠損。体部は内彎し，口縁部は僅かに外傾する。	体部内面横位のヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P45 20% 中央部 覆土中層
78	高台付坏 土師器	A 17.9 B 5.6 D 8.7 E 0.6	平底。底部から低い貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部全面回転ヘラ削り。 体部下端回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P46 60% 中央部 床面
79	高台付坏 土師器	A 15.4 B 6.4 D 8.7 E 1.5	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は直線的に外傾し，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラナデ。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 不良	P47 70% 竈燃焼部 覆土下層
80	高台付坏 土師器	A 15.0 B 5.8 D 8.3 E 1.5	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラナデ。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P48 75% 竈燃焼部 覆土下層
81	高台付坏 土師器	A 14.6 B 5.6 D 8.6 E 1.5	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	P49 90% 竈燃焼部 床面
82	高台付坏 土師器	A 17.2 B 7.1 D 8.6 E 1.8	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り。 体部下端回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P50 75% 竈燃焼部 覆土中層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
83	球状土錘	1.6	1.4	0.3	2.6	竈燃焼部　覆土中層	DP32 100%
84	紡錘車	径5.2　厚さ1.7　孔径0.8			(50.4)	南コーナー付近　床面	DP33「中舘」の刻書 90%

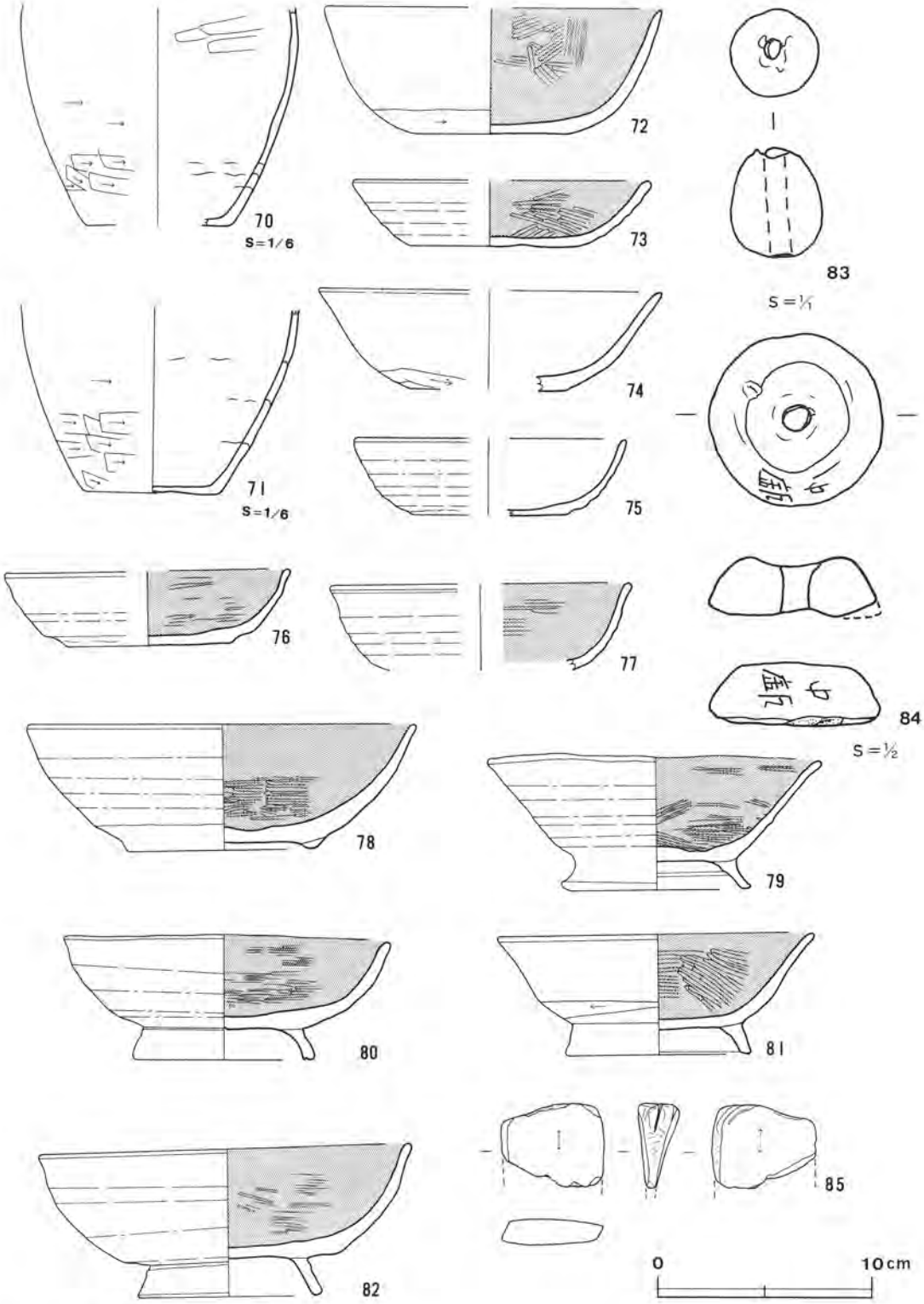
遺物番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
85	砥石	3.8	4.8	2.0	(36.1)	凝灰岩	西コーナー付近　覆土中層	Q1 10%

第16号住居跡（第50図）

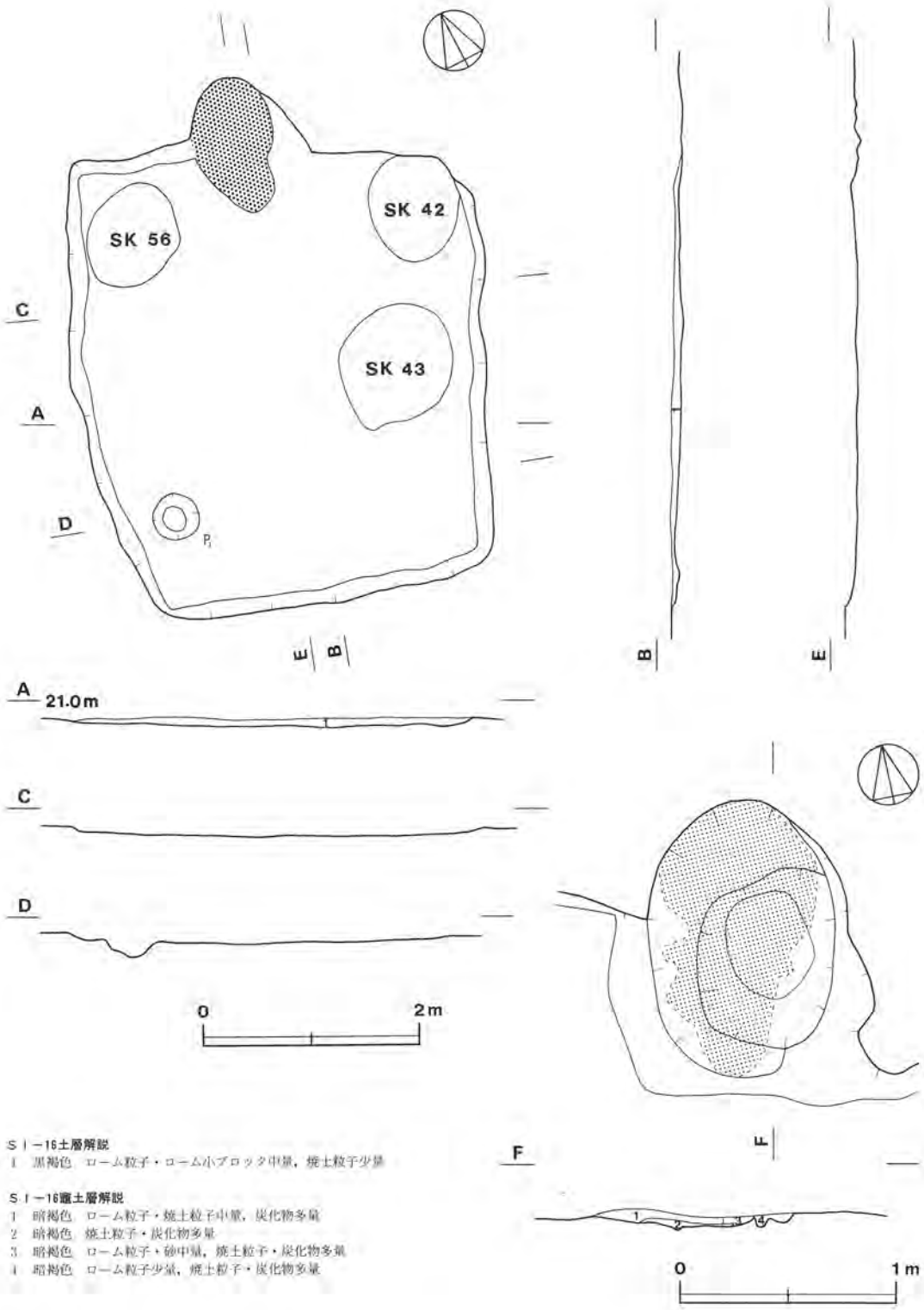
位置　調査区の西部，B2e_0区を中心に確認されている。

重複関係　北東コーナーを第42号土坑に，南部を第43号土坑に，北西コーナーを第56号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.42m，短軸3.90mの長方形を呈している。



第49図　第15号住居跡出土遺物実測図



S I ー16土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量

S I ー16竈土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物多量
2　暗褐色　焼土粒子・炭化物多量
3　暗褐色　ローム粒子・砂中量，焼土粒子・炭化物多量
4　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物多量

第50図　第16号住居跡実測図

主軸方向　N－16°－E

壁　壁高は，4～8cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　平坦であり，全体的に良く踏み固められ，堅緻である。

ピット　1か所（P_1）検出されている。P_1の平面形は，径40cmの円形を呈し，深さ15cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。

竈　北壁中央部に付設されている。撹乱を受け，明確な規模については不明であるが，砂や粘土，火床部の焼土等が検出されている。

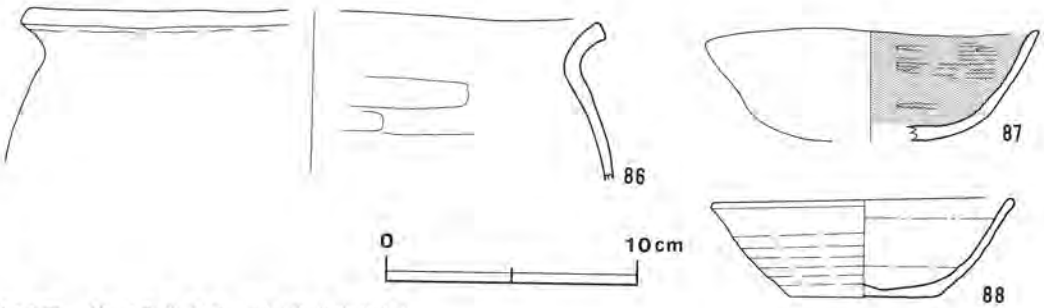
覆土　撹乱を受け，覆土も浅いため堆積状況は不明である。

遺物　土師器片30点（甕片，坏片），須恵器片2点（甕片）が，主に竈燃焼部覆土及び南部覆土から出土している。87，88の坏は，竈燃焼部覆土中層から出土している。

所見　本跡は，第42・43・56号土坑よりも古い時期に構築されており，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
86	甕 土師器	A〔22.8〕 B（6.5）	頸部はくびれ，口縁部は外反する。口唇部は平坦におさめる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P51　10% 竈燃焼部 覆土中層
87	坏 土師器	A 13.1 B（4.4） C〔5.4〕	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。 口縁部に歪みがある。	底部欠損のため調整不明。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P52　75% 竈燃焼部 覆土中層
88	坏 土師器	A 11.9 B 4.1 C 6.1	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，全面手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 淡橙色 普通	P53　60% 竈燃焼部 覆土中層

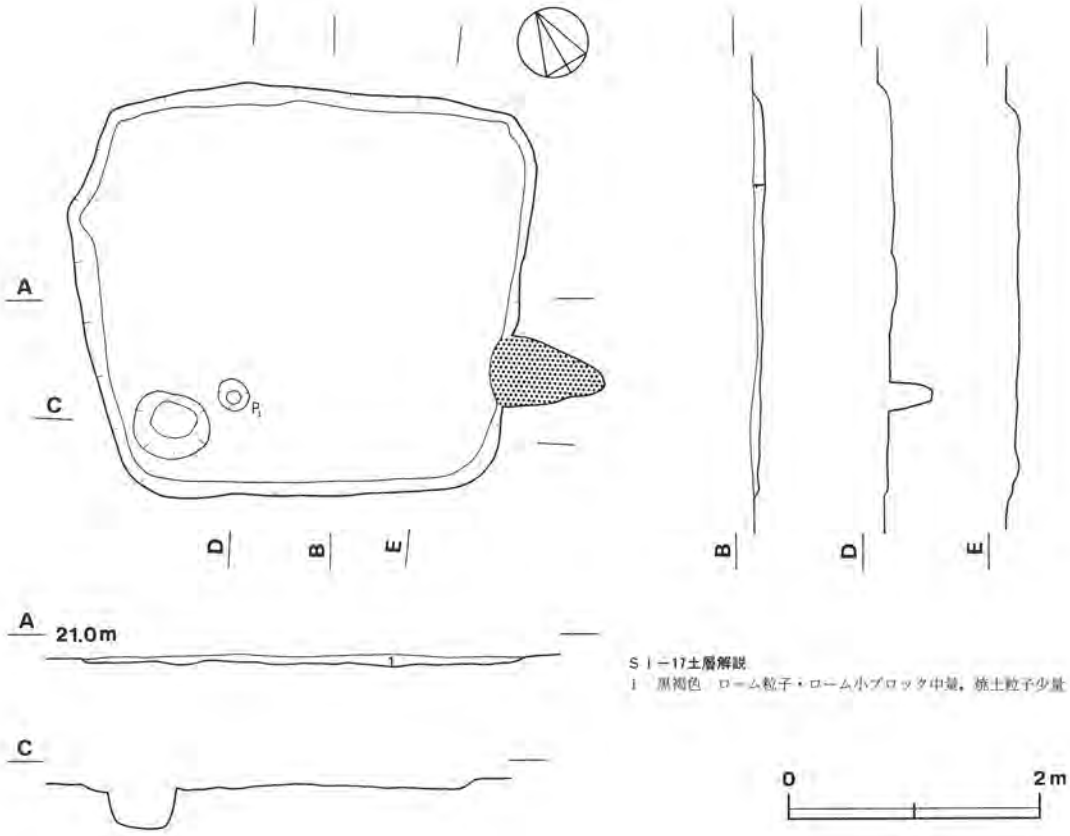


第51図　第16号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡（第52図）

位置　調査区の西部，B2e_7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.72m，短軸3.30mの長方形を呈している。



S I－17土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量

S I－17竈土層解説
1　黒 褐 色　焼土粒子・焼土小ブロック中量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
3　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物少量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化物中量
5　暗赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量，
6　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

第52図　第17号住居跡実測図

主軸方向　N－132°－E

壁　壁高は，4～10cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　平坦であり，全体的に良く踏み固められ，堅緻である。

ピット　1か所（P_1）検出されている。P_1の平面形は，径25cmの円形を呈し，深さ34cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴　西コーナーに付設されている。長径60cm，短径52cmの隅丸長方形を呈し，断面形は逆台形状で，30cm程掘り込まれている。

竈　南東壁南部に付設され，規模は長さ94cm，幅57cmを測る。壁を74cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を10cm程掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から緩やかに立ち上がっている。

覆土　撹乱を受け，覆土も浅いため堆積状況は不明である。

遺物　土師器片7点（甕片，坏片，高台付坏片），土製品1点（球状土錘）が，覆土上層及び竈燃焼部覆土中層から出土している。90の高台付坏は南コーナー付近の覆土上層から，91の高台付皿は竈燃焼部覆土中層から，それぞれ出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
89	甕 土師器	B(12.7) C〔11.0〕	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面下位に縦位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P54　20% 南コーナー付近 覆土上層
90	高台付坏 土師器	A〔14.0〕 B(5.6)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P55　30% 南コーナー付近 覆土上層
91	高台付皿 土師器	B(1.9) D〔 6.8〕 E　0.7	平底。底部には「ハ」の字状に開く低い貼り付け高台が付く。体部は直線的に外傾する。	底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P56　40% 竈燃焼部 覆土中層

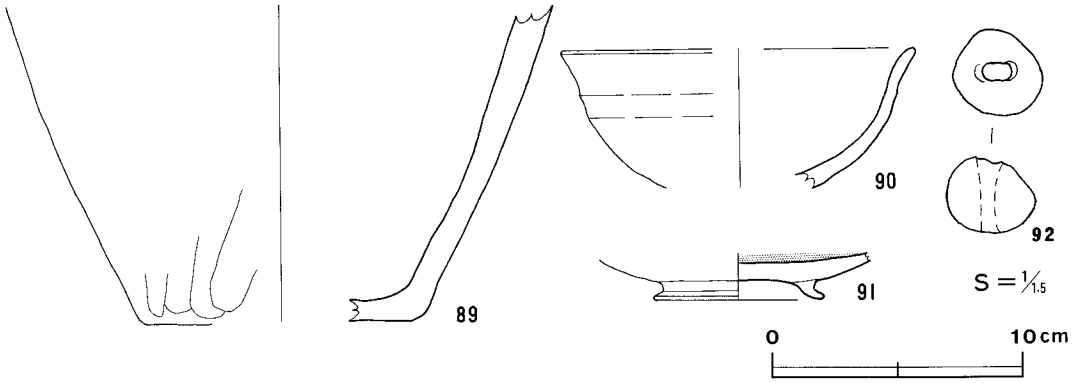
遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
92	球状土錘	1.7	1.5	0.6	3.1	東コーナー付近　覆土下層	DP34　100%

第18号住居跡（第54図）

位置　調査区の西部，$A2i_8$区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸4.00m，短軸3.60mの長方形を呈している。

主軸方向　N－57°－E



第53図　第17号住居跡出土遺物実測図

壁　壁高は，12～18cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　北東壁を除き，壁下に検出され，上幅４～８cmを測り，深さは４～８cm程で，断面形はU字状を呈している。

床　やや凹凸状を呈しているが，全体的に良く踏み固められ，堅緻である。

ピット　６か所（P_1～P_6）検出されている。P_1，P_2の平面形は，径20～26cmの円形を呈し，深さ14cm程を測り，規模や配置から補助柱穴と考えられる。P_3，P_4の平面形は，長径28～50cm，短径28～32cmの楕円形を呈し，深さ16～18cmを測り，規模や配置から主柱穴と考えられる。P_5の平面形は，径20cm程の円形を呈し，深さ８cmを測り，規模や配置から出入口施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_6の平面形は，径28～32cmの円形を呈し，深さ18cmを測るが，性格は不明である。

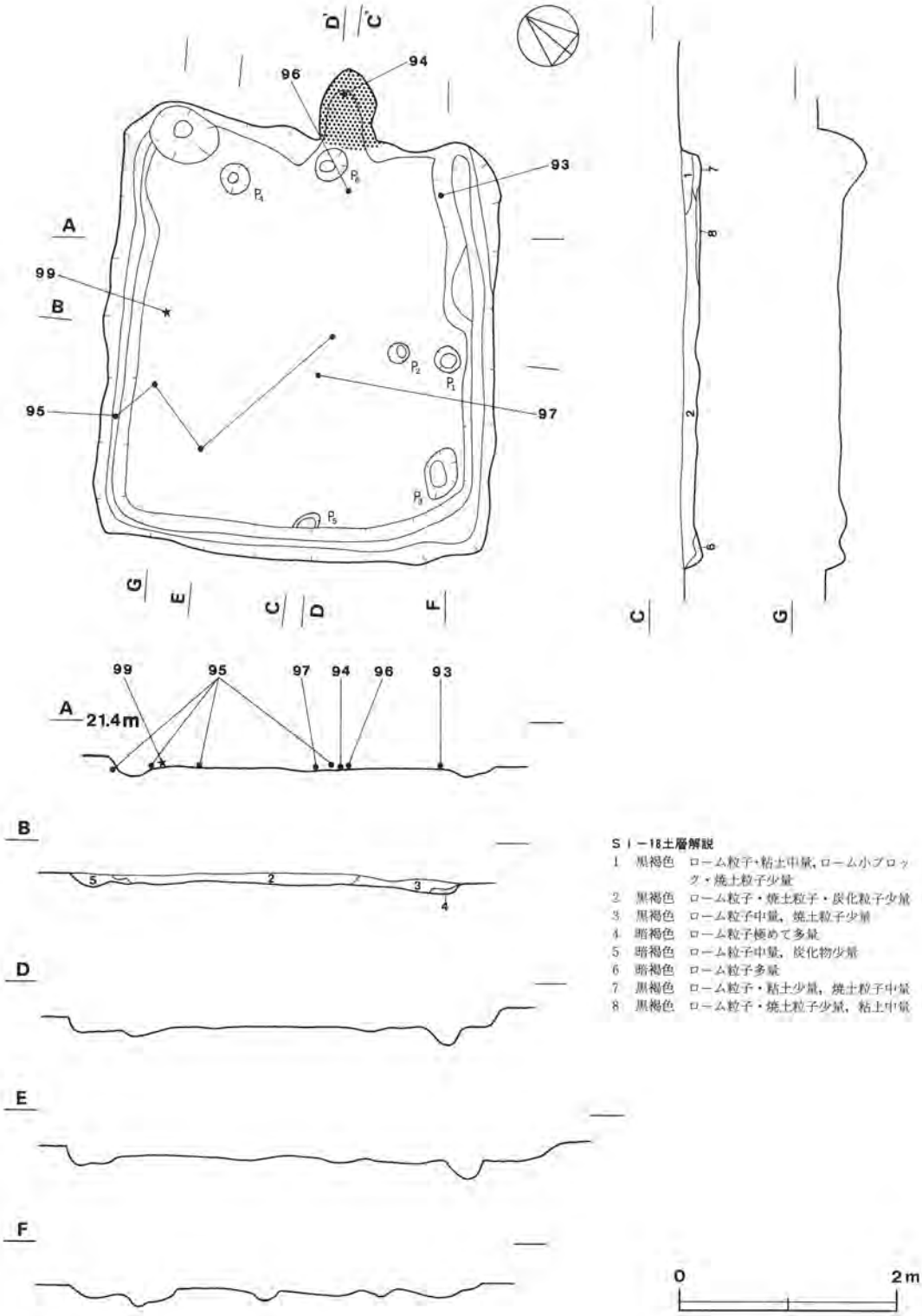
貯蔵穴　北コーナーに付設されている。長径60cm，短径48cmの楕円形を呈し，断面形はU字状で，43cm程掘り込まれている。

竈　北東壁中央部に付設され，規模は長さ119cm，幅56cmを測る。壁を66cm程壁外へ掘り込み，砂や粘土で構築されている。火床は，床面を僅かに掘り窪め，火熱を受けた部分は赤変硬化している。煙道は，火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片154点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片８点(甕片)，土製品１点(球状土錘)，鉄製品４点（鎌，刀子等）が，住居跡全域の覆土中・下層から点在して出土している。竈燃焼部覆土下層からは，土師器17点（甕片，坏片）が出土している。94の小形甕は，竈燃焼部から逆位の状態で，95の小形甕は，西部覆土下層から横位の状態で，それぞれ出土している。99の鉄製品は，北西部覆土中層から出土している。

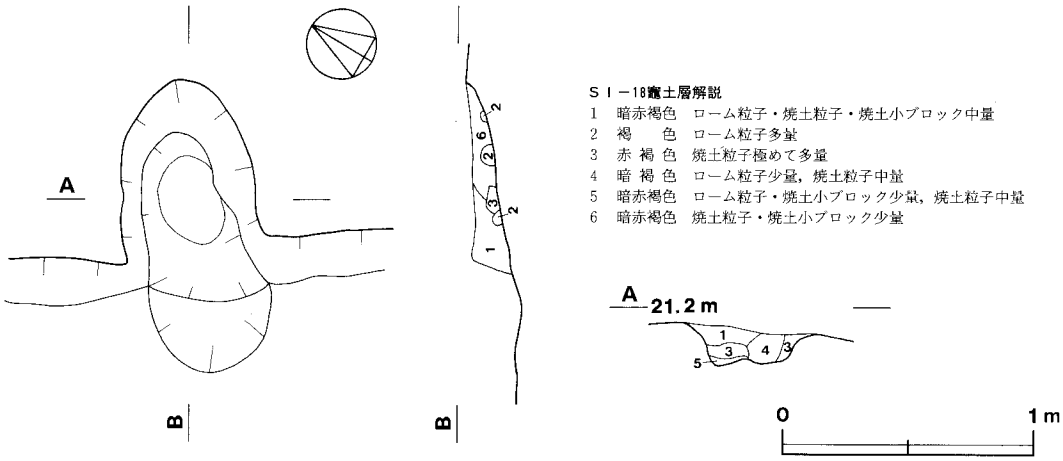
所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から平安時代中期の住居跡と考えられる。



S I－18土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・粘土中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
4　暗褐色　ローム粒子極めて多量
5　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物少量
6　暗褐色　ローム粒子多量
7　黒褐色　ローム粒子・粘土少量，焼土粒子中量
8　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，粘土中量

第54図　第18号住居跡実測・遺物出土位置図



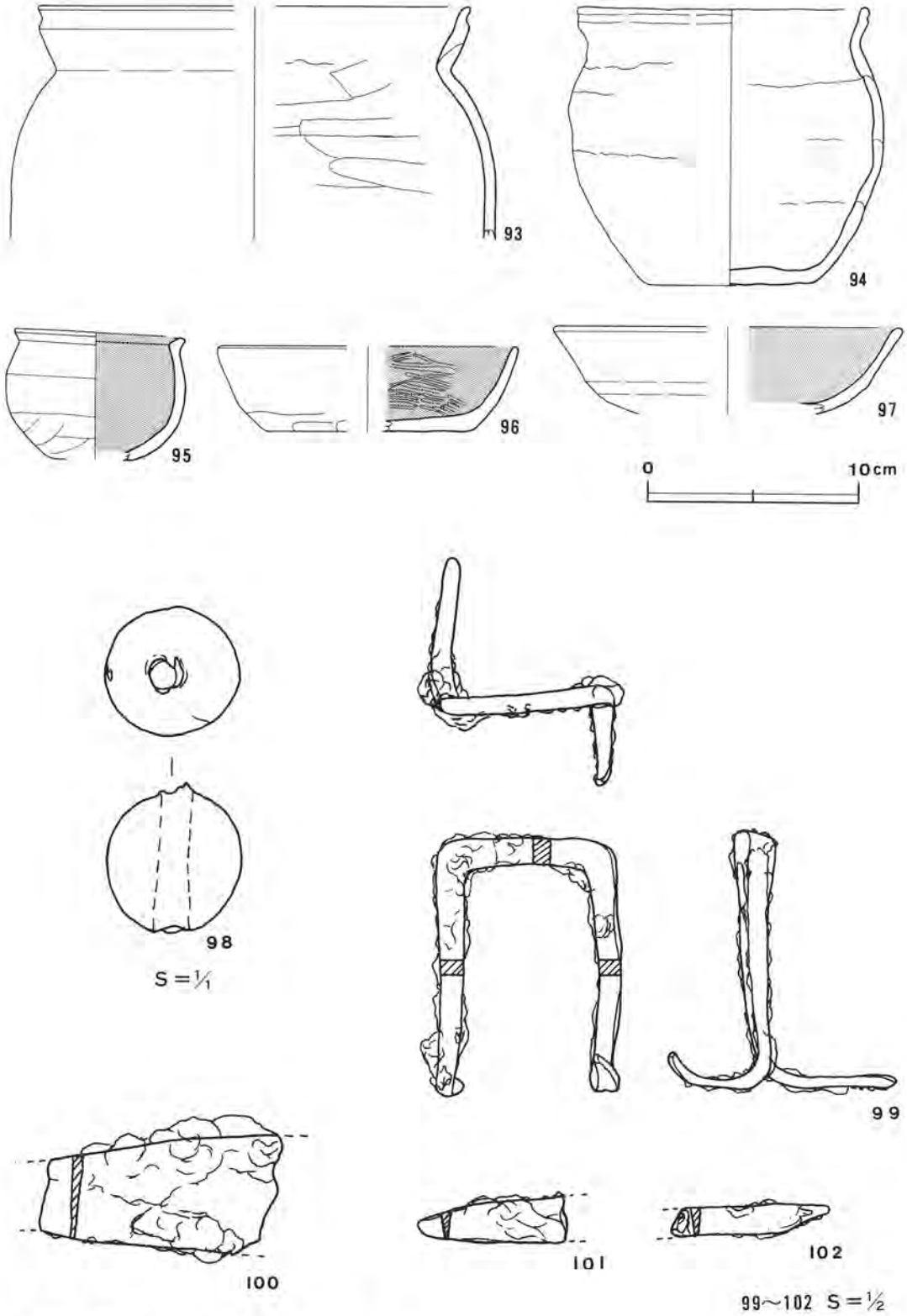
第55図　第18号住居跡竈実測図

第18号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
93	甕 土師器	A〔20.4〕 B(11.1)	胴下半部欠損。頸部はくびれ，口縁部は外傾する。口唇部を外上方へつまみ出す。	胴部外面剝離のため調整不明，内面横位のヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P57　20% 北東コーナー付近 覆土下層
94	甕 土師器	A 13.5 B 13.3 C 8.1	平底。胴部は内彎して立ち上がり中位に最大径をもつ。口縁部は僅かに外反し，外面に沈線を施す。	胴部外面下位斜位のヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 不良	P59　85% 竈燃焼部 覆土下層
95	甕 土師器	A 7.9 B 6.2 C 4.1	底部一部欠損。平底。胴部は球体をなし，中位に最大径をもつ。口縁部は短く外傾する。	胴部下位手持ちヘラ削り。 胴部外面横ナデ，内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P58　70% 西部 覆土下層
96	坏 土師器	A〔14.0〕 B 4.0 C〔 9.8〕	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・パミス・雲母 にぶい褐色 普通	P60　50% 竈前方 覆土下層
97	高台付坏 土師器	A〔16.2〕 B(4.1)	底部欠損。体部は内彎し，口縁部は僅かに外傾する。	体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P61　20% 中央部 覆土下層

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
98	球状土錘	2.1	2.2	0.6	7.1	覆土	DP35　100%

遺物番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
99	不明鉄製品	(8.5)	(5.8)	0.7	(38.0)	北西部　覆土中層　M 5
100	鎌	(6.2)	(3.6)	1.2	(41.6)	東　部　覆土中層　M 6
101	刀子	(3.9)	(1.5)	0.7	(7.2)	南　部　覆土中層　M 7 A
102	刀子	(4.9)	(1.2)	0.7	(4.5)	南　部　覆土中層　M 7 B



第56図　第18号住居跡出土遺物実測図

表 4　岡ノ内遺跡竪穴住居跡一覧表

住居番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高(cm)	床面	柱穴数	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
1	$C5d_7$	N- 7°-E	方形	2.84 × 2.68	15	凹凸	0	北壁中央部	自然	土師器片40点(甕片，坏片)，須恵器片4点(甕片)，灰釉陶器1点	
2	$C5e_7$	N- 33°-E	長方形	3.82 × 3.32	8～18	凹凸	0	北東壁中央部	人為	土師器片31点(甕片，坏片)，鉄製品1点	
3	$C5g_8$	〔N- 23°-E〕	(方形)	(3.50)×(3.36)	5	平坦	0	北東壁中央部	人為	土師器片22点(甕片，坏片)	SK2と重複
4	$C5b_6$	N- 90°-E	(方形)	3.30 × 3.08	12～20	凹凸	0	東壁中央部	自然	土師器片60点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片1点(甕片)	SK8，SD1と重複
5	$B4i_0$	N-115°-E	長方形	4.50 × 3.70	8～18	平坦	0	南東壁中央部	自然	土師器片98点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片1点(甕片)，土製品2点	
6	$C4a_7$	〔N- 76°-E〕	(長方形)	(5.90)×(4.20)	2～4	凹凸	0	東壁中央部	自然	土師器片9点(甕片，坏片)	SK17と重複
7	$B3e_0$	N- 44°-W	方形	2.42 × 2.36	18～38	平坦	2	炉	自然	土師器片24点(甕片，坏片，高台付坏片)，鉄滓10点	(工房跡)
8	$B3i_9$	〔N- 2°-E〕	(不整形)	(4.36)×(3.56)	8～12	凹凸	0	北壁中央部	自然	土師器片6点(甕片，坏片)，土製品4点	SK26と重複
9	$B3g_6$	〔N-113°-E〕				平坦			不明	土師器片12点(甕片，坏片)	
10	$B3e_7$	〔N- 20°-E〕	(方形)	(3.32)×(3.00)	6～8	平坦	1	北東壁中央部	自然	土師器片33点(甕片，坏片，高台付坏片)，土製品4点	
11	$B4f_2$	〔N- 28°-E〕							不明	土師器片18点(甕片，坏片，高台付坏片)	
12A	$B3c_5$	N- 30°-E	方形	3.60 × 3.30	8～18	平坦	0	北東壁中央部	人為	土師器片137点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片1点(坏片)，土製品18点	SI12B，SK41・72と重複
12B	$B3c_5$	N- 12°-E	方形	4.20 ×(3.50)	6～8	平坦	0	北壁中央部	人為	土師器片26点(甕片，坏片)，鉄製品1点	SI12A，SK41・72と重複
13	$B3e_4$	N-108°-E	長方形	3.60 × 3.18	4～12	平坦	2	東壁中央部	人為	土師器片50点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片4点(甕片)，土製品2点	
14	$B3g_2$	N- 28°-E	方形	4.56 × 4.36	10～22	平坦	2	北東壁中央部	人為	土師器片102点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片3点(甕片)，土製品1点	SK73と重複
15	$B3f_2$	N- 31°-E	方形	3.40 × 3.12	14～32	平坦	1	北東壁中央部	人為	土師器片125点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片2点(甕片)，その他3点	刻書の土製紡錘車
16	$B2e_0$	N- 16°-E	長方形	4.42 × 3.90	4～8	平坦	1	北壁中央部	不明	土師器片30点(甕片，坏片)，須恵器片2点(甕片)	SK42・43・56と重複
17	$B2e_7$	N-132°-E	長方形	3.72 × 3.30	4～10	平坦	1	南東壁南部	不明	土師器片7点(甕片，坏片，高台付坏片)，土製品1点	
18	$A2i_8$	N- 57°-E	長方形	4.00 × 3.60	12～18	凹凸	6	北東壁中央部	人為	土師器片154点(甕片，坏片，高台付坏片)，須恵器片8点(甕片)，その他5点	

2　土坑

当調査区からは，76基の土坑が検出されている。形状や規模にはそれぞれ差異が認められるものの，一部を除いては出土遺物が少なく，時期や性格について不明のものが多い。ここでは，土坑のうち形状や規模，覆土の状態や出土遺物に特徴がある12基の土坑について個々に解説を加え，その他については一覧表にした。

第12号土坑（第57図）

位置　調査区の東部，$C5h_6$区に確認されている。

規模と平面形　長径2.20m，短径2.04mの隅丸方形を呈し，深さは1.08mである。

長径方向　N－70°－E

壁面　やや外傾して立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　縄文式土器２点，磨製石斧１点，土師器片22点（甕片），土製品１点（球状土錘）が，覆土から出土している。148の磨製石斧は，南西部の覆土中層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から，縄文時代前期の陥し穴と思われるが，詳細については不明である。

第20号土坑（第59図）

位置　調査区の中央部，B4e_2区に確認されている。

規模と平面形　長径1.62m，短径0.90mの楕円形を呈し，深さは0.28mである。

長径方向　N－85°－E

壁面　外傾して立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，締まりは普通である。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片17点（甕片，坏片，高台付坏片）が，覆土から出土している。底面から人骨片が出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から，墓壙と思われるが，時期については不明である。

第26号土坑（第60図）

位置　調査区の中央部，B3h_8区に確認されている。

重複関係　第８号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形　長径1.46m，短径1.36mの方形を呈し，深さは0.50mである。

長径方向　N－12°－E

壁面　外傾して立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片50点が，覆土から出土している。104の坏は，中央部覆土中層から正位の状態で出土している。

所見　本跡は，重複関係から第８号住居跡よりも新しい時期に構築されており，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第41号土坑（第62図）

位置　調査区の中央部，B3c_5区に確認されている。

重複関係　第12－A・B号住居跡の南部床面を掘り込んでいる。

規模と平面形　径1.26mの円形を呈し，深さは0.26mである。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。底面に，焼土が検出されている。

覆土　自然堆積と思われる。

遺物　土師器片28点（甕片，坏片，高台付坏片）が，主に覆土下層から出土している。南東壁際覆土下層からは，炭化材が検出されている。107の内面黒色処理した高台付坏は北部覆土下層から，108の坏は中央部覆土下層から，それぞれ出土している。

所見　本跡は，重複関係から第12－A号住居跡よりも新しい時期に構築されており，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第45－A号土坑（第63図）

位置　調査区の西部，B2d_0区に確認されている。

規模と平面形　長径1.16m，短径0.90mの楕円形を呈し，深さは0.68mである。

長径方向　N－57°－E

壁面　垂直に立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器１点（足高高台付坏），土師器片40点（甕片，坏片，高台付坏片）が，覆土から出土している。109の足高高台付坏は，南部覆土上層から出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第46－A号土坑（第63図）

位置　調査区の西部，B2d_0区に確認されている。

重複関係　南東部を第46－B号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　径1.26m程の円形を呈し，深さは0.46mである。

壁面　垂直に立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片31点（甕片，坏片，高台付坏片）が，覆土下層及び底面から出土している。116の甕は，中央部覆土下層から出土している。

所見　本跡は，重複関係から第46－B号土坑よりも古い時期に構築されており，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第46－B号土坑（第63図）

位置　調査区の西部，B2d_0区に確認されている。

重複関係　北西部が第46－A号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　径1.60m程の円形を呈し，深さは0.82mである。

壁面　やや内傾して立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み,人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片71点（甕片，坏片，高台付坏片）が，覆土から出土している。114の内面黒色処理した高台付坏は，北部覆土下層から出土している。111の土師質土器の皿片，112の坏片，115の高台付坏片は，第45－B号土坑出土の破片と接合している。

所見　本跡は,重複関係から第46－A号土坑よりも新しい時期に構築されており,出土遺物等から,平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第48号土坑（第63図）

位置　調査区の西部，B2c_9区に確認されている。

規模と平面形　径1.30m程の円形を呈し，深さは0.48mである。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み,人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片９点（坏片，高台付坏片）が，覆土から出土している。118の高台付坏は，西部壁際覆土上層から逆位の状態で出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第53号土坑（第63図）

位置　調査区の西部，A2i_7区に確認されている。

規模と平面形　径1.44mの円形を呈し，深さは0.62mである。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。西部底面に焼土が検出されている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み,人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片７点（甕片，坏片）が，主に覆土上層及び中層から出土している。124，125の置き竈片は，西部覆土上層から中層にかけて出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第54号土坑（第63図）

位置　調査区の西部，B2d_9区に確認されている。

規模と平面形　長径1.78m，短径1.66mのほぼ円形を呈し，深さは0.58mである。

長径方向　N－4°－W

壁面　外傾して立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的に平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み,人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片22点（甕片，坏片）が，覆土から出土している。120の坏と，121の土師質土器の皿は，北部覆土上層から出土している。

所見　本跡は，出土遺物等から，平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。

第64号土坑（第64図）

位置　調査区の西部，A2h_4区に確認されている。

規模と平面形　長径1.30m，短径1.06mの楕円形を呈し，深さは0.36mである。

長径方向　N－19°－E

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　ローム面が平坦であり，硬く締まっている。

覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　南東部底面から人骨片が出土している。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物等から，墓壙と思われるが，時期については不明である。

第67号土坑（第65図）

位置　調査区の西部，B2a_0区に確認されている。

規模と平面形　径1.04m程の円形を呈し，深さは0.24mである。

長径方向　N－28°－E

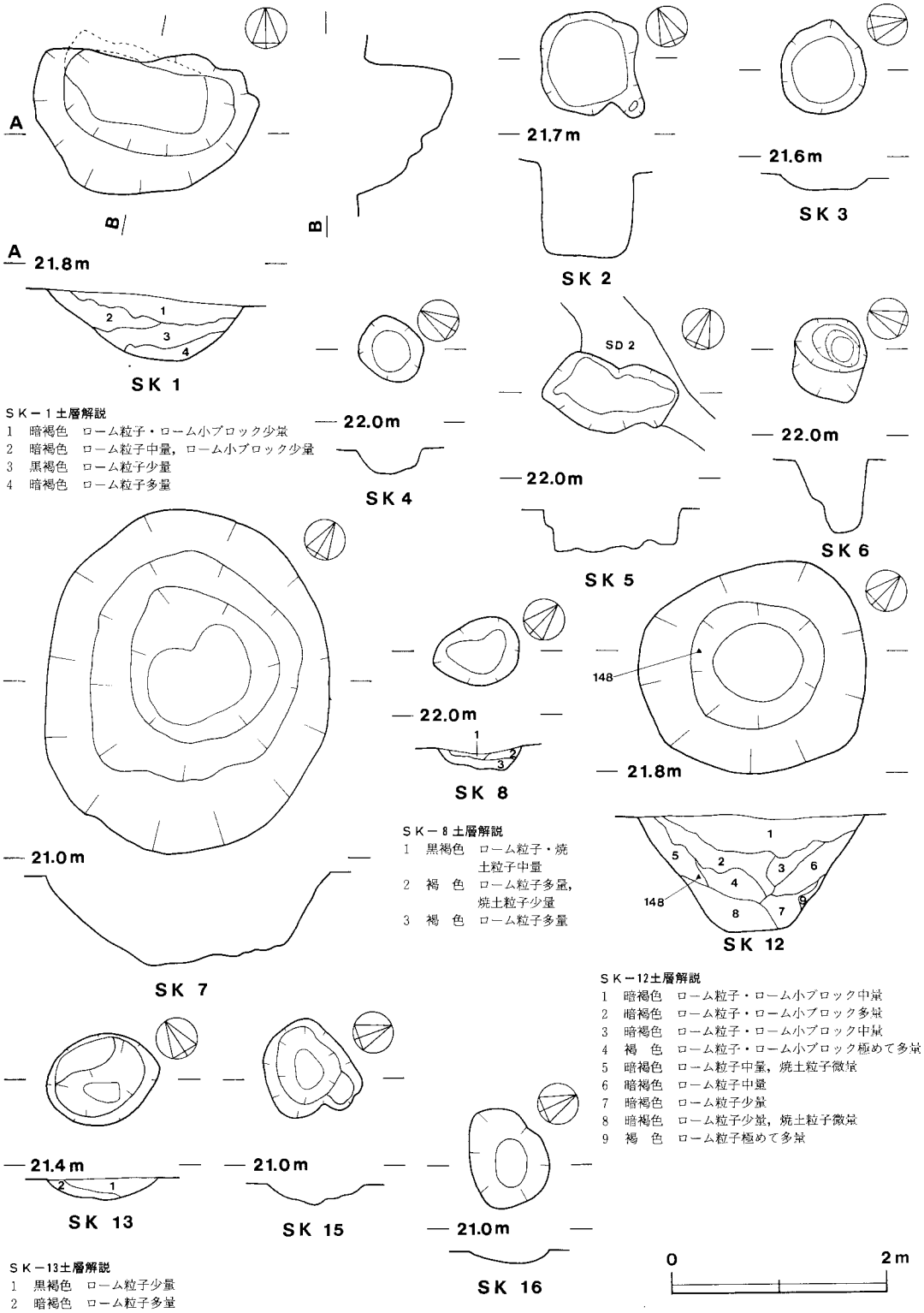
壁面　外傾して立ち上がり，ロームで硬く締まっている。

底面　全体的にほぼ平坦であり，硬く締まっている。

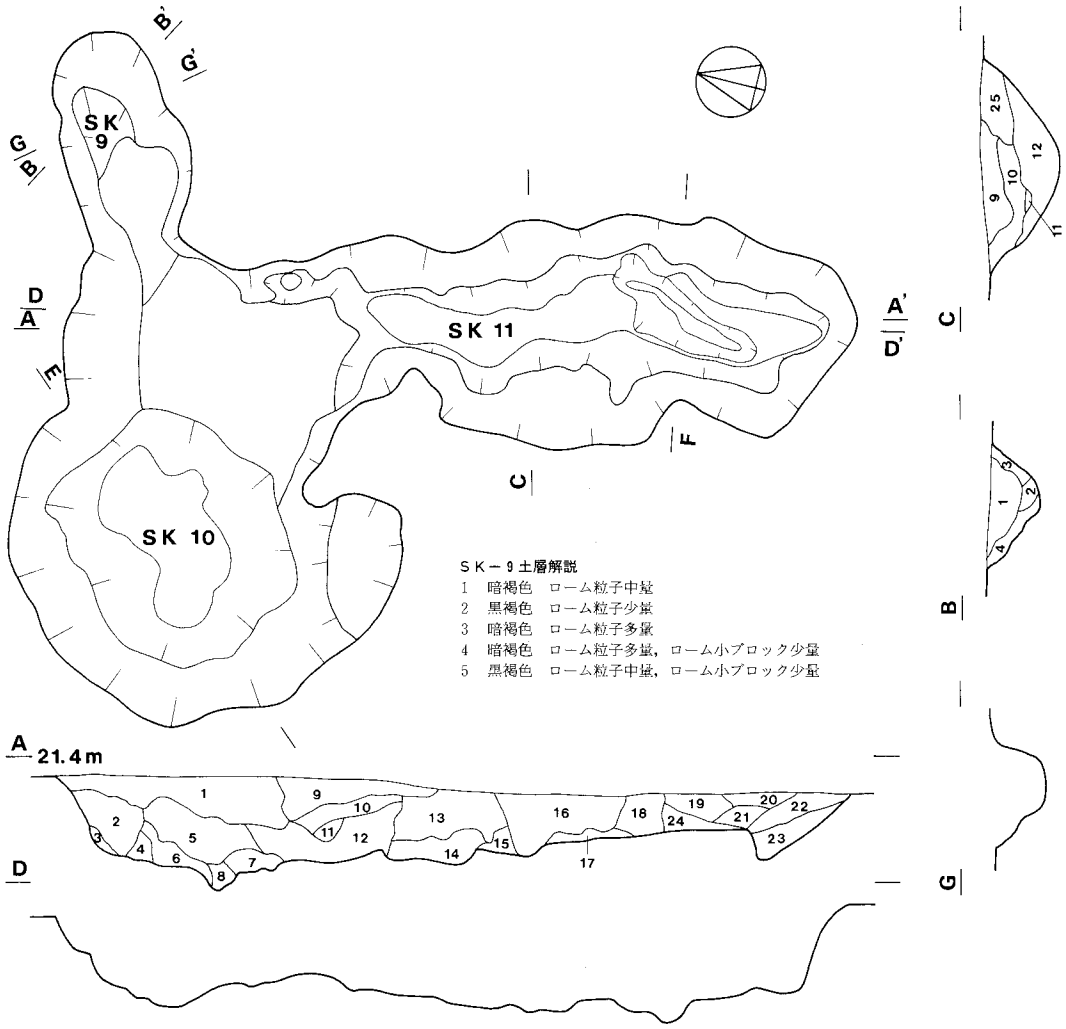
覆土　全体にローム小ブロックを多量に含み，人為堆積の状況を示している。

遺物　土師器片15点（甕片，甑片，坏片），土製品１点（球状土錘）が，主に北部覆土中層から出土している。123の内面に黒色処理を施された坏は，北部覆土下層から出土している。

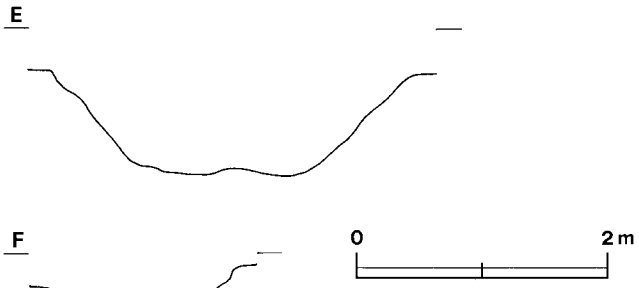
所見　本跡は，出土遺物等から平安時代の土坑と考えられるが，性格については不明である。


A
B
A 21.8m
SK 1
SK－1土層解説
1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3 黒褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ローム粒子多量
21.7m
SK 2
21.6m
SK 3
22.0m
SK 4
SD 2
22.0m
SK 5
22.0m
SK 6
21.0m
SK 7
22.0m
SK 8
SK－8土層解説
1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
2 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子少量
3 褐 色 ローム粒子多量
148
21.8m
SK 12
SK－12土層解説
1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
4 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック極めて多量
5 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
6 暗褐色 ローム粒子中量
7 暗褐色 ローム粒子少量
8 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
9 褐 色 ローム粒子極めて多量
21.4m
SK 13
SK－13土層解説
1 黒褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子多量
21.0m
SK 15
21.0m
SK 16
0
2m

第57図　土坑実測図(1)

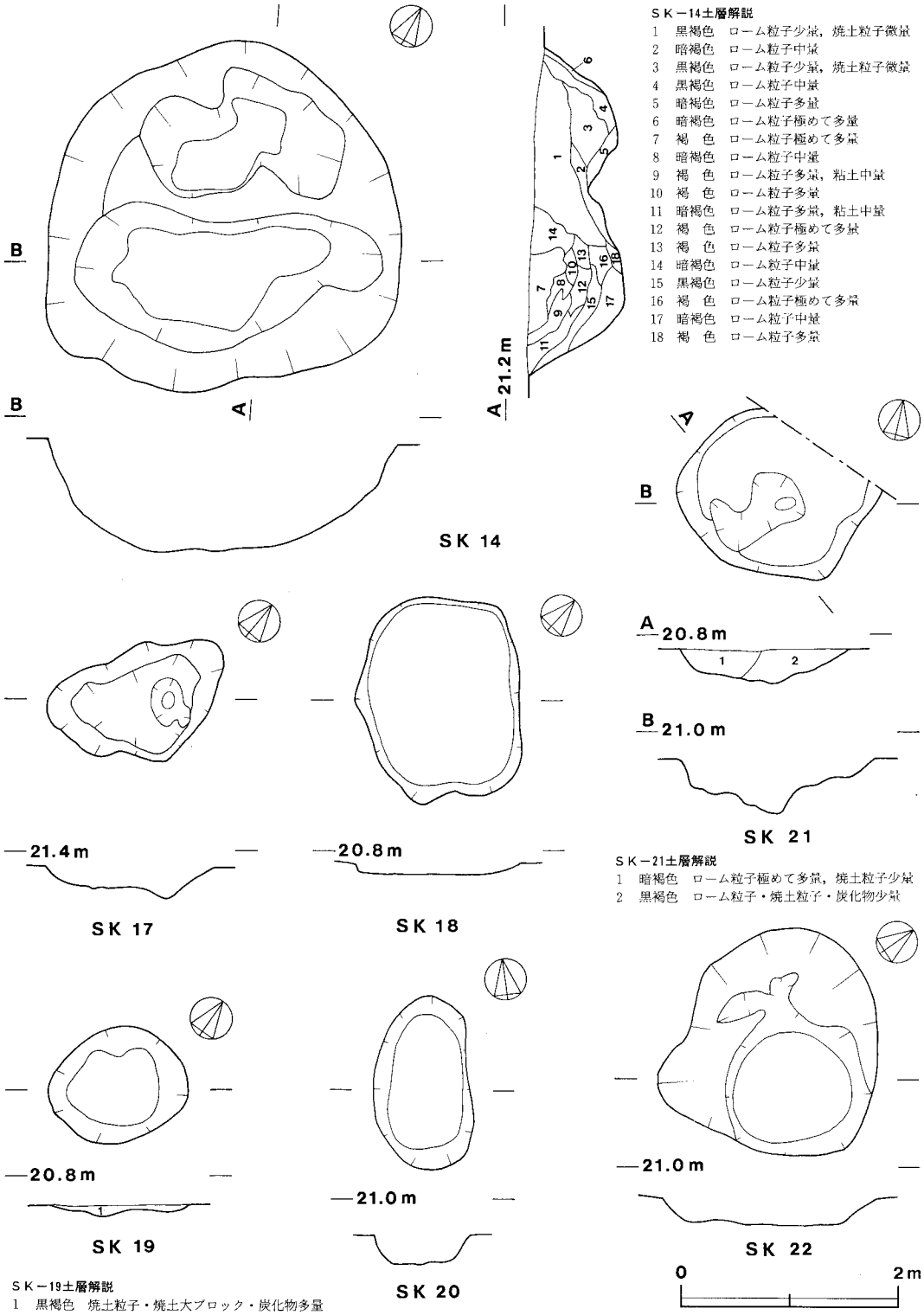


SK－9土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量
2　黒褐色　ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子多量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

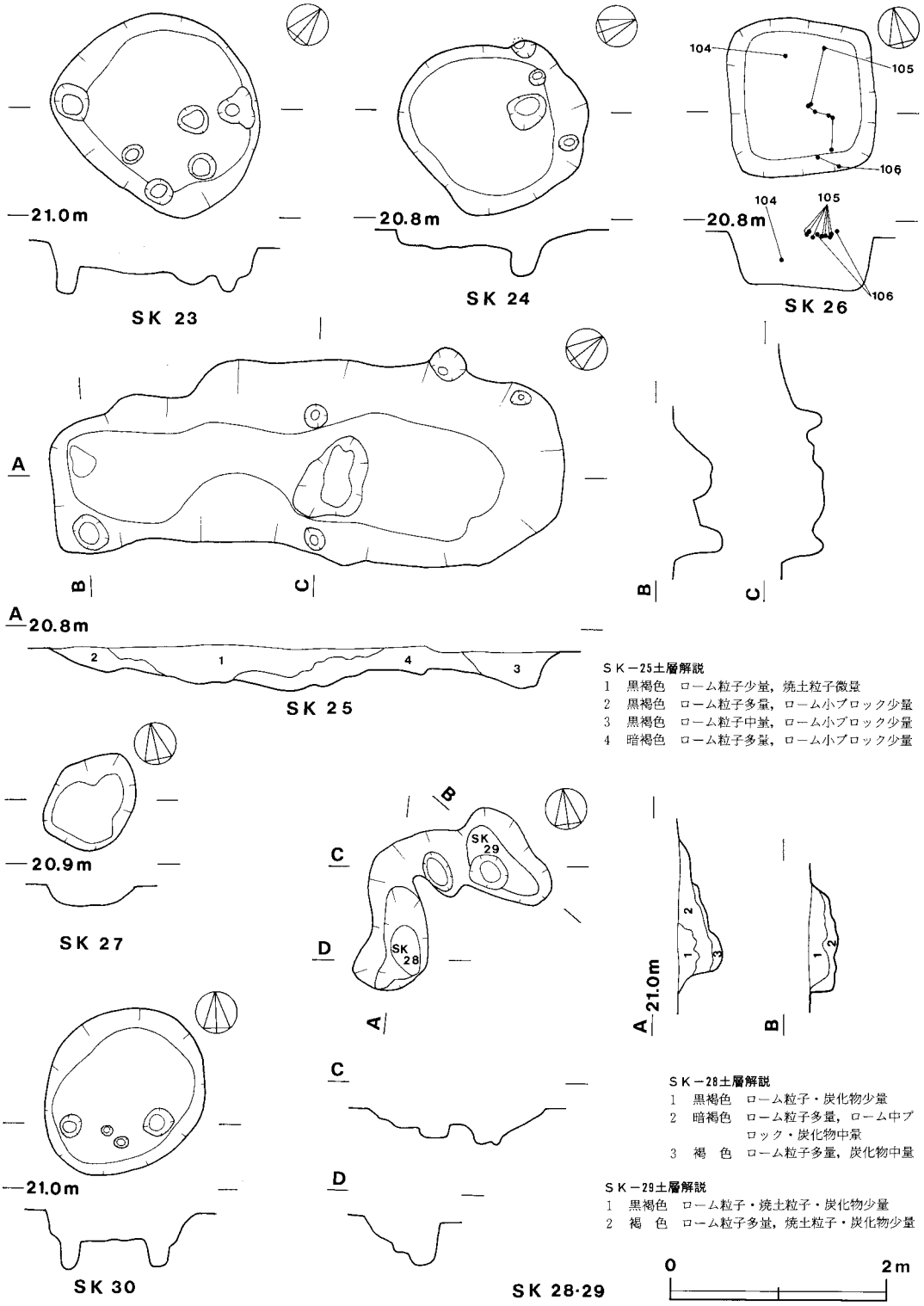


SK－11土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子多量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　黒褐色　ローム粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子少量
7　暗褐色　ローム粒子中量
8　黒褐色　ローム粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
10　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
11　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物中量
12　黒褐色　ローム粒子少量
13　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
14　黒褐色　ローム粒子微量
15　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
16　黒褐色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
17　褐　色　ローム粒子極めて多量
18　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
19　褐　色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子微量
20　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
21　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
22　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
23　黒褐色　ローム粒子少量
24　暗褐色　ローム粒子多量
25　黒褐色　ローム粒子少量

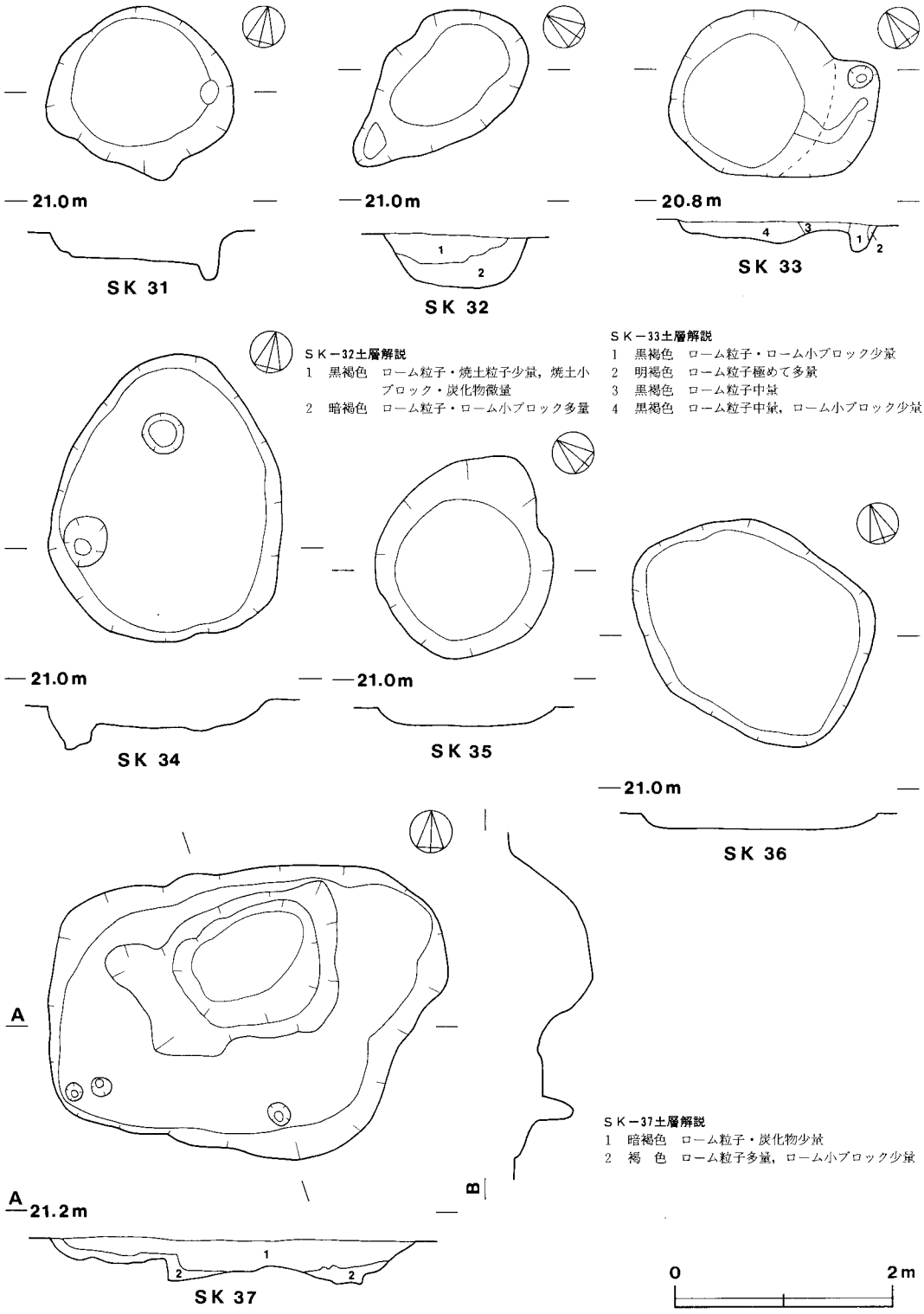
第58図　土坑実測図(2)


SK－14土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子中量
3　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　黒褐色　ローム粒子中量
5　暗褐色　ローム粒子多量
6　暗褐色　ローム粒子極めて多量
7　褐　色　ローム粒子極めて多量
8　暗褐色　ローム粒子中量
9　褐　色　ローム粒子多量，粘土中量
10　褐　色　ローム粒子多量
11　暗褐色　ローム粒子多量，粘土中量
12　褐　色　ローム粒子極めて多量
13　褐　色　ローム粒子多量
14　暗褐色　ローム粒子中量
15　黒褐色　ローム粒子少量
16　褐　色　ローム粒子極めて多量
17　暗褐色　ローム粒子中量
18　褐　色　ローム粒子多量
A 21.2m
SK 14
A 20.8m
B 21.0m
SK 21
SK－21土層解説
1　暗褐色　ローム粒子極めて多量，焼土粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
21.4m
SK 17
20.8m
SK 18
20.8m
SK 19
SK－19土層解説
1　黒褐色　焼土粒子・焼土大ブロック・炭化物多量
21.0m
SK 20
21.0m
SK 22
0
2m

第59図　土坑実測図(3)


21.0m
SK 23
20.8m
SK 24
104
105
106
20.8m
SK 26
A
B
C
A 20.8m
2
1
4
3
SK 25
SK－25土層解説
1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
20.9m
SK 27
SK 29
SK 28
D
A 21.0m
SK－28土層解説
1 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・炭化物中量
3 褐 色 ローム粒子多量，炭化物中量
SK－29土層解説
1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量
21.0m
SK 30
SK 28·29
0
2m

第60図　土坑実測図(4)

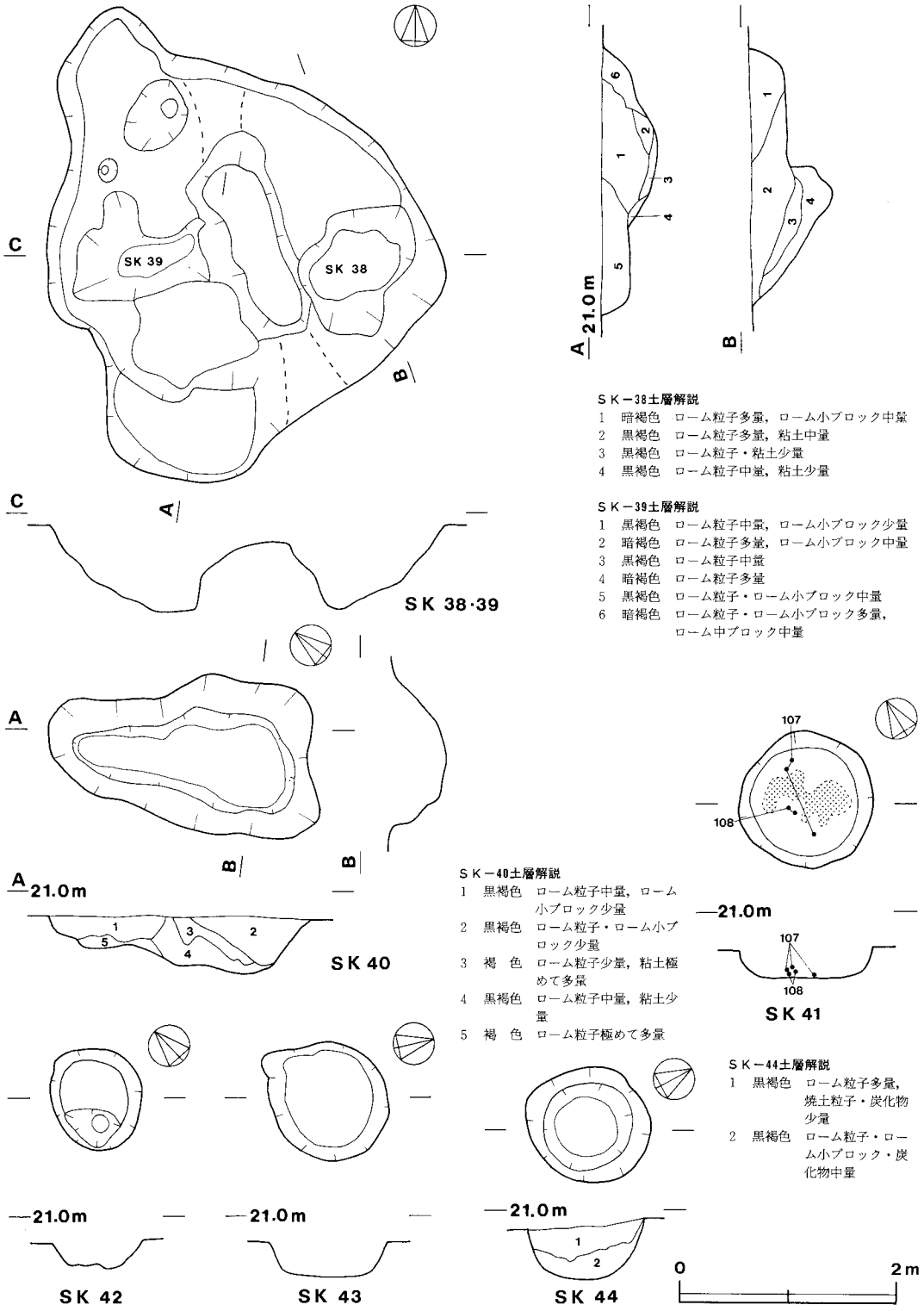


SK－32土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量

SK－33土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　明褐色　ローム粒子極めて多量
3　黒褐色　ローム粒子中量
4　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

SK－37土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

第61図　土坑実測図(5)



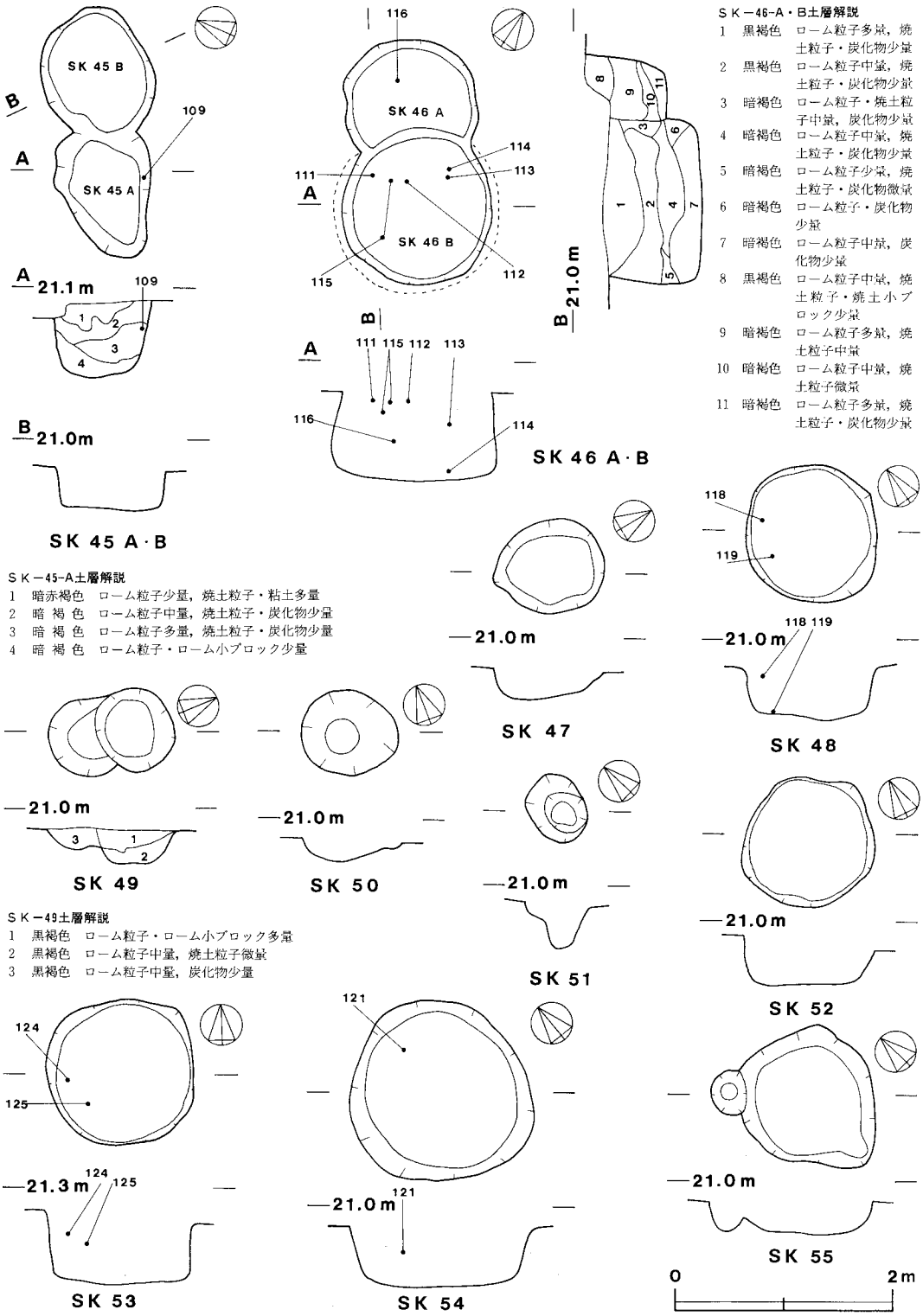
SK－38土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　黒褐色　ローム粒子多量，粘土中量
3　黒褐色　ローム粒子・粘土少量
4　黒褐色　ローム粒子中量，粘土少量

SK－39土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3　黒褐色　ローム粒子中量
4　暗褐色　ローム粒子多量
5　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
6　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量

SK－40土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子少量，粘土極めて多量
4　黒褐色　ローム粒子中量，粘土少量
5　褐　色　ローム粒子極めて多量

SK－44土層解説
1　黒褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物中量

第62図　土坑実測図(6)



SK－46-A・B土層解説

1 黒褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量
2 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物少量
4 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
5 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
6 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量
7 暗褐色 ローム粒子中量，炭化物少量
8 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・焼土小ブロック少量
9 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子中量
10 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
11 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量

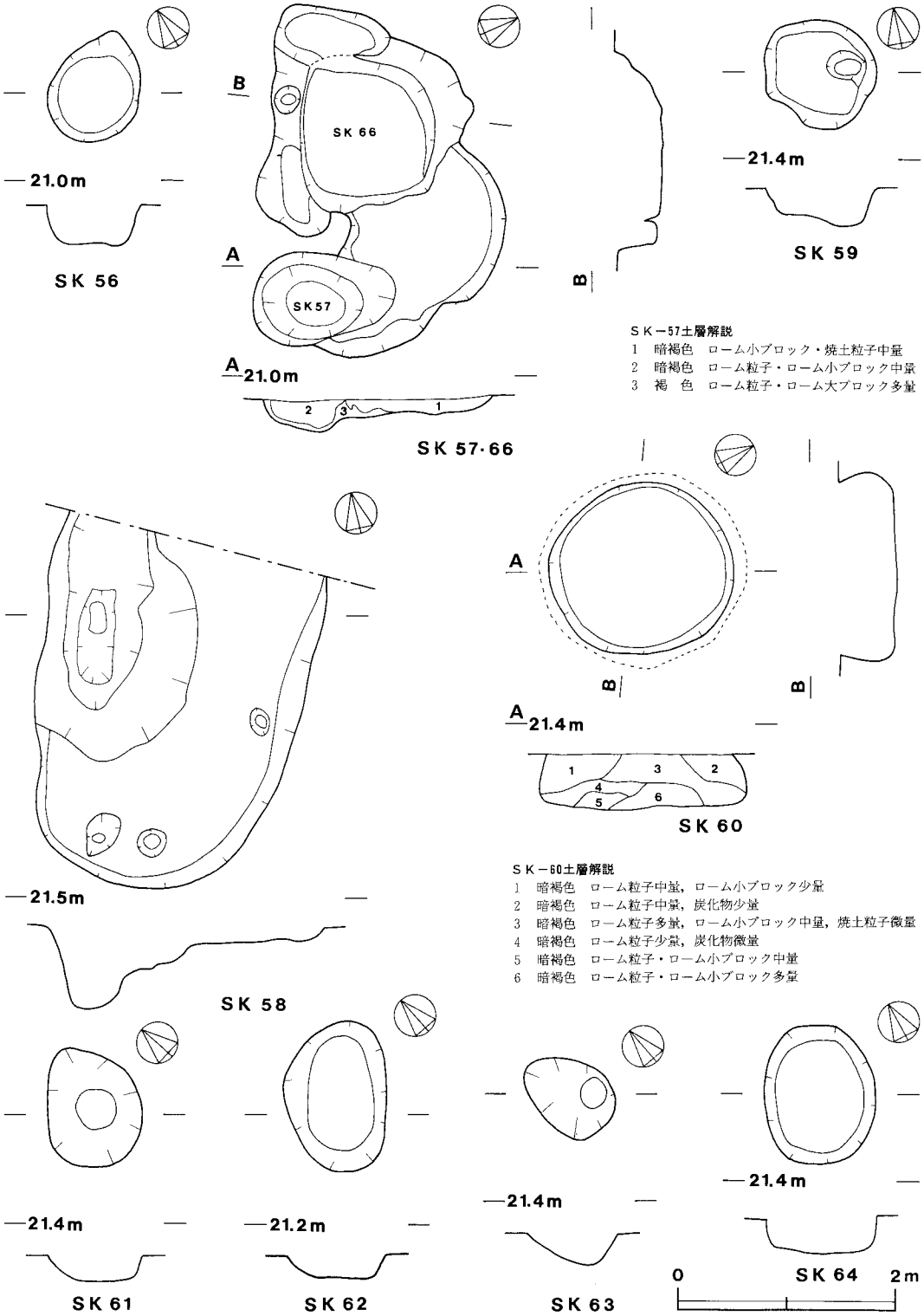
SK－45-A土層解説

1 暗赤褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・粘土多量
2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
3 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化物少量
4 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

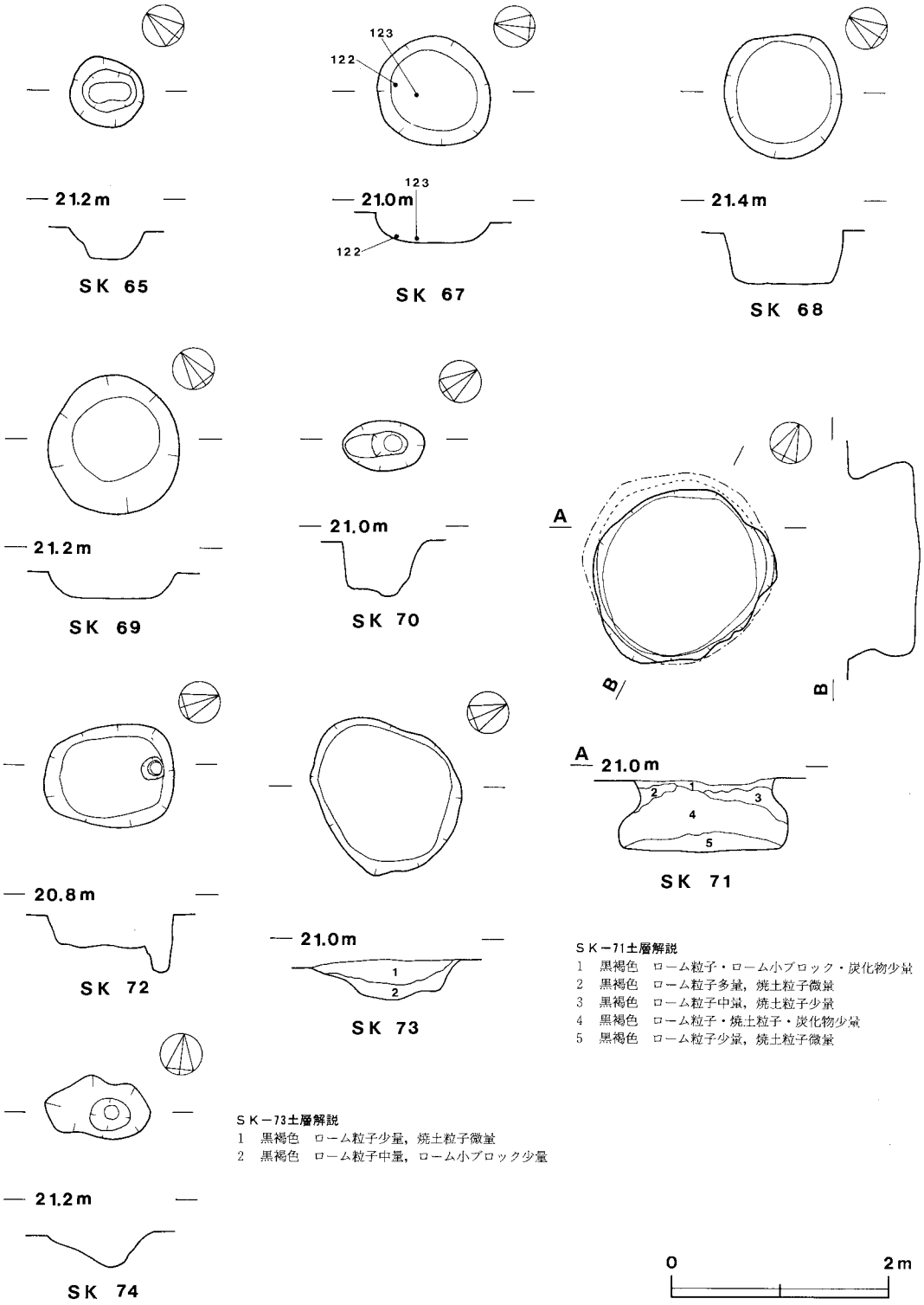
SK－49土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
2 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子中量，炭化物少量

第63図 土坑実測図(7)


21.0m
SK 56
B
SK 66
A
SK57
A 21.0m
2
3
1
SK 57·66
B
21.4m
SK 59
SK－57土層解説
1 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子中量
2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
3 褐 色 ローム粒子・ローム大ブロック多量
21.5m
SK 58
A
B
B
A 21.4m
1
3
2
4
5
6
SK 60
SK－60土層解説
1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量，炭化物少量
3 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子少量，炭化物微量
5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
6 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
21.4m
SK 61
21.2m
SK 62
21.4m
SK 63
21.4m
SK 64
0
2m

第64図 土坑実測図(8)



SK－71土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量
2　黒褐色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
5　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量

SK－73土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

第65図　土坑実測図(9)

第16号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
103	甕 土師器	A〔12.6〕 B(6.0)	胴下半部欠損。頸部はくびれ，口縁部は外反する。口縁部外面に沈線を施す。	胴部内・外面剝離のため調整不明。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P62 10% 中央部 覆土上層

第26号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
104	坏 土師器	A 13.7 B 4.3 C 6.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り後，手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P63 80% 中央部 覆土中層
105	坏 土師器	A 15.3 B 4.6 C 7.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。 口縁部に歪みがある。	底部及び体部下端手持ちヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P64 60% 東部 覆土上層
106	坏 土師器	A〔14.5〕 B(3.9)	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P65 20% 南部 覆土上層

第41号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
107	高台付坏 土師器	A 14.5 B (3.7)	平底。高台剝離。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P67 60% 北部 覆土下層
108	坏 土師器	A〔12.5〕 B 3.6 C 6.3	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P68 55% 中央部 覆土下層

第45－A号土坑出土遺物観察表

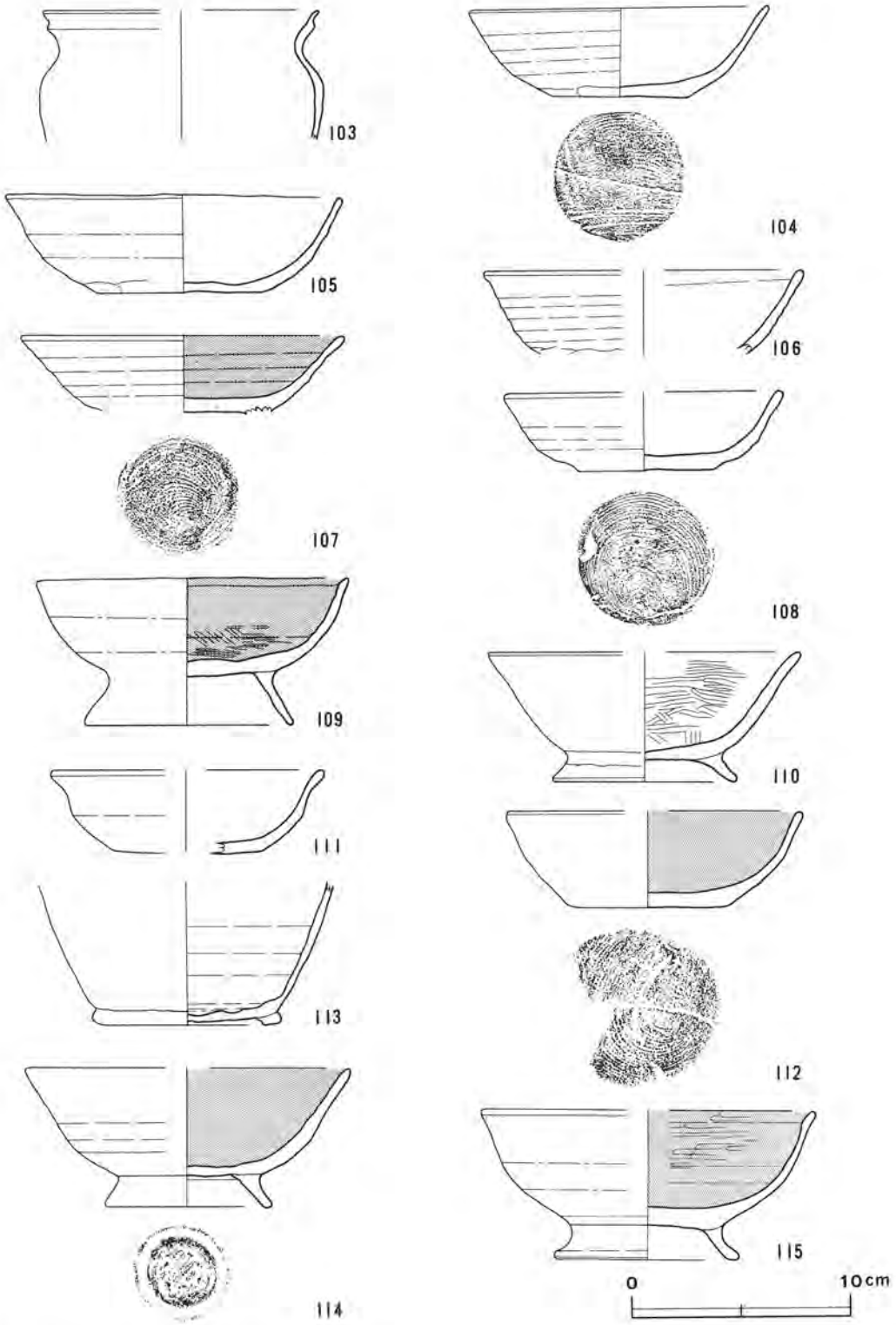
遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
109	高台付坏 土師器	A 13.9 B 6.7 D 9.5 E 2.5	平底。底部には「ハ」の字状に開く足高の貼り付け高台が付く。 体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラナデ。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P69 80% 南部 覆土上層

第45－B号土坑出土遺物観察表

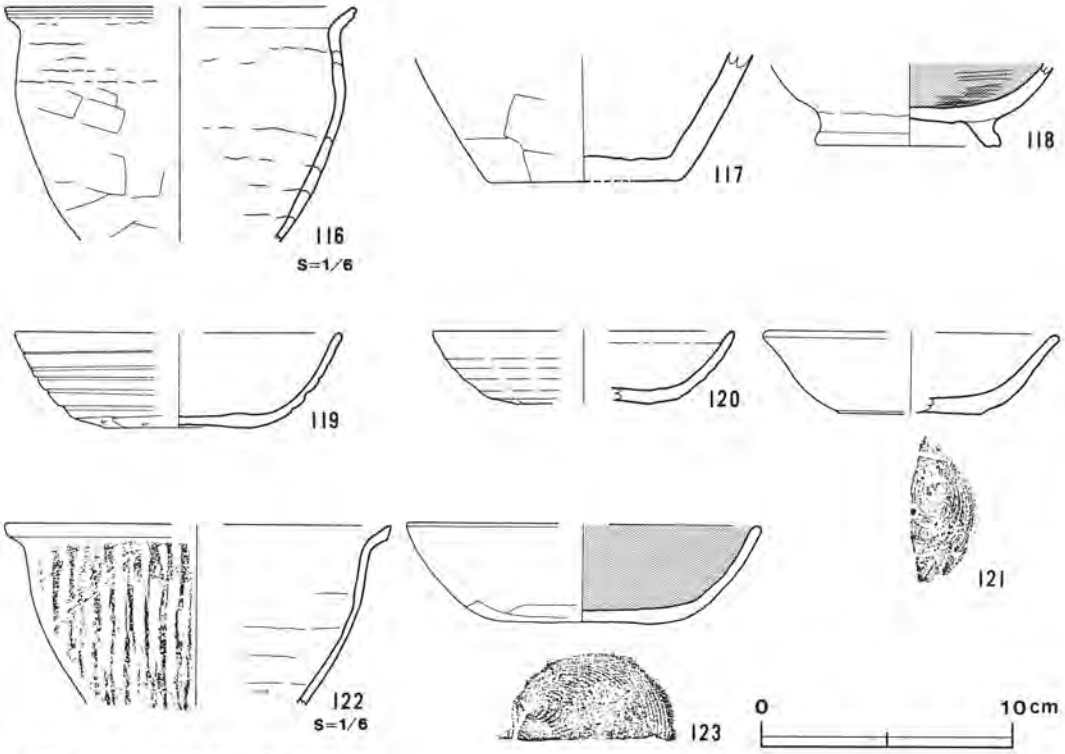
遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
110	高台付坏 土師器	A〔14.2〕 B 5.9 D〔 8.5〕 E 1.0	平底。底部には「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。 体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は僅かに外反する。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラナデ。 体部外面横ナデ，内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P70 40% 中央部 覆土上層

第46－A号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
116	甕 土師器	A〔27.4〕 B(18.6)	胴下半部欠損。胴部は内彎し，頸部は「く」の字状にくびれ，口縁部外面に横位の沈線を施す。	胴部外面下位横位のヘラ削り後，ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P71B 30% 中央部 覆土下層
117	甕 土師器	B(5.1) C 7.8	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部外面剝離のため調整不明，内面ヘラナデ。 胴部外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P71A 10% 中央部 覆土中層



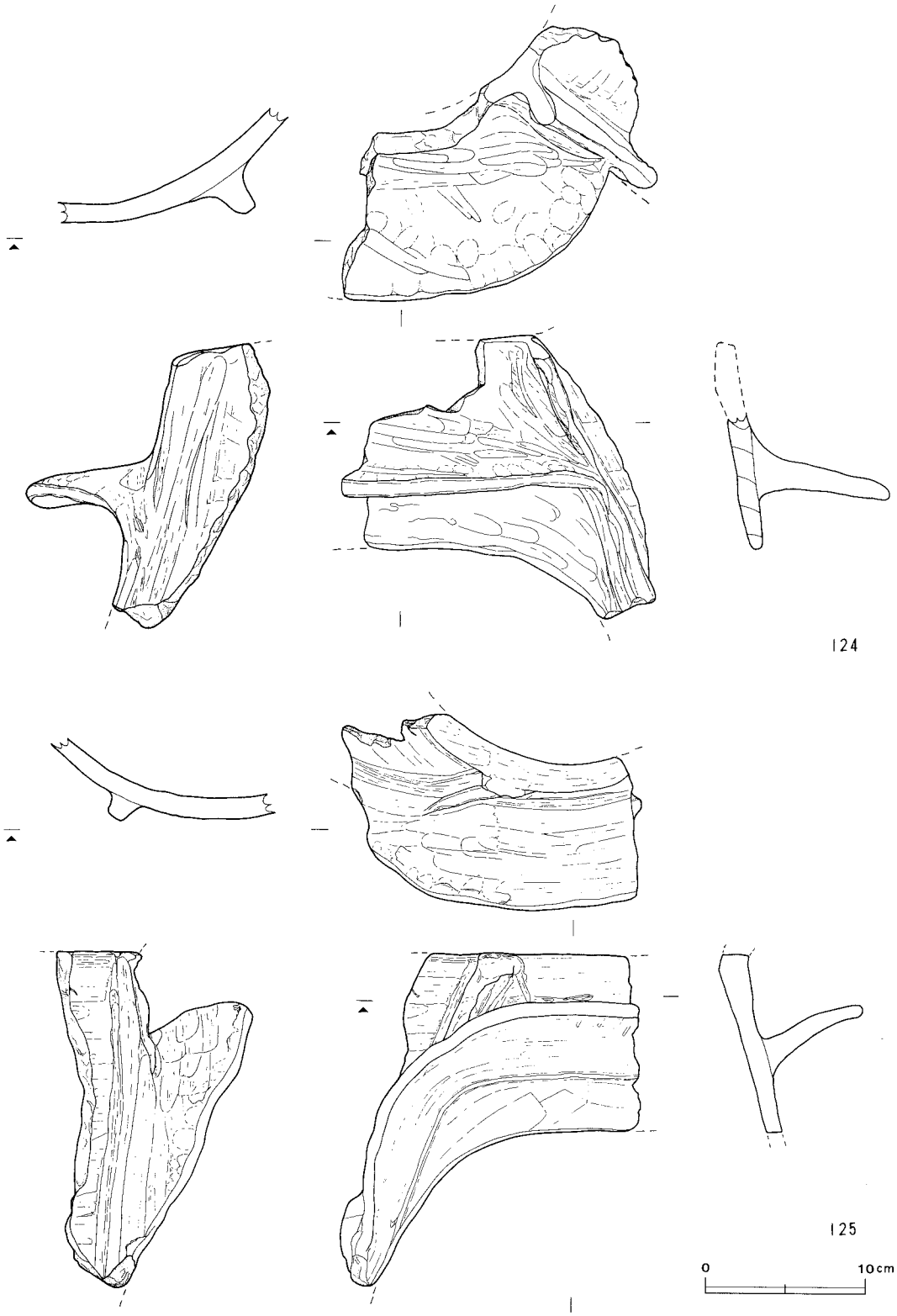
第66図　土坑出土遺物実測図(1)



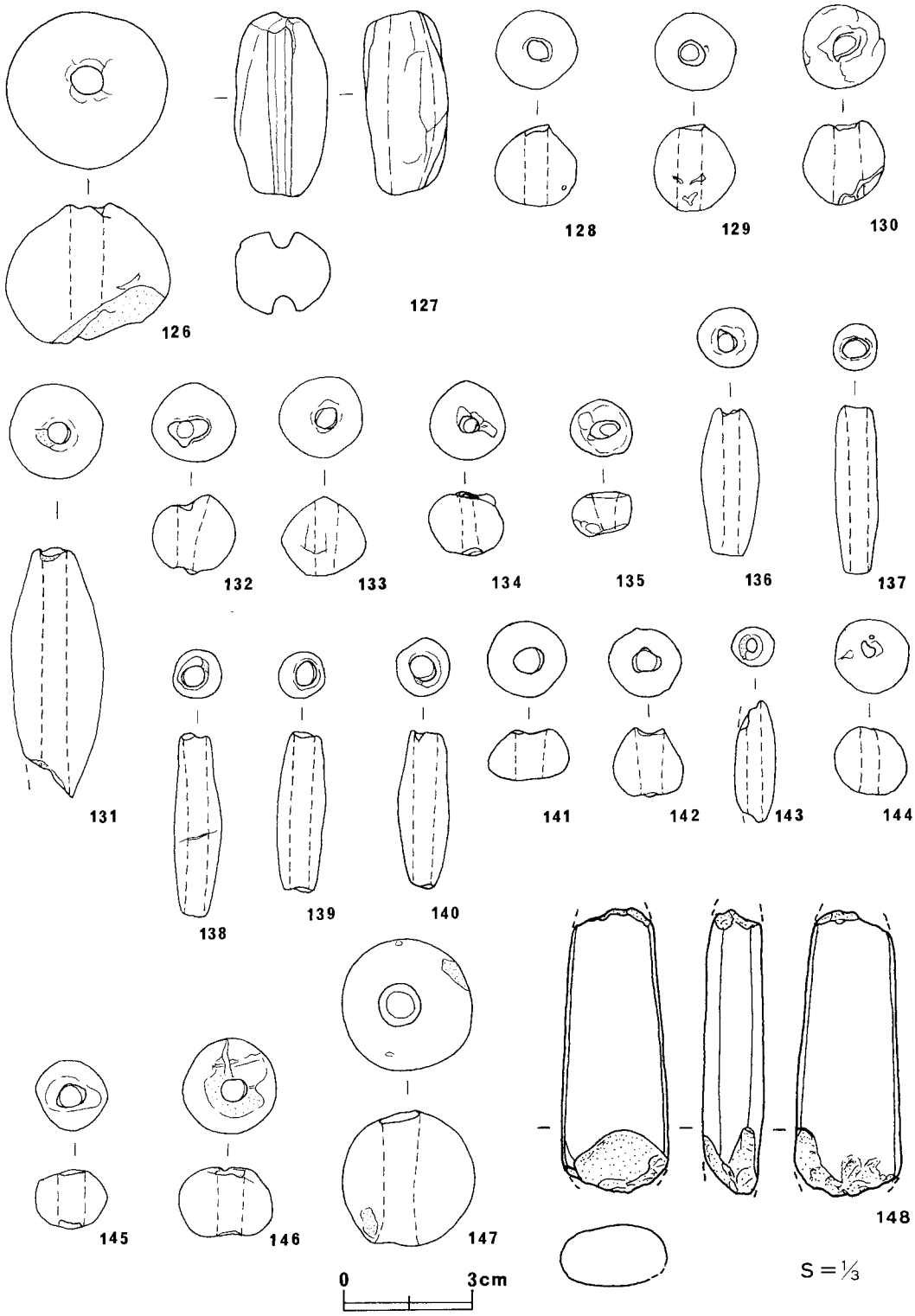
第67図　土坑出土遺物実測図(2)

第46－B号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
111	皿 土師質土器	A〔12.3〕 B 3.8 C〔6.7〕	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，中位に不明瞭な稜をもつ。口縁部は外反する。	底部外面剝離のため調整不明。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P73　40% 西部 覆土上層
112	坏 土師器	A〔13.3〕 B 4.4 C 7.2	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P74　40% 西部 覆土上層
113	壺 灰釉陶器	B(6.6) D 8.7 E 0.6	胴上半部欠損。平底。底部には「ハ」の字状に開く低い貼り付け高台が付く。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，回転ヘラナデ。 胴部下位横位のヘラ削り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P72　30% 北部 覆土中層
114	高台付坏 土師器	A〔14.6〕 B 6.3 D 7.5 E 1.5	平底。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P75　50% 北部 覆土下層
115	高台付坏 土師器	A〔15.0〕 B 6.8 D 8.4 E 1.5	平底。底部には「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後，横ナデ。 体部下端回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P76　50% 中央部 覆土上層



第68図　土坑出土遺物実測図(3)



第69図　土坑出土遺物実測図(4)

第48号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
118	高台付坏 土師器	B(3.3) D 7.4 E 1.1	体部上半部欠損。平底。底部には「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。	底部手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 にぶい橙色 普通	P78 40% 西部壁際 覆土上層
119	坏 土師器	A〔12.9〕 B 3.8 C 6.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。体部外面に4本の太い沈線と1本の細い沈線を施す。	底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P77 30% 西部壁際 覆土下層

第53号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
124	置き竈 土師器	B(17.7)	右前方部の破片。焚き口部の上位にほぼ水平に庇が付く。庇の内・外面に指頭痕。庇右上から受部にかけて補強の粘土紐貼付。	胴部内面横位のヘラナデ，外面縦位の粗いヘラナデ。 庇内・外面横位のヘラナデ後，指による整形。粘土紐痕有り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P89 20% 西部 覆土上層
125	置き竈 土師器	B(20.9)	左前方部の破片。焚き口部の上位にやや上向きの庇が付く。庇左上から受部にかけて補強の粘土紐貼付。受部内削ぎ。	胴部内・外面ヘラナデ。 庇内・外面横位のヘラナデ後，指による整形。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P90 20% 西部 覆土中層

第54号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
120	坏 土師器	A〔11.9〕 B 2.9 C〔5.2〕	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。 体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 やや不良	P79 40% 北部 覆土上層
121	皿 土師質土器	A〔11.6〕 B 3.2 C〔5.8〕	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P80 30% 北部 覆土上層

第67号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
122	鉢 土師器	A〔30.6〕 B(14.5)	胴部は内彎する。頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部はつまみ上げられる。	胴部外面上位縦位の平行叩き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P82 20% 北部 覆土下層
123	坏 土師器	A〔14.0〕 B 3.9 C 6.3	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部回転糸切り。 体部下端手持ちヘラ削り，内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P83 30% 北部 覆土下層

土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
126	球状土錘	(3.1)	3.7	0.7	(35.8)	SK-12	DP36 80%
127	土錘	長さ4.2 幅2.2 溝の上幅0.6 溝の深さ0.6 重量18.0				SK-23	DP37 100%
128	球状土錘	1.9	1.9	0.5	6.4	SK-26	DP38 100%
129	球状土錘	2.0	1.9	0.6	6.8	SK-26	DP39 100%
130	球状土錘	1.9	1.9	0.5	(5.2)	SK-26	DP40 90%
131	管状土錘	(5.8)	2.2	0.6	(20.4)	SK-36	DP41 90%
132	球状土錘	1.8	1.9	0.6	5.2	SK-41	DP42 100%
133	球状土錘	1.9	1.8	0.5	4.7	SK-45B	DP43 100%

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
134	球状土錘	1.8	1.8	0.4	4.1	SK-45B	DP44	100%
135	球状土錘	1.8	1.4	0.7	1.7	SK-45B	DP45	100%
136	管状土錘	3.4	1.4	0.5	(5.8)	SK-45B	DP46	90%
137	管状土錘	3.9	1.0	0.6	3.7	SK-45B	DP47	100%
138	管状土錘	4.2	1.1	0.5	(3.8)	SK-45B	DP48	90%
139	管状土錘	3.7	1.1	0.5	3.2	SK-45B	DP49	100%
140	管状土錘	3.7	1.2	0.6	4.2	SK-45B	DP50	100%
141	球状土錘	1.1	1.8	0.7	3.1	SK-46B	DP51	100%
142	球状土錘	1.6	1.6	0.7	3.4	SK-46B	DP52	100%
143	管状土錘	(2.8)	1.0	0.3	(1.9)	SK-52	DP53	60%
144	球状土錘	1.5	1.6	0.5	3.9	SK-54	DP56	100%
145	球状土錘	1.3	1.6	0.6	2.7	SK-54	DP57	100%
146	球状土錘	1.6	2.2	0.6	(6.8)	SK-67	DP58	90%
147	球状土錘	3.1	3.0	1.0	26.9	SK-71	DP59	100%

第12号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	器種				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
148	磨製石斧	13.2	4.9	2.8	(359.8)	硬砂岩	覆土中層	Q2	80%

表5　岡ノ内遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模(m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径	深さ						
1	$C5c_8$	N－76°－W	不整楕円形	2.08×1.30	0.92	外傾	平坦	自然			第57図
2	$C5g_7$	N－40°－E	円形	0.96×0.88	0.84	垂直	平坦	人為	土師器片3点（甕片，坏片）	SI3と重複	57
3	$C5g_6$	N－60°－W	楕円形	0.90×0.80	0.12	外傾	皿状	人為			57
4	$C5c_7$	N－40°－E	円形	0.66×0.58	0.20	外傾	皿状	人為			57
5	$C5c_4$	N－68°－W	不整楕円形	1.28×0.70	0.36	垂直	凹凸	不明		SD2と重複	57
6	$C5c_6$	N－44°－W	円形	0.86×0.74	0.68	垂直	平坦	人為	土師器片8点（甕片，坏片）		57
7	$B4h_6$	N－44°－W	円形	3.16×2.70	0.86	外傾	平坦	自然	縄文式土器片23点，土師器片4点（甕片）	風倒木痕	57
8	$C5b_5$	N－34°－E	楕円形	0.82×0.60	0.22	外傾	凹凸	自然		SI4と重複	57
9	$B4h_9$	N－60°－E	(円形)	(1.92)×0.98	0.42	外傾	凹凸	人為			58
10	$B4h_9$	N－11°－W	円形	3.21×2.90	0.80	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片13点，土師器片6点（甕片，坏片）	風倒木痕	58
11	$B4h_9$	N－14°－W	不定形	6.34×1.82	0.72	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片21点，土師器片4点（甕片）	風倒木痕	58
12	$C5h_5$	N－70°－E	隅丸方形	2.20×2.04	1.08	外傾	平坦	自然	縄文式土器片2点，磨製石斧1点，土師器片22点（甕片22点），土製品1点		59
13	$B4i_9$	N－68°－W	楕円形	1.08×0.86	0.20	外傾	凹凸	自然	土師器片1点（甕片）		57
14	$B4j_5$	N－80°－W	円形	3.38×3.34	1.02	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片53点		59
15	$B4h_6$	N－52°－E	不整楕円形	0.92×0.90	0.18	外傾	平坦	自然			57
16	$B4h_6$	N－67°－W	楕円形	0.92×0.76	0.12	外傾	皿状	自然	土師器1点（甕），土師器片1点（甕片）		57
17	$C4a_7$	N－29°－E	隅丸長方形	1.70×1.08	0.28	外傾	皿状	不明		SI6と重複	59
18	$B3f_3$	N－43°－W	隅丸長方形	1.96×1.52	0.08	外傾	皿状	人為	土師器片4点（甕片，甑片，坏片）		59

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模(m) 長径×短径	規模(m) 深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
19	$B4f_3$	N－32°－E	楕円形	1.26×1.04	0.08	緩斜	皿状	不明	土師器片1点(甕片)		第59図
20	$B4e_2$	N－85°－E	楕円形	1.62×0.90	0.28	外傾	平坦	人為	土師器片17点(甕片,坏片,高台付坏片)		59
21	$B4d_1$	N－53°－W	楕円形	1.66×(1.38)	0.50	緩斜	凹凸	人為			59
22	$B4e_1$	N－67°－W	楕円形	2.12×1.74	0.24	外傾	平坦	人為	土師器片34点(甕片,坏片,高台付坏片)		59
23	$B3d_0$	N－45°－E	円形	1.92×1.90	0.28	外傾	凹凸	人為	土師器片12点(甕片,坏片),土製品1点(土錘)		60
24	$B4f_1$	N－16°－E	円形	1.78×1.56	0.16	緩斜	平坦	人為	土師器片8点(甕片,坏片)		60
25	$B3g_0$	N－36°－E	長方形	2.36×0.94	0.40	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片10点,土師器片4点(甕片,坏片)	風倒木痕	60
26	$B3h_8$	N－12°－E	方形	1.46×1.36	0.50	外傾	平坦	自然	土師器3点(坏),土師器片50点(甕片,坏片,高台付坏片)		60
27	$B3g_8$	N－40°－E	楕円形	0.96×0.76	0.10	緩斜	皿状	人為			60
28	$B3d_9$	－	不整楕円形	1.34×0.70	0.40	緩斜	凹凸	人為	土師器片1点(甕片)		60
29	$B3d_0$	N－46°－W	不整楕円形	1.00×0.78	0.36	緩斜	凹凸	人為			60
30	$B3c_0$	N－47°－E	楕円形	1.68×1.44	0.26	緩斜	凹凸	人為	土師器片3点(甕片)		60
31	$B3f_6$	N－3°－E	円形	1.70×1.48	0.28	緩斜	平坦	人為	土師器片5点(甕片,坏片),須恵器3点(甕片)		61
32	$B3f_6$	N－76°－W	楕円形	1.92×1.12	0.48	垂直	平坦	人為	土師器片2点(甕片,坏片),須恵器片1点(甕片)		61
33	$B3e_8$	N－27°－E	楕円形	1.54×1.26	0.12	緩斜	平坦	人為			61
34	$B3c_8$	N－11°－W	楕円形	2.66×2.14	0.30	緩斜	平坦	人為	土師器片5点(甕片,坏片)		61
35	$B3e_4$	N－84°－E	円形	1.90×1.66	0.16	緩斜	皿状	人為	土師器片9点(甕片,坏片)		61
36	$B3d_4$	N－49°－W	楕円形	2.30×1.80	0.14	緩斜	平坦	人為	土師器片7点(甕片,坏片),土製品1点		61
37	$B3b_6$	N－62°－E	不整楕円形	3.86×2.86	0.76	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片14点,土師器片3点(坏片,高台付坏片)		61
38	$B3a_5$	N－32°－W	不定形	2.72×(1.34)	0.78	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片1点	風倒木痕	62
39	$B3a_5$	N－15°－W	不定形	4.50×(1.80)	0.80	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片8点,土師器片2点(甕片,坏片)	風倒木痕	62
40	$B3c_1$	N－34°－W	不整楕円形	2.66×1.48	0.52	緩斜	鍋底	自然	縄文式土器片6点,土師器片7点(甕片,坏片)	風倒木痕	62
41	$B3c_5$	－	円形	1.26×1.26	0.26	外傾	平坦	自然	土師器2点(坏,高台付坏),土師器片28点(甕片,坏片),土製品1点	SI12－A・Bと重複	62
42	$B2e_0$	N－47°－E	円形	0.96×0.86	0.24	垂直	平坦	人為		SI16と重複	62
43	$B2e_0$	N－40°－E	円形	1.28×1.08	0.32	垂直	平坦	人為	土師器片2点(甕片,坏片)	SI16と重複	62
44	$B2b_9$	N－44°－E	円形	1.20×1.08	0.64	外傾	鍋底	人為	土師器片11点(甕片,坏片)		62
45-A	$B2d_0$	N－57°－E	楕円形	1.16×0.90	0.68	垂直	平坦	人為	土師器1点(高台付坏),土師器片40点(甕片,坏片,高台付坏片),土製品7点		63
45-B	$B2d_0$	N－56°－E	円形	1.20×1.04	0.36	垂直	平坦	人為	土師器1点(高台付坏),土師器片31点(甕片,坏片)		63
46-A	$B2d_0$	－	円形	1.26×1.26	0.46	垂直	平坦	人為	土師器2点(甕),土師器片31点(甕片,坏片,高台付坏片)	SK46Bと重複	63
46-B	$B2d_0$	－	円形	1.60×1.56	0.82	垂直	平坦	人為	土師器3点(坏,高台付坏),その他2点(壺,皿),土師器片71点(甕片,坏片,高台付坏片)	SK46Aと重複	63
47	$B2d_0$	N－29°－E	楕円形	1.00×0.86	0.28	外傾	傾斜	人為			63
48	$B2c_9$	－	円形	1.36×1.26	0.48	垂直	平坦	人為	土師器2点(坏,高台付坏),土師器片9点(坏片)		63
49	$B2c_8$	N－14°－E	円形	0.70×0.78	0.32	外傾	鍋底	人為	土師器片2点(甕片,坏片)		63
50	$B2c_8$	N－13°－W	円形	0.90×0.80	0.20	外傾	皿状	人為	土師器片19点(甕片,杯片,高台付坏片)		63
51	$B2b_8$	N－35°－E	楕円形	0.66×0.52	0.40	外傾	鍋底	自然			63
52	$B2b_8$	－	円形	1.24×1.22	0.40	垂直	平坦	人為	土師器片19点(甕片,坏片),土製品1点		63
53	$A2i_7$	－	円形	1.44×1.44	0.62	垂直	平坦	人為	土師器片7点(甕片,坏片),置き竈片2点		63
54	$B2d_9$	N－4°－W	円形	1.78×1.66	0.58	垂直	平坦	人為	土師器1点(坏),土師質土器1点(皿),土師器片22点(甕片,坏片),土製品2点		63
55	$B2c_8$	N－13°－W	円形	1.46×1.26	0.30	緩斜	平坦	人為	土師器片3点(甕片,坏片)		63
56	$B2e_9$	N－50°－E	楕円形	1.08×0.84	0.38	外傾	平坦	人為	土師器片1点(坏片)		64
57	$B2d_8$	N－23°－E	楕円形	1.30×0.86	0.40	外傾	平坦	不明	土師器片8点(甕片,坏片)		64
58	$A2g_8$	N－28°－E	(長楕円形)	(3.22)×2.58	0.76	緩斜	段状	自然	縄文式土器片7点,土師器片2点(甕片)		64

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 (m)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径	深さ						
59	$A2i_6$	−	円形	1.02×1.02	0.36	緩斜	傾斜	人為			第64図
60	$A2f_4$	N−25°−E	円形	1.90×1.74	0.52	内傾	平坦	人為			64
61	$B2a_5$	N−35°−E	楕円形	1.16×0.90	0.36	緩斜	平坦	自然	土師器片6点（甕片，坏片）		64
62	$B2c_5$	N−44°−E	楕円形	1.40×0.96	0.20	外傾	平坦	人為	土師器片1点（甕片）		64
63	$B2a_5$	N−25°−E	楕円形	1.28×1.04	0.28	垂直	鍋底	人為	土師器片5点（甕片，坏片）		64
64	$A2h_4$	N−19°−E	楕円形	1.30×1.06	0.36	垂直	平坦	人為			64
65	$A2j_0$	−	円形	0.68×0.68	0.28	緩斜	平坦	人為			64
66	$B2c_8$	N−14°−W	円形	2.16×2.12	0.42	緩斜	平坦	人為			64
67	$B2a_0$	N−28°−E	円形	1.04×1.02	0.24	外傾	平坦	人為	土師器2点(鉢，坏)，土師器片15点(甕片，甑片，坏片)，土製品1点		65
68	$B2a_2$	N−34°−E	円形	1.16×1.10	0.48	垂直	平坦	人為			65
69	$A2j_1$	N−26°−E	円形	1.26×1.20	0.24	外傾	平坦	人為			65
70	$B3a_2$	N−30°−E	楕円形	0.78×0.46	0.52	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片5点，土師器片1点(高台付坏片)		65
71	$A3j_4$	−	円形	1.72×1.56	0.66	内傾	平坦	人為	土師器片25点(甕片，坏片，高台付坏片)，土製品1点		65
72	$B3c_5$	N−19°−E	楕円形	1.20×0.94	0.54	外傾	平坦	人為	土師器片2点（甕片）	SI12と重複	65
73	$B3g_2$	N−59°−E	円形	1.48×1.32	0.36	緩斜	平坦	自然	土師器片1点（坏片）	SI14と重複	65
74	$A3j_1$	N−90°−E	楕円形	0.98×0.54	0.34	緩斜	U字状	自然		地点貝塚と重複	65

3　溝

当調査区からは，6条の溝が検出されているが，いずれも出土遺物がないため，それぞれの溝の構築時期や性格を明らかにすることは困難であった。ここでは調査結果に基づき，それぞれの溝の規模や形状等を中心に記載する。

第1号溝（第70図）

位置　調査区の東部，C4・C5区に確認されている。

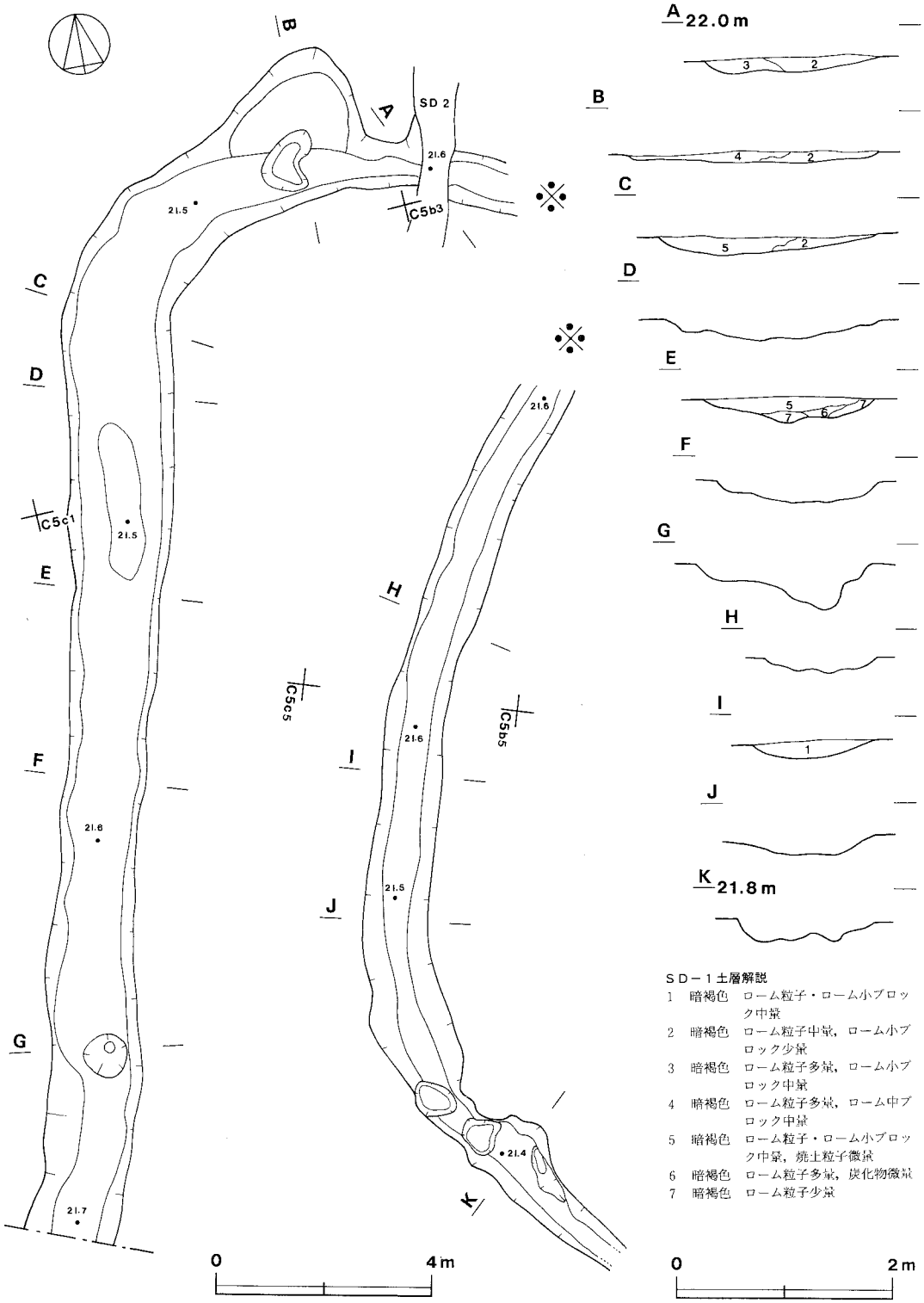
重複関係　$C5a_3$区で第2号溝に，掘り込まれている。$C5b_6$区で，第4号住居跡を掘り込み，第8号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　平面形は，「⌐」状を呈し，全長は約44.80mであり，上幅0.88〜2.02m，下幅0.30〜1.76m，深さ10〜25cmを測り，断面形は皿状を呈している。

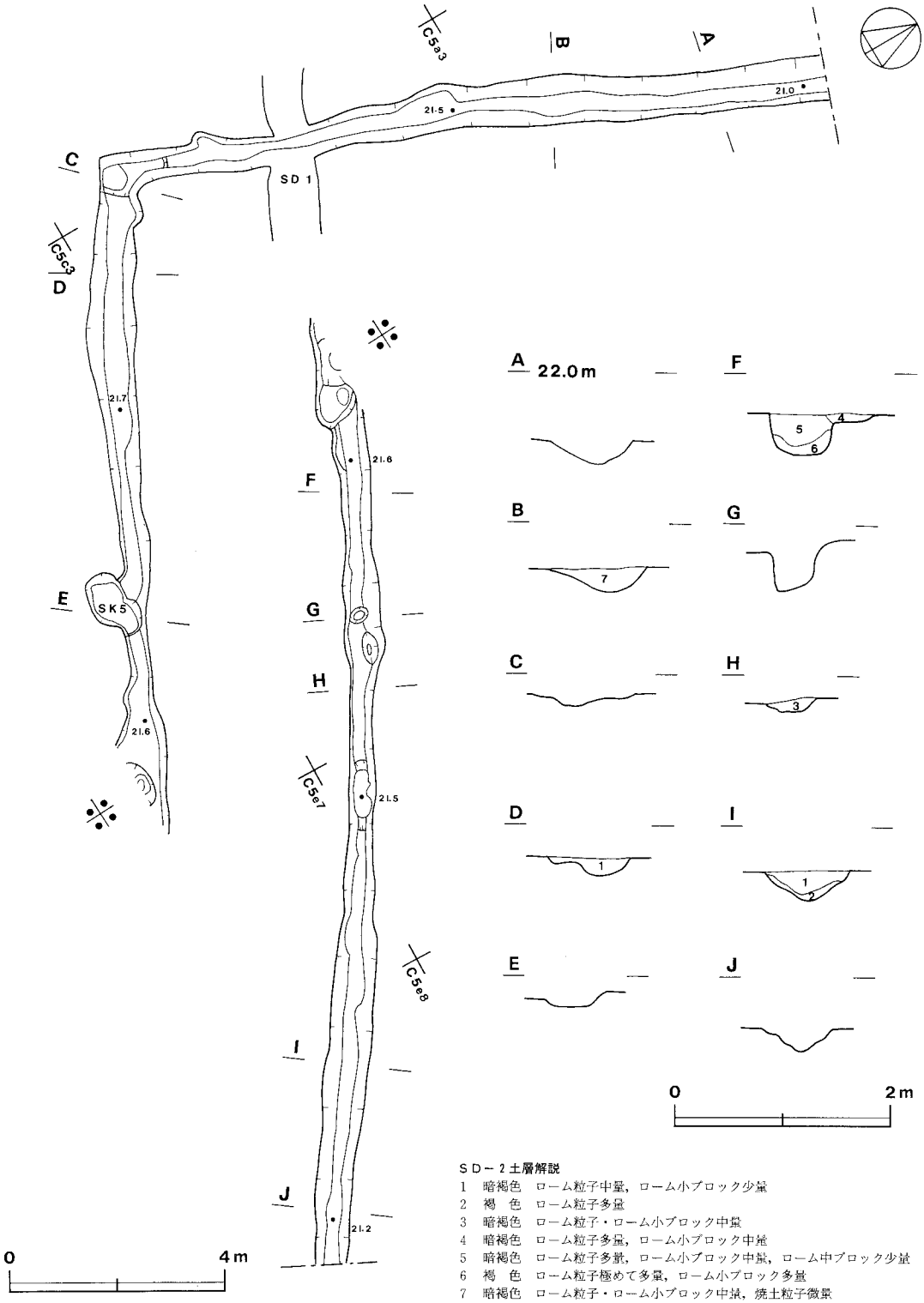
方向　$C4f_0$区から北東方向（N−18°−E）へ20m程ほぼ直線的に延び，$C5a_2$区で南東方向（N−115°−E）に大きく屈曲して18m程彎曲して延びている。さらに$C5b_6$区で北東方向（N−40°−E）に向きを変え，6.80m程直線的に延びて調査区の境界へ達している。溝の両端共，調査区外へ延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は，重複関係から第4号住居跡より新しく，第8号土坑と第2号溝よりは古い時期に構築された溝と考えられる。しかし，詳細な時期や性格については不明である。



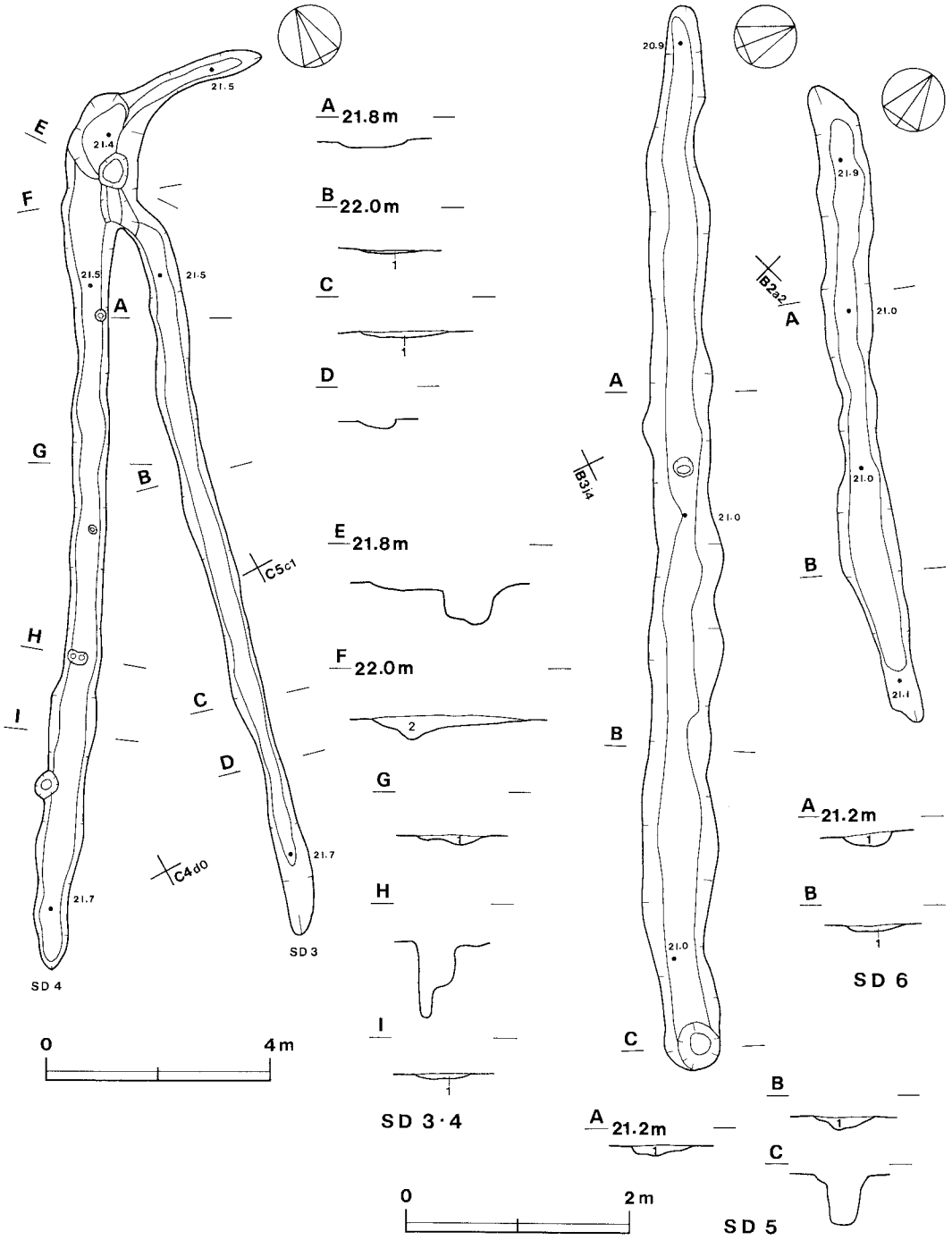
第70図　第１号溝実測図



SD－2土層解説

1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
6　褐　色　ローム粒子極めて多量，ローム小ブロック多量
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子微量

第71図　第2号溝実測図



SD－3 土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

SD－4 土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量

SD－5　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量

SD－6 土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

第72図　第3・4・5・6号溝実測図

第2号溝（第71図）

位置　調査区の東部，B5・C5区に確認されている。

重複関係　$C5a_3$区で第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状　平面形は，「L」状を呈し，全長は約42.50mであり，上幅0.40～0.92m，下幅0.16～0.44m，深さ12～26cmを測り，断面形は皿状を呈している。

方向　$C5e_9$区から北西方向（N－60°－W）へ20m程ほぼ直線的に延び，$C5b_2$区で北東方向（N－23°－E）に大きく屈曲して14m程直線的に延びて調査区の境界へ達している。溝の両端共，調査区外へ延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は，重複関係から第1号溝よりは新しい時期に構築された溝と考えられる。しかし，詳細な時期や性格については不明である。

第3号溝（第72図）

位置　調査区の東部，C4・C5区に確認されている。

重複関係　$C5a_1$区で第4号溝と重複している。

規模と形状　全長は約13.40mであり，上幅0.34～0.62m，下幅0.16～0.40m，深さ5～8cmを測り，断面形は皿状を呈している。

方向　$C4d_0$区から$C5a_1$区まで，北東方向（N－16°－E）へほぼ直線的に13.40m程延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は出土遺物もなく，詳細な時期や性格については不明である。

第4号溝（第72図）

位置　調査区の東部，B5・C4・C5区に確認されている。

重複関係　$C5a_1$区で第3号溝と重複している。

規模と形状　全長は約18.30mであり，上幅0.56～0.96m，下幅0.38～0.62m，深さ8～15cmを測り，断面形は皿状を呈している。

方向　$B5j_1$区から$C4d_9$区まで，北東方向（N－32°－E）へほぼ直線的に18.30m程延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は出土遺物もなく，詳細な時期や性格については不明である。

第5号溝（第72図）

位置　調査区の西部，A2区に確認されている。

規模と形状　全長は約9.50mであり，上幅0.40～0.65m，下幅0.15～0.30m，深さ10～12cmを測り，断面形は皿状を呈している。

方向　A2i_2区からA2j_4区まで，北西方向（N－65°－W）へほぼ直線的に9.50m程延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は出土遺物もなく，詳細な時期や性格については不明である。

第6号溝（第72図）

位置　調査区の西部，A2・B2区に確認されている。

規模と形状　全長は約5.75mであり，上幅0.27～0.54m，下幅0.12～0.33m，深さ6～12cmを測り，断面形は皿状を呈している。

方向　A2j_1区からB2a_2区まで，北西方向（N－50°－W）へほぼ直線的に5.75m程延びている。

覆土　自然堆積と思われる。

所見　本跡は出土遺物もなく，詳細な時期や性格については不明である。

4　地点貝塚

当調査区からは1か所の地点貝塚が検出されたので，調査結果について以下に記載する。

第1号地点貝塚（第73図）

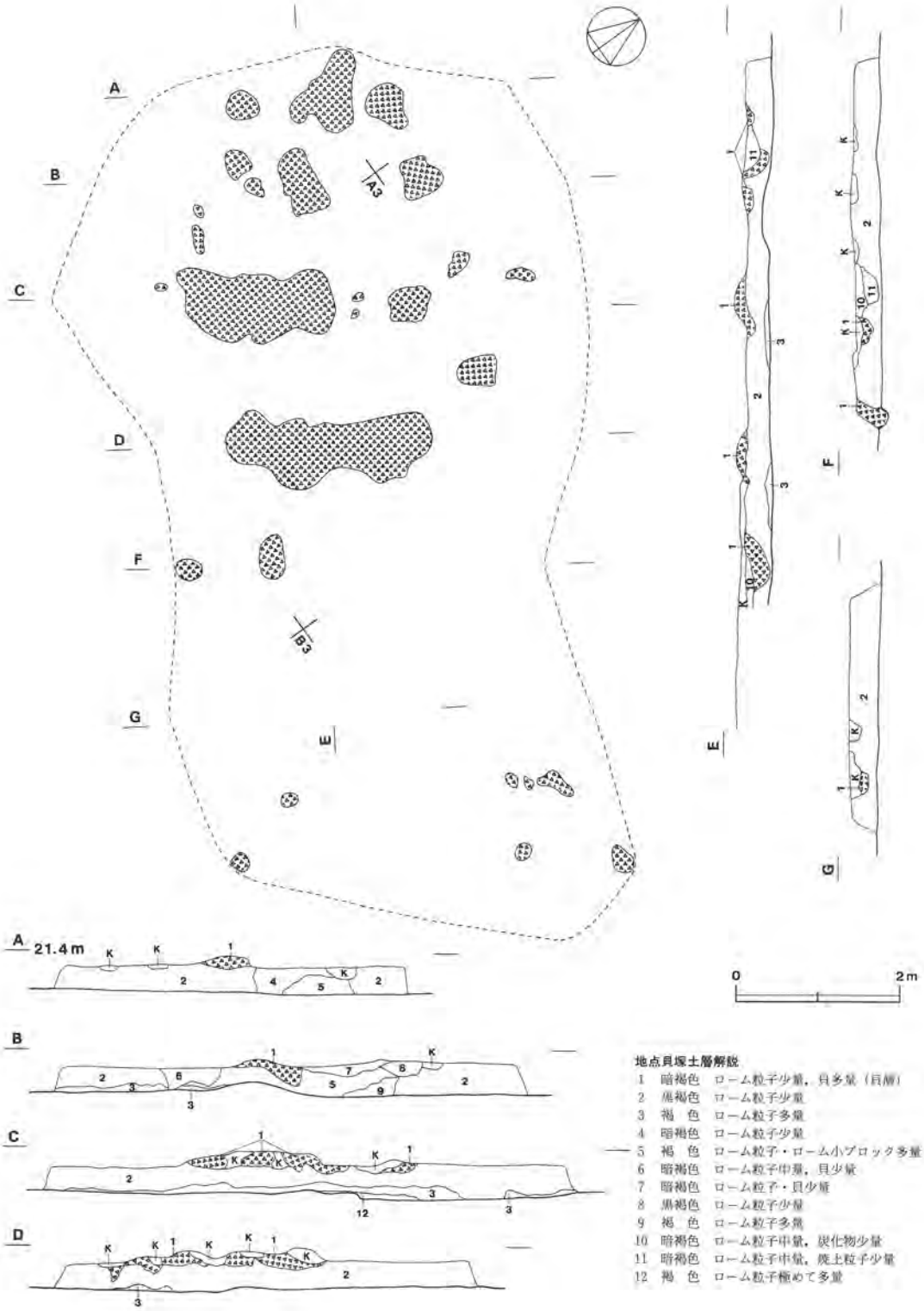
位置　調査区の北西部，A3j_2区を中心に南北8m，東西11mの範囲で確認されている。

重複関係　A3j_2区で，貝層の下に第74号土坑が確認されている。

規模と堆積状況　平面形が，長径1.80～2.50m，短径0.50～0.90mの不整楕円形を呈した2つの大きな混土貝層を中心に，その周囲に径0.40～0.50mの不整楕円形を呈した小さな混土貝層が30か所程確認されている。貝層には，純貝層，混土貝層，混貝土層を呈するものがみられたが，大半は混土貝層ないし混貝土層が主で，純貝層は部分的な箇所に過ぎない。貝層は上層に混土貝層，下層に混貝土層が堆積している。貝層は，ローム面から10～20cm程上位に堆積し，層厚はいずれも15～40cm程である。

遺物　貝種は淡水産のヤマトシジミだけであり，出土量は遺物収納箱（60×40×20cm）に6箱程である。ヤマトシジミは殻高10～20mmの個体のものが多く，最大殻高は25mmを測る。

所見　本跡は，重複関係から，第74号土坑よりも新しい時期のものである。しかし，土器等の出土遺物がないため，貝塚の形成された時期については不明である。



第73図　第１号地点貝塚実測図

5　遺構外出土遺物

当調査区の遺構外出土遺物について，観察表，実測図及び拓影図でその一部を紹介する。

縄文式土器（第74・75・76図）

第１群の土器　縄文時代早期に比定される土器群を本群とする。

第１類　縄文時代早期前葉の無文系土器に比定される土器を本類とする。

149，150は口縁部片である。149は口縁部が僅かに外反し，口唇部は平坦である。150は小波状口縁を呈している。151，152は胴部片であり，153は，丸みを帯びた底部片である。

第２類　縄文時代早期中葉の沈線文系土器に比定される土器を本類とする。

（本類に於ける分類は，沈線文の太さ，細さ及び刺突文や貝殻文の有無や施文方法の差異等を基準として行い，ａ～ｅの５種に大別した。）

ａ種　太めの沈線が施されているもの

154～157は口縁部片である。154は縦位の太めの沈線が施されており，155は縦位の沈線で区画された部分に斜位の沈線が充塡されている。156は口縁部が外反し，口唇部は角頭状を呈し，口縁部に横位の沈線が施されている。157は口唇部が平坦で，口縁部に横位の沈線が施されている。158～166は胴部片である。158～160は縦位の太めの沈線が施され，161は斜位の沈線が羽状を構成している。162，163は横位の沈線が施され，164～166は太めの沈線で区画された部分に，太めの爪形文が充塡されている。

ｂ種　細めの沈線文と太めの沈線文が施されているもの

167～172は胴部片である。167は横位の太い沈線の下位に斜位の細い沈線が施されている。168，169は２本の太い横位の沈線の下位に矢羽状の施文が施されている。170～172は縦・横位の太い沈線と斜位の細い沈線が施されている。

ｃ種　細めの沈線が施されているもの

173～175は口縁部片である。173は口縁部に指頭による押圧が施され，下位に横位の細い沈線が施されている。174は沈線で区画された内部に，斜位の細い沈線が施されており，175は横位の沈線の下位に斜位の沈線が施されている。176～182は胴部片である。176は細い縦・横位の沈線により，格子状の施文が施されている。177は縦位の沈線の間に斜格子状の施文が施されている。178～182は横位ないし斜位の沈線が施されている。

ｄ種　沈線文と刺突文が施されているもの

183～185は口縁部片であり，183，184の口唇部は外削ぎ状を呈している。183の口縁部には２本の太めの沈線とＤ字状の刺突文が施されている。184の口縁部には半截竹管によるＣ字状の刺突文が施され，下位に横位の沈線が施されている。185は細い横位の沈線の間に横位の刺突文が充塡されている。186～190は胴部片である。186，187は横位ないし斜位の細い沈線の上位に横位の刺突

文が施されている。188～190は，横位の太めの沈線の間に，半截竹管によるＣ字状の刺突文が施されている。

ｅ種　貝殻腹縁文が施されているもの

191～193は口縁部片である。191は２本の太い横位の沈線が施され，下位に細い沈線と貝殻腹縁文が施されている。192は口唇部に矢羽状の刻み目が施され，口縁部には横位の太い沈線，矢羽状の沈線，細い沈線が順次施され，下位に貝殻腹縁文が施されている。193は４本の横位の沈線，丸頭状の刺突文，アナダラ属の貝殻腹縁文が順次施されている。194は胴部片である。横位の沈線と刺突文の下位に，アナダラ属の貝殻腹縁文が施されている。

第２類土器の底部

195～200は鋭角的な尖底部片であり，いずれも「天狗の鼻」状を呈している。195～198は無文の尖底部片であり，199，200は横位ないし斜位の沈線が施され，199は先端部に至るまで横位の沈線が施されている。本類は，広義の田戸下層式に比定される土器と思われる。

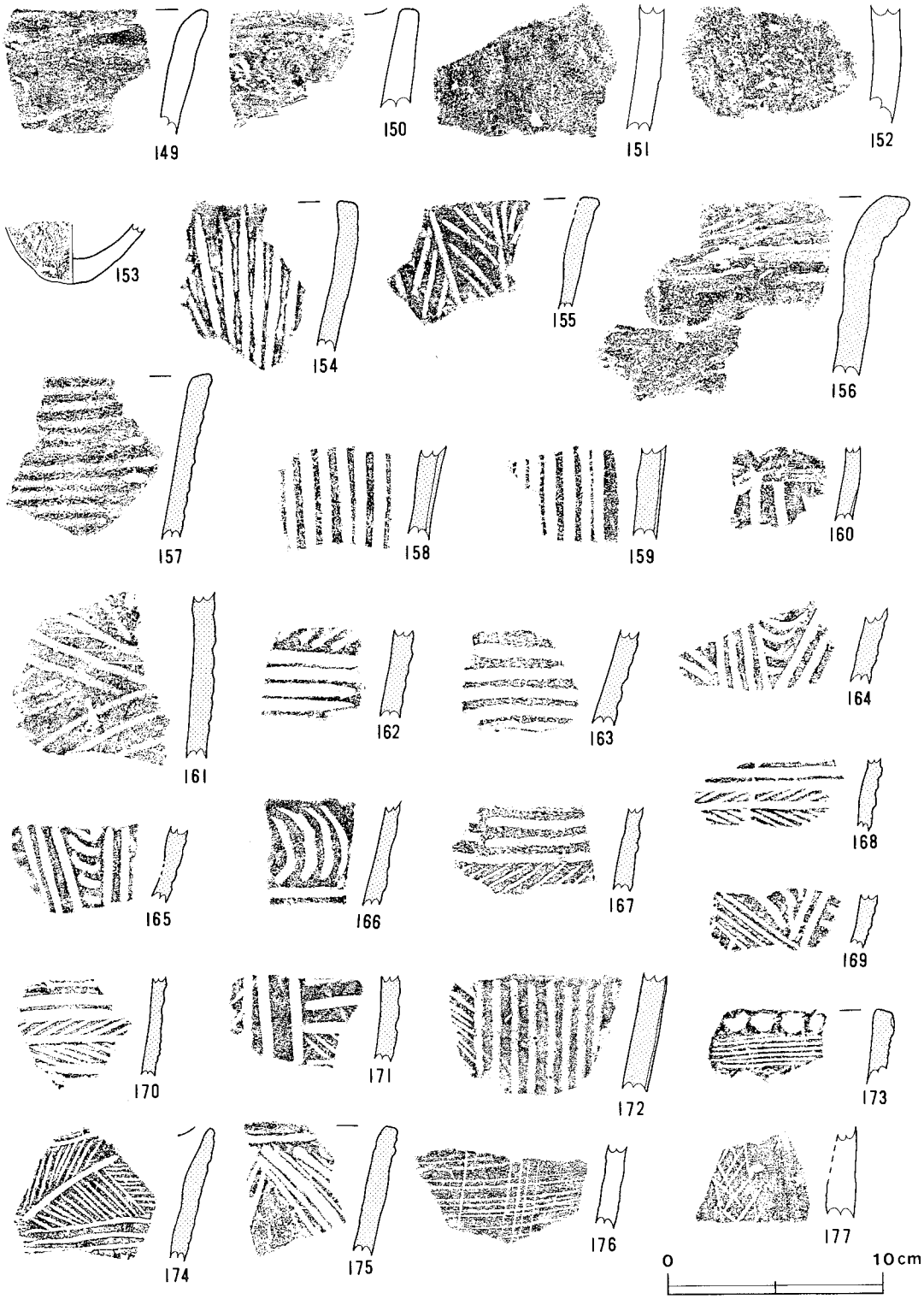
第２群の土器　縄文時代前期に比定される土器群を本群とする。

第１類　前期前葉に比定される土器を本類とする。

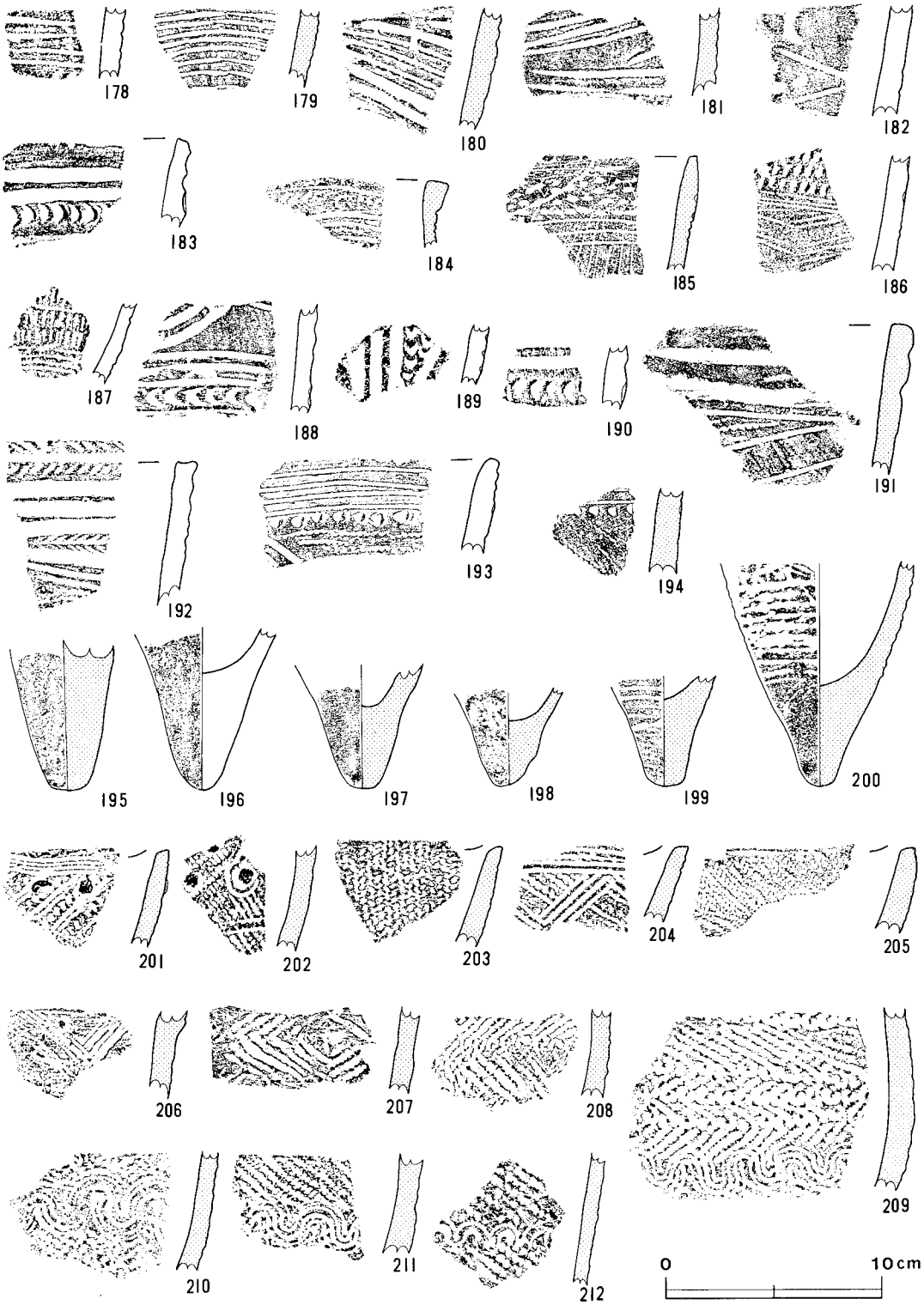
201は口縁部片であり，内削ぎ状の小波状口縁を呈している。口縁部には４本１条の横位の沈線が施されている。202は胴部片である。201，202ともに地文には，単節ＬＲの縄文が施され，その上に貼りコブが施されている。203～205は口縁部片である。いずれも，口唇部が内削ぎ状で小波状口縁を呈している。203は地文に組み紐による施文が，204は単節ＬＲの地文に４本１条の沈線による横位と山形の施文が施されている。205は単節ＬＲの縄文が施されている。206～212は胴部片である。206は櫛描の山形文が施文され，207はひし形のモチーフが施され，208は単節ＬＲが羽状に施文されている。209～212は地文に単節ＬＲの縄文が施され，その上にコンパス文が施されている。本類は，広義の関山式に比定される土器と思われる。

第２類　前期中葉に比定される土器を本類とする。

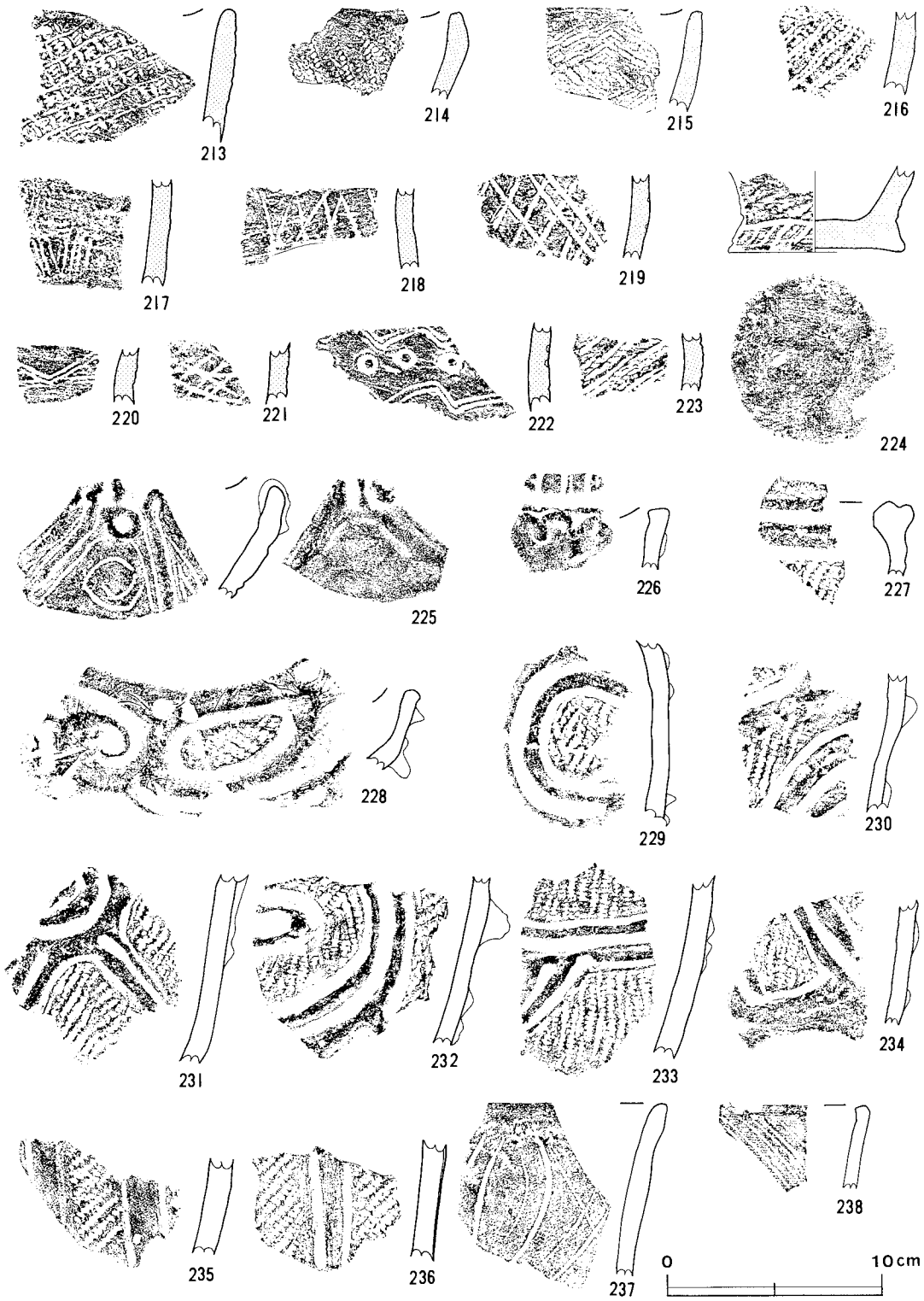
213～215は口縁部片である。213は地文に附加条縄文が施され，214は小波状口縁を呈し撚りの弱い単節ＬＲがまばらに施されている。215は無節ＲとＬでひし形を構成している。216～223は胴部片である。216は単節２本１対の単軸絡状体の撚糸文が施され，217は斜位の沈線が施され，218～221は斜格子状の施文が施されている。222は竹管による○状の刺突文が施され，上下に２本１条の山形文が施されている。223は３本１対の単軸絡状体の撚糸文が施されている。224は底部片である。平底で，径8.3cmを測る。横位の沈線が巡らされ，そこから下方に斜位の沈線が施されている。本類は，広義の黒浜式に比定される土器と思われる。



第74図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



第75図　遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第76図　遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

第３群の土器　縄文時代中期に比定される土器群を本類とする。

第１類　中期初頭に比定される土器を本類とする。

225，226は口縁部片であり，波状口縁を呈している。225は３本の隆帯が貼り付けられ，斜位の沈線の間には逆「の」の字状の沈線が施されている。226は口唇部に刻み目が施され，口縁部には隆帯が施されている。

第２類　中期中葉に比定される土器を本類とする。

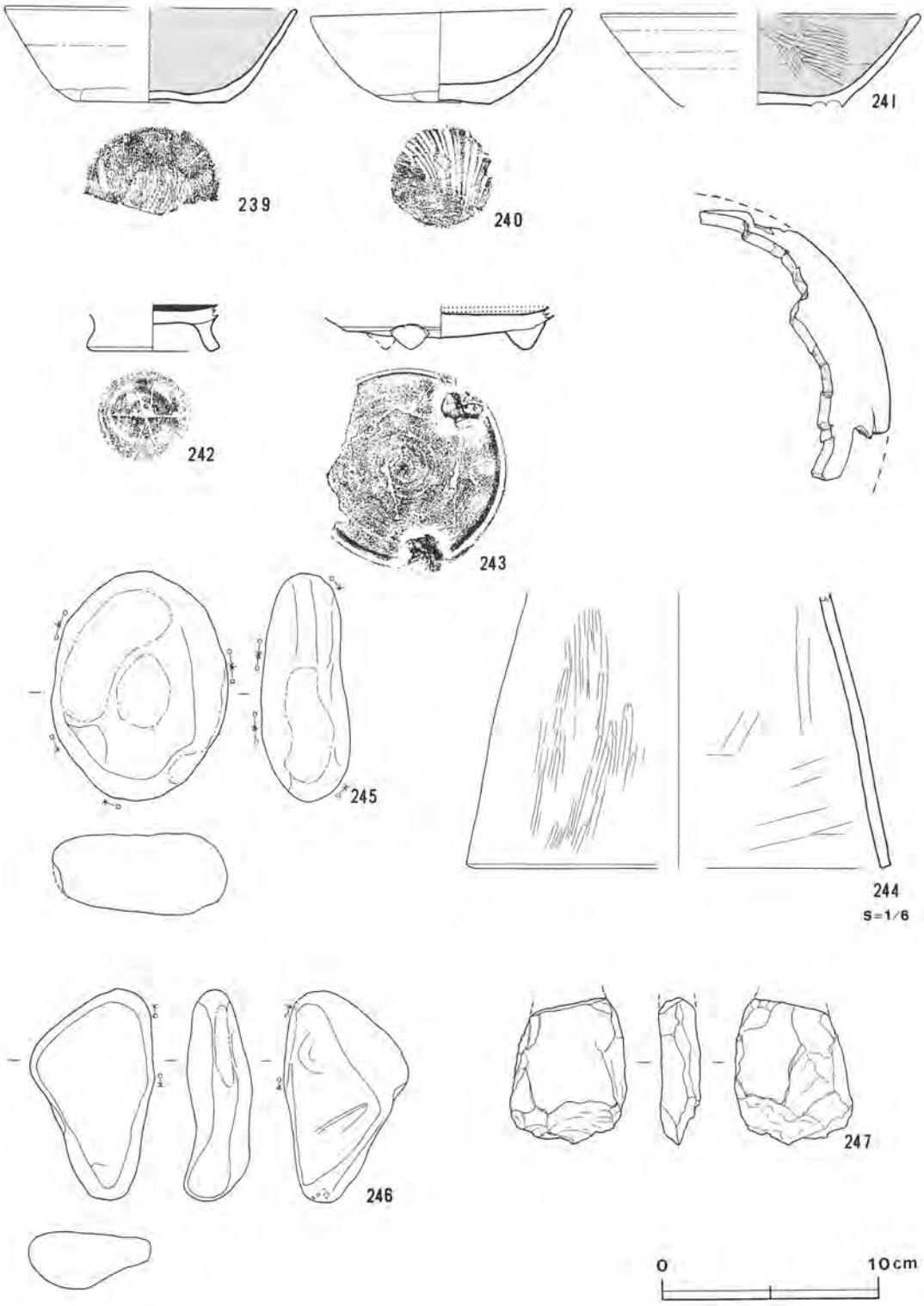
227，228は口縁部片である。227は口縁部外面に沈線が巡らされ，228は波状を呈し，口縁部には断面三角形の隆帯で区画された部分に単節ＲＬの縄文が施されている。229～236は胴部片である。229～234はいずれも，断面三角形の隆帯で区画された部分に単節ＲＬの縄文が充填されている。235，236は縦位の沈線で区画された部分がすり消しと単節ＬＲの縄文が交互に施されている。本類は，縄文時代中期中葉の加曽利Ｅ式に比定されるものと思われる。

以上の他に，237，238の口縁部片がある。237は斜格子状の施文が施され，縄文時代後期に比定される土器と思われる。238は口唇部が外削ぎ状を呈し，口縁部に斜位の沈線が施され，縄文時代後期加曽利Ｂ式の粗製土器と思われる。

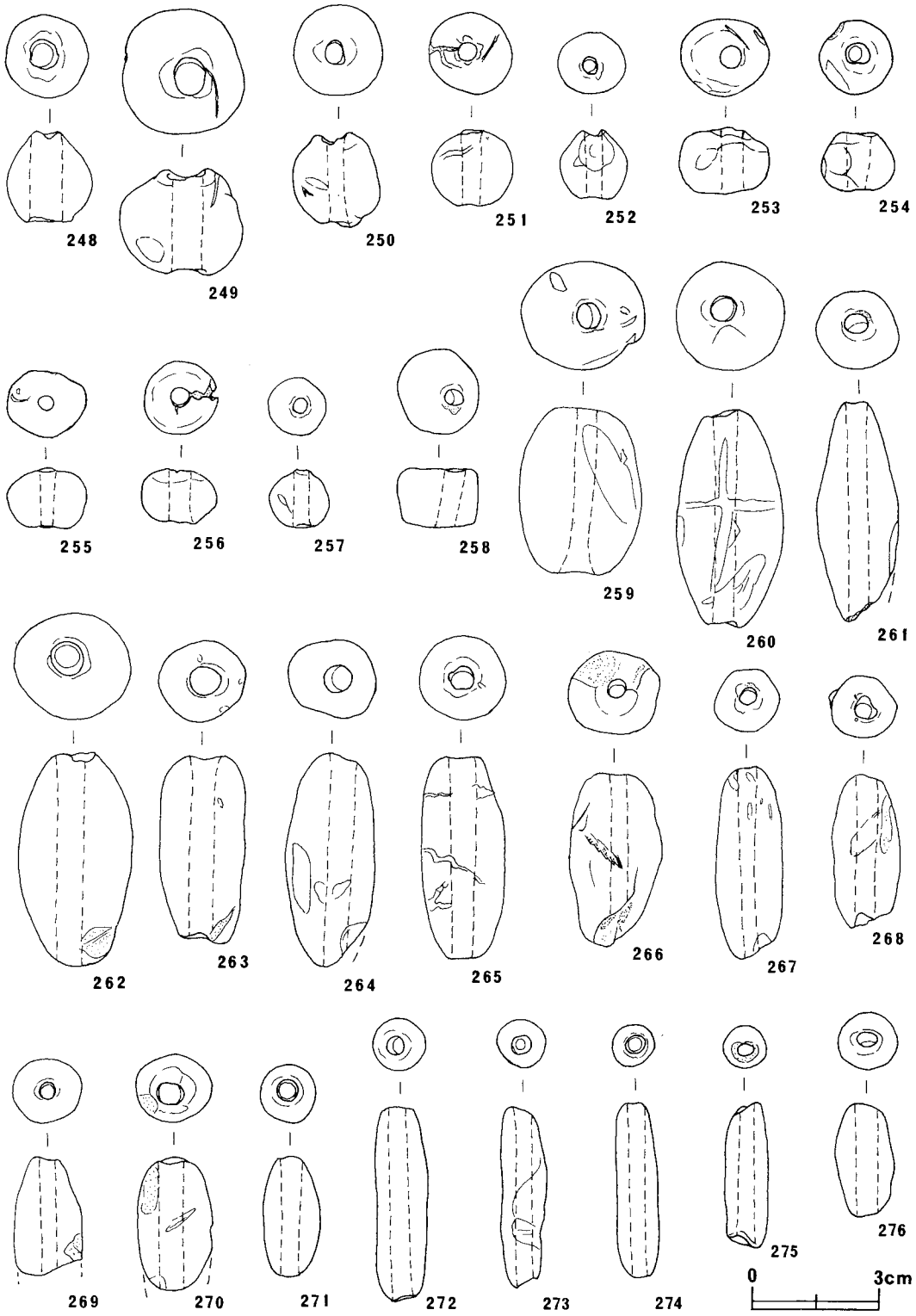
遺構外出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
239	坏 土師器	A〔13.2〕 B 4.3 C〔6.8〕	底部の中央が浅く窪み，体部は内彎して立ち上がる。	底部回転糸切り後，手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り，内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P84　40% 表採
240	坏 土師器	A 11.8 B 4.4 C 4.7	平底。体部は内彎して立ち上がる。	底部静止糸切り後，手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P85　80% 表採
241	高台付坏 土師器	A〔14.6〕 B〔4.3〕	平底。高台剝離。体部は内彎して立ち上がる。底部外面にスス付着。	底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P86　40% 表採
242	高台付坏 土師器	B〔2.2〕 D 6.2 E〔1.5〕	体部欠損。底部から「ハ」の字状に開く貼り付け高台が付く。	体部内面ヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒 灰白色 普通	P87　20% 表採 底部に「✕」状のヘラ描き
243	香炉 陶器	B〔2.0〕 C 8.9 E 1.0	底部片。平底。足は２か所残存。底部外面露胎。	底部回転ヘラ削り。 見込みに灰釉（黄褐色）を施す。	砂粒 浅黄色 良好	P88　20% 表採
244	置き竈 土師器	B(25.2) C〔40.0〕 器厚1.0~1.2	胴部片。底部は平坦であり，胴部は直線的に内傾している。	胴部外面縦位のヘラ磨き，内面下方横位，上方縦位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P91　15% (B3a$_2$区) 覆土

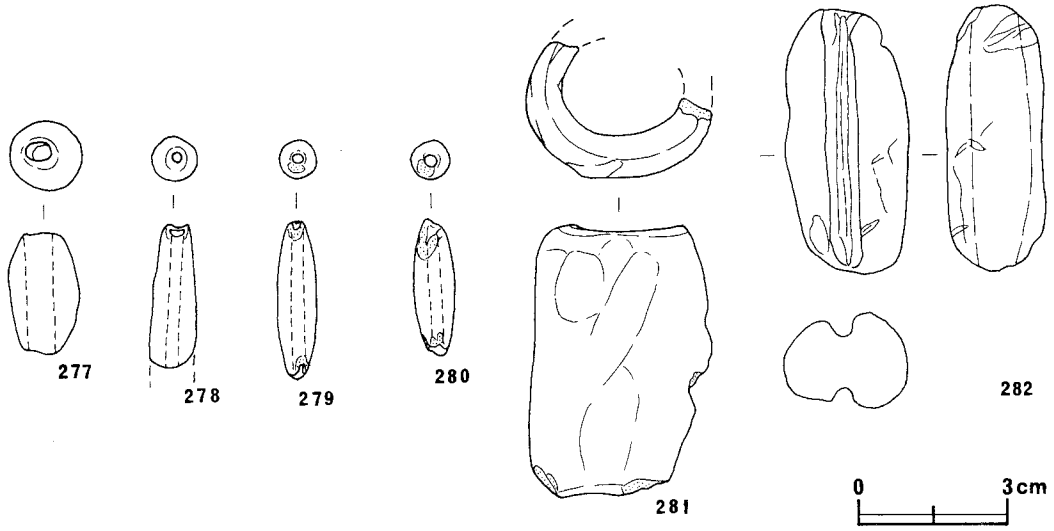
遺物番号	器種	法量				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
245	敲石	10.5	8.2	4.1	470.8	砂岩	表採	Q3　100%
246	磨石	9.8	5.8	3.1	177.4	砂岩	表採	Q4　100%
247	打製石斧	(6.5)	5.2	1.8	(89.6)	硬砂岩	表採	Q5　50%



第77図　遺構外出土遺物実測図(1)



第78図　遺構外出土遺物実測図(2)



第79図　遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
248	球状土錘	2.1	2.0	0.7	7.1	$B3a_4$	DP63	100%
249	球状土錘	2.9	2.9	0.9	(17.1)	表採	DP61	90%
250	球状土錘	2.1	2.1	0.5	8.1	表採	DP62	100%
251	球状土錘	1.8	1.9	0.4	6.0	表採	DP64	100%
252	球状土錘	1.6	1.6	0.4	3.4	表採	DP65	100%
253	球状土錘	1.5	2.1	0.5	(5.9)	表採	DP67	90%
254	球状土錘	1.4	1.7	0.6	3.6	表採	DP68	100%
255	球状土錘	1.6	2.9	0.4	3.4	表採	DP69	100%
256	球状土錘	1.7	1.7	0.6	(2.1)	表採	DP70	90%
257	球状土錘	1.3	1.4	0.4	3.2	表採	DP71	100%
258	管状土錘	1.4	1.9	0.5	5.3	表採	DP66	100%
259	管状土錘	3.8	2.8	0.6	23.0	表採	DP72	100%
260	管状土錘	5.0	2.5	0.6	25.5	表採	DP73	100%
261	管状土錘	4.6	2.0	0.5	(15.0)	$A3j_2$	DP74	90%
262	管状土錘	4.9	2.7	0.8	(25.0)	表採	DP75	90%
263	管状土錘	4.3	2.0	0.8	(16.5)	$A3j_4$	DP76	90%
264	管状土錘	5.0	2.1	0.7	(14.3)	表採	DP77	80%
265	管状土錘	4.7	2.0	0.6	(15.5)	表採	DP78	90%
266	管状土錘	4.0	2.2	0.4	(11.4)	表採	DP79	60%
267	管状土錘	4.5	1.6	0.3	(9.7)	$A3i_1$	DP80	90%
268	管状土錘	3.6	1.6	0.5	(6.4)	表採	DP81	80%
269	管状土錘	2.8	1.6	0.4	(6.0)	表採	DP82	60%
270	管状土錘	3.1	1.7	0.6	(5.2)	表採	DP83	60%

遺物番号	器種	法量				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
271	管状土錘	2.8	1.3	0.5	(4.0)	表採	DP84	80%
272	管状土錘	4.5	1.3	0.5	6.4	表採	DP85	100%
273	管状土錘	4.2	1.2	0.4	(3.8)	表採	DP86	90%
274	管状土錘	4.0	1.0	0.4	(3.3)	表採	DP87	90%
275	管状土錘	3.4	1.0	0.4	(2.7)	表採	DP88	80%
276	管状土錘	2.6	1.4	0.5	(3.4)	表採	DP89	90%
277	管状土錘	2.5	1.5	0.6	3.7	表採	DP90	100%
278	管状土錘	(2.9)	0.9	0.3	(2.0)	表採	DP91	90%
279	管状土錘	3.1	0.8	0.2	(1.4)	表採	DP92	90%
280	管状土錘	(2.7)	0.8	0.2	(1.1)	表採	DP93	90%
281	管状土錘	5.2	(3.7)	(2.2)	(30.7)	表採	DP95	50%
282	土錘	長さ5.2 幅2.4 溝の上幅0.5 溝の深さ0.4 重量26.1				表採	DP94	100%

第3節　考　察

岡ノ内遺跡から出土した土器等から，当遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明している。ここでは，検出された各時代の住居跡や土器を4期に区分し，各期毎にその特徴を述べ，若干の検討を加えて行くことにする。

1　土器の様相について

(1)　縄文時代

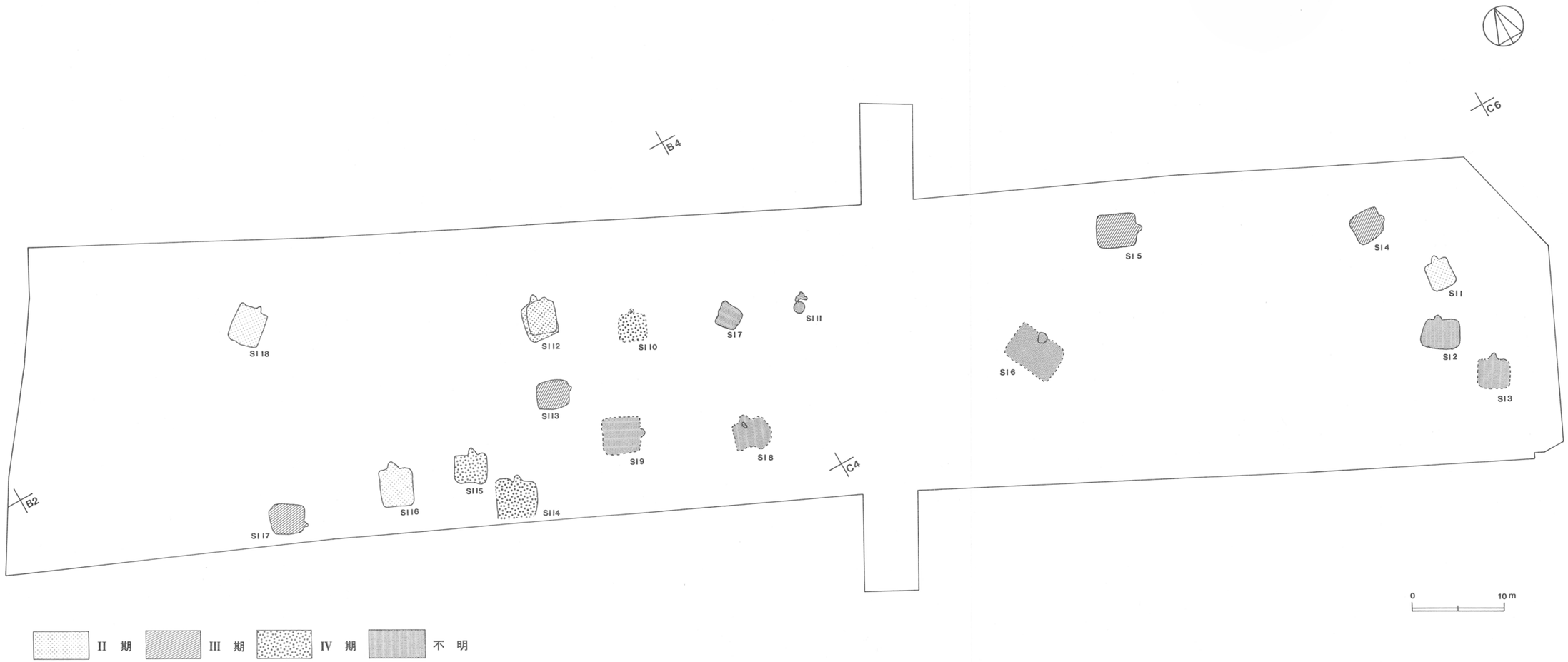
Ⅰ期

調査区内から出土した縄文式土器は，表土及び平安時代の遺構の覆土内からのもので，早期では田戸下層式に比定されるもの，前期では関山式，黒浜式に比定されるもの，中期では加曽利E式に比定されるもの，後期では加曽利B式に比定される土器が，いずれも破片で出土している。

(2)　平安時代

Ⅱ期

本期に該当する土器は，土師器の甕，坏，高台付坏，高台付皿，須恵器の甕，坏及び灰釉陶器の長頸壺等である。土師器の甕は頸部がくびれ，口唇部が外上方につまみ上げられるもの（93）と，平底で胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部がくびれ，口唇部に沈線が巡らされている小形のもの（94）がある。坏は平底で体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部が僅かに外反するものが多い。底部が回転ヘラ切りによる切り離し後，手持ちヘラ削りの調整を施されたもの(88)，底部が回転糸切りによる切り離し後，手持ちヘラ削りの調整を施されたもの（54，55）がある。高台



第80図　時期別住居跡配置図

付坏は「ハ」の字状に開く高台が付き，体部は内彎しながら立ち上がり，内面黒色処理が施されている(35)。高台付皿は底部に低い高台が付き，体部は直線的に大きく外傾して立ち上がり，内面黒色処理が施されている(4)。灰釉陶器の壺は，平底で底部に低い高台が付き，胴部は球状を呈し，胴中位に最大径を有し，胴上位の一部に緑釉がかかっている(1)。須恵器は衰退の時期であり，甕や坏等の破片が少量出土している程度である。第1号住居跡の竈燃焼部覆土下層から逆位の状態で出土した灰釉陶器の壺(1)は，胎土に砂質の多いこと，焼成温度が低いために生ずる火ぶくれがあること等の特徴から，東海地方（三河産）の灰釉陶器と思われ，猿投の黒笹90号窯に並行する時期のものと思われる。黒笹90号窯の時期については，楢崎編年によると10世紀前葉に位置付けられている。以上のようなことから，本期は，平安時代中期（10世紀前葉）に位置付けられるものと思われる。

III期

本期に該当する土器は，土師器の甕，坏及び高台付坏等である。甕は胴部が内彎して立ち上がり，頸部は「く」の字状にくびれている（57)。整形技法は胴部下位が縦位のヘラ削りで調整され，内面黒色処理が施されている。II期の甕に比べ，口唇部のつまみ上げが退化しているのが特徴的である。坏は平底で体部が内彎しながら立ち上がり，口縁部が外反しており，底部は回転糸切りによる切り離しである(9)。高台付坏は底部に「ハ」の字状に開く低い高台が付き，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに外反する(59)。坏と同様，内面黒色処理が施されている。坏及び高台付坏ともに，II期に比べ体部に丸みがみられ，口縁部も外反しているのが特徴的である。これらの土器は，いずれも平安時代中期（10世紀中葉）に位置付けられるものと思われる。

IV期

本期に該当する土器は，土師器の甕，坏，高台付坏及び土師質土器の皿等である。第15号住居跡の床面からは，「中舘」と判読可能な刻書のある土製の紡錘車（84）が出土している。甕は頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁部は外反する(21)。甕はIII期に比べ差異があまり見られない。坏は平底であり，体部は内彎しながら立ち上がり，体部がやや深めのもの（72）と浅めのもの（73）がある。底部はどちらも回転ヘラ切りによる切り離しであり，体部内面はヘラ磨き後，黒色処理が施されている。坏はII期に比べると体部に丸みが見られる。高台付坏は底部に「ハ」の字状に開く高台が付いている。高台の高さが1.5～1.8cmを測り，体部が内彎しながら立ち上がるもの(80,82)，直線的に外傾するもの（79,81）がある。高台の高さが1cm前後の低いもの（78）も見られる。いずれの高台付坏も底部は回転ヘラ切りによる切り離しであり，体部内面はヘラ磨き後黒色処理が施されている。高台付坏は，III期に比べ高台の高いものも見られる。土師質土器の皿は平底で体部は内彎しながら立ち上がり，口唇部は丸く，底部は回転糸切りによる切り離し後未調整である（63)，(64)。本期は，出土遺物のほとんどが土師器であることと，II・III期には見られない土師

質土器の皿等も出現していることから，平安時代中期（10世紀後葉から11世紀初頭）に位置付けられるものと思われる。

2　住居の形態と集落について

(1)　縄文時代

Ⅰ期

調査区内からは当該期の住居跡は検出されていないが，早期から後期にかけての土器片が出土しており，調査区の北東側（霞ケ浦湖畔方面の当台地縁辺部付近）に，当該期の住居跡が存在する可能性も考えられる。

(2)　平安時代

II期　平安時代中期（10世紀前葉）

第１，12-A・B，16，18号住居跡が当該期に属する。住居跡の規模及び構造については，平面形は方形ないしは長方形を呈し，一辺が４m前後の住居跡がほとんどであるが，一辺が３m弱の小形の住居跡も検出されている。主軸方向はN－７°～57°－Eの範囲内を示しており，竈がいずれの住居跡も北壁あるいは北東壁に付設されている。柱穴は，６か所検出されているものから，全く検出されないもの等様々である。この時期の住居跡は床を効率的に使用するためか，住居跡内に主柱穴をもたないものが多くみられることが特徴的である。住居跡の配置では，第１号住居跡が調査区の東端部に検出されているが，他の４軒は調査区の西部にそれぞれ20m程の距離を置いて検出されている。第12-A・B号住居跡の重複は，本期の時間幅の中での建て替えと考えられる。

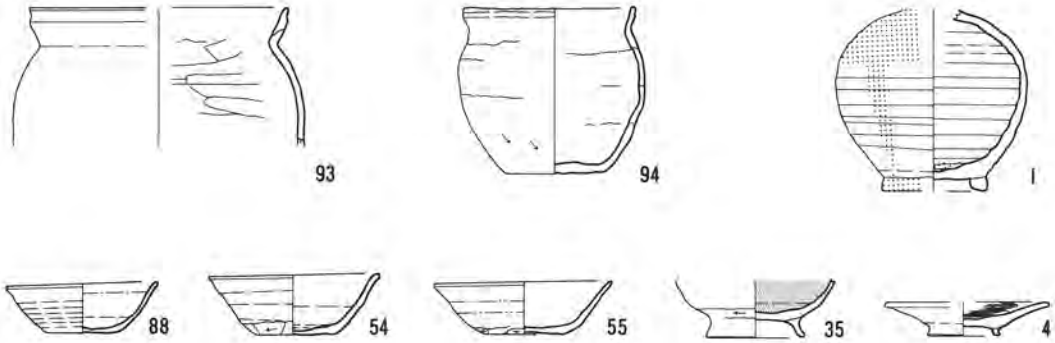
III期　平安時代中期（10世紀中葉）

第４，５，13，17号住居跡が当該期に属する。住居跡の規模及び構造については，平面形は方形ないし長方形を呈している。１軒を除く他の３軒は，一辺が３m台の小形住居跡である。主軸方向はN－90°～132°－Eの範囲内を示しており，竈がいずれの住居跡にも付設されている。II期の住居跡の竈がほぼ北壁に付設されているのに対し，本期の住居跡の竈はほぼ東壁に付設されているのが特徴的である。柱穴は２軒の住居跡からは１～２か所検出されているが，他は検出されていない。住居跡の配置では，調査区の東部に第４・５号住居跡が20m程離れて，西部には第13・17号住居跡が20m程離れて，それぞれ検出されている。

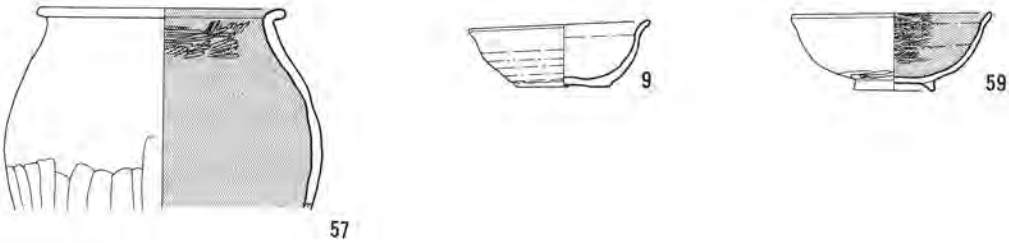
IV期　平安時代後期（10世紀後葉～11世紀初頭）

第10，14，15号住居跡が当該期に属する。住居跡の規模及び構造については，平面形は方形を呈している。一辺の大きさは，２軒の住居跡が３m台であるのに対し，第14号住居跡が４m台となっており，当調査区の住居跡の中では最も大きな規模である。主軸方向は，N－28°～31°－Eの範囲内を示しており，いずれの住居跡にも竈が北東壁に付設されている。柱穴は１か所ずつ検出され，

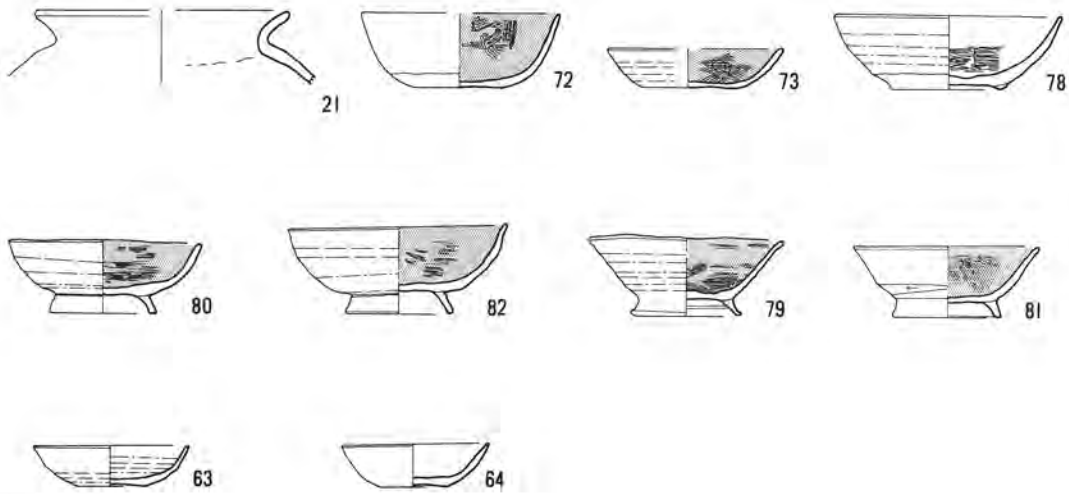
II 期



III 期



IV 期



第81図　土器分類図

出入口施設に伴うものと考えられる。3軒の住居跡とも調査区の中央部より西側に2～15m程離れて検出されている。II・III期の住居跡は調査区の東部に検出されていたが，本期に属する住居跡は，すべて調査区の西部から検出されている。

以上のように，岡ノ内遺跡から出土した土器をI～IV期の4期に区分し検討した結果，当台地上に於いては，縄文時代早期に人々が住み着いたものと思われるが，縄文時代を含め，その後の，弥生時代から古墳時代・奈良時代を経て，平安時代前期に至るまでの住居跡や土坑は検出されなかった。

平安時代中期～後期（10世紀前葉～11世紀初頭）にかけては住居跡が検出されているが，この時期に於ける住居跡の規模や構造には，それ程大きな変化が認められず，一辺が3～4mの小形の住居跡がほとんどであり，主柱穴は床面からほとんど検出されなかった。竈についてはII期（10世紀前葉）にはほぼ北壁に付設されていたが，III期（10世紀中葉）にはほぼ東壁に付設されるようになり，そして，IV期（10世紀後葉～11世紀初頭）には再び北壁に付設されている。遺物は，土師器が大部分を占め，内面黒色処理が施された坏や高台付坏がみられる。第1号住居跡から出土した灰釉陶器の壺は，三河産と見られ，10世紀代における当地方と東海地方との交流が窺われる。当遺跡周辺における同時期の住居跡を検出している遺跡としては，桜川村の西側，小野川を挟んだ江戸崎町の思川遺跡及び二の宮貝塚がある。

3　土坑の形態について

当調査区からは，土坑が76基検出されている。主に調査区の中央部から西部にかけて集中しており，土師器の甕・坏及び高台付坏等が出土している土坑も検出されている。ここでは，これらの土坑を平面形や壁面の形状により分類し，その特徴を述べてみたい。

なお，分類は下記のように行い，結果については表6の通りである。

○平面形

・I類･･･平面形が円形を呈するもの

・II類･･･平面形が楕円形を呈するもの

○壁面

・A類･･･壁が垂直のもの

・B類･･･壁が外傾のもの

・C類･･･壁が内傾のもの

本稿では平面形が円形（I類）と楕円形（II類）についてのみ取り上げ，不定形のものについては分類から省き，壁面の形状がA～C以外の土坑については，その他とした。

表 6　土坑の分類

平面形	形　態	数（基）	割合(%)	土　坑　番　号
円　形	Ⅰ　A	11	37.9	2,42,43,45B,46A,46B,48,52,53,54,68
	Ⅰ　B	6	20.7	41,44,49,50,67,69
	Ⅰ　C	2	6.9	60,71
	その他	10	34.5	4,6,23,24,31,35,55,59,65,66
	小　計	29	100.0	
楕円形	Ⅱ　A	4	25.0	32,45A,56,64
	Ⅱ　B	4	25.0	20,22,61,62
	Ⅱ　C	0	0.0	
	その他	8	50.0	3,30,34,36,47,57,63,72
	小　計	16	100.0	
資料外		31		
合　計		76		

平面形が円形を呈する土坑（Ⅰ類）は29基検出されている。表６から解るように，その内，ⅠA類に属する土坑が最も多い。ⅠA類の規模は，径1.2～1.5m，深さ0.3～0.5mの範囲のものが多く，第15号住居跡北西側のB2区に，土坑群（SK-42・43・45-B・46-A・46-B・48・52・54）として集中して検出されている。いずれも，底面は平坦であるのが特徴的である。これらの土坑からは遺物が出土している。第46-B号土坑からは高台付坏（114），第48号土坑からは坏（119）が，それぞれ覆土下層から出土している。ⅠB類に属する土坑は調査区の西部に点在して６基検出されている。規模は，径1.0～1.2m，深さ0.2～0.3mの範囲のものが多く，西端部に検出された第69号土坑を除く他の土坑からは遺物が出土している。第44号土坑の覆土下層からは高台付坏（107）が，第67号土坑の覆土下層からは坏（123）が，それぞれ出土している。ⅠC類に属する土坑は調査区の北西部から２基検出されている。規模は，径1.5～1.9m，深さ0.5～0.7mであり，共に壁面が内傾し，断面形が袋状を呈している。ⅠA・ⅠB類に属する円形土坑から出土している土師器の各種土器は，岡ノ内遺跡のⅣ期（10世紀後葉～11世紀初頭）に比定される土器と思われる。しかし，これらの円形土坑の性格を明確に判断できる遺物は出土していない。

平面形が楕円形を呈する土坑は16基検出されている。壁がほぼ垂直なⅡA類と外傾するⅡB類は，４基ずつ調査区中央部から西部にかけて検出されているが，壁が内傾するⅡC類は検出されていない。ⅡA類の規模は，長径1.1～1.9m，短径１m前後，深さ0.5m前後である。第45-A号土坑は，B2区の土坑群の中に検出され，高台の発達した足高高台付坏と呼ばれるもの（109）が出土している。ⅡB類の規模は，長径が1.5m前後，短径が1.0m前後，深さ0.3m前後のものが多く，調査区のほぼ中央部のB4区から検出された第20・22号土坑と，西部のA2区から検出された第64号土坑の底面からは，人骨が出土していることから墓壙と思われる。Ⅱ類の土坑の性格については，その多くが墓壙としての性格をもつものと考えられる。

当調査区から検出された，平面形が円形及び楕円形を呈する土坑について分類してみた。土坑の性格については，墓壙的性格，食物の貯蔵穴的性格，道具類の貯蔵穴的性格，牧との関係における貯蔵穴等の説がある。円形土坑（Ⅰ類）の覆土中層及び下層からは，住居跡から出土している遺物とほぼ同時期のもので，平安時代（10世紀～11世紀）に比定されるものと思われる土師器の甕，坏及び高台付坏等の遺物が出土している。しかし，円形土坑の性格を明確に判断できる遺物は出土していない。平面形が楕円形を呈する土坑（II類）の３基からは人骨等が出土していることから，II類の土坑はその多くが墓壙としての性格をもつものと思われる。このような，平安時代に比定される遺物を伴う土坑の類例が報告されている，当遺跡周辺の遺跡としては，江戸崎町二の宮貝塚が挙げられる。

4　置き竈について

調査区から出土した置き竈の破片は３点であり，しかも，それぞれが別個体である。ここでは，これら３点の置き竈の特徴について述べてみたい。

第53号土坑（ⅠＡ類の円形土坑に属する）から２点（124・125），B3a_2区の覆土中からは１点（244）が，それぞれ出土している。第53号土坑は調査区の西部A2i_7区に検出され，集落の西端に近い場所に位置し，東側３m程には第18号住居跡が検出されている。第53号土坑の平面形は，径1.44mの円形を呈し，深さは0.58mを測る。覆土はローム粒子を中量，焼土粒子を少量含む暗褐色土である。第53号土坑の西壁際から底面にかけては焼土が確認されており，土坑内で火を使用した可能性も考えられる。（125）の置き竈片は第53号土坑内西部の覆土中層から，（124）の置き竈片は（125）より北側の若干上層から，それぞれ庇が下を向いた状態で出土している。置き竈片は２点であり，他の破片は土坑内からは確認されていない。（124）は置き竈の右前方の破片であり，付け庇が付いており，庇の右上に補強用の粘土紐が貼り付けられている。（125）は置き竈の左前方の破片であり，同様に付け庇が付き，左上に補強用の粘土紐が貼り付けられている。器形には類似点がみられるが，整形や胎土から（124）と（125）とは別個体のものと思われる。（244）の置き竈片は胴部片であり，第53号土坑より東へ15m程離れたB3a_2区の覆土中から出土している。出土した地点が第68号土坑の上層に当たっているが，第68号土坑との関係については不明である。胎土から（124），（125）とは別個体のものと思われる。

当調査区から出土した置き竈の特徴について述べてみたが，置き竈の性格については，日常生活の炊飯具として使用されていたものという捉え方と，宗教的祭祀に関わる儀式に使用されたものではないかという捉えかたがなされている。当調査区内から出土した置き竈の性格については，当時，人々が日常生活の中で炊飯具として使用していたか，或は，何らかの祭祀に関わる儀式に

使用したかを明確に言及することはできず，今後の資料の増加を待ちたい。

なお，県内の類例については，表７に一覧表としてまとめた。

表７　茨城県内の置き竈

遺跡名及び所在地	出土地点・遺構	時　　期	そ　の　他
森戸遺跡 那珂町森戸額田北郷	第29号住居跡	10世紀末から 11世紀前葉	羽釜が出土
南丘遺跡 土浦市烏山字南ケ丘	第１号溝	不明	
岡ノ内遺跡 稲敷郡桜川村大字浮島	第53号土坑・・・２個 B3a_2区覆土 ・・・１個	不明	３個体分出土 （焚き口部２，胴部１）

引用・参考文献（順不同）

(1)　愛知県陶磁資料館　「愛知県陶磁資料館研究紀要　２」　1983年

(2)　茨城県教育財団　「森戸遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第55集　1990年

(3)　茨城県教育財団　「南丘遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第64集　1991年

(4)　茨城県教育財団　「思川遺跡・二の宮貝塚」　茨城県教育財団文化財調査報告第65集　1991年

(5)　栃木県教育委員会　「下野国府跡　Ⅷ」　1988年

(6)　神谷　佳明　「東国出土の竈形土器についての検討」　『群馬の考古学』　1988年

(7)　君津郡市文化財センター　「永吉台遺跡群」　1985年

(8)　茨城県教育財団　「大境遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第34集　1986年

(9)　江里口省三ほか　「多摩ニュータウン№382・№383・№384・№386遺跡」　『多摩ニュータウン遺跡－昭和58年度－』　（第２分冊）　東京都埋蔵文化財センター　1984年

結　　語

平成２年４月から同年９月にかけて実施された稲敷郡桜川村に所在する，上ノ台遺跡及び岡ノ内遺跡の発掘調査は，一般県道新川江戸崎線道路改良工事に伴うもので，平成３年10月から平成４年３月までの整理作業をもって完了する運びとなった。

調査の結果，上ノ台遺跡からは平安時代の住居跡が３軒検出され，墓壙と思われる土坑も検出されている。遺物は土師器の甕，坏，高台付坏及び羽釜片や鉄製品の鉈等が出土している。土製品の管状土錘，球状土錘等は，いずれの住居跡からも出土している。

上ノ台遺跡の北西側に，小さな支谷を挟んで位置する岡ノ内遺跡からは，平安時代の住居跡が19軒検出されている。土坑が多数検出され，中には，墓壙と考えられるものが含まれている。遺物は土師器の甕，坏及び高台付坏が大半を占め，坏や高台付坏は内面黒色処理されているものが多くを占めている。これらの遺物は，10世紀から11世紀にかけての時期に比定される。中には，東海地方産の灰釉陶器が出土しており，当時の交流について窺い知ることができる。

上ノ台遺跡及び岡ノ内遺跡は，10世紀から11世紀にかけてのほぼ同時期に集落が形成されていたものと思われる。両遺跡からは，土製品の管状土錘，球状土錘が多数出土していることから，当時の人々が，霞ケ浦での漁を営んでいたことが窺われる。しかし，その後は，両遺跡共，墓地となっている。

以上，上ノ台・岡ノ内両遺跡の発掘調査によって得られた成果についてまとめてきたが，本報告書が，今後，当地域の歴史を解明するため，ささやかな一助になれば幸いである。

最後に，発掘調査から報告書作成に至るまで，関係各機関・関係各位から，多くの御指導・御助言を賜ったことに対し，心から感謝の意を表したい。

写真図版

上ノ台遺跡

岡ノ内遺跡

調査終了後全景

調査前全景

テストピット土層

グリッド試掘後全景

遺構確認状況

第１号住居跡

第１号住居跡竈内遺物出土状況

第２号住居跡

第３号住居跡

第３号住居跡遺物出土状況

第３号住居跡竈内遺物出土状況

第１号土坑

第２号土坑

第 2 号土坑遺物出土状況

第 3 号住居跡貯蔵穴，第 3 号土坑

第 4 号土坑

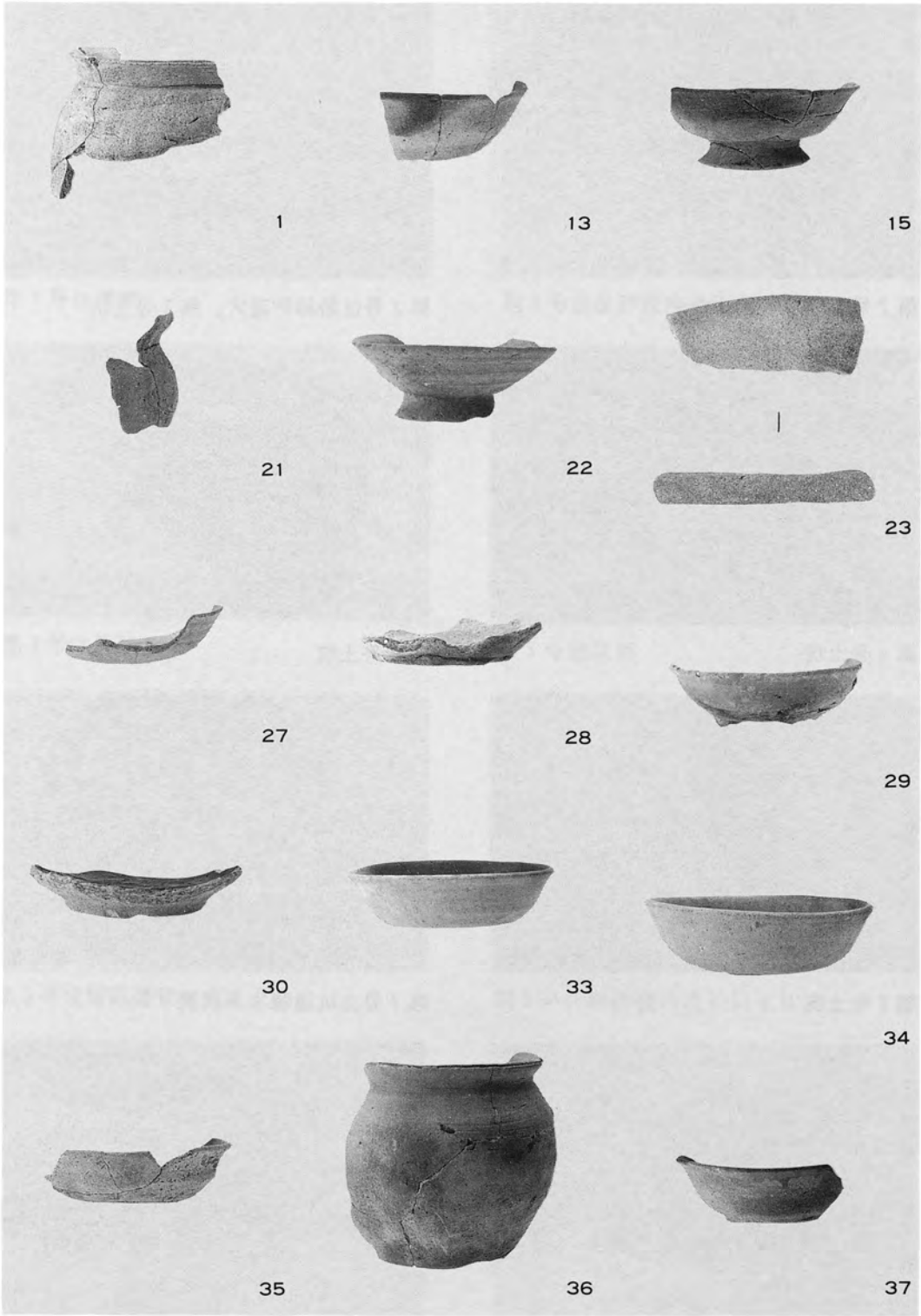
第 5 号土坑

第 6 号土坑

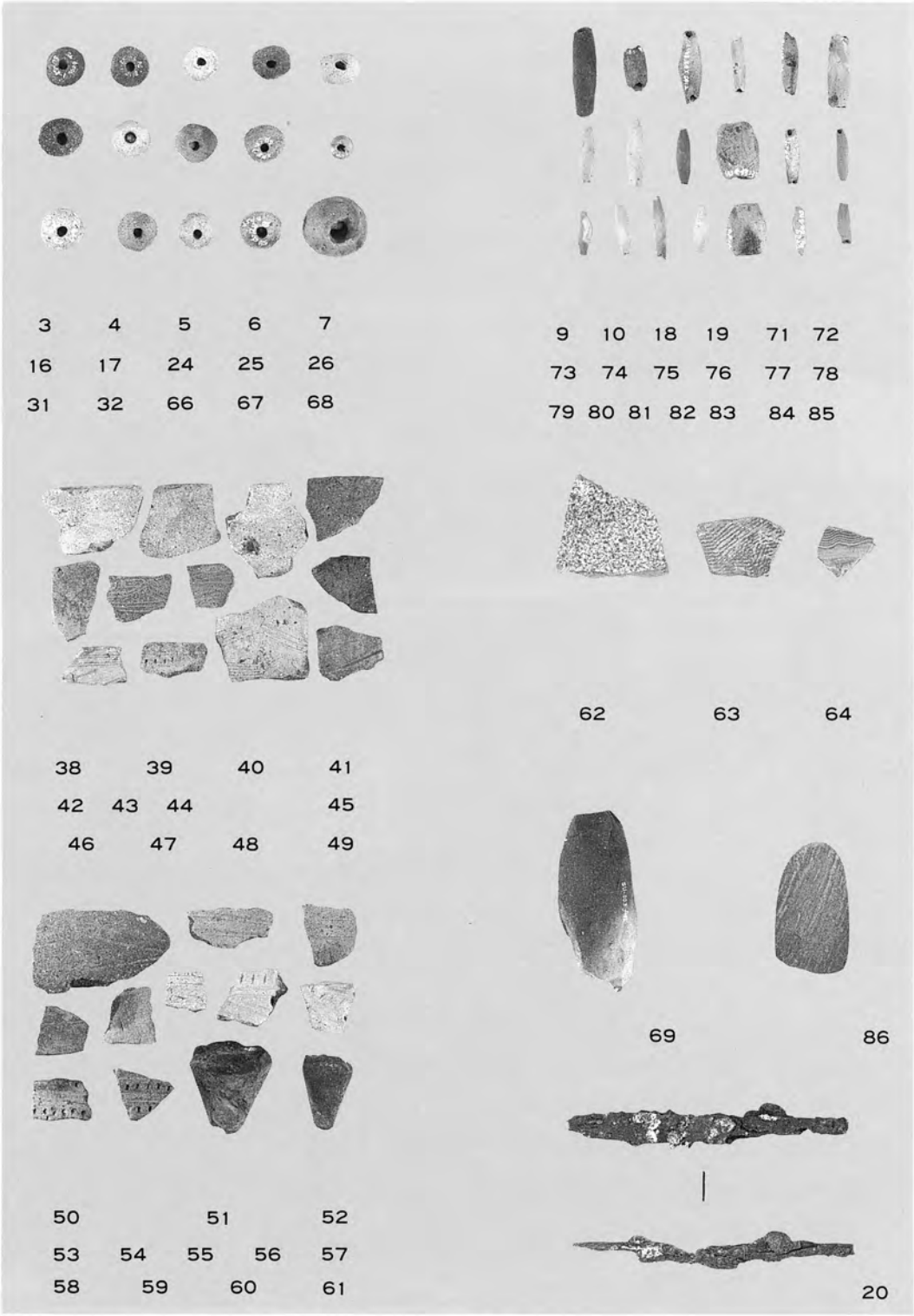
第 7 号土坑遺物出土状況

第 8 号土坑

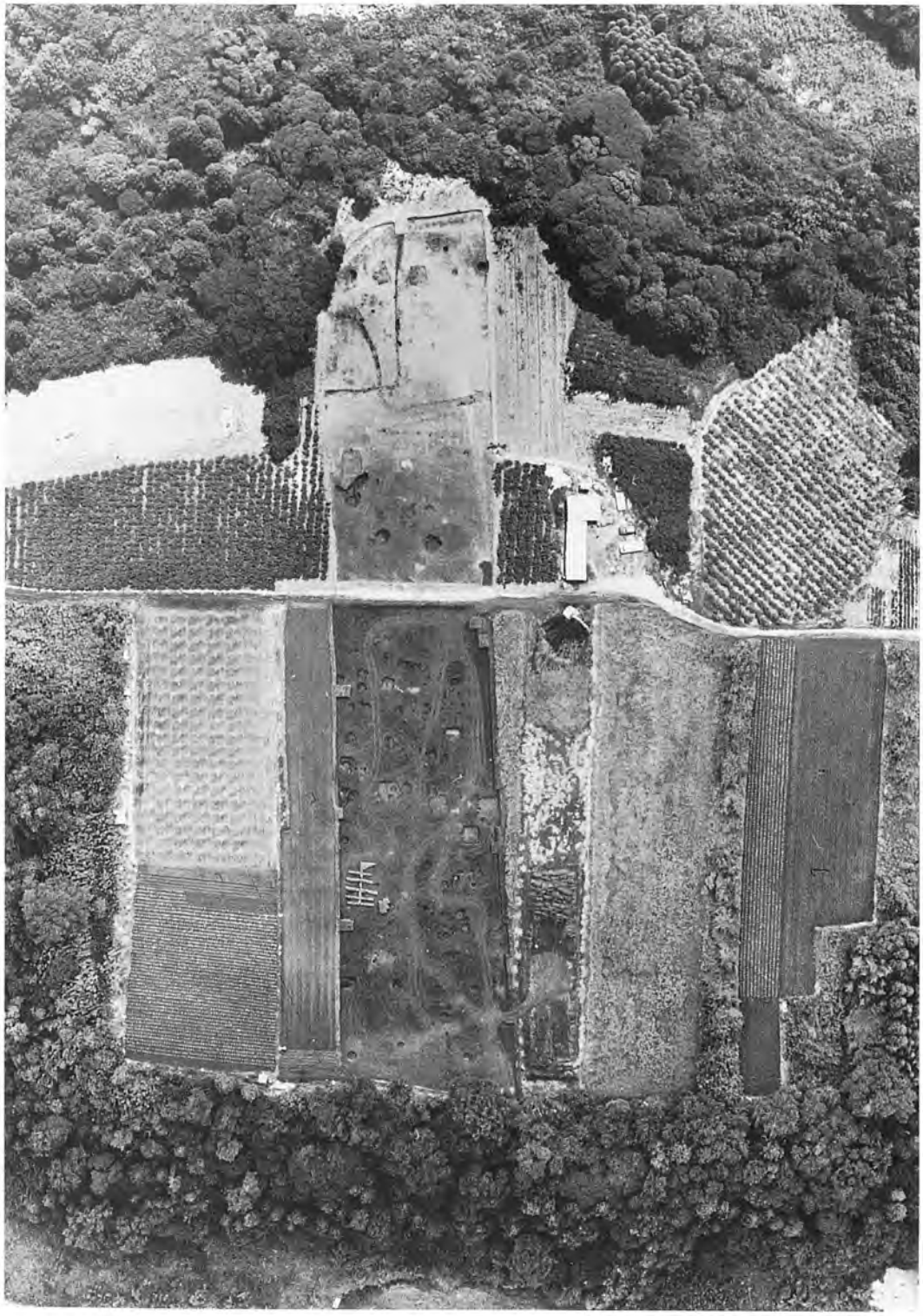
第 1 号溝，第 3 号住居跡，第 1・2 号土坑



第１～３号住居跡，第２・４・５・７号土坑，出土遺物



第1～3号住居跡，第1・2号土坑，遺構外，出土遺物



岡ノ内遺跡全景

調査前全景

グリッド試掘作業

テストピット土層

東部遺跡全景

遺構確認作業

西部遺跡全景

第１号住居跡

第１号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡

第５号住居跡

第５号住居跡竈内遺物出土状況

第７号住居跡

第８号住居跡竈内遺物出土状況

第10号住居跡遺物出土状況

第12-A・B号住居跡遺物出土状況

第12－B号 住居跡竈内遺物出土状況

第13号住居跡

第13号住居跡竈内遺物出土状況

第14号住居跡

第14号住居跡竈内遺物出土状況

第15号住居跡

第15号住居跡竈内遺物出土状況

第16号住居跡遺物出土状況

第17号住居跡

第18号住居跡

第18号住居跡竈内遺物出土状況

第20号土坑

第22号土坑

第30号土坑

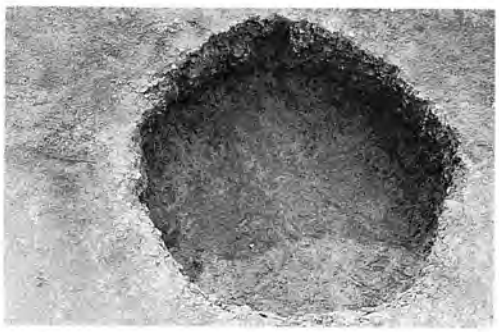
第41号土坑

第43号土坑

第44号土坑

第45－A・B，第46－A・B号土坑

第48号土坑遺物出土状況



第52号土坑

第53号土坑遺物出土状況

第54号土坑遺物出土状況

第56号土坑

第60号土坑

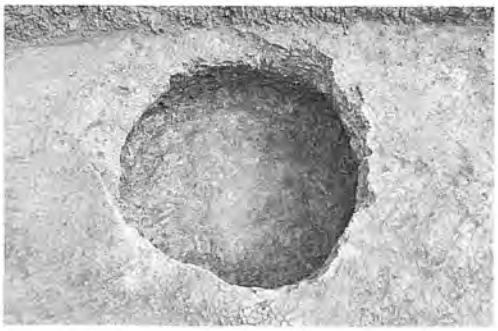
第61号土坑

第64号土坑

第67号土坑遺物出土状況

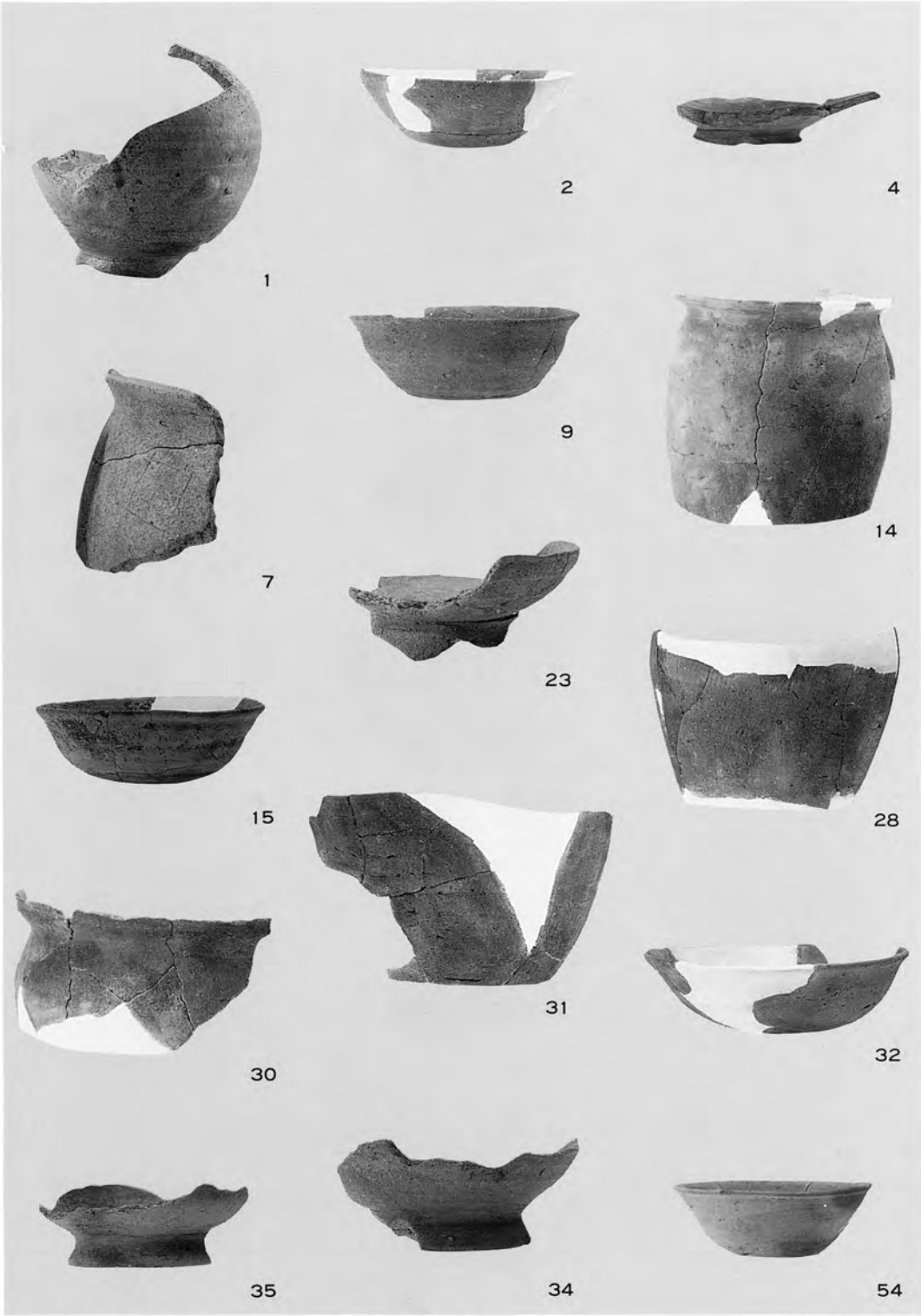
第68号土坑

第69号土坑

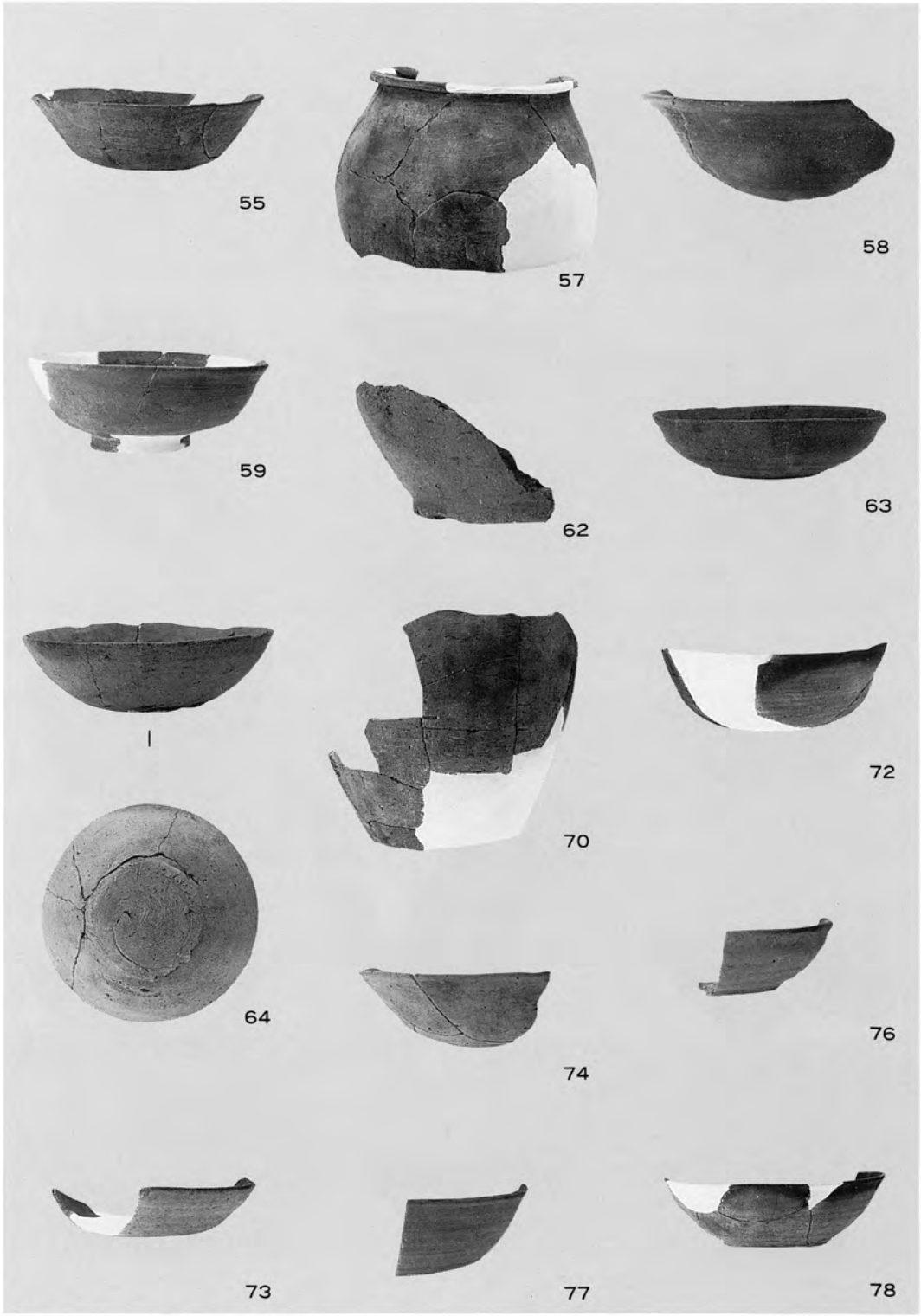


第71号土坑

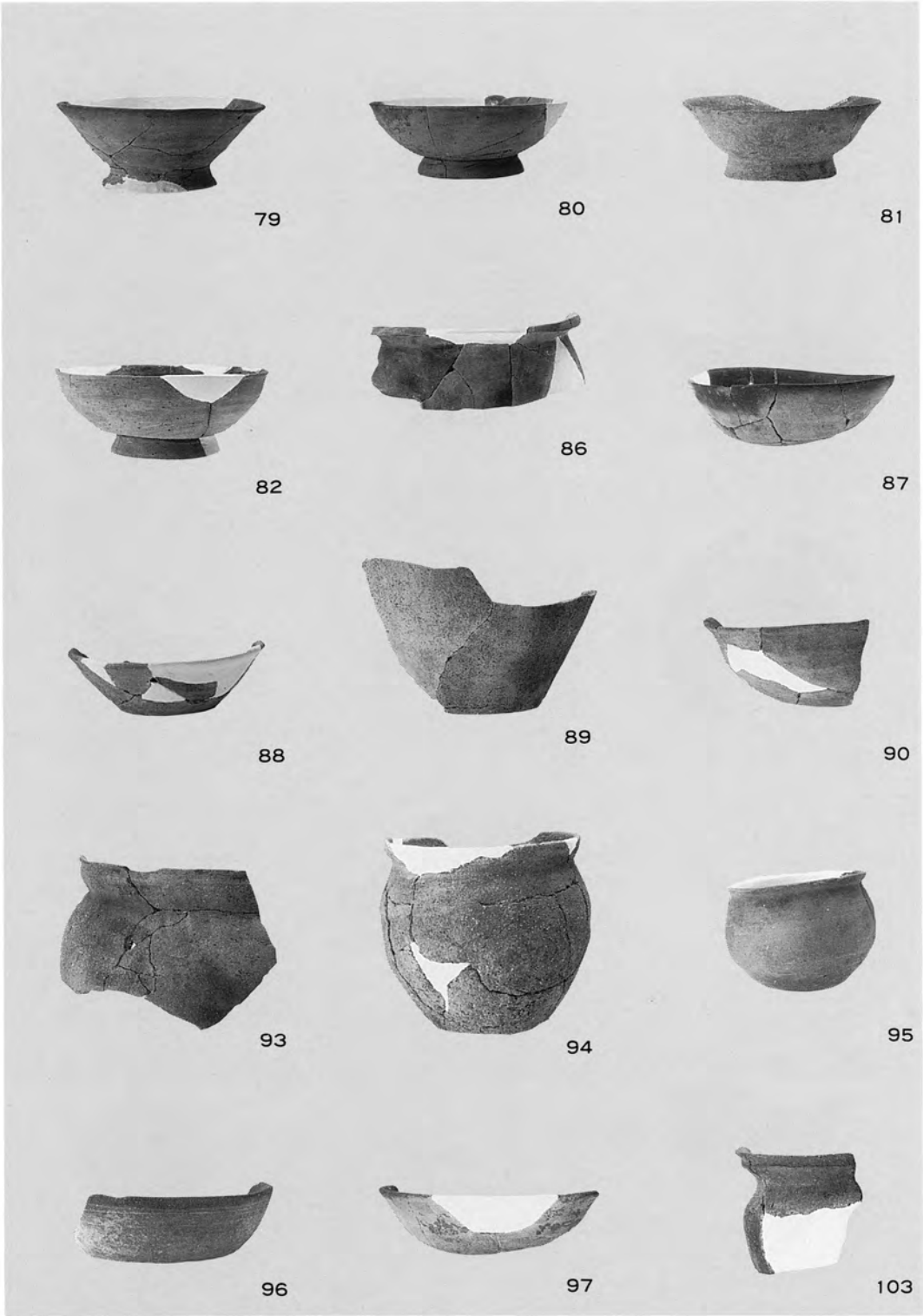
土坑群



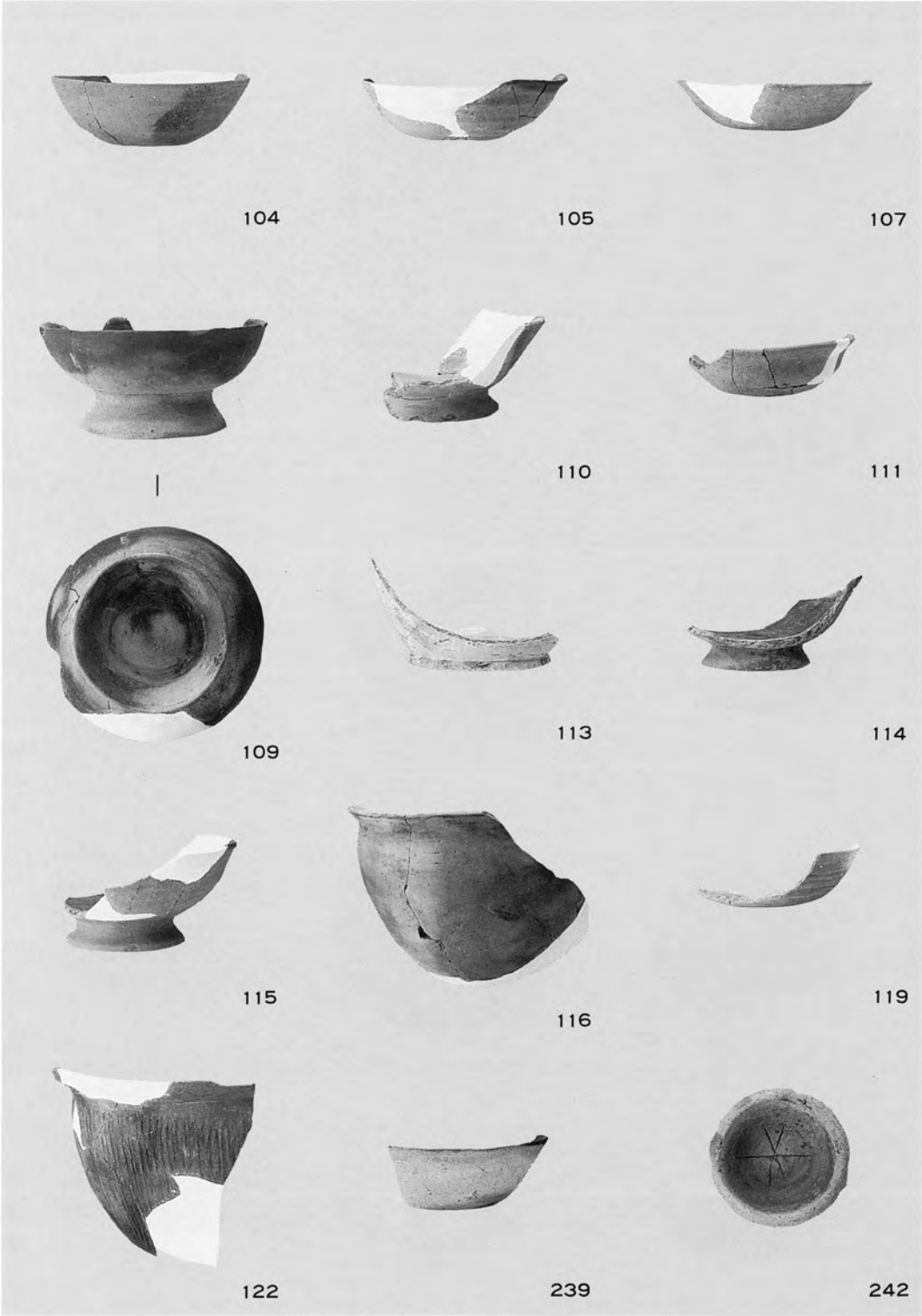
第1・5・8・10・12-A・B号住居跡出土遺物



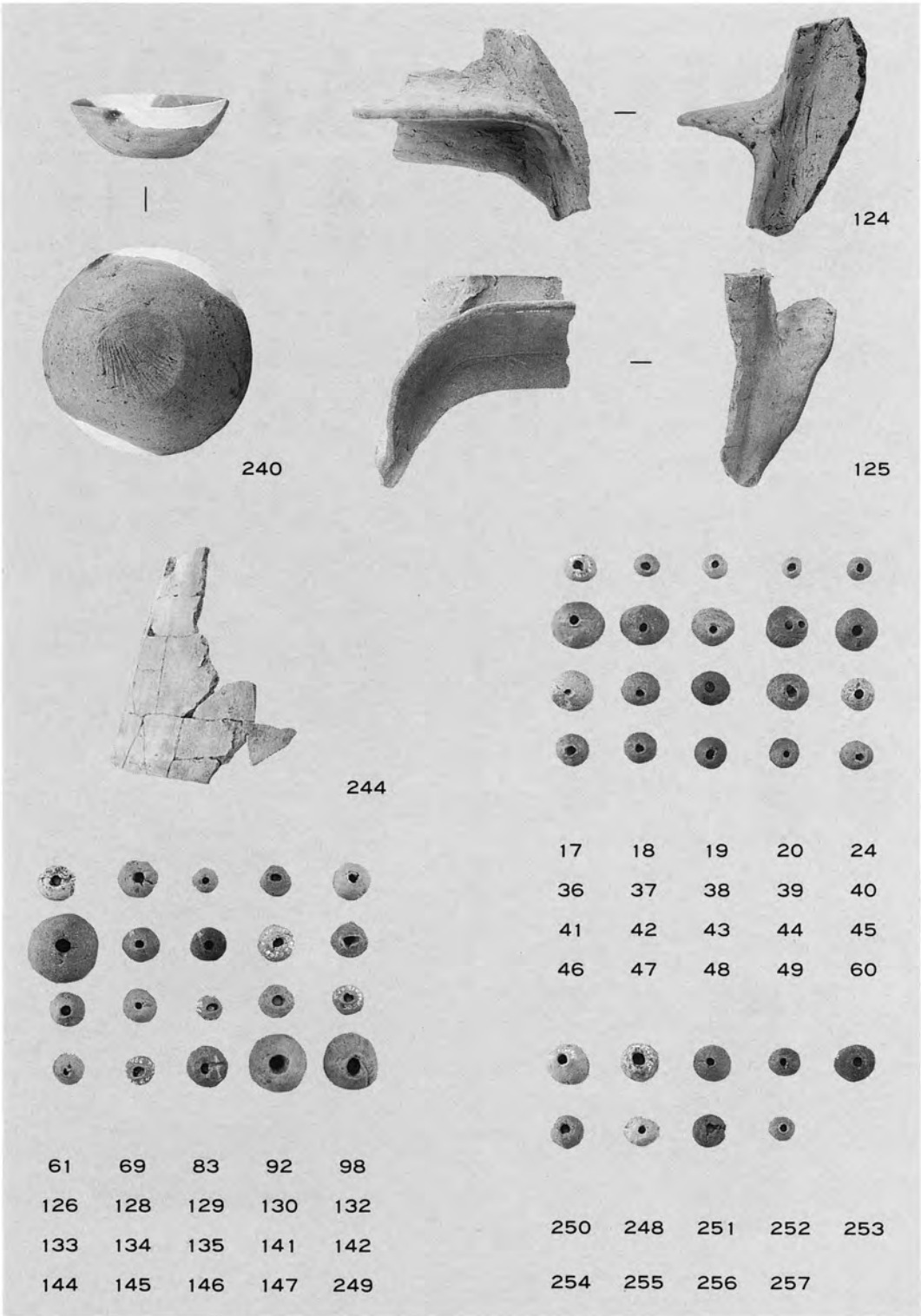
第12-B～15号住居跡出土遺物



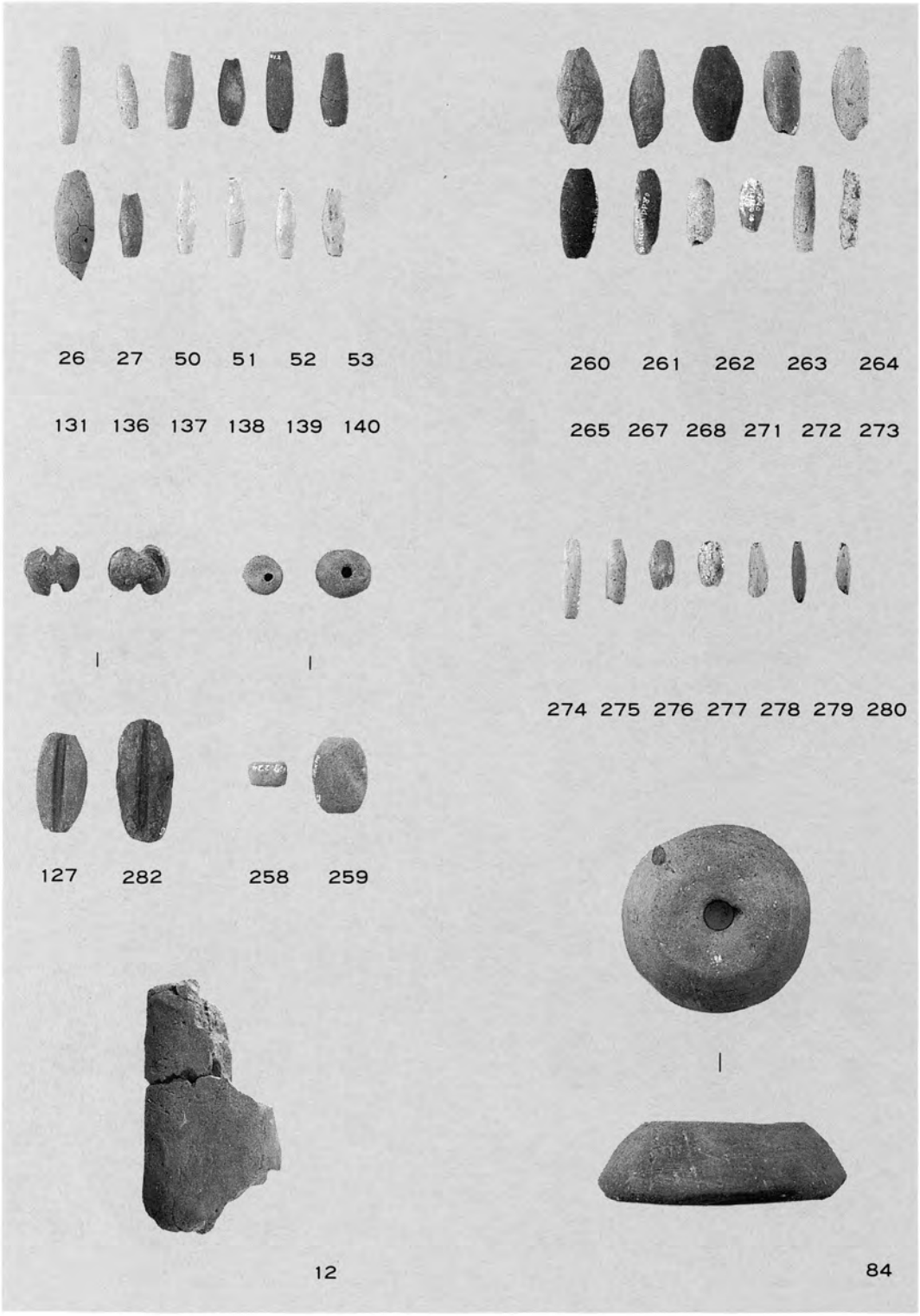
第15～18号住居跡，第16号土坑，出土遺物



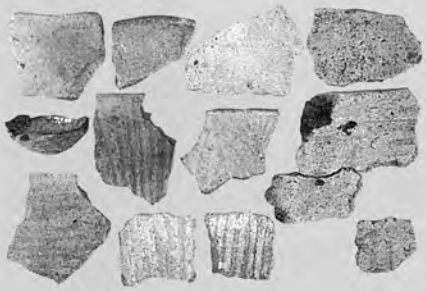
第26・41・45-A・B・46-A・B・48・67号土坑，遺構外，出土遺物



第8・10・12-A・13～15・17・18号住居跡，第12・26・41・45-B・46-B・54・67・71号土坑，遺構外，出土遺物



第5・10・12-A・15号住居跡，第36・45-B号土坑，遺構外，出土遺物



149 150 151 152
153 154 155 156
157 158 159 160

161 162 163 164
165 166 167 168
169
170 171 172 173

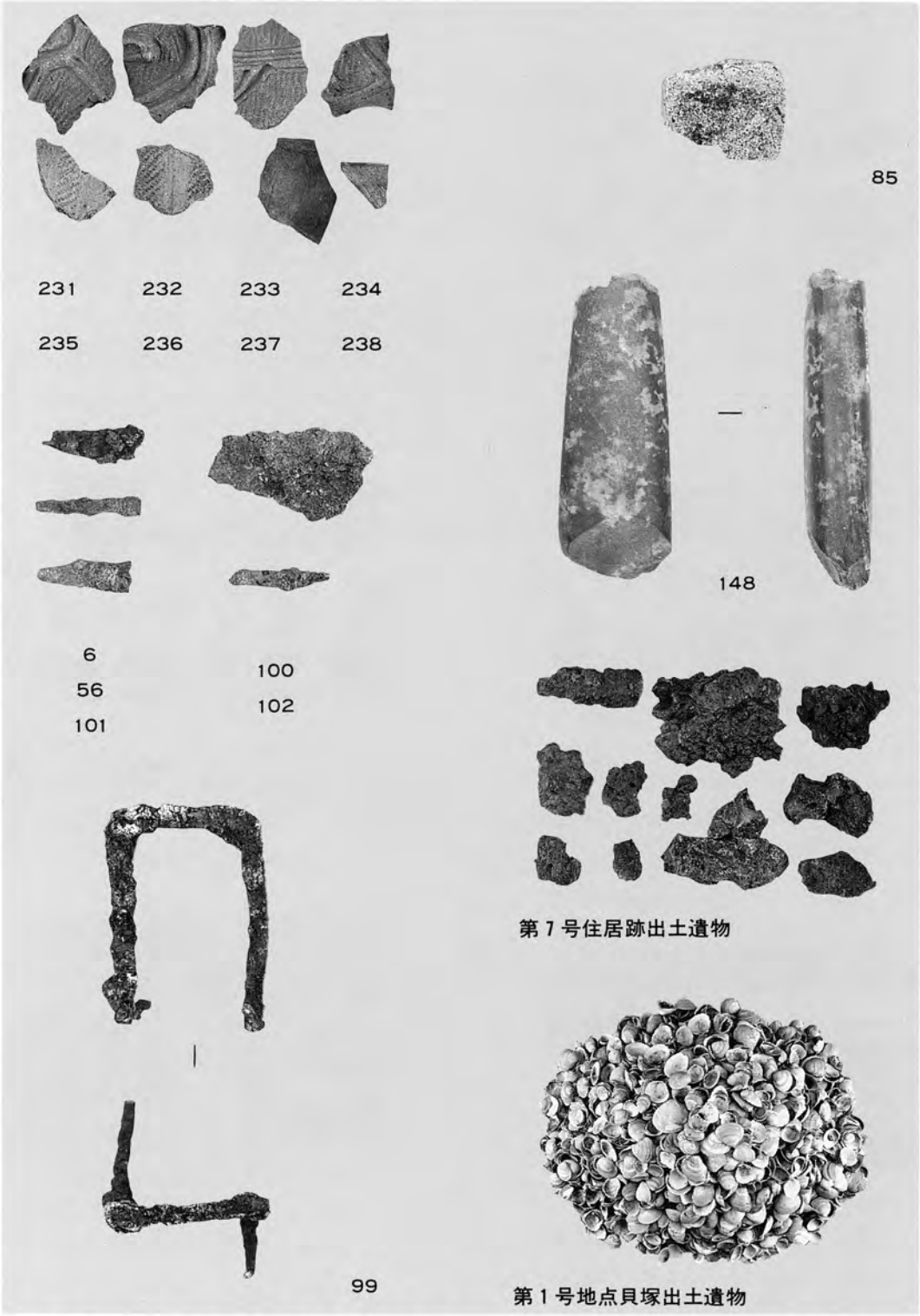
174 175 176 177
178 179 180 181 182
183 184 185 191 186
187 188 189 190

192 193 194 200
195 196 197 198 199
201 202 203 204 205

206 207 208
210 211 212 209
213 214 215 216

217 218 219 224
220 221 222 223
225 − 225 226 227
228 229 230

遺構外出土遺物



第2・7・12-B・15・18号住居跡，第12号土坑，第1号地点貝塚，遺構外，出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第75集

一般県道新川江戸崎線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

上ノ台遺跡
岡ノ台遺跡

平成4年3月25日 印刷
平成4年3月31日 発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
☎ 0292-25-6587

印　刷　有限会社　川田プリント
水戸市上水戸4丁目6番53号
☎ 0292-53-5551